
剣の国の黒猫

T O C

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣の国の黒猫

【Nコード】

N9606C

【作者名】

TOC

【あらすじ】

男の身に降りかかるは不幸の嵐
その日暮らしを満喫していたリア「フェイロンの日常は
領主の娘を助けたばかりに奈落の底へと叩き込まれる

注意

本作品には不幸成分がかなり多めに詰まっています。
人の不幸を我が事のように感じる素敵な紳士淑女の方には
とてもお勧めできる小説ではありませんので、ご注意ください。

（１）始まりは穏やかな午後

はじまりは穏やかな午後だった。

クエスト屋エルカーナの中は穏やかな春の陽気に満ち、まさに『子猫が欠伸をしそう』という言葉に似つかわしい昼下がり。

窓辺にある日時計針の上ではチョウがうつらうつらと休み、机の上の帳面も風にそよがれてゆったりとページをめくっている。

そんな中、唯一いそいそと動き回る一人の影があった。

短めの黒髪と彫りの深い大きな黒目、薄手のシャツとダークグレイのパンツ。クエスト屋としては随分と若かったが、彼　リア＝フェイロンはれっきとしたここの店員だった。

「おっと、そろそろ茶葉が良い感じに蒸れたかな」

この時フェイはご機嫌だった。

退屈な店番をしながらも鼻歌が止まらないほどだ。

それは彼の至福のひと時であるティータイムを、誰にも邪魔されず楽しめるからである。しかも、今淹れているのはツヴァイ港に入港したばかりの高級茶ベルリーフティーときた。

真っ白な陶器のポットから十分に温めたカップへ、琥珀色のお茶をゆつくりと注ぎはじめた。

すると、コポコポと言う水音が少しづつキーを上げる。これがたまらない。

茶葉を丁寧^{かくわ}に蒸らした甲斐あって、部屋の中はたちまちベルリーフ特有の芳^{かぐわ}しい香りで満たされた。

フェイは堪えきれずカップを鼻先で燻^{くゆ}らせる。

「ふう」

鼻から頭に抜けるような香りが突き抜けた。神様ありがとう、と無意味に叫びたくなる瞬間だ。

フェイは溺れるようにどっぴりとその感触を楽しんだ後、チビチビと貧乏たらしく茶を飲み始めた。

もちろんお茶菓子など食べない。

お茶菓子など食べたなら、折角の香りが邪魔されてしまうのではないか。

「最近はお茶菓子も高いからな」

つい本音がポツリと漏れてしまうが、気にする事も無い。
なにせ、このクエスト屋エルカーナにはフェイ以外に猫一匹いなのだ。

つまり今日も客が一人もいないと言う事なのだが

「ん？」

その時、店の外に人の気配を感じた。

獲物を狩る獣の如く、扉の向こうへ神経を集中させる　確かに人がいた。

さらには女性らしき「ふう」という物憂げなため息も聞こえてくるではないか。

エルカーナは、まだ開店して間もないという事もあり、現在は営業不振の真っ只中だ。

なのに昼間からため息を吐いて悩んでいるような上客を逃したとあっては、店長のエルカに申し開き出来ない。

フェイは名残惜しげにカップを置くと、少し跳ねていた黒髪を軽く撫でつけ、襟元を正す。

まだ十九歳であるフェイは、その若いと言う第一印象だけで仕事

を断られる可能性だつてあるのだ。

仕上げに最近覚えた作り笑いを貼り付け、優雅にドアを開け放つ

「ぎゃああああああああっ！！」

絶叫された。問答無用とはこの事だ。

店の前では、小さな少女が直立不動で固まっていた。その碧目は落ちそうなくらい見開かれ、じわじわと涙目にさえなっている。

俺が何したってんだ

フェイの作り笑いは既に崩れ、引きつった顔で少女を無遠慮に値踏みする。

年齢は十歳くらいだろうか。

驚いて目口を見開いているのも関わらず、繊細な線で描かれた整った顔立ちだと分かった。

おまけに肌は子供のくせに真っ白で、見たこともない水色の素材のドレスを着ている。

十分に手入れされた鮮やかな金髪は頭の両側にしばられ、それでもなお腰のあたりまで伸びてゆらゆらと揺れている。

一目で相当なお金持ちの御令嬢だとは分かった　　が、お金持ちでも子供は子供、金にはならない。

そして、金にはならない相手を、フェイはお客様とは呼ばない事に決めているのだ。

「あー、どうかしたかい、お嬢ちゃん？」

少女はビクリと体を震わせると、絶叫したのが恥ずかしかったのか、白い肌が一気に赤く染まった。

これだけ見事に赤面する瞬間を見たのは初めてだ。

それからたつぷり十数える沈黙の後、少女はもそもと口を開く。

「あ、あの、アニサマは、いますか？」

「アニサマ？」

エルカーナの正従業員は、店長のエルカと従業員であるフェイの二人だけだ。

たまに神官のルナが遊びに來たり、クエストの応援としてコノハを呼んだりするが、断じてアニサマなる名前ではない。

「アニサマねえ、アニー……アニ……ああ、ひよつとしてアニキのことか？」

その言葉に少女は小さく頷いた。

むろん、妹といえばフェイの妹ではない。残るは、

「……って、ひよつとして店長の妹っ!？」

フェイの大声に気圧され、少女は小動物のようにコクコクと金色の頭を前後に揺らす。

言われてみれば店長のエルカには、妹がいると聞いた事がある。

しかし、こんなに歳が離れていようとは。

「……でも悪いけど、エルカは今留守なんだ」

「そう、ですか」

エルカが留守と分かるや少女は肩を落とし、子供らしからぬ憂いを帯びた表情を作った。

まるで欠点の見つからぬ精巧な人形のような顔に、フェイはエル

力の筋骨隆々偉丈夫たる姿を重ねる。

この美少女がエルカと兄妹って、ほとんど詐欺だな

しかし、綺麗な碧の目だけは同じ色だった。珍しい色なので兄妹と言っのは嘘ではないのだろう。

「それにしても、エルカにこんな可愛い妹がいたなんてなあ。ビツクリだ」

「かつ」

少女は『可愛い』と復唱しそうになり、そこで固まる。

百戦錬磨のエルカの妹なので、この手の社交辞令は慣れてるのかと思っただが、どうやら社交界デビューうんぬんもまだらしい。

「か……帰ります」

そうきたか

少女はなんとか引っ込みをつけると、深々と礼をするや早々に走り去っていった。

フェイも店に入ってティータイムの続きでも、とドアを閉めようとした。その時だ。閉めようとしたドアの隙間から少女がピタリと立ち止まっている姿が見えたのだ。

あまりにも不自然な挙動に、フェイはついドアの隙間から観察を開始する。

グルリ

少女は軍人のようにカカトを軸に方向を変えると、トコトコと店

の方へ戻ってきた。

フェイはあわててドアを閉めると、ドアの内側で少女がノックするのを待つ。

足音がパタパタと近づき、エルカーナのドアの前でピタと止まるが、ドアはノックされない。

「……ふう」

かわりに盛大な溜め息だけが漏れる。

一分が過ぎ、二分が過ぎ、そして三分が過ぎようとした。

「……ふう」

ああああ！　じれったい！

元々気が長いほうではないフェイは、待ちきれずにドアを開け放つ。

ゴス

突き刺さるような鈍い音がし、ドアが途中で止まった。

何事かとドアの隙間から覗くと、少女がドアの前で額を抑えてうめいている。至近距離にいたらしくドアのカドで頭をぶつけたようだ。

「おお、悪い！　大丈夫か？」

かなり良い音がしたのでコブになってないかと、フェイは外に出て少女の顔を覗き込み、そのまま固まった。

少女はボロボロと涙を零していたのだ。

『女に泣かれる』と、『子供に泣かれる』事以上に苦手な物はフエイには無い。今回はその両方に正面からぶち当たっているのだ。

「その、あのな……」

なんとかなぐさめようと無い知恵を絞っていると、ご近所のオバサマ方が数人集まり、ちらちらとこちらを見ているのに気付いた。あれこそ最速情報ネットワーク、井戸端会議に違いない。こんな所で悪い噂が立てば、本当に廃業になりかねないだろう。

「ほら、とりあえず中に入れ、な？」

フエイはオロオロとなだめすかしながら、ご近所の目に触れないよう、少女を店内へ導き入れてしまった。

そう、それこそがフエイことリア・フエイロンの不幸の始まりとなつたのだ。

（２）それは尋問のような

それは尋問のような光景だった。

少女がほとんど口を開かないため、フェイの質問もつい事情徴収のような口調になってしまっただ。

「で、痛いから泣いてた訳じゃないんだな？」

コクン

「何かに追われていて、すごく怖かった、と」

コクン

「で、相手の顔は見たのか？」

ブルブル

少女は相変わらずハンカチを握り締めてメソメソと泣いていた。フェイはため息を吐くと、彼女から聞き出した情報を頭の中でまとめる。

朝、一人で街を散歩していたら、途中で誰かに尾行されていると気が付いたらしい。それが怖くて逃げてまわっていたら、すっかり帰り道が分からなくなったそうだった。

そして途方にくれた時、家出をした兄　つまりエルカが経営するクエスト屋エルカーナの看板を偶然目にした、と言うわけだ。

「……大体の事情はわかった。ああ、そう言えば自己紹介がまだだったな。俺はリア「フェイロン、フェイでいい。お嬢ちゃんの名前は

？」

「セシリア、ひっく、ラドクリフ」

「ラドクリフ……そうか、そうなるんだよなあ」

店長であるエルカの父ラドクリフ公は九公爵の一人だ。公爵位はシュバート国に九つある領土とセットになっており、つまりラドクリフ公はここゼクス領の領主様と言う訳だ。

もっとも店長のエルカは家出と同時に勘当され、それ以来エルカはラドクリフ姓を使わず、ただのエルカと名乗っている。

エルカが何故家出したのか、知りたくないと言えば嘘になる。

しかし、家庭背景なんて詮索されても迷惑なだけだ。ならば一切聞かないのがパートナーだろう、フェイはそう思っていた。

話を戻そう。

そのエルカとセラの父親ラドクリフ公が治めているのがここ鉦都ゼクス領である。

鉦都の名の通り、ここにはバイスレイトと呼ばれる貴重な鉦物の鉦山があり、当初はその作業場のようなものだった。

しかし、王都アインと港都ツヴァイ領までを繋ぐ巨大な道路バイスアルムが建設される時、ここをバイスアルムが通る事になってから状況は一変した。

当然、大量のバイスレイトが必要になり鉦山付近の人口は増え、さらには物流の大動脈となったバイスアルムはゼクス領に巨万の富をもたらしたのだ。

今やゼクス領は商業都市として、かなり裕福な領に位置している。

つまり、このセシリアなる少女は非常に裕福な領の公女様だという事だ。

その娘を誘拐しようと狙うのは、共感できないしても非常に効率的で納得できた。

況や、何故そんな狙われやすいネギカモ姫が一人で出歩いているか、である。

「さて、まずはセシリア公女殿下　じゃあ長いな。ええと、セラでいいか？」

少女の目が僅かに開かれた。
しばらくフェイを値踏みするように見つめた後、ゆっくりと頷いた。

「じゃあ、セラ。いまお茶入れてやるから、そろそろ泣きやめよ？」

セラは握り締めたハンカチで顔をこすると、もう一度頷いた。もう泣くまいと引き結んでいる口元がいじらしい。

「さて、こっちは捨てるか」

フェイは名残惜しそうに冷めたお茶を窓から廃水路に捨てると、新しくお茶を淹れはじめた。

チロチ口と火の燃え残る釜戸に薪を追加すると、水がめからケトルに水をすくい、勢いを取り戻した火にかける。

その器用な手つきを、セラは興味深そうに眺めていた。

やがてエルカーナ店内がベルリーフの豊かな香りで満たされる。

フェイはカップをセラの前に差し出すと「どうぞ」と薦めた。

差し出されたカップをおずおずと受け取ると、さすがに領主公女殿下らしく優雅に口をつけた。

「おいしい！」

子供らしく素直な反応にフェイも素直に嬉しくなった。この瞬間

は自分が味わうに次いで至福の時なのだ。「だろ？　なにせ入荷したばかりのベルリーフだからな」とフェイが上機嫌に笑うと、つられてセラもようやく微笑む。

話を切り出すに絶好のタイミングが訪れたのだ。

「で、セラ。一つ質問があるんだが」

セラはお茶で警戒心が薄れてきたのか、すぐに頷いた。

「なんで城を抜け出したんだ？」

ガタンッ

セラはカップを持ったまま立ちあがる。お茶を溢さなかったのは見事だ。

大きく見開いた目は「なんでその事を？」と雄弁に訴えていが、普通に考えてそれしかないのだ。

豊かになった代償としてゼクス領の治安レベルが低くなった。だから、クエスト屋なんて『事件解決屋』が成り立つのだ。

そんな中、誘拐して下さいと言わんばかりの贅沢な格好で、娘を一人歩きさせる親はいない。ならば抜け出した事は明白　そう、正直に言おうかとも思ったが、もうひとつの理由をフェイは口にした。

「エルカも、よく抜け出してたって言ってたからな」

「兄様も、ですか？」

「ああ、だから抜け出したくなる気持ちはよく分かる。ほら、座れって」

セラは言われるままに座り、不思議そうにフェイを見る。

「じゃあ、とりあえず城まで送ればいいよな？」

「あ、はい」

慌てて返事をしてコクコクと頷く様は、人形のような作り物めいた雰囲気漂っている。確かに美しいが生気を感じないのだ。下町のクソガキばかり見てきたせい、余計にそう思った。

目鼻立ちが整いすぎるのも、考え物かもしれない。

「じゃあ準備するから、そこで茶でも飲んで待つてな」

営業スマイルで言ったものの、フェイは心の中で溜め息を吐く。こつこつ身内の仕事は全く金にならないからだ。

たとえ無事に届けても、届け主がエルカの知り合いでは領主と言えど礼金は期待できない。あつたとしても『ありがたーいお言葉』だけなのだ。それはむしろ要らない。

だからと言って、これが誘拐に発展するかもしれない以上、放っておくわけにもいかない。

ため息の一つも出るというものだ。

壁にかけてあったホルダー付きのベルトと愛用のボウガン、大ぶりのダガ を腰にぶら下げ、最後に厚手の黒いレザージャケットを羽織る。

今日のような小春日和に厚手のレザージャケットはかなり蒸すだろう。しかし、万が一にも誘拐犯と乱闘なんて事になれば、この皮一枚で命が助かるかもしれないのだ。

しっかりとベルトを留め、セラに声をかけようとした。その時だった。

コンコン

ドアが軽くノックされた。

セラは猫のようにピクリと顔だけ反応し、フェイも油断無くボウガンを構える。

例えば賊が白昼堂々と客を装って店内に侵入する、という可能性もこの街ならありえるのだ。

フェイはドアの向こうにいる人物に向かって照準をあわせつつ、バンとドアを蹴り放なった。

「きゃあああああつ！！」

また絶叫された。

扉の向こうにいた無害そのものの顔を見て、フェイはボウガンの先端をヒョイと上げる。

「タイミング悪いよ、ルナ」

「何？ 何なの？ あれ？ お客さん？」

フェイの肩越しにセラを見つけ、「わあ、かわいい！」と声を上げた彼女は、神官補佐のアルティア「ルナティヒ、通称ルナだ。

癖の無い栗毛色の髪を伸ばしており、相変わらず神官候補生の制服を生真面目に着込んでいる。

綺麗と言うよりは愛嬌のあると言った感じで、彫りの浅いその顔は表情をコロコロと変え、いつも周囲を和ませてくれる。

ルナはエルカーナの開店以来　いや、開店前からも色々手伝ってくれている女性だ。

さらに彼女は若干二十一歳ながら神の『約束』を受けており、簡易的な治療医術の心得もあるため、緊急要員として力を借りる事も多い。

あだやおろそかにできない人であり、ある事件をきっかけにフェイがひっそりと心を寄せている相手でもあった。

「さあ、入ってよ。ちようどお茶も淹れたとこなんだ」
「わーい！」

フェイは営業用でない笑顔で道を譲ると、ルナは軽い足取りで中に入る。そして、不安そうな目で事の成り行きを見ていたセラに「こんにちは」と声をかける。

ルナは孤児の面倒を見ることが多く、子供相手によく好かれるのが自慢でもあった。が、セラはモゴモゴと返事をしながらも目一杯フリーズする。

どうやらセラは初対面の相手は誰でも苦手らしい。
フェイはしうがなしに助け舟を出した。

「名前はセシリア、エルカの妹だよ」
「ええっ！ エルカに妹なんていたの？ 初耳！」

ルナは両手をパタパタさせて驚いた。
フェイはセラの事情を簡単に説明すると、ルナは腰に手をあてて嘆いた。

「ほんと最近は治安が悪くて困ってるの。教会に来た人が食器を盗むなんてしょっちゅう、なかには女性の下着まで盗まれて」

「ええ！」
「なに、そこだけ食いつくなんて、ちょっとやらしいじゃない」
「あ、いや、驚いただけで」

フェイはもごもごと口を閉じる。ルナの前では、まだまだ大人になれない自分が妙に齒がゆい。

「じゃあ、フェイはこれからセシリア様を城まで送るのね？」

「あ、ああ、そのつもりだけど」

「そっかあ、なら仕方ないか。私、帰るわね」

「ええええっ!？」

「だってここ、閉めちゃうんでしょ？ フェイのお茶飲みに来ただけど、そういう事情ならしょうがないしね」

「あ、いや、その……」

しまった。ルナが遊びに来てくれるなど、10日に1回くらいのものだ。その貴重な日に儲けにもならない仕事が入るなど、悔やんでも悔やみきれない。

そんなフェイの様子に、ルナがちよつと不満げにフェイを覗き込む。

「何？ まさかまた店番させるつもり？」

その手があった。

手早く送って戻ってくれば、二人きりでティータイムができるかもしれない。

「いや、その、店番頼むよ。今全然依頼がなくてさ、このままだと結構苦しくて」

「うーん……他にやることないし、まいっか。でも夕方までには帰ってきてね」

「もちろんだよ！」

勢い込んだ返事に、ルナは屈託無く笑った。その朗らかな笑顔にフェイが見とれているとクイクイと袖を引かれた。セラだ。

妙に不満そうな上目使いでフェイを睨んでいる。

「ああ、悪い。そうだな、早く行かなきゃな。じゃあルナ、店番頼むな」

「ふうん、なるほどね……うん、頑張つてね」

フェイよりもセラを見て『頑張つて』と言ったようだったが、セラはプイとルナから顔を背けてフェイを先導した。

フェイは苦笑を漏らし、続くように外へ出る。

「がーんばってねー！」

春の陽気を体現したようなルナの声が、二人の出発をささやかながら祝福したのだった。

陽はまだ高く光も強かったが、幸いにもサワサワと心地よい風が吹いており、散歩には絶好の日和だ。抜け出さなくなったセラの気持ちも分らないでもない。

息を大きく吸い込むと、青い、春の芽吹き匂いがした。

「よし、最短距離で行くぞ！」

領主の城はここから徒歩で一時間ちょっと、セラの遅い歩調に合わせても、まず二時間はかからないだろう。わざわざ高い乗り合い馬車に乗るまでもない。

フェイは時折振り返って、微妙な距離を取ってヒョコヒョコと付いてくるセラを確認した。こうやって子供を連れて歩くと、自分が一気に年寄りじみた気がして嫌になる。

振り返る。前を向く、振り返る。そこでようやく、セラが後ろ

にいと、いざと言う時に守りにくいと思い当たった。

「セラ、できれば前を歩いてくれないか？ 道はちゃんと指示するから」

フェイは極めて紳士的に切り出したつもりだったが、セラはぶんぶんと首を振った。

いざと言うときの安全の為だと理由を説明したがそれでも首を振る。フェイにはまったく理解不能だ。

「これから人ごみを歩くんだ、はぐれたら危険なんだ、わかるよな？」

イライラしたフェイは半分脅しのつもりで言った。のだが、セラはにっこりと微笑むと、走りよってフェイの手を掴んだ。

確かにこれなら一番はぐれないだろう。しかし、なぜ前を歩くのが嫌で手を繋ぐのが良いのか、極めて理解不能だった。

しかし、危険だと言った手前、フェイは手を繋いで歩き始める。しかし、これがどうしようもなく恥ずかしいのだ。これではまるで自分が誘拐犯だ。

知り合いが来ないことを祈りながら、道の端をコソコソと歩き続ける。

「あの」

おずおずとセラが声を出した時、さすがに手を繋ぐ事が恥ずかしくなったのだと、フェイは胸をなでおろした。

「そうか、じゃあ俺の前を歩いてくれるか？」

ブンブンと首を振っての全否定。

フェイの僅かな期待は一秒もしないうちに崩れさった。

「あの、さっきの女の人」

「さっきのって言うと、ルナの事か？」

セラはコクンと頷く。

「ルナがどうかしたか？」

「恋人、ですか？」

セラの一言にフェイは僅かに動揺し、思わず顔を背けた。

「そりゃあ恋人じゃない　けど、友達ではあるな。うん」

「恋人、いないんですか？」

「はあ!？」

フェイは自分の顔が引きつっているのを自覚した。

何でそんな事を答えきやならない、と怒鳴ろうとしたが、ここでセラが泣けば完全に誘拐犯だ。

フェイはため息混じりに答えた。

「……そんなもん、いない」

するとセラはとニマニマと笑って見上げてくる。

その歳で恋人もいないんだ、と言われたような敗北感をフェイは覚えた。

これだからガキは

これ以上恋愛話など広げてたまるか、と、フェイはあえて別の話題を切り出した。

「そうだ。セラのガーディアンってどうしたんだよ？ 公女殿下ともなれば、一人や二人はいるんだろ？」

「その、ガラムは、お休みで」

「ちよつとまで！ 今、ガラムって言ったか？」

セラの言葉を遮るように、フェイは思わず声を荒げた。

「ガラムって、あの風のガラムだろ？ シャムシール 曲刀の達人の？」

「知ってるんですか？」

「そりゃあ知ってるさ！ あの盗賊団ゴルゴンの元副団長で、ああ、そうか。エルカの剣の師匠だったよな。いや、そう考えればありえるか。いやあ、そっかあ」

ナラドⅡガラムデイン、通称『風のガラム』。知る人ぞ知るシャムシール曲刀の達人だ。

ラドクリフ公に仕える前には、なんとあの最強と名高い盗賊団ゴルゴンの副団長だった人である。

各地で軍をも退ける盗賊団ゴルゴンは、怖れられつつも義賊として自由と力の代名詞となっている。

フェイも、クエスト屋をやる前はゴルゴンに入団する気でいたのだ。

いや、今でも機会があればと思っている。

ひよつとして、セラに話をつければ、ガラムさんに会えるかも？

「なあ、セラ。今度でいいから、ガラムさんに会わせてもらえないかな」

「会っ？」

「そうそう。会って話したいんだよ。俺、いつかガラムさんみたいになりたいくてっさ」

「ガラムみたいに？」

セラは小首を傾げる。

「ああ。いつかさ、ガラムの後継者って呼ばれるようになったらな
って」

「後継者って」

「いや、流石に無理なのは分かってるよ。でも、きつといつかは」

そう、あのゴルゴンでも一目置かれるような男に！

妄想に浸っていると、フェイの手がグイと引かれた。
見ると、微妙に頬を赤くしたセラが立ち止まっている。
長い間歩いていたので、体調でもくずしたのだろうか？
しかし、セラは微笑むと小声でつぶやいた。

「なれます」

「ん？」

「フェイさんなら、ガラムみたいに、なれます！」

「あ、ああ、ありがとう。と言っても、俺なんてまだ全然弱いんだ
けだな」

「うっん。フェイさんなら、絶対、大丈夫！」

顔を上げたセラの目は真剣そのものだった。こつこつ直ぐに言
われると不思議と自信が湧いてくる。それと同時に、今は『この子
を守らなくては』と強く決心したのだ。

「おし、じゃあしつかり守ってやるからな」

「は、はいっ！」

「それから、もうフェイさんはやめろよ。フェイでいい。なんかむず痒いんだ」

「じゃあ、その……フェイ」

「そうそう、その方がこっちも楽だ」

「……はい」

繋いでいた小さな手に、キュツと力が込められる。

その瞬間、小さく弱い手の感触に何故かゾクリとした悪寒を感じた。

決定的な間違いを犯したような、そんな寒気が走ったのだ。

こんな子供に恐怖を感じるなんてな

フェイは苦笑すると、疑念を頭の片隅へと追いやったのだった。その疑念が確信に変わるまでの間だが。

(3) その白く大きな道は

その白く大きな道はバイスアルム 白き腕と呼ばれている。

王都アインから東西に伸びた様が腕のようだと、当時の剣の王が名付けたらしい。

ここゼクス領は東に伸びた腕のヒジにあたる位置にあり、フェイとセラの二人はその巨道の脇を並んで歩いていた。

このまま王都方面へ上っていけば、簡単に領主邸へたどり着けるというわけだ。

それにしても、コレ作るのにいったいいくらかったんだ？

フェイはバイスアルムに来る度、ついそう思ってしまう。

なにせ大型馬車が5台並んで走れるほどの桁外れな広さを誇りながら、それら全てがバイススレイトで出来ているのだ。

白い粘土のような鉱物であるバイススレイトは、特殊な焼きを施すことで一定の強度を保ちながら、木のような弾力も兼ね備える。

馬車の轍や蹄鉄に優しいばかりか、形状記憶の性質が強いため跡が付かないバイススレイトは、理想の馬車道の材料と言えるだろう。

一度成型してしまうと再利用できないが、他にも高級食器や防具、豪邸では外壁にも利用されている。その利便性から、加工前のバイススレイトは相当な高値がついていた。

そんな高級品でバカでかい道路を作ろうなどと、お偉いさんはよくも考え付いたものだ。

「フェイ、どうかしたのですか」

セラが小首をかしげて、フェイの顔を見上げていた。

「なんだか少し、嬉しそうです」
「そうか？ いや、そうかもな」

フエイはこの活気に溢れる道が小さい頃から大好きだった。何か来るだけでワクワクするのだ。

なにせここには砂漠の民の露店もあれば、隣国のウォラン人の店もあちこちにあった。遥か海の向こうのムウ帝国から豪商が指輪をぎらつかせて来る事もあれば、美都アハト領からは連日のように芸団がやって来ている。

その活気は陽が沈んでも変わらない。

白い道は月明かりを受けてほのかに光り、その脇を何百何千ものかがり火が毎晩焚かれるのだ。露店では珍しい食べ物が並び、それを肴に人々は酒を酌み交わす。

太陽と月が空にある限り、ここは眠らない道だった。

「そう言うセラも十分嬉しそうだな」

「はい！ すごく楽しいです！」

「そ、そうか……それより、そろそろ手を離して歩く気にならないか？」

「ぜんぜんありません！」

「……そうか」

肩を落としたフエイの横を、二歩足で走る大きな獣にひかれた馬車がすさまじい速さで通り過ぎる。

「おお、竜馬だ！ 久しぶりに見たけど、やっぱり速いな」

「竜馬は速過ぎて、ちよつと苦手です」

「……まさか、乗ったことあるのか？」

「いえ、お父様が持ってます」

フエイは目をむいた。

竜馬一頭でラマが百頭買えると言われている。つまり竜馬を一頭を売れば、一生働かなくともすむ大金が手に入るわけだ。

「竜馬なんて金持ちの道楽かと思ってたけど、領主も持つてるんだな……そりゃ経済的に言えば持つてても不思議じゃないが、うーむ」

「フエイ、乗りたい？」

「……いや、いい。乗ったらラマの乗合馬車がストレスになりそうだ」

ちょうど反対方向からラマの乗り合い馬車がゆったりと現れた。四倍とか五倍とか、そう言うレベルじゃない速度差である。

「フエイ！ あれなに？ あの大きい馬車！」

「ああ、あれが今言ったラマの乗合馬車だ　って、見た事無かったのか？」

「うん。外にあまり出ないし、馬車の窓はいつも閉まってるから」

他愛の無い雑談を交わす内に、徐々にセラの言葉数が多く、砕けたものになっていくのに気がついた。

この状況に慣れてきているのだから、いい傾向ではある。

こっちは誰かに見られやしないかと、ヒヤヒヤしてるってのにな

フエイは何度となく周りを見回す　しかし、二人に注意を払う人など誰もいなかった。

道行く人々が気にしているのは、脇にある魅力的な商品の価格であり、自分の懐にある財布の残りなのであろう。

その財布の紐を緩めるべく、威勢の良い呼び込みが飛び交い、それに立ち止まる人がいて、それを避ける人がでる。

結果、混雑が生まれ、フェイ達はその中に巻き込まれることになった。

まずいな、もう少し警戒するか

人通りの無い場所の方が危険と言えば危険だが、警戒する場所と危険な場所は違う。

人ごみにまぎれて護衛をザックリ刺すなんて、姑息な悪党の考えそんな事だ。

フェイは気を引きめて、周囲を観察する。

クイクイ

フェイが視線を巡らせていると、セラが手を繋いだまま、空いている方の手でフェイのジャケットを引っ張っていた。

「どうかしたか？」

「あそこ」

セラの指差した先には、真っ赤な巨大テントがデンと鎮座していた。

通り沿いでもひととき大きなテントは、他の店が三つも四つも入りそうなサイズなのに、その出入り口は人でごった返しており、その繁盛振りがうかがえる。

テント上部に貼ってある布看板には、凝った公用文字で『YUNO』と刺繍ししゅうされていた。

「ユノ？ ああ、コノハが言ってた最近出来た装飾店って、これの事だったのか」

フェイが一人納得していると、セラがまた繋いでいない方の手で袖をクイクイと引っ張った。

その目はキラキラと輝き、視線は完全に店へと吸い込まれている。

「……まさか、この状況で買い物がしたいって言うんじゃないだろうな？」

嫌味たっぷりに尋ねるが、セラは意に介さず、表情をパツ明るくすると大きく頷く。

フェイは嘆息して空を見上げた。

『狙われてる自覚あんのか、この重箱入りネギカモ!』と怒鳴れたら、どれほどスツキリするだろうか。

しかし、怒鳴ればこの泣き虫がどうするかなど明白だ。

ここで泣かれるのは本当にたまらない。

一刻でも速く帰ってルナとティータイムを楽しみたいフェイは、苦渋の決断をする。

「……分かった。その代わりさつさと選べよ」

セラはコクンと頷くと、あれほど離さなかった手をパツと離し、脱兎の如く店の人ごみに溶け込んでいった。

制止する暇などない。今までのゆったりした拳動からは考えられない速度だった。

そしてフェイは気付く　クライアントを完全に見失っていたのだ。

「まずい！」

こんな人ごみの中でセラを見失ったら、さらわれる可能性だって無いわけじゃない。

いや、狙っているヤツから見れば絶好のチャンスだ。

「くそ、こういう所は苦手なのに」

装飾店の客はほとんどが女性だ。

エルカならば堂々と入れるだろうが、フェイにはそれが不思議でたまらなかった。

しかし、そんな事を言ってる暇もない。しぶしぶフェイはセラを追って、人のごったがえす店内に突入する。

「おい、セラ！」

中に入るが、セラの姿はもうどこにも見当たらなかった。

人ごみや装飾品が並ぶ棚で視界が悪いことこの上ない。

仕方なく、フェイは店内をウロウロと徘徊することにした。

ドン

「おい、オバちゃん、ちゃんと周りを見ろよ！　って、いたっ！」

かっぱくの良いオバちゃんにはじき飛ばされ、その先にいた若い女性の集団に足をしたたかに踏まれる。

それでも諦めるわけにはいかず、フェイは必死でセラを探した。

「おい、セラァ！　どこだぁ！」

恥ずかしいのを我慢して、とうとう大声で呼んでみる。

しかし、セラからの応答はまったく無い。

時折チラチラと覗き見る周囲の視線が痛かった。

くそっ！ やっぱり子守なんてやるんじゃないかった！

心で悪態を吐きながら、フェイは半ば自暴自棄になって叫んだ。

「おおおい！ セーラーッ！ 返事しろおおっ！！」

「フェイ、アンタ何やってるの？」

背後からかかった声に、慌てて振り返る。すると最悪な事に、そこには見知った顔があった。

「うわ、コノハ」

後ろで縛ってある綺麗で真っ直ぐな黒髪、切れ長の目、スラリと伸びた無駄の無い体。

ややキツめの美人顔が訝いぶかしげに傾けられている。

クグラ・コノハ、フェイの一歳年下の十八歳。一応フェイとは幼馴染であり、コノハとフェイ、それにクロフと言う三人組は近所での名を馳せた悪ガキトリオだ。

しかも、そのトリオのリーダーだったのは、間違いなく彼女である。

「い、今の見てたのか？」

「店内であれだけ叫んでれば嫌でも目立つわよ。ったく、恥ずかしい」

その容赦ない言葉にフェイはがつくりと項垂れる。

コノハはかなりの美人だが気が強く、厄介なのはそれ以上に腕っ節が強いことだった。

彼女の家はクグラ槍術道場なる物騒なノウハウを売り物にしており、コノハはその最高位の師範とか言う階級にいるらしいが、それ

が肩書きだけでない事はフェイが身をもって知っていた。

店長のエルカより強い人類と言えば、フェイはコノハしか知らないのだ。

「フェイがこんなところに来るなんて、珍しいじゃない。何かあったの？」

そこで、フェイはようやくセラの事を思い出した。

「そうだ！ 実はさっきまでエルカの妹を護衛してたんだけど、ここで見失って探してたんだ」

「エルカに妹なんていたんだ。何でアイツは内緒にするかな」

「でもまあ、それがエルカだよな……あ、そうだ、一緒に探してくれないかな？ セラって言うんだが、どうも誘拐目的で狙われてるらしくて」

「ちよつと、それ大変じゃない！ ったく、しょうがないわね。手伝ってあげるか」

「すまん、助かる」

「あ、そうだ！ 依頼料としてこれの代金お願いね」

コノハはニコリと笑うと、手にもっていた髪留めをフェイの手に押し付けた。

チラリと値札を見るとやはり安物ではなかった。だが、この状態を打破する代金と思えば決して高くはないだろう。フェイは「わかった」と条件を承諾した。

フェイはセラの容姿を簡単に説明した。

目立つ格好なので、詳しい説明など要らないだろう。

説明を聞いたコノハは「十分後にこの店の入り口で」とだけ言うのと、するすると店の奥へ消えていった。

さすが、頼もしい

フェイは胸をなでおろす　　が、なでおろした手に残った髪留めが虚しかった。

後はコノハに任せれば大丈夫だろうと、フェイは出口のそばにある料金所に向かう。

店内の人は多いが、料金所の混雑はさほどでもなかった。

よく見ると代金を支払う場所が四ヶ所にも分かれ、しかも店員一人一人が良く訓練されているようだ。

オーナーはやり手だな

だからこの盛況振りもあるのだろう、フェイは商売の奥の深さを噛み締めると、代金を払うために最後尾に立って順番を待つ。

もちろん、フェイはその間にもセラの姿を求めてキョロキョロと周りを確認し続けた。

そして、何気なく店の外へ目を向けた時

「え」

巨道バイスアルムはさんだ向かい側で、不信な大男が水色のモノを脇に抱えているのを見つけてしまった。

男は走りながら裏通りの路地に入ろうとしており、抱えている水色のモノからは、尾のように二本の金色の束が揺れている。

まちがいない、セラだ。

「くそっ、なんて強引な人さらいだ！」

フェイは客の列を抜け出し、全速力で店の出口へと駆け出す。

「カシム、万引きだよっ！ その黒ジャケットのヤツ！」

唐突に甲高い女性の声が店内に鋭く響きわたった。

黒ジャケット……って、俺っ！？

フェイは立ち止まって訳を話そうとしたが、事は一刻を争う。
やむを得ず、フェイはそのまま店を飛び出すと、そのまま白き巨道へと足を踏み入れた。

その瞬間、フェイは背後にゾクリとしたものを感じ、身をよじって左によけた。

ビュオッ！

空気を裂く轟音が、寸刻前までフェイのいた空間を斬った。
カシムと呼ばれた男の斬撃に間違いない。立ち止まらないフェイに向かって攻撃を仕掛けてきたのだ。

「ちょ、ちよっと！」

ブォン！

フェイの言い訳など知るかと言わんばかりの二撃目が首のすぐ後ろを横切った。

空気を切り裂く音が全く洒落になっていない。

振り向けば、さぞ鬼のような漢がいるに違いないだろう。

なんで、こんな事につ

フェイは泣きそうになりながらも必死で加速し、三撃目を奇跡的にかわした。

そしてセラの消えた路地へと、ひたすら姿勢を低くして疾駆する。既に追っているのか逃げているのか、フェイには分からなかった。

ビュゴォ！

「ちょ、ちょっと待てよ！ 俺は」

ウォン！

「し、死ぬ！ 死ぬるうつ！」

右へ左へと紙一重で斬撃を避けながら、フェイはただひたすら走った。

その目に浮かんだ涙を、いったい誰が責められよう？
男だろうが、怖いものは怖いのだ。

(4) 涙を拭う暇なんて無い

涙をぬぐう暇なんて無い。

斬音は耳のすぐ後ろで絶え間なく続いているのだ。

足には相当の自信を持っていたフェイだったが、一向に引き離せない。

この追っ手、装飾店ユノのオーナーは確かカシムと読んでいた……名前から砂漠の民だろうが、相当の手練だ。

「おおおっ！」

フェイは雄叫びとも悲鳴ともつかない叫びをあげ、セラの消えた路地へと入った。

幸い、路地はまっすぐ一直線に伸びており、遠くに男と二本の金髪が踊っているのを確認できた。

「いたっ！」

フェイが叫んだ時に出来た一瞬の隙をついて、カシムの斬撃が容赦なく襲う。

ビチッ！

フェイのジャケットをかすめる。かすっただけでこの音　まともにあたったら本当に死ぬる。

ヒイと言っ情けない悲鳴を飲み込み、フェイはひたすら全力で駆け続けた。

……おっ、あれは！

フェイは路地脇に右に山積みされていた樽を見つけ、内心で歓声を上げる。

ゼイゼイと息をきらせながら樽に近づくと、その一番下の樽を思い切り蹴り飛ばした。

中身は空だったらしく、山積みされた樽はガラングロンと音をたててあっけなく崩れ落ちる。

案の定、後ろから「うお」と言う小さい悲鳴が上がった。

よし、これで少しは時間が稼げたはず

フェイが路地の先を睨むと、ちょうど樽が崩れる音にセラを抱えた男が振り返ったところだった。

男はフェイに気づき、その顔を焦りの色に染めて逃げ始める。

一瞬、抱えられたセラとも目があう。

今にも泣き出しそうなその顔に、希望が浮かんた。

待ってろ

セラの顔を見た瞬間、暴れていた鼓動が、上がっていた呼吸がスウと落ち着いた。

ふっと短く息を吐くと、フェイは路地の濁いた土を蹴って加速し、男との距離を詰める。

セラも必死で暴れ走る邪魔をしていた。

よし、いいぞ！ あと少しで……

ゴキイイイ！

そう思った刹那、右肩にとんでもない衝撃が落ちた。

肩の感覚が消し飛び、膝はガクンと折れる。

カシムに追いつかれたのだ。

激痛で意識が飛びかけたが、歯を食いしばってかろうじて繋ぎ止める。

そして、フェイは霞む意識の中で、感だけを頼りに地面を転がった。

ガッ

カシムの追撃が地面をえぐった。

「ちっ」

背後から舌打ちが聞こえるが、息をつく暇は無い。
フェイは立ち上がりざま、執念で前へと駆け出す。

これ以上、カシムを無視するのは危険だ

まずはカシムを何とかしなければ…… フェイは覚悟を決めると、怪我の具合を確認する。

右腕は熱いケトルでも押し当てたように脳へ痛みを訴え、指先まで震えていた。

あきらめて、フェイは利き腕でない左手で愛用のダガーを引き抜く。

そして、走りながら徐々に右の家屋に近づく。

目指すは、三軒先の出っ張った窓だ。

3
2
1

タイミングを見計らい、窓に向かって飛んだ。

タン

走っていた勢いを使って窓枠を蹴ると、さらに上へと跳躍する。
フェイの体は急制動を掛けながら、空高く舞い上がった。

ビュオ！

フェイの足のすぐ下を、大根のように太い棒が、轟音を上げて通り過ぎる。

直後、踏鞴^{たたら}を踏んだカシムが足下に現れた。

やはり砂漠の民だったらしく頭は見事に剃り上がって、上半身は裸だ。そして、その背中では想像以上にゴツイ。

正面から戦っては、ほとんど勝ち目など無かったろう。

だが、この一瞬だけは、その無防備な背中をフェイに晒しているのだ。

「うおおおお！」

落下と同時にフェイは雄叫びをあげ、カシムの首元にダガーのギリップを叩きつける。

大木でも殴ったような手ごたえ　利き腕の攻撃でなかったのが心配だったが、カシムは「ぐぬっ」と低くうめくと、ゆっくりと前のめりに倒れた。

ついで、大根のような巨大棒がズンと重量感ある音をたてて主人の脇に倒れる。

あんなので殴られたのだ、よく意識が残っていたものだとなフェイは人事のように感心した。

「よし、頼むからいい子で寝ててくれよ」

ピクリとも動かないカシムを飛び越えると、フェイは休むも無くセラを追う。

男はまだ見える位置にいた。だが、あの先はたしか枝道が無数にあり、ここで見失ってしまうと、見つからなくなる可能性が高くなる。

フェイは走りながらダガーを素早く収めると、今度は腰に下げているボウガンを引き抜いた。

「ったくよお」

フェイは悪態を吐きながら、その場にひざを付く。そして、立てたひざを使いボウガンを固定する。

「クエスト屋を」

照準を男に合わせ、トリガーロックを外す。

男は右脇にセラを抱えているので、なるべく遠い左足へとさらに照準を絞った。

神経を冷たく細く尖らせる。

そして、痛みすら消えた一瞬、フェイは吠えた。

「なめるなっ！」

キヨン

小気味良い発射音と共に、鉄製のボルトが鋭く射出された。ボルトは路地の狭い空間を気持ちよさそうに疾走する。

そして、セラをかすめて男の右肩に吸い込まれた　　男はたまらず、セラを地に落とす。

「あ、あぶねっ。くそっ、照準が狂ってやがる」

さっき叩かれたときか、店でオバちゃんに跳ね飛ばされたときか、ボウガンのフレームのどこかが歪んでしまったらしい。

フェイは冷や汗を拭いっつ、地面に転がったセラへと走り寄った。

「く、くるなっ！」

男は走ってきたフェイに気づき、撃たれていない左手でセラを担ぎ直そうとしたが、セラも必死で抵抗しており上手くいかない。

フェイがさらに迫ると男はとうとうセラを諦め、バタバタと逃走を開始した。

フェイは倒れてうずくまっていたセラに近づき、その背中に手を当てる。

小刻みに震えていた。

「おい、セラ。大丈夫か？」

セラは両手で自分の肩を抱いており、地面にこすり付けるようにしている顔は蒼白だ。

なんとか体を起こして地面に座らせたが、とても声が出そうな状態には見えない。

言いようのない不快感がフェイを襲い、路地の先を睨む。

男は肩を抑えながら、枝分かれしている道を真っ直ぐ逃げていた。ここで逃げられては、セラはまた狙われるだろう。

「ちょっと、待ってろ」

セラの頭をポンと叩き、フェイは数歩進みと再び片ひざをついて座った。

腕に仕込んであったボルトをボウガンへ素早く装弾し、右肩に激痛が走るのを無視してボウガンを一気に引き絞った。

「つくそ、俺は早く帰りたいってのに」

わたわたと逃げる男に照準を合わせると、そこからさらに左下へボウガンの切っ先をスライドさせる。

そして呼吸を整え集中する。痛みに震える照準がピタリと止まった一瞬、静かにトリガーを引く。

キヨン

ボルトは右足へと見事命中し、誘拐犯はもんどりうって道端で転げまわった。

しかし、命中したにもかかわらずフェイは不機嫌そうに舌打ちする。

「くそ、やっぱり歪んでやがる。修理代も高いってのに……おい、セラ、そろそろ立てるか？」

じっとフェイを見つめていたセラは、慌てて地面に手を付き立とうとする。

しかし、足腰にまったく力が入らないようで、申し訳無さそうに首を振った。

「困ったな……」

セラをこの場に置いて男を保安所に突き出しに行けば早いかもしれないが、あの男に仲間がいないとも限らない。

フェイは小さくため息をつく、セラの前に屈んだ。

「早く乗ってくれ。アイツが復活すると話がややこしくなる」

そう言っただけでセラをさらった男ではなく、ずっと後方で昏倒しているカシムを指差した。フェイの偽らざる本音だ。

セラは少しの間戸惑ったが、おずおずとおぶさってきた。

「……軽いな。本当に乗ったのか？」

「は、はい」

フェイは左手でセラを支えると立ち上がり、撃たれた箇所を抑えギアギアとわめいている男へと近づいた。

そして、痛む右手でボウガンを何とか持ち、それを男に突きつける。トリガーも引いてないが十分だませるだろう。

「よし、手を頭の上に乗せろ。ああ、撃たれたほうは勘弁してやる。いそげ！」

男はゆっくりと左手を頭にのせて、こちらをうかがう。

その目はまだ諦めているようには見えず、まだ油断はならなかった。

「よし、そのまま立て。左足が無事なら立てるだろう？」

フェイが命令すると、男は座ったままベラベラしゃべり始めた。

「た、頼む！ 見逃してくれ！」
「ダメだ。さつさと立て！」

ここで付け入る隙を与えてはいけない。
フェイはボウガンの先をさらに男に近づける、が、男はさらにま
くし立てた。

「頼むよ。家には腹をすかしている女房と子供がいるんだ。俺だっ
てこんな事したくなかったさ。生きるために仕方なくやったんだ。
なあ」

「残念だったな、今日の善意はとくに品切れだ。後は保安所に掛
け合え」

「お、俺が帰らないと子供が飢えて死んじまうんだよ！ なあ、頼
むぜ色男の兄ちゃん」

「うるせえ！ ぐだぐだ言っでないでさつさとっ……グエ」

突然、首を絞められた セラだ。

負ぶさっているセラがギユウギユウと首を締めていたのだ。

「グッ、セラ！ なにするんだ！」

「……逃がして、あげれない？」

「ふざっ、ふざけるなっ！ 駄目なモノは駄目だっ！」

「……でも」

「ほらほら、この可愛い嬢ちゃんもこう言ってることだしさ。なあ、
頼むよ」

男は必死に懇願しながらも、チラチラとフェイの隙をうかがって
いた。

危険だ そう感じたフェイはボウガンの先を男の眉間にあて、
つぶやく。

「そうか、死体にした方が楽だったな」

この脅しに男は慌てて起き上がる。

だが、当然背後からはセラの猛抗議、つまり絞首攻撃にさらされる事になったのだ。

このガキ、ここで捨てたるか

必死の思いで助けた相手に首を締め付けられ、さらに、男を警戒するためボウガンを構える右手は下ろせない。しかも、この状態で保安所まで歩けと言う 極めつけは、これが金にもならないのだ。何故こんなに頑張っているのか、フェイにはもはや分からなかった。

ただ分かっているのは、今日が最悪の厄日だと言う事だけである。フェイは一刻も早くこのゴタゴタをどうにかしたい、そればかりを痛切に願っていた。

しかし、やがて彼は後悔する。

ここで捨てればよかったと。

(5) 陽は赤く染まり

陽は赤く染まり、空には星がうつすらとその姿を現しはじめた。道沿いの客引きの声も商人の巧みな口上から、屋台の騒がしい声へと取って代わる。

それらの声を一切無視して、奇妙な一団はひたすら歩を進めていた。

「つ……着いた」

やっこの思いで保安所にたどり着いた時、フェイは疲労と痛みと酸素不足と重度のストレスで涙が出そうだった。

安っぽい保安所のドアを乱暴に蹴りつける。

すると、すぐに細目の衛視が「何事だ!？」と出てきて、フェイを見るなり噴き出した。

「おい、フェイ! なんだその面白すぎる格好は?」

「……クロフ、この男を頼む。人さらいだ」

『人さらい』と聞くやクロフと呼ばれた衛視はさすがに表情を変えた。

腰袋から錠付き縄を取り出すと、男を素早く後ろ手に縛り上げる。その手馴れた手つきに幼馴染もすっかり衛視になったんだなと、フェイは感慨深く思った。

クロフ、本名はアルター・クロフォード、フェイの数少ない友人だった。

「クロフ、ちょっと中で休ませてくれ。限界だ」

「事情徴収もあるし、それは構わんが……背中のお譲ちゃんは被害

者か？」

「……被害者は俺だよ」

フェイは死んだ魚のような目でそうつぶやくと、安っぽい扉を開いて保安所の中に押し入る。

中には他の衛視の姿は見えず、いつも通りの極めて殺風景な部屋だ。

確かに、衛視は領主の雇う言わば領所属の傭兵隊のようなもので、その詰め所に贅沢など許されるわけも無い。だが、もう少し領民に華やぎを与えるような配慮があっても良いような気がした。

とは言え、ゼクス領の衛視はバイスレイト製の高級アーマーを支給されているため、他領に比べて恵まれている方なのだろう。その白いアーマーは『白犬』とも皮肉られる原因にもなっているのだが

……

いや、今そんな考察はどうでもよかった。

フェイは

「ほら、もう立てるだろ」

フェイは椅子の近くで言うと、セラは無言で背中から降りた。

「なんで？」

降りた直後、セラはフェイを睨み上げる。

なんで あの大男を逃がしてやらなかったのか、と言うことだろう。

「また誘拐されるぞ、それでもいいのか？」

と言うフェイの脅しにもセラは全く動じず「ちゃんと反省してた」

と睨み続けた。

その真っ直ぐ過ぎる眼差しにフェイは逆に怯む。
理論が通じない、だから子供は苦手なのだ。

「なんで？」

頑なにセラは問う。

フェイはそれに答えず、重かったレザージャケットを脱いでイスにかけると、そこにグッタリと座り目を閉じた。

その瞬間、今までの疲れがどつと出てくる。

金槌でガンガン叩いているような右肩の痛みは、クギでも刺さってるのかと言うくらいまで酷くなった。ひよっとすると骨までやっ
たかもしれない。

「なんで？」

薄目を開けてセラを見ると、口を真一文字に引き絞っている。

あの顔は返事をするまで諦めないだろう。

フェイは面倒くさそうに口を開いた。

「自分でやった事の責任は自分で取る。それがこの世界のルールだ」

「でも、そのせいで、子供が死んじゃうなんて……」

「はっ！ 飢えて死ぬガキなんざ、この街にはいくらでもいるさ」

「うそです！ お父様の街なのに、そんな」

「いるさ、俺も死にかけたからな」

「……うそ」

フェイの言葉を聞いて、セラは押し黙った。

父親が治めるこの町に公然と飢えて死ぬ人がいるとは、温室でぬくぬくと育った少女にはとても信じられないだろう。

真実が信じられない。ならば、フェイにはこれ以上何も言う事はなにも無い、ダンマリを決め込むつもりだった。

「……ごめんなさい。知りませんでした」

この言葉にフェイは驚いた。セラは事実を受け止めたのだ。その上で、さらに言葉を重ねる。

「でも、その中で助けられる子がいるなら、私は助けたいです」
「……なぜだ？」

「私が、そうしたいからです」

この答えにフェイは苦笑をもらした。確かにわがままだったが、筋は通っている。

この少女は現実が見えない訳じゃない、恐らく何も『見させてもらえなかった』のだ。

ならば質問にはちゃんと答えねば、フェアじゃない　フェイは覚悟を決めた。

だらけていた姿勢を少し直し、肩の痛みは顔に出さないよう注意して話し出す。

「俺は小さい頃、パンを一本盗んでとっ捕まったんだ」

セラはキョトンとフェイを見た。「いきなり何を？」といった顔だ。

「とっ捕まって、ここに連れて来られた。その結果、半年の間バイスレイト鉱山に放り込まれて強制労働だ」

「パン1つで、半年も？」

「……そうだな、あの時は俺もそう思った。でも、それがこの街に

決めてある代価だ」

フェイは目を閉じ、まぶたの裏に鉦山での日々と、厳しかった人々を映し出す。

あの生活は最低だったが、最悪じゃなかった。

「あれがあつて俺は生き方を学べた。そのお陰で、俺は生きるために盗まなくて済むようになったんだ」

「……」

「それが正しい代価だったかなんて、そんな事は俺に分からない。ただ、多くのヤツが正しいと信じて決めた代価なんだ。それを払わないなんてフェアじゃない。子供がいるなら、子供が苦しむのもその代価なんだろう」

フェイの言葉に、セラは理解したのかしてないのか、ムスリと押し黙ってしまった。

しかし、この俺が罪と罰についての説教とは、ねえ

フェイは自嘲気味に溜め息を吐くと、イスにもたれかかる。

安物のイスは迷惑そうに、ギィと小さく鳴いた。

やがて、クロフが奥の部屋から戻ってきた。

さっきの男の言い分を聞いていたらしい。調子のいい口述を長々と聞いたせい、かなりウンザリした表情だ。

しかし、クロフに休む間は無。次は被害者の、つまりフェイとセラの事情徴収なのだ。

と言つても、主にフェイが受け答えをしたので、それは軽口の応酬となった。

「たつくよお、フェイ。俺はまたお前がとうとう誘拐犯にでもなったのかと思ったぞ」

「誘拐なんて小さい犯罪は俺の主義じゃない。俺がやるならもつとでかい事をやるな。たとえば」

「やめとけやめとけ！ お前に犯罪者なんて無理だよ。コノハにぶっ飛ばされてお終いだぞ？」

「ふざけんなっ……って、あれ、コノハって言えば何か忘れてるよ
うな……」

フェイは眉根にしわを作っと思いつくとするが、思いつく瞬間にクロフの声がかぶさる。

「おい、フェイ。そんな事より、こちらにいる美しいお嬢ちゃんをそろそろ紹介して欲しいな」

「ああ、そうだったな。名前はセシリア、セシリア＝ラドクリフだ」

クロフは言われた名前を帳面にさらさらと記載する。

「ふんふん、セシリア＝ラド……クリフって、うん？ ラドクリフ？」

「忘れたのか？ 白犬の飼主殿だろ」

「ああ、領主様の娘ね……って、セシリア公女殿下っ！？」

クロフは目が飛び出さんばかりに開かれた。

普段細い目がここまで大きくなると非常に怖い。

クロフはセラの顔をジロジロと眺め、やがて大きく頷いた。

「……なるほど、ここまで綺麗だったとはな。領主様が溺愛するの
も分かる」

「領主が溺愛？ その話は衛視の中じゃ有名なのか？」

「ああ。なんでも領主様は公女の周りから男をいっさい排除して、城の外には一歩も出さない徹底ぶり　のはずなんだが」

「深いことは考えるな。昇進が遠のくぞ」

その言葉にクロフは苦虫を噛み潰したような顔で頭をかいた。

「その言葉は耳が痛いな……実はな、レンファが後一押しで結婚してくれそうなんだよ」

「知ってるさ、コノハが散々言い触らしてるからな」

「なっ　ま、まあいいか。それでレンファのやつがな、せめて衛視長か城勤務に昇進するまで結婚はお預けだって言うんだよ」

「……それはかなり大変だろ。いったい何十年先になるんだ？」

「だろ？　働いてる場所が場所なだけにレンファに言い寄るヤツなんて日替わりでいるだろうし、俺は気が気でなくてな」

どうにもクロフは真剣に参っているようだ。

レンファは酒場の看板娘で、気は強いが気立ては良い。酔っ払いから口説かれるなど日常茶飯事だし、心配性のクロフならば日々恐々とするのも無理からぬ事である。

「おお、そうだ！　だったらこの公女誘拐の捕り物、クロフにやるよ」

「やるよって、フェイ？」

クロフがきよとした顔でフェイを見る。

「領主の大事な娘を誘拐犯から救出、これなら城勤務の足がかりになるだろ？」

「しかし、それじゃあお前は……」

「おっと、万一報奨金が出たらそれは貰うぞ？ 後はどうせありがたい言葉か何だかだろ？ そんなもんいらねえし」
「フエイ！！」

クロフは両手を祈るように組み合わせてフエイを拝む。おまけに目の端に涙まで浮べていた。

フエイは「よせよ」と手で払い、ニヤリと笑って条件を追加した。
「その代わり、もし昇進したらクエスト屋エルカーナをよしなに」
「もちろんだよ！ ありがとう、フエイ！」

左拳をガツガツと合わせる。下町で育った者の友情の挨拶だ。

「あの」

と、セラがおずおずと声を上げた。
思えばずいぶんとほったらかしにしまったものだ。

「どうした、セラ。便所か？」

「フエイ、お前はそんなのだから独り身なんだ。顔だけはエルカよりいいのに」

「偉そうに言いやがって、クロフだってレンファがはじめての女じやねえか！」

「いいんだよ！ 一人いれば十分！ 大体、何でそんな事知ってるんだよ」

「いや、それはレンファが言いふらしてるぞ」

「なにいいいいっ！？ ちよつとまで、他に何かっ」

「あのっ！」

二人の軽口を切るようにセラが口を割り込む。大人しかったセラ

が出した精一杯の声だった。

フェイが振り返るとセラはまた押し黙るが、クロフがニッコリと笑って「なんでしょう？」と尋ねると、セラはおずおずと話を切り出した。

「あ、あの人は、どうなるんですか？」

クロフ相手に緊張してるのか、セラの声は震えていた。

少なくとも茶化す場面でないとフェイとクロフは目を合わせる。

「包み隠さず話してやりな。この町を知ってもらういい機会だ」

フェイが頷くと、クロフは監視らしくセラの前にかしずく。

「セシリア様、大丈夫ですよ。先程の男、名はチックトライムと言いまして、手配中の詐欺師でした」

「さぎ、し？」

「ですが、ご安心下さい。ちゃんと捕らえて厳重に牢に拘束してありますので、もう二度と公女殿下に危害を加えるような事はありません」

「ち、違うの！ そのチックさんに、飢えてる子供がいて……その……助けて、あげられませんか？」

クロフはキョトンとしたが、が、すぐに事情が飲み込めたらしい。

「セシリア様はお優しいですね……ですが、あの男に子供はおりません」

「え」

「ああいう手合いのヤツは、捕まった時は大体そう言うもんです」
「そん、な……」

「チック」トライムは、元々賭博で偽手　ええと、つまりカジノでインチキをして儲けていたらしいのですが、そこを追い出されてからは、詐欺や恐喝、強盗まがいの事もやってたようです。一度そういう生き方を覚えてしまうと戻れないモノなんですよ。さっき聞いた証言も嘘だらけで　」

「……それじゃあ」

「チック」トライムの処分は領主様の判断を仰ぐ事になりますが、まあ鉱山での強制労働を二十年と言ったところですか。ですから、ご安心下さい」

クロフの言葉にセラは魂の抜けたような顔になってしまった。

後半は、ぼんやりと頷く事も無く聞いていた。

シヨックだろうが仕方ない、これも時間がたてば良い教訓となってくれるだろう。

フェイが安堵混じりに息を深く吐いた時だった。

ドンドンッ

突然、保安所の扉がけたましく叩かれた。

クロフは「今日は大入りだな」とボヤキながら席を立つ。

取り残されたセラは、自分の殻に籠るように俯くと、すっかり塞ぎ込んでしまっていた。

これ以上自分にできる事など何も無い、そう思ったフェイは少し眠ろうと目をつぶる。

「まったく、高い金を払ってるのに泥棒一人捕まえられないなんて、仕様の無いデクの棒だね！」

保安所の外から甲高い女性の声が頭に響いてきた。クロフはまだ扉を開けていないにも関わらず、だ。

フェイは首を傾^{かし}げる。このキンキン声に微妙に覚えがあったからだ。しかも、その記憶は最近である。

誰だったかなと扉のほうを覗き見ると、クロフが開いた扉の間から二人の影が見えた。

ん？

真っ赤なドレスを見事に着こなした中年の女性と、その後ろに申し訳なさそうにしている褐色の肌の男が立っている。

男は上半身が裸で見事な筋肉を晒し、手には巨大な棒を持っている。

あの大根のような太さの棒には、強烈な見覚えがあった。

カシムッ！

フェイの背筋にゾクリと悪寒が走った。

慌てて目をそらそうとするが、その瞬間カシムと目がばっちり合っってしまう。

ガタンッ

フェイは思わずイスから腰を浮かしてしまった。

それを見たカシムは全てを悟り、クロフの横を擦り抜け、野獣のようなスピードで迫ってきた。

「ちょ、ちょっと待てっ！　ちがっ、ちがっ！」

「うがあああああっ！！！」

フェイは慌てて説明しようとするが、カシムの獣のような咆哮にあっさりかき消される。

そして、大根棒は唸りを上げ容赦なくフェイの腹に吸い込まれた。

ドゴスッ！！

フェイはイスごと空を飛んだ。

幸いだったのは、そこで意識が途切れた事だったのだろう。たぶん。

(6) その天井には

その天井には年輪のようなシミがあった　意識の回復したフェイがまず気付いた事は、そんなどうでもいい事だ。

どうやら気絶していたらしい。いつの間にか保安所の簡易ベッドの上に寝かされている。

天井にある茶色いシミは、おそらく監視達の吸う紫煙しえんが何年も掛けて描いたものだろう。年輪と言うのもあながち間違っていない。

フェイは少し体を動かしてみようとして　腹に激痛が走り、諦める。

目線で体を確認すると、裸にされた上半身が包帯でグルグル巻きにされており、そこから塗り薬の匂いが漂ってきた。

手当てをされたらしいが、右肩の包帯の巻き方が異常なくらい下手で、きついくせに隙間だらけだ。

その先に、心配そうな顔のセラがいた。

「フェイ！」

「く、くるな」

抱きつこうとしたセラを動く左手で辛うじて押し留める。

その騒ぎに誰かが近づいてきた。真っ赤なドレスが印象的な婦人だ。

「おや、気付いたみたいだね。よかったよかった」

傷に触る明るい口調で頷いたのは、あの装飾店ユノの店主で、名もそのままユノと言っらしい。

年齢はまったく不詳で30代前半に見えることもあり、50代に

見えないこともない。

「いやあ、悪かったねえ。まあ、誤解されてもしようがない状況だったし、恨みっこは無しだよ？」

フェイの不機嫌そうな顔を物ともせず、ユノは調子よくまくし立てていた。

運良く腹に穴はあかなかったそうだが、今度は胃に穴があきそうだ。

カシムとその主人ユノにクロフが既に事情を説明したらしい。勘違いとわかったユノは巧みに責任をばかし、話をまとめにかかっていると言う訳だ。

冗談じゃない、慰謝料くらいふんだくらないと気が済むものか
そう思っのだが、痛みでろくな言葉が浮かんでこない。

「フェイ、大丈夫？」

辛そうなフェイを唯一心配してくれたのは、セラだった。

目を真っ赤にしているところを見ると、気を失っている間に泣いていたのかも知れない。

近年まれに見るお人好しであり、貴族社会の荒波に乗り出せば、さぞ苦勞するに違いないだろう。

しかし、セラにはこのままでいて欲しいと思った。綺麗事など忘れてしまった貴族どもに、一陣の風を吹かせて欲しいと。

フェイは柔らかな金色の頭に手を置き、これ以上心配させないよう声を掛ける。

「気にするな、大丈夫だ」

「そうかい！ 大丈夫かい！ そりゃあ良かった！ さすが領主令嬢のガーディアンはタフで心が広いね。おまけにいい男だし。うち

のカシムが負けるわけだよ」

「ま、待て！ 俺はっ くっ」

「おっと、興奮すると体によくないよ。うん、そうだね。あたいらは退散したほうがいいね。それじゃあフェイロン君、再就職先を探すならウチはいつでも歓迎するよ。では、これからも装飾店ユノをごひいきに！」

一気に話を終わらせると、ユノはカシムを引き連れてさっさと保安所を出て行ってしまった。

あまりの調子のよさに、フェイは口をぽかんと開けてそれを見送ってしまった。

その様子をこっそりうかがっていたクロフは、部屋に入ってくるなり爆笑する。

「ぷつくつく、くあっはっはっは！ 災難だったなあ、フェイ！

まあ、犬に噛まれたと思って忘れようぜ！」

「うるせえ。犬に噛まれた方が遥かにマシだ！ っ痛うっ」

「おいおい、無茶するなよ……おっと、何時の間にか外が真っ暗だな。俺はセシリア様を城に送ってくるから、フェイは寝てていいぞ」

「すまん、助かる」

「なあに、礼を言うのはこっちの方だ」

クロフは昇進が、ひいては結婚がかかっているせいか、えらくご機嫌だ。

芝居がかった動作でセラの前に仰々しくかしずく。

「それでは、セシリア様」

「いやっ！」

しかし、セラはクロフを振り向きもせず、その呼びかけを一蹴し

た。

クロフはピクリと顔を引きつらせたが、なんとか作り笑いだけは崩さない。この少女を泣かせれば昇進どころかクビが飛ぶ可能性だってあるのだ。

「セシリア様、これ以上遅くなると領主様が本気でご心配されますよ」

クロフの声は恋人のレンファに話すときのように紳士的で優しさにあふれていたが、セラはベットにしがみつき眉すら動かさない。

フェイはため息を吐き、痛いのを我慢して上半身を起こすと、セラを見て言った。

「セラ、家に帰るんだ。クロフは俺より強い。十分セラを守る。

ほら、安心して帰るんだ」

「いやっ！」

今度はフェイの顔が引きつる。元気だったら絶対に怒鳴っていただろう。

「セシリア様、一体どうなされたのですか。私ではいけませんか？」

「だめなの！ 私を守るのは、ガラムとフェイだけなのっ！」

「あの風のガラムと俺を同格にしてくれるのは嬉しいけど、でもな」

「だって約束したじゃない！ 私のガーディアンになるって！」

「……は？」

「フェイ、お前、そんな約束したのか？」

クロフが細い目を見開いてフェイを見たが、フェイは細かくクビを振って全否定する。

まったくもって身に覚えが無いことだった。

「そ、そんな、一生私の事を守るって言ったのに……」
「一生つて！ おまつ、おまつ、お前つ、まさかつ！」
「ちがうつ！」
「酷い……約束、したのに」

セラは大きな目を見開いて、そのままポロポロと泣き出した。

「あああつ、また泣くかよつ ツテテ、くそつ、傷が開く」
「……フェイ、なんとなく分かったぞ」
「クロフ！ 分かってくれたか！」
「ああ、お前の趣味がな」
「そつちかよつ！ ぐつ、腹が、クロフ、頼む、城から、誰か、呼んで来てくれ……」

「そうだな。このままでは由緒ある保安所が修羅場になってしまう」

その言葉にフェイは殺意の限りクロフを睨みつける。だがクロフはニヤリと笑って視線を避けると、さっさと保安所を出ていってしまった。

喧しいクロフがいなくなると保安所の中は急に静まり返り、セラのすすり泣く音だけが残った。

エルカなら、こう言う時になんて言うのかな

女性の扱いに長けたエルカ成らざるフェイには、何の言葉も思い浮かばない。ただ、セラの頭を撫で続ける事しかできないまま、ゆっくりと時は過ぎていった。

ふと、フェイは右肩に巻かれている包帯を見る。

明らかに包帯の巻き過ぎであり「包帯の無駄遣いはこのようにやります」と言う見本のような巻き方だ。

おそらく、セラが必死で巻いたのだろう。

「ありがとな」

フェイは小さくつぶやいた。

窓から見える景色はすっかり真っ暗だった。

ここから城まではバイスアルムを通ればたいした距離じゃない。もしクロフが走っていれば、もうすぐ戻ってくる頃合だろう。

「……ヒック」

「セラ、泣き止んだか？」

出来る限り優しい声で尋ねると、セラは小さく小さく頷いた。

「そうか、じゃあ話しておくな」

真っ赤な目のままセラは不思議そうにフェイを見上げた。その目は「何を？」と雄弁に語る。

「お前をさらった男、チック＝トライムについてだ」

その名を聞いた瞬間、セラの顔色が変わる。

どちらかと言うと嫌な物を思い出したような顔だが、無理もない。さらわれた拳句、親切心につけ込んで騙されそうになった相手なのだ。

しかし、これから言う事実を伝えれば、この少女は一体どういう反応を示すのだろう。

フェイはセラの碧色の目をまっすぐに見つめた。

「チック・トライムは公開処刑なと思う。つまり、死刑だ」

その言葉の意味が浸透するや、セラの目が大きく開かれる。

「だ、だって、鉱山で働くって、さっきの人が」

「いや、死刑だ」

途端にセラは泣きそうな顔をする。

自分の物言いの悪さを反省しながら、フェイは慌ててフォローを入れた。

「悪い、少し違うな。このままセラが何もしなければ、死刑になるって事だ」

「わたしが？」

「そうだ、領主　つまりセラの親父さんは、セラの事を大事に思ってるよな？」

その言葉にセラは大きく頷き、その目には一分の疑問も見えない。よほど大切にされているんだろう。

物心がつく前に親に捨てられたフェイから見ると「羨ましい」と言うより、ただ「眩しい」と感じた。

「だから、領主公はチック・トライムを絶対に死刑にする」

「お父様が、そんな……」

「セラを守るためさ。セシリア・ラドクリフに手を出す者は絶対に容赦しない。それを町中に分からせるには、派手に公開処刑にした方が効率的だ。これで、セラも狙われなくなるぞ？」

「でも……」

セラの顔が目に見えて青くなり、そして何とかしようと必死で考え始めた。

その様子にフェイは少なからず感動を覚える。

自分をさらい、そして騙そうとした相手のために、ここまで真剣に心配できる人間が、貴族にもいた。信じられないが、この街にいたのだ。

こいつが次の領主になったら、面白いだろうな

だから、そんな小さな感情が、この時芽生えたのだろう。

フェイはそのコロコロと変わる表情を見て、静かに告げた。

「……もしそれが嫌なら、お前が領主に減刑を頼み込むんだ」

「でも、お父様は、お仕事に口出ししちゃ駄目だって。それは良くない事だって」

「そうかもしれないな。じゃあ、ここであきらめるか？」

ハッとしたようにフェイを見上げ、セラは首を横に振った。

「だったら、変えてみせろ。セラ」

セラは胸の前で両の手をグッと握ると、深く頷いた。

「よし。じゃあ、約束だ」

フェイは人差し指をセラの真っ白な額にピタリとつけ、ゆっくりと告げる。

「剣の民に、偽りなき明日を」

『必ず約束を守る』と言うシュバート国で広く使われる儀式だ。特に制約のない子供だましの儀式だが、この場にはそれが似つかわしいと思った。

真っ赤になった目をパチパチと瞬かせたセラは、ようやく意味を理解したのか、薔薇バラが咲いたように笑った。

「じゃあ、私からも、約束！」

「ん？」

「必ず、私のガーディアンになって」

そう言っ、セラはベッドに乗り込んでフェイの額に指をつけようとす。

「冗談じゃない、そんな一方的な約束があるか！」

フェイは慌てて顔を捻り、迫る小さな人差し指をギリギリのところで避けた。

そのせいで胸元まで掛けてあった毛布が滑り落ち、フェイの上半身が裸になったが、セラはそんな事はお構いなしだ。

ベッドに這い登ってきて、フェイの額を追いかけまわす。

「きゃっ？」

やがてバランスを崩したセラはフェイの上に倒れこむ。

おまけにセラの手が着いた場所はカシムが作ったアザへ容赦なく吸い込まれた。

「ぐあっ！」

あまりの激痛に、フェイの意識が飛んだ。

意識が飛んだのは、ほんの一瞬だったはずだ。
だから、意識が戻って目を開いた時、そこに憤怒の形相の男が立
っついて驚いた。

なんだコイツ？ 待てよ、どこかで見た顔だ

そして、クエスト屋エルカーナの店主、エルカに似ていると思い
当たる。いや、似ているところではない。まるで親子だ。

でも、なんでそんなに怒ってるんだ？

フェイは体を起こそうとしたが、うまく動かない。
不思議に思い、胸元に視線をむけるとそこにセラがベッタリと抱
きついていてた。

さらに酷いことに、セラが抱きついていて自分の上半身は 裸
だった。

「……あ」

ズバキイイイ！

口を開きかけた瞬間、バーベルで叩きつけられたような質量の右
ストレートがフェイの顔面を打ち抜いた。

ああ、死ぬる

鉄の味を深くかみ締めながら、フェイは深い闇へと落ちていった

の
だ。

(7) 目を開けてもそこは闇だった

目を開けてもそこは闇だった。

ただ、寝ている場所だけがいつの間にか変わっている。

硬い保安所の簡易ベッドではなく上質で柔らかいベットへ、いつの間にか移されていたようだ。

いてえ

心臓が脈打つたびに顔がズクンズクンと痛み、腹の痛みもさつきより酷くなっている。

はつきり言つて息をするのも辛かった。

「つたく、いい加減にしろよな……」

かすれた声で天に向かって吐いた悪態は闇の中へ溶けて消える。すると、誰もいないと思っていた部屋の奥から、意外にも返事が返ってきた。

「あら、ずいぶんなセリフね」

冷たくゾクリとするハスキーボイス。

しかし、それは聞き覚えのある声だった。

フエイは声のした方に顔を向けて尋ねる。

「ひょっとして、コノハか？ わざわざ見舞いだなんて、悪いな」

「お見舞い……そうね。見舞いかもね、うふふふ」

ランプにボツと火が灯される。

揺らめく炎に照らされ、コノハの顔が闇に浮かび上がった。

悪魔だ

普段から鈍感だの要領が悪いだの言われているフェイにも、これくらいは分かった。

コノハは明らかに、怒っている。

「フェイ……約束は、どうしたの」
「や、約束？」

フェイは記憶の海から該当するものを引きずり出そうと、慌てて眉根を寄せた。

すると、すぐさまフェイは上半身を起こして叫んだ。

「ああああっ！　しまった！　忘れてた！」

その様子にはコノハの顔がごく僅かだが緩んだ。
しかし、次のフェイの言葉でそれも完膚なきまでに消えうせることになる。

「ルナに店番頼んだままだった！　くそ、早く帰る予定だったのに！　しまったああっ！」

フェイは頭を抱えてベッドに伏せると、後悔の叫びを上げる。
せつかくの二人きりのティータイムが、泡のごとく消えうせたのだ。これはいくら後悔しても悔やみ足りない。

チヨンチヨン

ベッドに顔を伏せたフェイの肩を、細い指がつつく。

フェイが顔を上げると、そこにうつすらと微笑んだコノハがいた。

「ひいつ」

思わず、フェイは恐怖に息を呑む。

目が笑っていないだけで、笑顔とはこれほど怖くなるものなのだろうか。

あつという間に喉がカラカラに乾き、目に涙がたまる。

「……いつたい、あたしがお店で何時間待ったと思う？」

コノハのその言葉に、フェイはようやく思い出した。

装飾店ユノでの会話が、フラッシュバック閃光のごとく脳裏によみがえる。

『しょうがないわね、手伝ってあげる』

『依頼料としてこれの代金、お願いね』

『十分後にこの店の看板のところで』

フェイの背中に、冷や汗が背筋を伝う。

「あ、あはは、その、こっちにも色々あって」

「……色々、ねえ」

クグラ「コノハ、フェイの知りうる中でエルカより強いと言い切れる唯一の人物。

考えるより先に行動し、融通の利かない生真面目な性格で、座右の銘は勸善懲惡　そして、約束を破ることを何より嫌う。

「保安所で公女様とイチャイチャしてたって聞いたわよ。あたしが

一生懸命探し続けてる間に、ね」
「ち、違うつ！」

クロフだ。

この情報のリーク元は、間違いなくクロフのバカ野郎だ。
フェイは上半身を起こして否定しながら、悪友への復讐を胸に刻む。

ガコン

無言のまま、コノハは立て掛けてあつた棒を手に取り、静かに構えた。

その棒を見ただけでフェイの腹がズンと痛む　間違いない。カシムの持っていたはずの大根棒だ。

「な、なんでその棒をコノハが？」

「……ユノさんが教えてくれたのよ。保安所でフェイが寝てるって」

フェイはベッドの上でじりと後退りする。

「いい度胸よね。このあたしを待たせておいて……」

「ま、待て、話せば分かる！」

「……で、渡した髪飾りは？　あれ、ユノさんをお願いして入荷するのを半年も待ってたモノ、なんだけど？」

言われてフェイはギクリと体を強張らせた。

あれ、髪飾りってどうしたわけ？

代金を払おうと左手に持っていたのは覚えている。

そこでセラを見つけ追いかけたら、それを泥棒と間違われ逃げ始めたのだ。

で、カシムと戦う時は左手でダガーを持って……あれ？

いつの間にか、すっぽりと手からも記憶からも髪飾りが消失していた。

フェイの負の雰囲気を感じたのか、コノハは大根棒を正眼に構え重心を下げていく。

その引き絞られた肉体は、肉食動物が獲物を狩る時に似ていた。

こいつ、殺る気だ

フェイは必死で幸せになれる嘘を探した。

だが、有り余る恐怖心のせいか頭は空回りするばかりで、ロクな言い訳が見つからない。

そしてとうとう、殺気がピークまで高まった瞬間　　フェイはついに観念した。

「な」

「な？」

「　　なくした」

血飛沫が舞った。

そして、長い一日はようやく終わりを告げる。
人生が終わらなかったのが不思議な夜だった。

(8) 扉の向こうに

扉の向こうに気配を感じて、フェイはうつすらと目を開ける。
すでに嫌な予感しかない。

「だれだ？」

フェイのかすれた声に病室の扉が開き、ひょこりとセラが現れた。

「フェイ！」

当然、フェイは思いっきり強張る。

なにせ、セラの周りに誰もいない　つまり、また一人でこんなところまで来たのだ。

つい先日誘拐未遂にあっただばかりなのに、ある意味大した度胸だった。

「……セラ、お前、また抜け出してきたのか」

「お見舞いだつて、ちゃんとお父様に伝えてきました」

「た、助かった」

フェイは安堵の息を吐き、疑われたセラは不満そうに頬を膨らませた。

その子供っぽい表情をフェイはマジマジと見つめる。
セラの膨らませた頬はすぐに赤くなった。

「あの、なんでしょうか？」

「いや」

今朝早く、店長のエルカが見舞いに来た時の事をフェイは思い出していたのだ。

昨夜遅く、エルカが仕事を終えてフェイの様子を見に来た時、そこは戦場のような有様だったらしい。

シーツは派手に血まみれで、床の上に転がったフェイの周りに、チョークで線を引くべきか真剣に迷ったほどだと言う。

幸い、フェイに息があると分かるとエルカはすぐに医務官を呼び、さらにシーツを新しいものに交換してくれた。

本当に持つべきものは優しい店長だと思ったものだ。

ただ、シーツを換えてもらう間、こうなった事情を涙混じりにエルカに訴えたのだが、無情にも爆笑されてしまった。

その後の会話はこんな感じである。

「笑うなよ……」

「悪い悪い。しかし、あの引っ込み思案だったセシリアにそこまで気に入られたか。いやいや、たいしたものだ」

「頼むからやめてくれ……それに、妹の箱入り具合もほどほどにさせないと、いつか困るぞ？」

「私に言われても困る。セシリアと最後に話をしたのは、もう一昨年も前だからな……とは言え、妹が相当迷惑をかけてしまったようだな。すまない、フェイ」

「あ、いや、エルカが悪い訳じゃないし……そうだよ、悪いのはお前の親父だよ！ 娘を救出して人間を、言い訳する間もなく殴り倒しやがったんだぞ！ なんだアレ？」

「あつはつは、そうだったな。ただ、アレが怒るのも無理のない話しだ。妙齡の娘に裸で抱きついてしている男がいれば、父親なら鉄拳のひとつくらい当然だ」

「みょうれ……ゴ、ゴフツ」

フェイは思わず吹き出してしまい、痛んだ腹が悲鳴をあげた。

「なんだ、フェイはセシリアの歳を聞かなかったのか？」

「俺だつてクエスト屋だ。見れば年齢くらいわかる。あれは7から10くらいだろ」

「それはさぞ傷つくだろうな、セシリアは16歳だ」

「はあっ！？　ぐあっ！　いいってええええっ！」

フェイは今朝の激痛まで思い出してしまい、顔をしかめた。

16歳……俺のたつた3つ下？

たつた今、フェイの前でもじもじしている少女はどうみても8歳児だ。

お世話になつていているエルカの妹と言うことで特別温情を上乗せしても、せいぜい11歳だろう。なんの温情が分かんが。

とにかく、これはなんと云うか、あまりにも……可哀想だった。

「セラ。色々あるけど、がんばれよ」

「はい！」

セラは何を誤解したのか、満面の笑みを浮かべて元気良く頷いた。

「フェイも、頑張つて下さいね」

「ん？　何をだ？」

セラはテクテクとベッドに近づくと、フェイの額に人差し指を押

し付けた。

「約束成立です。がんばって、私のガーディアンになって下さいね」

セラにやんわりと額を押された勢いのまま、フェイは力無くベッドに転がった。

目の前にはやたらと白い天井が視界一杯に広がっている。

「勘弁してくれよ　　ったく」

フェイのうめくような呟きは、しかし、誰の耳に届く事も無く、さわやかな朝の風に流されていった。

まあ、後で何とでもなるか

実際、フェイは楽観的な男だったのだ。

ゆっくりと上半身を起こすと、サイドテーブルに置いていた濡れた布を腫れた右肩に押し当てる。

滅茶苦茶痛いのだが、医者が言うには骨は折れていないそうだ。我ながら丈夫だと他人事のように感心している。

「そうだ、セラ。親父さんとはチック・トライムの件で話せたのか？」

「はい。死刑には、しないって」

そう言っただけで嬉しそうな顔で笑ったセラの顔は、今までで一番大人びて見えた。

「そうか。そりゃあ良かったな。あの親父なら娘の提案なんて無視して、強引に死刑にするのかと思ってたんだけどな」

「お父様、最初はそんな感じでした」
「へえ。じゃあ、なんて言って説得したんだ？」

少し興味があった。頭に血の上ったあの凶悪そうな頑固親父に奇麗事を押し付けるなんて、簡単に出来る事じゃないだろう。

セラは言おうか止めようか少し迷った後で、せわしくフェイと宙を見比べてから、ポツリと真相をこぼした。

「家出して、フェイのところへ行くって言ったら、それだけはやめてくれって」

「おい」

「それでお父様、死刑だけは取りやめてくれました……でも」
「でもってなんだよ！　そこで終われよ！」

その時、ドドドと言う地響きがベッドを通して伝わってきた。
どうやら何か巨大なものが近づいているようで、嫌な予感がしてたまらない。

「でもお父様、当分フェイの所に行っちゃだめだって」

「……じゃあ、なんでお前はここにいるんだ？」

「だって、会いたかったから」

「許可とってたって言ったじゃねーかっ！」

「だから、ちゃんと手紙を置いたの、フェイのお見舞いに行くって」

「はあ！？　手紙い？」

悪びれも無く頷いたその顔には、恐ろしい事に悪意がカケラも感じられなかった。

だめだこいつ、早くなんとかしないと

フェイは寒気がするのに、額に吹き出た汗を拭う。
なるほどこれが冷や汗かと妙に納得した。

そんな現実逃避から引き戻すように、ドウドと言つ地響きはますます大きくなつていった。

「セ、セラ、はやく俺から離れる！ この部屋から出てつてくれ！」
「ひ、ひどいつ」

とたんにセラの瞳が潤み、眉根が寄る。
これも意識しないでやってているのだろつ。忌々しい事に。

「ば、ばかつ！ 今だけは泣くなっ！」
「ばかつて……ひどい……ヒック」

セラは今にも泣き出さんばかりだ、地響きはもう部屋のすぐそばまで迫っている。

迷っている暇は無かった。なにせ今、これ以上のダメージがあれば、たぶん 死ぬる。

「分かった。ガーディアンでも何でもなつてやるから。だから今だけは泣くな。なっ？」

自分でも気持ちの悪いような猫なで声でなだめすかした効果は、意外な事にてきめんだつた。

泣きかけていたセラは驚いたように目線をフェイに向け、一瞬のうちにその碧眼から涙が消える。

「 フェイ。それ、ほんと？」

「 あ、ああ。だから 」

「 フェイ！」

セラは感極まったようにベッドに飛び乗り、遠慮なく抱きついてきた。

「うぐあっ!？」

「約束ですっ！」

飛び乗られた激痛で硬直したフェイの額に、セラは人差し指をもう一度押し当てる。

そして、はた目には二人が仲睦まじく抱き合っている状況で、最後のドアは開かれた。

「小僧……」

野獣が、涙ににじんで見えた。

(9) 生きていれば

生きていればどうしようもない状況がいつか訪れるものだ。

フェイだって分かってた。

クエスト屋なんて危険な仕事をしていれば手ごわい敵に囲まれたり、密輸業者に付け狙われたり、浮気がバレた亭主から逆恨みされたり、そんな状況が訪れる可能性がある事くらい、分かっていたのだ。

しかし、これは酷い。

「小僧……」

底冷えするような声を聞き、セラはようやく父親の存在に気が付いたらしい。振り向くと「あ！」と嬉しそうに微笑んだ。

しかし、領主の表情はわずかたりとも緩まず、逆に憎しみを噛み締めるようにゆっくりと近づいて来る。

このままでは昨夜と全く同じ展開であり、問答無用で撲殺されるだろう。

そんな馬鹿げた話があるか！ 俺は何もやってない！

なんとか弁明できる言葉を探そうとするが、必死で考えれば考えるほど頭の中は真っ白になる。

とりあえず、セラが勝手に来た事だけを伝えようとフェイは口を開いた。

「あの、これはですね

がっ！？」

フェイの言葉は激痛によって途中で遮られる。セラがフェイの胸

からぴょんと飛び降りたのだ。

「お父様！ フェイのお見舞いに、来てくれたの？」

ズンツ……ズンツ……ズン……

娘の言葉を歯牙にも掛けず、領主はまっすぐにフェイの目だけを睨んで接近してくる。

「……死にたいのか、小僧」

領主の口から零れ出た言葉は、もはや人の言葉には聞こえない。すっかり恐怖に飲まれてしまったフェイの前に、セラが両手を広げて立ちはばかった。

「お父様！ 私の恩人に、なんて事を言うのですか！」

娘のかつて無い真剣さに、領主の眼がようやくフェイから外れる。

「セラ、ここに行くなと言ったはずだぞ」

「ですが恩人をお見舞いするのは礼儀だと、お父様が教えてくれたんじゃないですか！」

「礼儀はルールの下にあるべきものだ。二度と、この男に近づくな」
「それはできません！」

あまりに堂々と断られ、領主の目が驚きに見開かれた。
そこに畳み掛けるように、セラはその平らな胸に両手を押し当て
うっとりとする。

「私たちはたった今、約束したのです」

「約束、だと？」

約束と言うと、先ほどその場しのぎでガーディアンになるとか誓った件に決まっていた。

冗談じゃない。俺は今の暮らしが好きなんだ！

フェイは約束した手前、おずおずとセラにうかがう。

「あの、セラ。やっぱり俺、ガーディアンは……」

「分かってます。本当にフェイがなりたかったのは、私のガーディアンではないのでしょうか？」

「え？ あああ、そうっ！ そうなんだっ！」

なんとセラは分かっていたのだ。幼いようでも中身は十六歳、しっかりと周囲の気持ちを汲み取ってくれていたのである。

この少女を空気の読めない可哀想な子だと誤解していた事を、フェイは心から恥じた。

そして、セラは太陽のように微笑み、父である領主に向かい高らかに宣言した。

「フェイと私は、夫婦になると誓約したのです！」

「ちよとまでやこらあああっ！！」

「ぬおおおおっ！ セラアアアッ！！」

フェイは叫んだあまり激痛にのたうち、領主は野太い雄叫びと共にその場に崩れ落ちた。

いつの間にガーディアンがそこまで上書きされたと言つか。か。

フェイの意識が白濁する中、セラは嬉しそうに抱きついてくる。

「なんでも、そういう意味だったんでしょ？」

「は？ なんでも？」

なんでも？ あれ、俺なんて言ったわけ？ 確か『ガーディア
ンにでもなんでも』って なんでもおおっ！？

自ら犯した過ちに、フェイは頭をかきむしった。
狂っている。今のこの状況は完全に狂っている。いったいどこで
選択を間違えたのだろう。

そうだ。足りなかったのは……悪だ

そう、この小娘に親切心を抱いたのがそもそも間違っていたのだ。
クールで非情な、悪の心が足りなかったのだ。

盗賊団に入ろうと志すものが、なんと日和見で軟弱な心根だった
のだろう。

たとえ恩義ある店長の妹とはいえ、身を守る為ならば悪に徹し排
除すべきだ。

さもなくば

俺は、喰われる

フェイは抱きついていてセラを強引に押しのけ、自失している領
主に向かい、腹痛その他をこらえて言い放った。

「領主、俺はセラと結婚なんかしない」

「……な、に？」

領主がゆっくりと顔をあげる。本当に泣いているのが不気味だっ

た。

「俺は自由に生きたいんだ！ だから、公女と結婚なんてする気はサラサラ無い。約束した覚えも無い！」

「そうか……娘を傷物にしておいて、あげくに捨てるか」

「はいいつ！？」

「なれば、貴様の首を落とすのに何の憂慮もいらぬ」

領主はゆらりと立ち上がると、実用そのものの長剣を抜き放った。その碧眼には狂気の炎がメラメラと燃え上がっている。

「ちょ、違いますっ！ 俺、セラには何もしてませんっ！」

「娘をセラと呼ぶな！ 呼んでいいのはワシだけであっ！」

「フェイの嘘つきっ！ さつき抱き合って約束したのに！」

「ぬおおおおっ！ このくされ小僧が、死ねええい！」

おかしい。状況が奈落方面にしか落ちていかない。

目の前には剣を振り上げた凶獣の姿が見える。いつそ、このまま死ねば楽になれるかもと甘い誘惑が過ぎった。

だがしかし、まだこんなことで死ねない。やりたい事だって、まだまだ数え切れないほどあるのだ。

「お父様、やめてっ！」

「そこをどけっ！ お前は騙されているだけだ、今、目を覚ましてやる！」

「どきませんっ！ フェイ、結婚すると言って！ 早くっ！！」

言つべきか、いや、結婚すると言ったところで、領主に殺される気配は濃厚だ。

どうすれば生き残れる？ どうすれば？ クエスト屋としてつちかった知恵を今こそ絞るんだ！

そこで、フェイはハッと顔を上げた。

「クエスト屋……そうかつ！」

そして、セラを横にどけ終わった領主に向かい、フェイは叫んだ。

「領主公、頼む、俺の最後の言葉と思つて聞いてくれ！」

「付け上がるな小僧、貴様の言葉なぞ誰が聞くかつ！」

「お父様！ 民の声に耳を傾ける事が領主の務めだって、ずっと言つてたじゃないませんか」

「ぐつ いいだろう、遺言くらい聞いてやる」

フェイを睨んだまま領主はしぶしぶと剣を下げた。

その剣はいつ振り上げられてもおかしくない状況のままだが、チヤンスは掴んだのだ。

リア「フェイロン、命を掛けた交渉だ

フェイは息を吐いて、呼吸を整えた。

「ただの一領民にすぎない俺が、事もあるうに領主の姫君と、いきなり結婚できるんて思っています」

「そうか、なら死ね」

フェイは緩みそうになる涙腺を引き締めて、憤怒の領主を真っ直ぐに見つめる。

「俺はクエスト屋です。どんなものでも構いません。達成すればセラとの仲を認めても良い　そんなクエストを、俺に下さい」

領主はフェイを覗き込んで、ニヤリと邪悪に笑った。

「ならば取って置き of 任務をやるう」

「な、なんでしょうか？」

「今すぐ自分の首をはねて死ぬ。そうすれば少しは認めてやるう」

すごく泣きたかった。

エルカが頑固親父だと愚痴っていた事はあったが、まさか領主がここまで強烈な人物であるうとは。

「お父様！」

「……ふん、まあいい。セラに免じて簡単なクエストをやるう」

領主は長剣の刃先をフェイの鼻先に突きつけ、威厳に満ちた声で告げた。

「クエスト屋リア＝フェイロンに命ずる。盗賊団ゴルゴンを討伐せよ！」

「ゴッ」

「それが出来れば、セラとの仲を考えてやらんでもない」

盗賊団ゴルゴン、最強の組織として名高く、国の精鋭討伐隊もあつさり全滅するようなシュバート国一の盗賊集団である。

これ以上の無理難題も無い……まさに狙いどおりだった。

「分かりました、このリア＝フェイロン、盗賊団ゴルゴンを討伐するまで、セシリア公女殿下には近づきません」

物怖じせず答えたフェイに、領主は不快そうに鼻を鳴らす。

「娘に手を出すだけあって、度胸だけは無駄にあるらしいな」

「度胸が無くてはクエスト屋はできませんから」

領主の皮肉をサラリと避ける。

そうだ。別にゴルゴンなど倒さなくていいのだ。

放っておけばセラとの仲を認めてもらえない、つまり、好都合な方向へ流れるだけなのである。

よし、冴えてるぞ俺！

脳内にいる観客が拍手喝采をフェイに贈る。

すると、幸運に追い風が吹くように領主はセラをひよいと小脇に抱え、さっと身を翻ひるがえしたのだ。

「小僧、その約束忘れるなよ……さあ、セラ。こんな所においては体に毒だ」

部屋に重くのしかかっていた威圧感が霧散し、フェイは小躍りしそだった。

しかし、最後の抵抗とばかりにセラが声を荒げる。

「離してっ！ まだ帰りたくないの！ まだやらなきゃいけない事があるの！」

「セラ、いい加減に……いや、そだったな」

領主は何を思ったのか、暴れるセラを抱えたままフェイの方へ向き直る。

願いがかなったセラは、嬉々とした満面の笑顔だ。

一方のフェイは胸中で「こっちくん」を念じまくっていた。

「フェイ！ ごめんね、私……」

「セラ、目をつぶっていなさい。私としていたことが、最初の一件を忘れていたよ」

領主はそう言うのと初めてニタリと笑顔をフェイに見せた。

ハッキリ言って怒った顔よりよほど怖い。

フェイは愛想笑いを浮かべ、首をかしげた。

「最初の一件って言うと、なんのこと」

ズガシッ！！

「娘と抱き合うなぞ、何があろうと許さん！」

バーベルが顔面に落ちたような衝撃が走り、目の前が真っ暗になった。

遠くで誰かが呼ぶ声がするが、フェイは一目散に深い闇へと身を任せる。

もう、何も考えたくねえ……

そんな痛切な願いを抱いたまま。

(10) もう死にたい

もう死にたい

19年の人生で始めて、フェイの脳裏にそんな考えがよぎった。体中はズキズキ痛むし、領主に殴られた顔は特に酷い。まるで顔全体が虫歯にでもなったかのように、風が吹いても辛かった。

しかし、何より痛いのが、看病に来てくれたはずのルナの視線だ。虫でも見ているかのような目で、ベッドに横たわったフェイを見下ろしている。

「で、もう一度聞くけど、何があったの？」

「……別に」

そう言って、フェイは視線をそらす。

「別にじゃないでしょ！ その怪我はなんなの？」

「こ、転んだんだよ」

「転んだって……フェイ、私が嘘を見抜くの得意だって忘れたの？」

知っている。忘れるわけが無い。

だからこそ言う訳にはいかないのだ。

カシムの件はともかく、セラと結婚うんぬんなどルナには口が裂けても言いたくない。

だからと言って中途半端に話をはぐらかそうとしても、ルナの前では通じない可能性がある。

従って、フェイはだんまりを決め込んでいるのだ。

「ふうん、そうなの。転んだ傷なのね……」

ルナは冷たい口調でそうつぶやくと、見習い神官服の袖から手をゆつと出し、それをフェイの顔へと伸ばしてきた。

迫る手のひらを見てフェイの顔が引きつる。

「ル、ルナ。いったい何を？」

「だって、ただ転んだだけなんでしょ？　だったら触るくらい平気よねえ」

「なにバカな事を　お、おい、やめろ」

「なら、本当のこと話さない」

「い、嫌だ！　ちょ、待て。やめろ、やめてっ　アー――ッ！」

ペタペタと触る手にフェイは悶絶してのたうつ。

「ほら。やつぱり痛いんじゃない」

「いてえよ！」

涙目で怒鳴り返したフェイに、ルナは深く深くため息をついた。

「私ね、フェイにお願いされたから、二人を見送った後、ずーっと一人でエルカーナの店番してたんだよ」

「うつ」

弱い部分を突かれ、フェイはまたルナから視線を逸らす。

しかし、ルナはベッドに身を乗り出し、フェイの顔を覗き込むように話し続けた。

「なのに、すぐに帰ってくるって言ってたフェイは全然戻ってこないし、エルカも帰ってこないんだもん！　だから陽が暮れても帰れなくて、結局教会には朝帰りよ？　神官長にすっごいすっごい怒

られたんだから！」

そう言っただけがましく唇を尖らせた。

あの頭の固い神官長からネチネチいびられた事は、確かに可哀想だと思う。

しかし、フェイは昨日の一件で骨身にしみて悟ったのだ。同情や善行、愛だの友情だのがどれほど身を滅ぼす存在なのかと言うことを。

そう、必要なのは悪だ！ 冷徹な悪の心なんだ！

「うるせえ、俺の知ったことが」

この悪態にルナは目を丸くして驚いた。

普通ならばここで素直に謝るだろうフェイが、まさか悪態をつくなど思っても見なかった事だ。

「どうしちゃったの？ なんか、変だよ。本当にフェイなの？」

「……いいや、もう俺は昨日までの俺じゃない。俺は変わったんだ
冷酷な、悪党にな」

「プッ」

「……今吹いただろ？」

「ご、ごめん。なんかフェイってば可愛くて。あははははっ」
「……………」

まあ、いい。いつか名前を聞いただけで血も凍りつくような大悪党になってやる。

そうフェイは心の中で誓った。

「ところで、コノハから『ごめん』って伝言を預かったんだけど、

「なんだったの？」

「さ、さあな」

「あー！ やっぱり何かあったんでしょ？ コノハ、すごく沈んでたよ。ちゃんと話し合ったら？」

「ふん、うるせえ」

「ちよつと、フェイ！ いい加減にしなさい！」

激しく食い下がるルナに、優しい言葉だけはかけまいと気を引き締める。

冷徹になるには、ここが我慢のしどころなのだ。

そんな生産性のない争いを断ち切ったのは、さらなる来客だった。ノックとほぼ同時にドアが開け放たれ、目の細い人の良さそうな男が入ってくる。

「よお、フェイ　なんで怪我が増えてるんだ？」

「クロフ、聞くな、頼む」

「……そうか、お前も大変なんだな」

フェイの目に少し光る物を見たせいか、クロフは哀れんだ目を向けただけで、それ以上は聞かなかった。

ルナに一言挨拶をしたクロフは、フェイの寝ているベッドの脇にイスを持ってきて座る。

監視用の白鎧を来ていないところを見ると、今日は非番らしい。

「つと、そうそう。まずはフェイに報告しないとな」

「報告？」

「ええとな、とうとうレンファがな、その……結婚を承諾してくれたよ」

「おおっ！ 本当かつ！　イタタ、くそっ、おめでとうー！」

悪になると頑張っていたフェイの氷の仮面は、幼馴染の朗報によつてあっさりと砕け散る。

体中が痛いのに、それでもフェイは笑顔が止まらなかった。

「おいおい、フェイ。安静にしてろよ。でも、ありがとな」

「これが安静にしてられるかよ！ でも、ずいぶん早いな。さすがに昇進はまだじゃないのか？」

クロフは鼻を人差し指の裏でゴシゴシとこすり、目をさらに細くした。

昔から変わらない、照れているときのクロフのクセだ。

「いや、それがな、城にセシリア様の迎えを呼びに行った時な」

「そうだ！ あん時は領主なんて呼びやがって。お陰で思いっきり殴られたじゃねえか！」

「いや、それは俺のせいじゃないぞ。門番にセシリア様の名前を出したら、領主様が飛んできたんだからな」

「ぐっ」

確かにクロフに非は無いため、フェイは押し黙った。

隣で聞き耳を立てていたルナが、何か言いたそうにフェイを見ているが、無視することにする。

クロフはコホンと咳払いをすると、鼻をもうひと撫でした。

「それとだ。結局、領主様には本当の事を報告したんだよ。セシリア様を助けたのはリア＝フェイロンだってな」

「はあ？ なんてバラしたんだよ、もったいない。しかも、それで何でレンファと結婚って話になったんだ？」

「実はな、門兵にセシリア様の事を報告したら、領主様がすごい剣

幕で出てきたんだ。そのあまりの真剣さに、ふと我に返ったんだよ。このまま嘘をついていいのか、これでレンファと結婚できたとして、自分は後悔しないのかってな」

そこまで聞いて、正義感の強いクロフらしいとフェイは苦笑を浮かべた。

思えば7年前、コノハと3人でチームを組んで遊ぶようになってから、クロフはすっかりコノハの正義感に感化され、ついには衛視になってしまったのだ。

そう言えば、クロフの初恋の相手はコノハだったことを思い出す。散々アタックにつき合わされ、お陰で散々な目にあっただが、今では懐かしい思い出だった。

「……でな。気が付くと領主様へ正直に報告しちまってたって次第だ。それを今朝、レンファのヤツに話したらなんか感動してくれてさ、『男は誠実な一番』とか言っつて、結婚を受けてくれたんだよ！」

少し恥ずかしそうに語るクロフの表情は、本当に嬉しそうだった。

「まあ、レンファもきっかけが欲しかっただけかもな……って、何でルナが泣いてるんだ？」

「だって、素敵じゃない」

こっそり盗み聞きしていたルナは途中からは堂々と聞き始め、今ではハンカチ片手にポロポロと泣いている。

フェイには理解できない涙だった。

「まあ、とにかく良かったな。クロフ」

「ありがとう。レンファのヤツも覚悟を決めたら決めたで、今朝から会う人会う人に報告しててさあ」

「そうか　って、まさか俺の事まで言ってないだろうな？」

「いや、むしろお前のセシリア様誘拐救出劇の方がメインだな」

「ふっ、ふざけるなっ！　ぐっ、いってえ……」

「もうフェイってば、安静にしなきゃダメじゃない。で、クロフさん。フェイとセシリア様の話って？」

きらきらと瞳を輝かせて聞くルナに、クロフはほいほいと事実を話し始めた。結婚が決まって嬉しいのか、口に油でも塗ったようだ。もつとも、クロフには今日の午前中のやり取りは知られていないはずだ。

婚約だのゴルゴン討伐だの、ルナには絶対に話せる事ではなかった。

はあ、嫌なこと思い出しちゃった。いつその街から引つ越して……そうだ！　ゴルゴンに入団しちまえばいいんじゃないか！

そんな事を考えながら、病室の外を吹き抜けの窓越しに眺める。そこには昨日と同じ『子猫が欠伸をしそう』な穏やかな午後が広がっていた。

急にエルカーナが懐かしくなる。

でも、俺がいなくなったら、エルカーナはどうなるんだろうな

エルカの悲しそうな顔を思い浮かべ、フェイは首を振ってゴルゴン入団などと考えた自分を恥じた。

しかし、もしフェイがこの時エルカーナ店内で繰り広げられている会話を聞いていたら、違う結論を出したことだろう。

まさにこの時、クエスト屋エルカーナの応接室では、店主のエルカと竜馬のような厳しい顔の偉丈夫とが話し合っていたのだ。

竜馬顔の偉丈夫は、研ぎ澄まされた肉体をシュバート国の正規軍服で包んでおり、その腰には使い込まれた剣が息を潜めている。しかし、対するエルカの顔は、完全に気を許した穏やかなものだった。

腕を組み、笑みすら浮かべて口を開く。

「今フエイがエルカーナからいなくなると、経営上かなり困るのだが、その可能性はないと？」

「ご安心下さい、殿下。リア＝フエイロンがゴルゴンに入る可能性は、砂漠の砂粒ほどもありません」

「師父、何度も言っているが私はもうラドクリフ公爵家の一員ではない。エルカと呼んで欲しい」

師父と呼ばれた偉丈夫は、厳つい顔に朗らかな笑みを浮かべた。無論、一般人が見れば物騒と形容して許される笑顔である。

「私にとって殿下は殿下です。10年前と何も変わりませぬ」

「ふむ、城を出て少しは変わったと思っていたのが……」

「それは地が出ただけでしょう」

かつて師弟であった二人は豪快に笑い合った。

いま来客があれば、この偉丈夫二人の間に割り込むにはよほどの勇気が要ることだろう。

「それはそうと、父上が無理難題を吹っかければ、フエイとて盗賊団に入りたいと考える可能性もあるだろう。何故それは無いと言い切れる？ 私が知る限り、あいつほど盗賊として優秀な人間はいないぞ」

「ずいぶんと評価されていますな。まあ、ご安心下さい。先ほどセ

シリア様のご命令で、街中に連絡板を立てましたので」
「なんと！ セシリアの命令でか！？」

エルカの声が裏返る。

引っ込み思案で自分の意思もろくに話せなかった妹が、街中に連絡版を出すような行動に出た。これはエルカにしてみれば、『猫が話す』ほどに驚くべき事だったのだ。

「恋を知ると女とは変わるものだな……で、その内容は？」

「セシリア」ラドクリフの婚約者リア「フェイロンがゴルゴン討伐を成し遂げるまで、ゼクス領民はこれを全力で支援すべし、と」

「ほおう、今夜は街中の食卓でオカズにされるだろうな。いやいや、少しフェイが可哀想ではあるな」

可哀想と言いながらエルカの顔はニヤニヤと実に楽しそうだった。対する偉丈夫は心底意外だと憤慨してみせる。

「可哀想な事などんでもない！ セシリア様のご寵愛をこれほどの受けるなど、男冥利に尽きると言うものでしょう もっとも、この事はゴルゴンどもの耳にも入っていきましょうな」

「……なるほど、そうなればフェイが入団するなどとても無理、かひよっとして師父はフェイのことが嫌いかな？」

「リア」フェイロンなる名は、この『風のガラム』が手塩にかけた殿下を下町へ誘惑し、あまつさえ娘同然のセシリア様のお心をさらった不屈きな盗人、と記憶しております」

「ふむ、相違ない」

エルカは頷くと、歪んだ笑みを口元に浮かべる。
それはフェイなど届きもしない邪悪な笑みであった。

(11) 雨上がりの昼下がり

雨上がりの昼下がり、透き通るように高く爽やかな青空にその奇声はよく響いた。

「なあああっ！」

なんだこれは　　と言おうとして二つ目以降の言葉は形にならなかったらしい。

道行く人々がフェイの奇声を耳に止めて振り返り、その驚き歪んだ顔を見ては慌てて目を逸らす。

「こっ、こっ、こんな……」

フェイが指差し震えているのは地面に刺さった木製の板。バイスアルムの片隅にポツンと立てられた領御達の連絡板である。

その連絡板は雨風にさらされ少し痛んでいたものの、ごくごく一般的な連絡板だ。問題がその内容である事はまず間違いないだろう。エルカはフェイの震える肩越しに、連絡板に貼り付いている紙面へと目を通した。

『全ゼクス領民へ

セシリアⅡラドクリフの婚約者リアⅡフェイロンがゴルゴン討伐を成し遂げるまで、ゼクス領民はこれを全力で支援すべし　セシリアⅡラドクリフ』

それがこの看板の上半分に書いてある内容だった。

フェイにすれば驚天動地の内容だろうが、エルカはガラムから事前報告を受けた通りの内容である。

しかし、その紙面の下半分を見た瞬間「ほう」と感嘆のため息を漏らさずにはいられなかった。

紙面の下半分に印刷されていたのは、男の似顔絵だったのだ。

これは、素晴らしい

確かにシュバート国の印刷技術が駆使されたその似顔絵は、ある意味において素晴らしいかった。つまり、歯が浮くという言葉が見事に具現化した絵だったのだ。

似顔絵の男は妙にアゴが細く、髪は毛先にわざとらしいウェーブがかかり、耳元でもくると跳ね上がっている。

鼻は異常なまでに高く、気持ち悪いほど爽やかな笑顔が張り付き、むき出しになった歯にはキラリと輝くエフェクトまでついている。

トドメに拳大ほどの眼には、キラキラと輝く星が散りばめられている。

そして当然、下に書いてある人名にはリア「フェイロンとあった。

「あつ、あんちくしょおおおおー！」

周りの視線も気にせずに叫ぶと、フェイは看板から紙を剥ぎ取ると粉々になるまで引きちぎった。

「はあつ、はあつ」

恥辱に息を上げるその顔は、首を絞めてもこつはならないと言うくらいに真っ赤だ。一週間の入院生活の後だと言うのに素晴らしいリアクションである。

そんなフェイにエル力は耳元でささやいた。

「他の連絡板はどうする？」

一瞬のうちにフェイの顔が蒼白に染まった。

この連絡板は領の伝達手段として重要視されており、区画ごとにみ
つちりと配備されている。このバイスレイト沿いだけでも100箇
所は下らないだろう。

つまり、広大なゼクス領全体では1000個所以上もの連絡板が
ある事になるのだ。

回収不可能　その事実打ちのめされたフェイは地面に手を着
き、ガクリと深くうなだれた。

その様子を見てエル力は心の中では妹に喝采を贈る。

素晴らしい。我が妹ながら、末恐ろしいな

これほどの確かつ効果的に心理的ダメージを与える方法が他にあ
るだろうか？

自分の意志も言えなかった内気な妹は、しばらく見ぬ間にコレを
善意でやれる女になっていたのだ。

まったく。恋する女とは恐ろしい

エル力はニヤニヤと歪む口元を手で隠し、この状況をたつぷりと
楽しみながら、フェイが復活するまで待った。

やがて、フェイはゾンビのようにノロノロと立ち上がる。

「……いや、こんな絵から俺が分かる訳がない……そんな訳がない」

そう自分に言い聞かせるようにブツブツと唱えながら、やはりゾ
ンビのようにズルズルと移動を開始した。

当然、エルカもその後を追う。

しかし、たとえ無茶苦茶に美化された似顔絵でも、フェイの特長はしっかりと押さえてあったらしい。

屋台で焼きチーズを買おうとフェイが近づくと、屋台のオバちゃんにニツコリと笑って歓迎の声をあげる。

「やあ、未来の領主様が来て下さった！」

フェイの顔が顔面神経痛のごとく引きつった。

屋台のオバちゃんは凍りつくフェイに「たぁんと食べて精をつけな」と、気前良く焼きチーズを一本おまけしてくれたのだ。

むろん、それはエルカが消費する事になる。

焼きチーズは外に薄く巻いたパン生地がカリッと焼けて、中がトロトロに溶けている僅かな瞬間でこそ旨いのである。

一方のフェイは教訓を生かすべく、今度は目立たないよう道の脇に隠れて歩く事にした。

もちろん、それも無駄に終わる。

「ああ！ 未来の領主様あ！ 哀れな乞食におめぐみを！」

道端の乞食に激しく呼び止められた。

フェイは無視して歩み去ろうとするが、乞食はしつこく「領主様あ！ お恵みを！」と叫び続ける。

そこで走り去ればいいものを、叫ばれるのがうつつとうしくなった。フェイは小金を渡してしまうのだった。

「おおお！ さすがゴルゴン退治をなさる勇者様だ！ ありがとうございっ！」

乞食は一際大きな声で御礼を叫び 当然、周囲の視線が一気に

フェイへと集まった。

「え、あれがセシリア姫様の婚約者!？」

「どこどこ？ え、あの人なの？ うそお!」

「なにあれ、ちよつと貧相じゃない？」

「こら、コウちゃん。指差しちゃダメよ」

周囲の無遠慮な視線やら言葉やらが、次々と飛んでくる。

フェイはまるで少女のように涙目で狼狽すると、ついには耐え切れなくなり、顔を真っ赤にして野次馬の中心を駆け抜け抜けた。

エルカも口元を押さえて後続く。もちろん心の中では民衆に喝采を贈る事も忘れない。

ああ、素晴らしきかな野次馬領民！

結果、そこにいた人々は絶望に暮れるフェイと絶頂に浸るエルカを奇妙な目で見送る事になった。

フェイは人通りのいない路地に駆け込み、ようやく足を止めた。

犬の如く過呼吸を繰り返し、近くにあった樽をガシガシと殴ると、鼻声混じりに叫ぶ。

「はあ、はあ　くそっ！　くそっ！　くそおっ!」

「フェイ、大丈夫か？」

「大丈夫なわけあるかよっ！　なんなんだよお前の妹はっ!」

フェイは声を荒げてエルカに詰め寄った。

されどエルカは慌てず騒がず、沈痛そうに目を伏せ、適度な間を

作ってからポツンと謝る。

「……すまない」

あまりにも絶妙に謝られたので、フェイはかえって動揺した。

「い、いや、悪い。エルカのせいじゃないのは分かってるんだ。ただ、ちょっと」

「分かってるよ、フェイ。今はひとまず帰ろうか？」

「ああ、そうだな。でも、エルカは商店通りに用事があつたんじゃないのか？」

「水臭い事を言うもんじゃない。相棒が困ってるんだ。一緒にいるのは当然だろ」

「……でもっ」

何か言おうとしたフェイを遮るように、エルカは緩やかに首を振る。

こんな楽しい状況で、フェイを置いてどこかへ行くなどありえない。一時として目を離すつもりなど無かった。

しかし、焦りもまた禁物だ。

人間の順応力は計り知れないもので、この状況が続けば慣れてしまふ可能性だつてのだ。慣れ、それほどつまらない事も無い。絶対に避けなくてはならない事態だろう。

まずは人の眼を逃れ、我らがエルカーナにこもる

そうすれば、フェイは部屋の中であれこれと想像し恐怖を膨らませ、その不安こそが最高のリアクションへと成長するのだ。

エルカは右手を広げ、フェイの背中を優しく包む。

「さあ、フェイ。エルカーナに帰ろうじゃないか。きっと明日になれば状況は変わっているさ。もし、この状況が停滞するのならば、その時は私が変えてみせよう。ああ、必ずね」

「……エルカ」

フェイにその言葉を疑う心など、砂粒ほども残されていなかったのだ。

(12) 空はこんなに青いのに

空はこんなに青いのに、ルナの心は今一つスッキリしない曇り空だった。

「はあ……」

ため息の理由は先日、連絡板を見た時のコノハの態度である。

あれは間違いない、よねえ

ルナはその時の様子を思い出して盛大なため息を吐いた。

先日、フェイが退院するので何か詫びの品を探すと言うコノハに付き合つて、バイスアルム沿いの商店を練り歩いていた時の事だ。

コノハは一本の連絡板の前にして、ネジの切れた人形のように固まった。

そして、その張り紙に書いてある内容を理解した瞬間 連絡板を蹴り折ったのだ。

その後のコノハは本当に酷かった。

心ここにあらずで何を話しかけても生返事、手を引かないと道も曲がらない、目の前にある昼食にはフォークを指したまま動かない。本当に人形を連れて歩いているようだった。

そのくせ連絡板を見るたびに生気を吹き返し、怒りの炎をたぎらせるのだ。

ここまで分かりやすい人間も珍しい。

これってやっぱり私のせい、なのかなあ

責任を感じ、三度目のため息を吐いた。

コノハがああなつてしまった原因、それはおそらく自分にあるからだ。

三年前、身寄りがおらず前科持ちと言うことで働き口も無かったフエイは、ルナのいる教会に居候していた。

ルナ達の作る料理に絶望した神官長が、器用なフエイを無理矢理引き止めていたと言う話もある。

ともかく、普段美味しい料理を作ってくれるお礼にと、ルナがフエイの部屋を掃除していた時の事だ。

ふと、ベッドの下に隠してある手紙を見つけてしまった。

考えるより早く手は勝手に手紙を開いてしまい、仕方なくルナは中身を覗き「きゃあ」と歓声を上げる。

なんとその手紙は熱烈なラブレターであり、さらに差出人　つまり想い人が親友のコノハだったのだ。

健全な神官見習いが、どうしてこれを黙っていられようか？

ルナは嬉々として手紙の内容を一字一句漏らさずコノハに報告してしまった。

あの時のコノハの動揺っぷりはすごかったなあ

今思い返すだけでほほが緩む。

なにせそんな気配など微塵も見せてなかった相手が、自分を好きだと知ったのだ。そりゃあうるたえもするだろう。

誓って言うが、悪気があってわけではない。

頬を染めて狼狽したコノハは確かに可愛かった。だがそれよりもこれをきっかけにコノハがフエイを意識してくれればいいなと思った、双方の姉代わりとしての老婆心である。

しかし、その後、ルナは恐ろしい事実を知る事になる。

手紙を書いた人物は、実はフエイではなかったのだ。

なんとそれはクロフが昔書いたラブレターだった。
直接手紙を渡せないクロフが手紙をフェイに託し、しかしフェイがそれを渡す前にクロフは勝手に玉砕してしまった。

フェイの手にポツンと残された手紙、さすがに想いの詰まったものを焼き捨てるのは気が引けて、ベッドの下に隠し、そしてそのまま忘れていたらしい。

手紙を見つけたフェイが笑いながら言っていたので、まず間違いない情報だろう。

これはまずい事になったと思ったルナは、正直にコノハに報告するかどうかを一晩悩んだ。

しかし、その後、二人の間に進展やら気まずい空気は見当たらない。

無理に事を荒立てることもないかと、結局ルナは誰にも報告しなかった。

しかし、それはやはり間違いだった。

想いの種はコノハの心の片隅で、静かに根付いていたのだ。

今思えば、男勝りだったコノハがアクセサリを身につけるようになったのは、あの頃からだった。

短かった髪を伸ばすようになったのもあの一件からであり、今では馬の尻尾のように後ろで垂れ下がるまでになっている。

その髪と同じく3年と言う月日かけた想いの芽は、一輪の恋花へと人知れず成長していたのだ。

そこにきて、この有り様である。

「あああ、どうしよう。あれが嘘だったなんて言いたくないよあ…

…うつうつ、神さまのばかぁ！」

このまま黙っていたい。しかしあのコノハの事である。感情に任せてどんな行動に走るか分からない。

せめてあの事件だけでもクリアにしないと、気持ちの整理だつて着かないだろう。

「よし、言おう！ 頑張れ、ルナ！ えいえいおー！」

この時にルナはようやく心を決めた……が、この決断は手遅れだった。

つまり、今この瞬間、既にコノハの暴走は始まっていたのだ。

フェイとエルカの二人は、民の目を逃れなんとか麗しのエルカーナへたどり着いた。

懐かしさに手を震わせながら扉を開けようとしたフェイは、鍵が既に開いている事に気付く。

警戒しながらも扉を開くと、エルカーナの中央に立ち尽くす人影があった。

「……コノハ？」

コノハが半眼でこちらを睨んでいた。

ゆらり

彼女の上に何かが揺らめいたのを、フェイは確かに見た。
熱くもないのに陽炎かと首を傾げると、コノハは薄く唇を開いた。

「おかえりなさい」

その声は金属的な響きで、暖かく出迎えるような雰囲気はみじんもない。

フェイの背筋に正体不明の悪寒が走った。

ルナから聞いた話では、コノハがひどく落ち込んでるとの事だったが、はたしてあれは落ち込んでるのだろうか。

「やあ、コノハ。合鍵を使うなんて珍しいじゃないか。フェイの退院祝いかい？」

その雰囲気にも物怖じせず、エルカは明るい声で話しかけた。

コノハがあいまいに頷くと「そうか」と微笑を浮かべ、さっそうと奥のある自席に向かうや、机の上の書類に嬉々として取り組み出した。

これを見たフェイは、少しだけ緊張感を解く。

「なんだ、コノハ、退院祝いに来てくれたのか。そうならそうと

」

カッン

コノハの靴音がやけに響き、フェイの喉が引きつって止まる。

ここを逃げ出したいと言う正体不明の危機感がフェイを警告するが、訳も分からずに逃げ出すわけにも行かない。

いや、正確に表現するなら、コノハの視線に硬直して動けないと言っべきか。

コノハは視線でフェイを捕縛したまま、ゆっくりと歩み寄り、そして手に持っていた紙をバサリと突きつけた。

紙がフェイの眼前でペロリと力なく垂れ下がる。

それは街中に貼られた例の屈辱的な張り紙だった。

リアクションに困っているフェイに、コノハは一言一言切るように問い詰める。

「これは、いったい、何？」

「い、いきなり何って言われても、その……」

「この婚者者とか言う、この部分よっ！」

コノハはバンと紙面の一部を指差した。

確かにそんな文言がある。

「婚約とか、あたし、全然、聞いて、ないんだけど？」

フェイには何でコノハがこんなにピリピリしているのか、カケラも分からなかった。

女兒に無理やり婚約者にされました。そんな失態をわざわざコノハに報告しなかったコトが、問い詰められるほど悪い事とは全く思えないのだ。

こういう時に頼りになるのは、やはり、

エルカツ！

救いを求めるようにエルカへ視線を向ける。

だが、エルカは書類に向き合いながらも、なにやら顔をしかめて口元を押さえており、こちらに気付かない。

今朝からよく口元を押さえているけど……虫歯かな、かわいそうに

「どこを、見てるの？」

「あ、いや、その」

「早く、答えなさい……なんで何も、言わなかったの？」

頼るものが無くなったフエイは必死で考える。

何かなんだか分からないまま、とにかく謝るかどうかを

いや待て。俺はクールな悪者になるって決めたじゃないか！

そうだ。こんな事でいちいち卑屈になっていられるかってんだ。さあ、言ってやれ！

フエイは自分を叱咤激励しつつ、コノハを睨み返して息を吸った。

「い、いちいちコノハに言う事じゃねえよ……」

決意とは裏腹に声は裏返った。言葉尻も消えた。視線も横にそらした。

でも言った。ちゃんとやったからなっ！　なんか分からんが俺は負けんぞ！

プス

乾いた音がしたので、横にそらしていた視線を元に戻して　絶句する。

フエイの似顔絵から刃が飛び出していたのだ。

刃は正確に人物像の右目を貫いている。

「ふうん、そう……」

コノハは無表情に短剣を紙面から引き抜くと、再び裏から突き立てた。

今度は額の中心部から刃先がによつきりと顔を出す。
ギラリと刃先が光り、フェイの頭の中では警鐘が打ち鳴らされた。
クエスト屋で養った直感が、生命の危機を感じているのだ。

「ええとな、まあ、なんだ、ほら、落ち着こうか？」

「あんな子供と婚約しておいて、言いたいことは、それだけなんだ」

コノハは無表情のまま短剣を下ろす。

刃は綺麗に紙面を滑り、フェイの似顔絵を額から鼻筋を通って喉元まで引き裂いた。

そして、コノハは興味を無くしたかのように、切り刻まれた張り紙を床へと落とした。

フェイとコノハとの間を遮っていた物が無くなり、紙面によって遮られていた重圧が一気にフェイにのしかかった。

なんだこのプレッシャーはっ？

動けない、言葉が出ない。

なんと言えはこの危機を回避できるのか、そもそもなんで殺されそうになっているのか。フェイはまとまらない頭を必死で空回りさせた。

その間にもコノハはにじり寄る。

くそ！ なんなんだ？ 髪飾りの件は済んだはずだし、生真面目なコノハが怒る事って……まさかっ！

その時、フェイの頭でカチリと歯車が噛み合った。

俺が、営利目的で婚約したと思ってたのか？

その考えは、至極しっくりと感じられた。

世間の事が右も左も分からないセラを騙し、領主の財産目当てに結婚まで漕ぎ着けようとしている。コノハの目にはそう映っているのではないか？

思い返せばコノハにセラの搜索をお願いした時も、世間知らずの子供だと伝えていた。

さらに、あの事件の後で悪になるとルナに宣言してしまったのだ。それがコノハに伝わって、結婚詐欺でもしているのかと疑われたとしても、不思議ではない。

そんなフェイに、正義の天誅を下さんと怒りに震えているに違いなかった。

おおお、あまりに完璧な推理だ。自分が恐ろしい。

そうなれば今やるべき事はいたって簡単だ。

あの婚約が遊びで無いと証明すればいいだけ。つまり真実の愛だと説明すれば、コノハの誤解はたちまちのうちに氷解するだろう。

フェイは真っ直ぐにコノハの目を見返した。

「コノハ。じつは、俺」

フェイの態度が急に真剣になり、コノハの漆黒の瞳が揺らぐ。

視線が絡み合い、呼吸が止まった。

「俺　ロリコンなんだ！」

ザクッ！

短剣がフェイの二の腕に突き刺さるや、鮮血が吹き出した。

「うおおああっ!？」

コノハは狙い定めず刃物を振り回し、フェイは出血した個所を押さえながら必死で逃げ回った。

「エルカツ！ エルカーツ！」

フェイが必死で助けを呼ぶがエルカは机に突っ伏している。
痙攣して反応がないのだ。

「エールカー!？」

「フェイの、ばかああっ！」

それから数分間、エルカーナは罵声と悲鳴と鮮血が飛び交う空間と化した。

その修羅場を救ったのは第四者、つまり新たな来訪者だった。

「おじやましまきやああああっ！」

戸口から叫び声がして、二人はようやく動きを止め、玄関に目を向ける。

そこには腰を抜かしたルナが、へたり込んでいた。

(13) 事のてんまつ

事のてんまつを二人から聞き出すと、ルナはこらえきれずに吹き出した。

「ちよつと、そこでロリコンってフェイ！ あなた本当にバカでしょ！ あはははっ！」

「笑うなよ。俺だって必死だったんだよ」

フェイは憮然とした表情で怪我の上から薬を塗っている。

一方のコノハはようやく落ち着きを取り戻したのか、来客用のソファの上で頭を抱えて頂垂れていた。感情が暴走した後は、いつもああやって自己嫌悪のスパイラルに入ってしまうのだ。あれさえなければ素直で本当にいい子なのだが。

ああ、そつか。笑ってる場合じゃないんだっけ

ルナはひとしきり笑い終えると、この阿鼻叫喚の原因が自分にある事を思い出し、小さくため息を吐いた。

これ以上、事態が悪化する前に事実を告げなければならない。

しかし、こんな状況でコノハに「実はあのときの手紙、クロフが書いた物なの。ごめんね」などと暴露すれば、一体どうなるだろう？

良くてコノハの自己嫌悪が1ヶ月追加され、悪ければルナとの友情が粉々に砕けかねない。

なんでこんなに話しがこじれてるのよ！ 神様の意地悪！

神官見習いにあるまじき愚痴を胸中で繰り返し、その果てにルナは一つの結論を出した。

すなわち真実の保留である。

おそらくこれ以上は悪くならないだろうとの、楽観的希望に基づいた結果だった。

しかし、黙っているだけと言うのもなんなので、とりあえずの妥協案としてフェイにアドバイスする事にする。

「ねえ、フェイ。セシリア様のコトだけど、ちょっといいかな？」

「ち、ちがうんだ！ ルナ、俺はっ」

「大丈夫よ。あなたが巻き込まれ体質な事くらい、ちゃんと分かってるから」

「……そうなのか？」

「相変わらずの自覚ゼロなのね。それはともかく、よく聞きなさい。セシリア様は俗に言う『はしか』にかかった状態なのよ。ほら、コノハ、あなたも小さい頃になったでしょ？」

「あたし？ あたしは、まだかかったこと無いけど……」

急に話を振られてキョトンとしたようにコノハは答えた。

ルナは少し疲れたように嘆息し、お姉さんらしく指をピツと立てて話を続ける。

「コノハも意外と天然よね。ほら、あなた10歳くらいの頃、ウチの教会の先生にベタボレだったでしょ？」

「ル、ルナ！ そんな昔の事、ここで言わなくなつて！」

「分かりやすい反応ありがとう。フェイ、分かった？ 女の子は小さい頃に一度は年上の男性にあこがれちゃうものなのよ。でもこれは、病気みたいに夢中になる代わり、すぐ引いちゃう事が多い厄介なシロモノなの」

「……だから、はしかか」

「そう！ そうなの！」

ルナは手を打って満面の笑みを浮かべる。

その後ろでコノハが「あれ？」と首をかしげてボソリとつぶやく。

「でも、セシリア様って16歳なんじゃ」

「コノハは黙ってる！ いいこと、フェイ。セシリア様は外界から閉ざされた世界で生きてたの。だから男性経験なんて無いも同然よ。今はただ恋に恋してる　つまりちよつと遅めの『はしか』ってコトなの！ 分かった？」

ルナの説明はかなり強引だったが、フェイは「なるほど」と素直に納得した。

たしかにフェイが生まれ育った下町でも、十代前半女の子は同世代の男にはあまり興味が無く、見も知らぬ王子様や頼りになる大人にあこがれていた子が多かった。しかし、しばらくすると一様に同世代の男子に興味が移ったものだ。

その要因はたった一つ、時間である。

「つまり、セラの事はこのままほっときや解決する　のか？」

「私の経験から言っと、そうかなって思うわよ」

フェイの回答にルナは満足そうに頷いた。

「そ、そっかあ。俺、なんか生きていく希望が出てきた気がするよ。ありがとう、ルナ！」

「その調子よ。それからコノハも、こんな事で犯罪者になっちゃ駄目だからね」

ルナに笑いながらおでこを突付つかれ、コノハは顔を赤らめてうつむいた。

「あ、もうこんな時間だ！」

応接室の片隅においてあった時計を見て、ルナがわざとらしく叫んだ。

「ごめんね、私もう行かなきゃ。と言うわけでまたねっ！」

ルナは慌しくもエルカーナを後にした。
なんとなく、何かを隠している様な気がしたのは、きっとフェイの気のせいだろう。

「……ルナって、やっぱり頼りになるよね」

コノハは少し潤んだ目でコノハの消えたドアを見つめ、フェイも無言で同意したのだった。

そして、そんな二人を後ろから冷ややかに睨む視線があった。
エル力である。

つまらん

そう、こんなに簡単に修羅場が治まってしまつては、つまらない事この上ない。

何より気に入らないのがセラへの対応である。
放っておけば冷めるなど言語道断、そんな怠惰たる展開が果たして許されて良いものだろうか？

否！ 断じて否！

エル力はゆっくりと目を閉じ、策を巡らせた。

「エルカ、大丈夫か？ 随分歯が痛そうだったみたいけど……お茶でも飲むか？」

目を閉じたエルカが辛そうに見えたのか、フエイが心配そうな声を掛けるとエルカはゆっくりと目を開いた。

「ああ、頂くよ。それにしてもフエイ、随分表情が変わったな」

「まあな。なにも色々悩まなくてもよかったんだ。ルナの言う通り、このまま放っておけばセラも飽きて、そのうち別のヤツに興味が移る。そう気付いたんだよ」

「そうか……」

フエイは既に悟りを開きかけている。

確かに、手を入れぬ恋愛など水をやらぬ草花のごとく、やがて枯れるのは必定。

事態はかなり深刻のようだった。

これは、止むをえんな。危険だが毒をもって毒を制するか

エルカは目を細めて両の手を口元で組むと、ゆっくりと宣言した。

「では、私も協力するでしょう」

フエイは「本当か？」と驚いて振り向く。

エルカは爽やかに笑うと大きく頷いた。

「もちろんだとも、私もセシリアの社会経験不足には不安を抱いていたんだ。いくら勘当された身とは言え、私にとってはたった一人の妹だ。何とか男性との出会いが増えるよう、私から父上に進言し

てみよう」

「でも、エルカ。あれだけ実家に干渉するの嫌がつてたじゃないか……」

「確かにできれば二度とかかわり合いたくはない。しかし、他ならぬフエイのためだ。出来る事はやっておきたいのだよ」

「エルカツ！」

フエイは感極まってガツシとエルカの大きな手を握ると、感動のあまり目元が潤んでしまった。

そのせいだろうか、エルカの爽やかな笑顔が、妙に歪んで見えたのだ。

翌朝、領主邸に一通の手紙が届けられた。

受取人は当然ゼクス領主ラドクリフ公爵になっている。

そして、手紙の差出人はエルカーノ＝ラドクリフ。

「ほう」

領主は手紙を前にあごをひとなでした。

あの強情なエルカが捨てたはずの姓名を使ったのだ。ただ事ではないだろう。

領主は封を切り、慎重に手紙に目を通し……そして、書いてある内容に首を捻った。

そこには他愛の無い社交辞令、そしてセラについてある進言しか書かれていなかったのだ。

手紙の内容はこうだ。

文頭には簡単な近状報告と義務的な父への体の気遣い。

そこからセラの現在のあり様を大袈裟に嘆く文面が、恋愛作家も顔負けの叙情風に書き留められていた。

いわく、セシリアがフェイに心を寄せてしまったのは、男に対する免疫の無さと良識ある高貴な男性を知らないためだと。

そして16歳にして正式な婚約者がいない事も問題だと述べ、ふさわしい男性は父親が用意すべきだ。と添えてある。

最後にエルカはセシリアの婚約者選定を主眼にした盛大なパーティーを開くべきだと切々と訴えた。そうする事でセシリアの目が開かれフェイなど忘れようと締めくくっているのだ。

「……ガラムよ、この手紙をどう思う？」

傍に控えていたガラムに手紙を見せた後で、領主は尋ねる。

ガラムは姿勢を正し、直立不動のまま答えた。

「賛成ですな。むしろセシリア様の社交界への参加は、既に遅いと感じておりました」

「そうではない！ このわざとらしい文面、あからさまに怪しいと思わんのか？」

「確かに殿下は謀略には長けておりますが、おおむね善人です」

「くそっ、あいつめ何をたくらんでおる！」

忌々しげにラドクリフ公は手紙を机に叩きつけるが、バイスレイト製の重厚な机は微動だにせずそれを受け止った。

領主の印象ではエルカは決して妹思いとは言えなかった。良く言えば何事においても自立しており、悪く言えば自己中心的である。公爵家の長男としてあらゆる私欲を禁じてきた反動か、自分の欲望に忠実になってしまったのである。

そのエルカが今、使いたくなかったはずの姓を使い、妹の将来を案じるような手紙をよこした。なにか意図があるに違いない。

「……恐れながら領主公、認めたくはありませんがリア＝フェイロンの自由のためではないでしょうか？ 殿下はかの者を貴重な片腕としておりますので」

「ふんっ！」

ガラムが口に出した名前に領主は思いっきり顔をしかめる。しかし、客観的に考えた末、それが最も有力な答えだった。

愛娘セシリアにとっても愚息エルカーノにとっても、リア＝フェイロンは無くてはならぬ人物。その結論を領主はしぶしぶながらも認める。

「だからと言ってセラに貴族とは言え男を引き合わせるなど……まだ早過ぎる」

ガラムはその場にひざまづき、両の拳を合わせた。

「領主公、恐れながら具申致します。今のセシリア様をこのままにしておくのはあまりに危険です。この先、果たしてどのような暴挙に出るか」

「無礼だぞガラム！ 我が娘をそこまで愚かだと言うつもりか！」

その時、執務室の扉がバンと開かれ、姫付きの侍女は声高らかに叫んだ。

「セシリア様が、脱走しましたっ！」

（14）わずかな沈黙の後

わずかな沈黙の後、依頼人の婦人はぜいぜいと息をつきながら腰をおろす。

テーブルを挟んで作り笑いを必死で保っていたフェイは、聞こえないようにため息を漏らした。

やっと落ち着いてくれたか。これだから浮気調査の受付は嫌いなんだよ……

そう思ったのもつかの間、息を整え終わるや婦人はバンとテーブルを叩き、身を乗り出して叫ぶ。

「でも、あの女狐に間違い無いんです！」

「はい。ですからまず奥様のお言葉を元に証拠を揃えますので」

「必ず、必ず証拠を見つけてくださいな！」

「わ、分かりましたから、奥様はどうぞご自宅でゆっくりと」

「もし証拠が見つからなければ、その時はでっち上げても構いませんわ！」

「いや、それはさすがに」

「だって間違いないんですもの！ 証拠なんて先か後かの問題ですよー！」

なるほど、コレは浮気をしなくなるかもしれない。

フェイは引きつった笑いの下で、そんな事を考えてしまった。

とにかく不正だけは店のイメージ低下に繋がるため絶対にできない旨をなんとか説明する。

「男のクセになんと言う軟弱な。まあいいですわ、その代わり証拠

が見つかったら即座にあの女を縛り上げて」

「こゝこゝはそういう荒事は受け付けておりませんので」

「じゃあどこにお願いすればいいのよ！」

こつという仕事を受ける度に浮気だけはするまいと心に誓つ。もつとも、二股する以前に一人目と言う問題はあるのだが。

何はともあれ今のエルカーナは財政難だった。

先日、フエイの入院費でエルカーナの貯蓄はほぼゼロになってしまい、公女救出の報酬も当然ながら貰えなかった。

屈辱ではあるが、今はどんな仕事も受けるより他、仕方無いのだ。

「お願い！ 現場を押さえた時でいいから、あのアマが二度とハンス近づけないようヤキを入れて！」

「入れません！ それにまだ決まったわけじゃないんですから、いから帰って待っててください」

押し問答の末、フエイに度胸がないと分かった婦人はしぶしぶとエルカーナを後にした。

女性に出したお茶を片付けながら、フエイは萎えそうになる氣力を叱咤する。

「ふう、こんな仕事さつさと終わらせて教会に行くぞ！ なんと言つても、もうすぐクロフの結婚式なんだからな！」

壁にかけてあるカレンダーの丸印を見て、フエイは柔らかに微笑んだ。

「八年の付き合いだ、準備くらいは手伝ってやらなきゃな」

カレンダーの丸印はもう十日後に迫っている。

式の三日前には教会のペンキ塗りや装飾を手伝ってやりたいから、浮気調査に何日もかける訳には行かない。

しかし、果たしてそんなに短期間で証拠が揃うだろうか。

運がよければ3日くらいで終わる事もあるが、悪ければ20日以上かかる事だってあるのだ。

「心配してもしようがない、まずは行動あるのみだな。ええと、住所は……ローミクか。領の南はずれって事は、パオロンの旨い店があったはずだ。よし、まずは腹ごしらえに行くか！」

パオロンの柔らかな皮からあふれる肉汁を想像し、舌なめずりをした時だ。

コンコン

フェイの独り言を遮るように、おずおずと言った感じのノックが部屋に響いた。

なんと日に2人目の客である。

珍しい事があるものと、フェイは驚きながらも服を軽く叩いて戸口へ向かう。

少し跳ねていた黒髪を軽く撫でつけ、先ほど散々使いまくった爽やかな作り笑いを浮かべた。

準備万端　フェイは優雅にドアを開け放った。

セラがいた。

「ぎゃああああっ！」

悲痛なフェイの叫びをいっただう解釈したのか、セラは不安そうな顔から一気に満開の笑顔を咲かせ、フェイの胸　いや、腹へ

と飛び込んだ。

「フエイ！」

「セ、セラ！ お、お前、性懲りも無くまた抜け出してきたのか？」

慌てて引き離して問い詰めると、セラは見る見る目に涙を溜めた。

「だって、フエイにずっと会えないって思ったら、一日中苦しくて」「そんなもん知るか！ って、いかん、アレが来る前に何とかしないと」

もう入院費も払えないのだ、フエイはセラを睨みつけながらこれから行動するべき選択肢を素早く列挙した。

セラを説得して帰ってもらう 却下だ、セラを一人で帰らせれば、また誘拐される可能性がある。否、きっとされる。

セラを護衛して領主邸に送る 却下だ、突き出した時が俺の命日だ。俺の言い分なぞ聞くはずが無い。

セラをエルカーナに隠し通す 却下だ、あの領主の嗅覚をごまかせる気がまったくしない。地面に埋めても掘り起こすだろう。

一緒に逃げてどこかに預ける 逃げている途中で見つかった時が怖いが、もし成功すれば無傷で済むかもしれない。

そうだ、逃げている間に仕事もできる。なにせ今は金がない、金が無ければ遠くに逃げる事も出来ない。

考えをまとえたフエイは一秒を惜しんでセラを説得にかかった。

「セラ、これから俺は仕事なんだ」

「仕事？ どこかに行っちゃうの？」

あつという間に目に涙をためる。ほんとこの展開は勘弁して欲しい。

「違う違う、セラを一人にしてまた誘拐されたら大変だ。悪いが今日は俺の仕事に付き合ってもらうぞ。いいな？」

半分泣いていたセラがキョトンとフェイを見上げ、小首をかしげてつぶやいた。

「フェイと一緒に お仕事？」

直後、セラは再び満面の笑みを浮かべる。こんな状況でも無ければバラのような笑顔と言って良かったかもしれないが、今のフェイには食虫植物にしか見えない。

「フェイとお仕事！ お仕事！」

何がそこまで嬉しいのか知らないが、セラは珍妙な歌とともに応接室をピョンピョンと飛び跳ねる。

その奇行を眉をしかめて見ていたフェイは、すぐさま我にかえった。

「い、いかん、急がねば！ アレがやって来る！」

セラに構っている余裕など無いと気付き、フェイは大急ぎで準備を始めた。

なけなしの金、愛用のダガーを手にとり、ボウガンは時間がかかるのであきらめる。最後にいつもの黒ジャケットを引っつかんだ。

「よし、準備完了 セラ、行くぞ！」

フェイはセラの襟首を引っつかむようにエルカーナを飛び出した。

領主達が地面を揺らしながらエルカーナに着いたのは、その数分後だった。

「セエエエラアアアッ!!」

アリブ族を思わせる雄叫びだ。そう思ったガラムは鼓膜を守るため領主から一步遠ざかった。

ちなみにアリブ族とは雄叫びだけで獣を卒倒させる狩りを行った事で有名な部族である。

「領主公、店には誰もいないようすな」

ひととおりエルカーナの周囲を調べたガラムは、領主へ報告する。

「……チツ、逃げたか。セラがここへ来たかどうかは分かるか？」

「申し訳ありません、出入り口付近に砂利が多く撒かれてあったため、足跡は分かりませんでした」

「ふん、エルカめ。いっぱしのクエスト屋気取りか……よし、聞き込み調査を開始するぞ」

「お待ちください」

ガラムはその場に片ひざを着き、頭を垂れる。

「領主公、このまま搜索を続行しては政策が滞ってしまいます。領主邸にお戻りください」

「バカを言うな！ セラの無事を確認するまで帰れるものか！」

「このガラムが必ずやセシリア様をお連れします。どうか領民のた

めに職務へお戻り下さい」

「むむむ……」

この責任感溢れる領主が『領民のため』との言葉に弱い事を、ガラムは十分に知っていた。

私情に駆られ公務を疎かにする事など、これまでは一度たりとも無かったのだ。

そして今回も、領主は齒を食い縛って私情を納めた。

「……ガラム、娘を、頼む」

「は、この一命を賭して」

「分かっていると思うが、もしセラがアレと一緒にであれば重大な規約違反だ」

「では、その時はヤツの首をお届け致しましょう」

「できれば生かして連れて来い。もし殺すようなら、楽に殺すなよ」

「御意」

ガラムの首筋に悪寒が走ったが、忠実な下僕は表情一つ変える事無く拳を眼前で合わせた。

そして、すぐさま行動に移ろうと領主に背を向けた、その時だった。

「ああ、ガラム、もう一つ頼みがあるんだが」

突然気の抜けたような一言に、もうガラムはもう一度領主へ視線を向ける。

しかし、彼の主は珍しく頼みを切り出すのをためらっているようだ。

「領主公、なんなりと御命じ下さい」

「うむ、愚息の提案に乗るのはしやくなのだが、このままではセシリアが危ういと言うのは良く分かった。そこでだ……」

ガラムは目尻にシワを浮かべて笑った。

「御意。セシリア様の社交界への船出です。パーティーへの招待者は厳選し、且つ盛大に執り行うよう手配します」

「うむ、我が目に適う男を集めよ」

ガラムはその職務の困難さに苦笑し、それでも拳を合わせ一礼したのだった。

「とまあ、こんな仕事なワケだ。分かったか？」

フェイは目深にかぶった真つ黒なつばの広い帽子をなでながら、同じように真つ白な帽子を目深にかぶったセラに確認する。

ここはゼクス領南端にある田舎町ローミクの外食店ファンパオロんだ。

昼飯時でかなり繁盛しており、店内は人の熱気と人気料理パオロ独特の胸の透くような香ばしい匂いで満たされている。

その店の隅にある二人がけのイスにどっかりと座りながら、フェイは本日の業務内容をひと通りセラに伝えたところだった。

しかし、セラはどうもピンとこない様子である。

「どうした？ 疑問があるなら今のうちに聞けよ。後で邪魔されちゃかなわんからな」

「あの、では質問してもよろしいですか？」

「あいよ」

「そのハンスさんという男性は、奥方ではない女性のところで、何をするのですか？」

ガタン！

フェイは思わず立ち上がった。

それからおずおずと座りながら、上ずった声で答える。

「そ、そりゃ、おまえ　アレだよ。その、アレだ」
「あれ？」

フェイはクールにサラッと説明しようとしたが、妙に狼狽してしまい言葉がうまく出てこない。

相手がセラだと、やってはいけない重犯罪を犯しているような気になるのだ。

フェイは周囲をキョロキョロと見回す。

店内は賑やかそのもので、他の客は食うなり話すなりに没頭している。二人が領内で話題の領主公女とその婚約者だと気付く者はいなさそうだった。

それでもフェイは声を潜め、ゴニョゴニョと話し出した。

「お前、子供はどうやって生まれるか知ってるよな？　まさか不死鳥がとか」

「不死鳥が運んで来るんじゃない事くらい、もちろん知ってます」

「ああ、さすがに知ってたか。いや、すまん」

このシュバート国には死んでしまった魂は全て不死鳥が持ち去り、愛し合っている夫婦に新たな命として届けると言う伝説がある。

小さい子供が良く聞く「赤ちゃんはどこから来るの？」と言う疑問には、大抵そのように語って聞かせているのだ。

しかし、いくらなんでもセラは十六歳、さすがにそれを信じている訳が無かった。

フェイは胸をなでおろすと、セラの頭をぼんと叩いた。

「つまり奥さんがいるにもかかわらず、別の女と命を作る行為で遊んでる訳だ。極端に言えばな」

「つまり、それはその、キ、キスしてるって事ですよね」

「は？」

「信じられません！ 許せないです！」

「いや、ちよつと待て」

「なんですかっ！ フェイは許せるんですか！ そんな人、死刑で十分じゃないですか！」

誘拐犯の減刑を必死で願った少女はどこへ行ったのか、フェイはツツコミをどこにするか悩み、まず根本の部分から確認することにした。

「まあ落ち着け、セラ。お前さつきキスとか言わなかったか？」

「い、言いました。その、はしたなくて、ごめんなさい」

「いや、その 怒らずに聞いてくれよ？ その、子供は、どうやって作ってるんだ？」

「ど、ど、どうやってって、また言うんですかっ！」

耳まで真っ赤にしたセラは、信じられないモノを見る目でフェイを見上げる。

そしてしばらくの間、両手を口に当てて言うか言うまいかを悩み、やがて小声でボソボソとつぶやいた。

「あのですね、その、キ、キ」

「もっいいっ！ よぉーくわかった！ って言うか教えるっ！ 月

に一回、腹が痛くなったりするアレは何だつて言われたんだ？」

「なっ、なんで私の病気の事知ってるんですか！ お父様以外には秘密にしていたのに」

「病気なのはためーのくそ親父だ、ドアホウ！」

フェイは絶叫すると、疲れたように頭を抱えた。

「ええ。確かにこの張り紙の人に似てましたけどね、でもちよつとお顔が貧相で　　は？ ええ、女の子も連れておりましたよ。」

まあ、あの方が公女様だったんですか。あんまりにも幼、いえ、お若く見えたものですから。たしか十六歳ですよ、やつぱり噂のとおり呪いとか　　ええ、男性の方が二つ買いましたよ。黒い帽子をご自分でかぶつて、お子さ、いえ、公女様へは白い帽子を贈りましてね、いやそりやもうすごい喜びようでした。つい私まで嬉しく　　え？ その後ですか？ いやあ、そこまではちよつと分かりませんねえ」

「わかった、情報提供に感謝する」

ガラムは懷から銅貨を一枚取り出し、衣類店の主人に放り投げると店を後にした。

「アズマ！」

店の外で待っていた白鎧を身に着けた若者が、ひざまづいて拳を合わせる。

よく訓練された見事な反応だ。

「領主公へ伝えよ。セシリア様はアレに連行されている模様。必ず

やセシリア様を確保し、夕刻までにアレをお部屋に届けるとな」

「はっ」

「親衛隊にも招集をかける。1時間以内に南中央広場へ集合、遅れなどしたら容赦せぬ」

「はっ！」

アズマと呼ばれた若者はカツンと拳を打ち併せると、駆け足で領主邸へと向かった。

若者が視界から消えるや、無表情だったガラムの顔が獣のように険しく、しかし獣ではありえない笑みを浮かべた。

「やってくれたな、リア＝フェイロン……よもや、このガラムから逃げおおせられると思うなよ」

領主への忠誠心、ガーディアンとしてのプライド、そして久しぶりの全力を挙げての狩り。その三つがガラムをどこまでも高揚させていく。

しかしそれは、傍から見ればただの薬物中毒者だった。

道行く人々は薄笑いを浮かべる狂人を、危険の降りかからぬ距離から好奇と忌避の視線で見つめたが、ガラムは周囲の視線など気にする人間ではない。

拳を天に突き上げるや、声の限りに宣言した。

「リア＝フェイロン！ セシリア様を奪って逃げるとはなんと愚かな！ 必ずや貴様を血祭りにしてくれるわ！ ぐあはっはっはあ！」

正義の公務員とは思えないその雄叫びは、人から人へ、尾ひれをつけ背びれをつけ、風のガラムよりも速くゼクス領内を飛び交ったのだった。

（15）あんた知ってるか？

15） あんた知ってるか？

「あんた知ってるか？」

宿帳に記入しようとしていた手を止め、フェイは帽子の影から宿屋のマスターの顔をちらりと見上げた。

「知ってるって何のことだ？」

「ほら、例の噂だよ」

マスターは恰幅のいい狸のような顔をした人物で、見るからに話し好きそうだった。

長い話に付き合わされるかも知れないが、ひよっとしたら浮気の手掛かりがつかめるかもしれない

さて、どうするかな

依頼の浮気相手と思わしき女性の家は、この宿の二階から垣間見る事が出来る。そこで、この宿に隠れながら女の動向を偵察しようという算段だった。

しかし、宿代が経費で落とせるとは言え、手持ちの金は心許ない。少しでも情報を手に入れる可能性があるなら利用するべきだろう。そう思ったフェイは探りを入れる事にした。

「面白そうだな。で、どんな噂だい？」

フェイがにこやかに聞くと、後ろで待っていたセラもとことこと

やって来てカウンターから顔だけをひょいと出す。

宿主はセラに不器用なウイंकを一つ贈ると、待ってましたとばかりに話し出した。

「いやなに、久しぶりにスカツとする噂なんだよ。こないだ連絡板が更新されただろう？　ほら、公女様の出したヤツだよ」

「ゲホホッ！」

フエイは慌てて帽子を深く被り直し、「す、すまない。少し風邪気味で……」とつぶやく。

「風邪か、気をつけなよ。で、話はこつからが本番なんだが、張り紙の色男　なんでもこいつがただの平民で、領主様が婚約を猛反対してるって噂なんだよ」

「……」

「そこであのリア＝フエイロンって若者がとつた行動が　何だと思っ？」

「さ、さあな」

「実はな、ここだけの話なんだが……今、公女様と駆け落ちしてるらしいんだよ」

「ゲホホホッ！」

危つく「アホか！」と叫び声を上げるところだったが、辛うじて咳き込んで誤魔化した。

心配そうに見つめるマスターに心配ないとフエイは手で合図したものの、心臓はバクバクと音をたてている。

もう部屋で休みたかったが、マスターの話好き魂に火が付いしまい、それすら適わない状況になっていた。

「いやなに。その噂を最初に聞いた時は、そんな事あるもんかって

鼻で笑ったんだよ。いかにも女どもが好きそうな話じゃないか」

「そ、そうだな。ただの作り話だろ」

「いやいや、それがな兄ちゃん。領主の親衛隊が公女とリア「フェイロンの二人を追って、たった今、街中を駆け回ってるらしいんだよ」

「は？」

このフェイの驚きを良い意味で解釈したのだろう。マスターは力ウンターから身を乗り出して熱く語り出した。

「驚くのはまだ早いぜ！ その親衛隊の隊長　これがまた悪鬼のような恐ろしいヤツなだけだよ。そいつが道々リア「フェイロンを血祭りに上げる、とか叫んでるらしいんだよ！　こりゃあ駆け落ち確定だろ！」

フェイの目の前がぐにゃあと歪み、立つことすらやつの状態だった。

鏡を見なくても顔色が真っ青になっているのが分かる。

「あと公女様なんだが、絶世の美人だって噂は聞くけど、ほとんど公に姿を見せないだろう？　あれ、実は成長しない呪いを掛けられてるせいって噂だぜ。そこで例の婚約者が呪いを解くべく、決死の覚悟でゴルゴンの秘薬を狙ってるとか。いやいや、泣ける話じゃないか！」

もはや、普通に街を出歩くことすら適わなくなった。

こんな領の南端であるローミクでここまで狂った噂が出回っているのだ。

もう二度と、お日様の下を歩けないのだろうか。

いやいや、『人の噂も月の満ち欠け』だ

人とは熱しやすく冷めやすい。月が欠けてまた満ちるころには別の噂で持ちきりになっているはずだ。

月の満ち欠けの周期は40日、その40日間を出歩かずじっとたえていれば、きっと幸せが巡ってくる、はず。

フェイはその小さな希望にしがみつくと事で正気を繋ぎとめた。

「……ええと、すまない。そろそろ休みたいんだが」

「おっと、風邪っぽいんだったな。すまない、つつい話し込んだしまった。ええと、あとはここに名前を書いてくれ。そっちの娘じゃないか、妹さんかい？」

「妹じゃなくて婚　フガガッ！」

フェイはセラの口を問答無用で塞ぐ。

頼むから空気を読んでくれと言いたい。

「そうそう、腹違いの妹だ。ええと、ここに二人分の名前を書けばいいんだな」

「フゲウ！」

物言いたそうなセラを抑えながら、フェイは宿帳に二人分のサインをした。

『ザーボン＝デガワ』

『ドドリア＝デガワ』

「フガアフゴオウッ！」

サイン欄に書かれた名前を見て、セラが猛抗議した。

偽名が気に食わなかったのだろうが、もちろん構ってなどいられない。

「ザーボンさんと、ドドリアさんですね。お部屋は二階の左奥になります」

「そうか、ありがとう。さあ、ドドリア。部屋に行こうか」

「ムーラー！ ムグウフリーー！」

「何を言ってるんだ？ あっはっは、そうか今日は疲れてしまったか。仕方ない、はやく部屋で休もう」

フェイは嫌がるセラを引きずって部屋に連れ込もうとする。一歩間違えれば変態の誘拐犯だ。

階段を登りかけたフェイを見て、店主がするどく呼び止める。

「ちょっと、デガワさん！」

「なんだとコノヤロウ！」

「あ、いえ、その、宿賃は前金でして」

フェイはいそいそと前金を払いながら心に誓った。
偽名に嫌いなヤツの名前を使うのはやめよう、と。

「エルカツ！ やつとみつけた！」

「やあ、コノハ それにルナも、血相変えてどうしたんだ？」

役所の待合室へ駆け込んだコノハとルナの二人は、まさに仕事を抜け出してきましたと言わんばかりの稽古着と神官服だ。

一方、エルカは役所の事務員らしき女性とテーブルを挟み、優雅にお茶をすすっていたようだ。

コノハとルナの乱入に、その女性は「この二人はなんなの？」という視線でエルカを睨んでいる。

「エルカ！　こんなところでナンパしてる場合じゃないのよ！」

コノハはその女性を一切無視し、声高にエルカに詰め寄った。

一方のルナは息がすっかり上がっており、言葉を発するところではないようだ。

「いや、私は情報収集をだね」

「だからそれどころじゃないの！　フェイが、セシリア様と駆け落ちしたって！」

「なんてことだっ！」

エルカは雷に打たれたように立ち上がると、持っていた書類を鞆に詰め込みつつ、女性に別れを告げる。

「すまないジムイーナ、重大な用事が入ったんだ。この続きはまた今度に」

女は不機嫌な顔でくれるが、エルカはそれどころではないと鬼気迫る顔でコノハに尋ねる。

「それで、フェイはどこにいるんだ！」

「ちょ、ちょっとエルカ、その人、それでいいの？」

急かそうとしていたコノハは、逆にエルカに聞いてしまった。

「構わないさ。私の大切な友がまた災厄に巻き込まれているのだから？　この間のように見過ごしてなるものか！　さあ、一刻も早く

「フェイの元へ行くぞ！」

そう言って逆にコノハ達を急かす。

エルカってこんな熱血な人だっけ？

口には出さなかったが、ルナとコノハは互いの目を見て肩をすくめた。

バベキヤ

執務室の肉厚な木製扉が領主に殴られた途端、細枝のように真つ二つになった。

報告をしていた若き親衛隊員アズマは、その異様な光景と立ち上る黒いオーラに開いた口がふさがらない。

「……アズマ、とか言ったな」

「は、はいっ！」

「すまない、もう一度聞かせてもらえないか」

「は、はいっ！ 公女殿下は婚約者であるリア＝フェイロンに連行されており、現在 わわっ」

ドゴスツ

丸太のごとき豪腕が唸りを上げてアズマの顔面を右から左へと打ち抜いた。

「うおのれ！ リア＝フェイロンめがっ！」

領主は呪詛の叫びを上げると、齒の隙間からシュウシュウと息を漏らしながらも机の上に溜まっている公務に戻った。

一方、地面を這いずったアズマは、その見事な忠誠心で恨みの矛先をリアⅡフェイロンへ向ける事に成功したのだった。

フェイは窓際に立ち、浮気相手と思しき女性の家を覗いていた。そのフェイに習うように、セラも隣の窓から覗いている。すぐに飽きてるだろうと思っていたが、意外にもセラは集中力を切らさないうで見張っているようだ。

部屋の中でもしっかりと白い帽子をかぶっており、時折意味も無くかぶり直しては満足そうな微笑を浮かべていた。

公女ともなればなんだって、それこそ竜馬の馬車だって買ってもらえるだろうに一番安い帽子で喜んでいる。

何故そんなに嬉しいのか、その理由くらい鈍いと言われているフェイにだって分かる。

い、いかん。しっかりしろ、リアⅡフェイロン！ こいつのせいでとんでもない目にあってるんだ！ 冷徹にならねば、本当に身が持たないぞ！ あれを見る！

フェイの視線の先、直下の街路で白い鎧の男が走り回っていた。あれは間違いなく領主公の私兵 しかも、衛視から選りすぐった新鋭隊員だろう。

ヤツの目的はセラの回収、そして、このリアⅡフェイロンを血祭りに上げることなのだ。

「悪だ、悪党になれ、リアⅡフェイロン……」

フェイはブツブツと自分に言い聞かせ続けた。

「フェイ！ 出てきた！」

セラの声にフェイは我に返る。

彼女の小さな指先を追ってみると、件の家から紫のワンピースを着た女性が見えた。

年の頃は三十ちよつと、赤茶色の腰まである長い髪、浮気相手と思しき女性に間違いない。

彼女は家を出るとそのまま向かいの宿、フェイ達のいる宿へと入って来たのだ。

「おおお、ひょつとしてこの宿で男と待ち合わせか？」

「ねえ、フェイ。なんで宿屋なの？」

「なんでって くそっ！ いいかセラ、何を見ても止めるなよ。ちゃんとした証拠が要るんだ」

フェイはセラの返事を待たず部屋を出ると、階段の脇 カウンターが見えるギリギリのところではしゃがみ込み、コッソリと階下を覗き込んだ。

カウンターにはさっきの紫のワンピースを着た女性がいた。

ボソボソと話し声が聞こえるが、遠いので部分的にしか聞こえない。

「だから いい？」

「ああ、いつものダンナだろ？ かまわないよ」

幸い狸顔のマスターの大声だけはハッキリと聞き取る事ができた。いつものダンナ これはビンゴかもしれない。かつて無いほど

のスピード立証になりそうである。

あとは現場証拠を掴み、クライアントへ報告。そして、その足で教会へ行きセラを迷子と言って預ける。

要領の良いルナならきつと、セラをうまく領主の元へ返す事が出来るだろう。

まさに完璧な作戦だった。

「……フェイ」

「のわああっ！」

いつの間にか背後にセラが来ていた。

考えに没頭していたとは言え、こんな素人の気配を感じれなかったのは少し悔しい。

「ふう、ビックリさせるなつて。部屋で待ってるよ」

「でも、気になる」

「ちつ。いいか、何があつても黙ってるよ　つと、来たな」

カランとカウベルの音と共に一人の男が入ってくる。

赤色がかった髪と中肉中背、そして依頼人の婦人に見せてもらった肖像画の通りの顔　ターゲットのハンスに間違いなかった。

「ハンス！」

待っていた女性が明るく弾んだ声でハンスを呼んだ。

互いを確認し、二人は満面の笑顔を見せると、そのまま走りよつて

「だめえええええっ！」

絶叫が響き渡った。

抱き合おうとした二人、マスター、そして最も驚愕しているフェイの視線を一身に受け、セラはすっと立ち上がった。

真っ白な帽子を剥ぎ取り、天高く放り投げると一歩踏み出す。

「妻帯者でありながら、別の女性と不埒な行いをしようなど、このセシリア」ラドクリフが絶対に許しませんっ！」

「お前、いいから人の話聴けよっ！」

フェイの悲痛な叫びは、階下のどよめきによってあっけなく掻き消されたのだった。

(15) あんた知ってるか? (後書き)

全世界のデガワさん、ザーボンさん、ドドリアさん、申し訳ありません。ほんとは大好きです。

(16) こいつ本当にダメだ

こいつ本当にダメだ

セラの迷いの無い真剣な表情を見て、フェイはそう確信した。黒い帽子を深くかぶり、どうにでもなれとその場に力なく座り込む。一方、公女殿下の乱入で宿屋のカウンター付近はすったもんだの大騒ぎだ。

「セ、セシリア様、俺の宿屋に公女殿下がっ！ こいつはすげえ話のネタだぞ！」

「うそつ、本物？ でも噂どおり小さいし、可愛いし、綺麗な金髪だし」

「あああつ！ この事はどうか、どうか妻にはご内密につ！」

狸顔のマスターは感激し、女性は疑いの目を、浮気男のハンスは床にひざまずいてセラを拝み倒している。

その状況を見てもセラは顔色一つ変えず、ビシリとハンスに指差すと無駄に威厳のある声で宣告した。

「ハンス！ 結婚している身でありながら、なんと……奥様になんとご報告すればいいのですか！」

「うひいっ！」

ハンスはガタガタと縮こまり、同時にフェイもガツクリと床に手を着いた。

終わった。依頼人まで暴露しやがった

涙で視界がにじんでくる。

これ以上後悔することなど無いと思っていたのに、甘かった。いくらなんでも対応が甘過ぎた。まず最優先でセラを何とかすべきだったのだ。

教会に預けられないとしても、せめてロ・プでがんじがらめにして口に布をかませ、誰にも見つからない場所に放り込んでから仕事するべきだった。

それなのに口約束だけでどうにかなると信じていた自分がバカだったのだ。

うな垂れるフェイの隣で、しかしセラの暴走はとどまるところを知らなかった。

「ハンス、もしあなたが改心し、これから一生奥方だけを愛すると誓うなら……ラドクリフの名において、奥方様には報告しないと誓いましょう」

「勝手に誓うなよ、頼むから……」

ファイの悲痛なつぶやきもむなしく、ハンスはパツと顔を輝かせると「誓います！ 誓います！」とひれ伏した。

当然、その隣にいた紫ワンピースの女はハンスをむんずと掴み上げて、したたかに顔をひっぱたく。心に響くほど痛そうな音だった。セラはふうと息を吐くと、につこりと微笑んでフェイを見る。

「良かった。これで、ハンスさんも奥様と幸せになれますね」

「……で、どうやってその奥さんには報告するんだよ」

フェイは半眼でセラを睨みつけたが、セラはあごに指をあててきよとんと首をかしげる。

「何も無かったですよ じゃダメなんですか？」

フエイは深い深いため息を吐いた。

依頼人に浮気してましたと報告するのは簡単だ。証拠を掴んで報告すれば、たとえ調査が一日で終わっても、定額どおりの報酬がもらえる。

しかし、何も無かったと報告するには最低でも10日は張り込む必要がある、当分の間、仕事は終わらないのだ。

つまり、報酬がもらえるのがずっと後になるという事だ。

メリットがあるとすれば、セラの言う通り、ハンスが奥さんと仲良くなってくれることを願うのみ

「いや、ちょっと待て。報告が10日後になるって事は……経費を水増し請求できるって事じゃないか？」

よくエルカがやっている手ではあるが、さすがに不正請求は後味が悪いのでフエイはやった事がなかった。

でも入院代でエルカに迷惑掛けたし……この際、仕方がない、よな？

なにより依頼人に納得してもらうためには必要な事だろう。仕方が無いとフエイは狸顔のマスターを探すことにした。経費の水増しにはマスターと口裏を合わせる必要があるのだ。

「ん？　そういえばマスターがいないな？」

フエイの疑問にセラはさらりと答えた。

「マスターなら、さっき外に飛び出していきましたよ」

「ふーん、外か……外っ!？」

一瞬、嫌な予感がフェイの脳裏をかすめた直後だった。

バンッ

宿屋のドアが大きく開け放たれ、真っ白な鎧を来た男が飛び込んできた。

その男は顔半分が痛々しい青あざになっていたものの、目はギラギラと怒りに燃えている。

そして、その怒りの視線がすぐさまフェイを捕らえた。

「見つけたぞ、リアッフェイロン！ 領親衛隊アズマ、貴様をひっ捕えてくれる！」

アズマと名乗った男は、刃渡りが腕の長さほどもある細身の直剣を抜き放った。

あんの狸親父、速攻で俺を売りやがった！

内心で毒づくが、今は階下にいるアズマをどうにかしないとまずい。

なにせ親衛隊といえは生半可な腕じゃないだろう。対してフェイの武器は腰に差しているダガーが一本きり、得物の長さで言えば半分にも満たない。かなり分が悪かった。

フェイは被っていた帽子を目深に被りなおし、作戦その1を決行する事にした。

「いえいえ、人違いですよ。私はザーボンデガワと言っしがない行商人で」

「フェイに剣を向けるなんて！ このセシリアの婚約者と知っての

狼藉ですか！」

「人の努力を片っ端から無駄にするなっ！」

涙ながらに絶叫したフェイに向かって、アズマは剣を構えたまま油断無く階段を登り始める。

「まったく、いい加減にしろよ……俺が何したって言うんだ」

ヤケクソ気味に愚痴をこぼすと、フェイはかぶっていた黒い帽子をかなぐり捨てた。

そして、セラを横向きにヒョイと抱える。いわゆるお姫様抱っこと呼ばれる恥ずかしい抱え方だ。

「フェイ？」

「……やってやる、やってやるぞ。悪だ。俺は悪だ、悪になるんだ！」

フェイはセラを抱えたまま階段の上辺に立つと、登ってくるアズマに真っ向から対峙した。

「貴様っ、汚らしい手で公女殿下を抱きおって！ さあ、返してもらっぞ！」

「言われるまでもねえよ！」

そう叫ぶと、フェイは抱えていたセラをアズマの胸元へポイと投げた。

「なっ！？」

アズマは守るべき公女殿下を受け取るため、構えていた剣を咄嗟

の判断で落とし、全神経を使ってセラを受け止める。
見事、セラは腕の中にすぱりと納まり、アズマはホッと息を吐いた。

そして目を上げ 再び顔をひきつらせる。

硬そうなブーツの底が、目前まで迫っていたのだ。

「落ちろおおっ!!」

フェイの落下力を加えた蹴りが、アズマの顔面目掛けてぶち込まれた。

ドゴスッ

鈍い音と共に、アズマはセラを抱えたまま階下に向けて吹っ飛ばされた。

ゴンッゴンッ……ガン

最後に一際痛そうな音が響き、ようやく宿屋に沈黙が訪れた。
親衛隊員アズマは階段の最下段で完全にのびている。しかも、気を失ったセラをしっかりと抱えたままである。敵ながら見事な忠誠心だった。

フェイはそれでも警戒しながら階段を下りたが、やはりアズマはびっくりとも動かなかった。

そのアズマの胸で、気を失っているセラをちらりと見る。
どこも打ってはいないはずだが、表情が僅かに苦しそうだった。

ズキン

今更ながら胸が痛む。一歩間違えば危険な事を行ったのだ。

セラの真っ白な頬に手をさし伸ばそうとして、止める。

馬鹿か俺は。悪だ。振り返るな。このまま立ち去るんだ

自身に言い聞かせ、フェイはゆっくりと振り返って一步を踏み出した。

ガシ！

突然足首を捕まれた。

思わずフェイの口から悲鳴が漏れそうになったが、足を掴んでいた相手がセラと知り、悲鳴はため息に変わった。

「……フェイ」

セラは不安そうな顔でフェイを見上げている。

捨てられそうな子犬の目、疑う事を知らない、嫌になるほど真っ直ぐな視線だ。

「フェイ、どこへ行くの？」

「……どこでもいいだろ」

「私も、行く」

「ダメだ。そこにいろ。もう分かっただろう。俺は、お前を……」

それでも、セラはゆっくりと起き上がる。

「えへへ。もう大丈夫」

そう言うと、セラはにっこりと笑ってフェイを見上げた。

まるで怖い物でも見たような表情で、フェイは一步後ずさる。

「……なんで、お前は」

「ん？ 大丈夫、フェイ？」

セラは真っ直ぐにフェイを見上げ、心配そうに覗き込んでくる。その碧の目をフェイは見返す事が出来ず、目をそらした。

「いいか、よく聞けよ。俺は、お前を利用したんだ。お前を
っ」

捨てた、と言おうとして吐き気がした。
腹がねじれて、胃がキリキリと痛む。

親に捨てられた事くらい、もう平気だと思つてのに

フェイを捨てた親と同じように、自分もセラを捨ててしまった。
その事が、フェイの心を激しく動揺させていた。

「利用したつて、私は平気だよ？ フェイのこと信じてるから」

「うるさいっ！ 黙れよっ！」

「フェイ、どうしたの？」

そう言つて心配そうに触れたセラの手を、フェイはパシンとはじいた。

「触るな！ お前のソレは、どうせただの『はしか』なんだろう！
金持ちの道楽なんかにつき合つてられるか！」

「なに？ はしかつて、なんのこと？」

「黙れよ！ さっさと俺なんか捨てて、他の貴族様に可愛がつても
らえ！ このっ」

グイッ

突然、えり首を捕まれた。

掴んだのは今まで傍観していた紫のワンピースの女　ハンスの
浮気相手の女性だった。

女は憤怒の表情を浮かべ、右手を高々と振り上げる。

ズパアアン！

ハンスの時以上の破裂音が宿屋中に響きわたった。

しかし、フェイは叩かれた頬をおさえ、呆然と女を見上げていた。
女の目に涙が溜まっていたからだ。

「あたしは、確かに許されない恋をしたよ！　牢に入れられたって
文句は言えない。でもね、あんたね、何様か知らないけどね、女の
子の恋を馬鹿にするなんてね　」

女は両手でフェイのえり首を掴み、声を震わせながら力の限り叫
んだ。

「この世の誰にだって許されちゃいないんだよっ！」

操り人形のように掴まれたまま、フェイは何も言い返す事が出来
なかった。

その通りだと思ってしまったからだった。

(17) 小さな手

小さな手が紫のワンピースへと伸びる。

「フェイに酷い事しないでください!」

セラが掴みかかったのだ。お陰でフェイは開放され床の上に尻餅をつく。

一方、掴みかかれた女はやってられないと苦笑を漏らした。それはそうだろう。セラがさぞ傷ついただろうと思って平手打ちまでしたのに、これではまるで道化である。

女は虫のようにまとわりつくセラを引っぺがすと、その頭にため息を落とした。

「そうかい、そりゃあ悪かったね。でもこれくらい許してくれよ。なんたつてあんたらはあたしの恋を終わらせたんだ」

「あ、あんな間違った恋なんかっ」

「そうね、あたしの恋は間違いだった……」

女は一瞬だけ厳しい顔を見せるときびすを返し、床に落ちていた真っ白な帽子を拾い上げる。

「私の恋は、生まれてくる場所を間違えたんだ。でもさ、それだけなのね……」

その寂しそうな後ろ姿に、セラは息を呑んだ。
今更ながら自分がもたらした結果を見つめ、下唇を噛んだ。

「……」

「ああ、そんな顔する事なんかないよ。適っちゃいけない恋なんだし、いつかこんな日が来る事は分かってたさ」

女はパタパタと帽子を振って、再びセラの前に戻ってくる。

「でも、終わらせたのが公女様で良かったよ。託す相手としては十分すぎるからね」

「……託す？」

大きく頷き、女はセラの耳元で何かをささやいた。
そして、白い帽子をゆっくりと、まるで重いガラスでも持っているかのように手渡した。

「あ、あの……ありがとうございます」

セラが頭をペコリと下げると、女は満足そうに微笑んだ。

「そう。その言葉でいいんだよ。さ、もう行きな。いつまでもここに居ちゃまずいだろう」

そこで、フェイは「あっ」と声を上げる。

女の言う通り、このままこんな場所においては第二第三の追っ手がやってくるだろう。

はやく逃げなければならない　そう思って立ち上がったフェイに、女は声をかけた。

「そのリア菲菲イロン。まさか、まだ置いてくつもりじゃないだろうね」

何の事だ、などと聞いたら本当に怒られそうだった。

なにせ女の側には不安そうに帽子を胸に抱いたセラが、じっとフェイを見つめているのだ。

女は親指の先をぐいと階段の下へ向けた。

「あの親衛隊さんをやつつけたのはあんただろ？　なら、責任もって最後までこの子を守るんだ。まさかあたしに預けて終わろうってんなら、今度はナニを蹴り上げてやるよ！」

「わ、分かったよ。連れてきやいいんだろ、連れてきや」

「ほら、行っておいで」

背中をポンと叩かれたセラは小走りでやってきて、フェイの黒ジヤケットの裾をしつかりと掴んだ。

これでまた振り出しに戻る、だ。

ため息を吐いたフェイに、女は早く行けとあごで合図する。

分かってるよ。こうなったら一刻も早く教会に行ってセラを預けるしかないからな

フェイは肩をすくめると女に背を向け、宿屋の大きな扉をゆっくりと押し開けた。

コロン

小さなカウベルの音が響き　その直後だった。

どわあああああ！！

カウベルの音はその何千倍もの音によって瞬時にかき消された。一瞬、土砂降りかと思ったがそうではない。人だ。

歩道を埋め尽くす人、建物の窓にも、屋根の上にまで人がいる。その全ての視線がこちらを見て歓声や口笛を吹いているのだ。フェイはあんぐりと開けて立ち尽くし、セラも人の多さに圧倒され、小動物のようにキョロキョロとせわしなく首を動かした。

「な、な、なんだこりゃあつー！」

フェイの絶叫は、周囲のどよめきにあっけなく押し返される。

「本当に姫様つてば小さい！ 人形みたい！ かわいいっー！」

「さつき入った白犬野郎はどうしたんだ？」

「バカだな兄ちゃん！ あの黒い人がやつつけたに決まってるじゃん！ ゴルゴンを倒す英雄だぜ！」

「いいぞ！ 黒い兄ちゃん！ 絶対公女様の呪いを解くんだぞ！」

「呪いって、キスしたら解けるんじゃないっけ？」

「それより、頬の手形はなんだ？」

「セシリア様ー！ 駆け落ちがんばってー！」

全員の遠慮のかけらも無い声援と視線が、二人に向かって容赦なく降り注いでいる。

なんだこれはっ、なんだこれはっ、なんだこれはああつー！

フェイは真っ赤になりながらも、激励のつもりかバシバシと触ってくる人波を掻き分けて道を進み出した。

一方セラは「ありがとう！」とにこやかに帽子を振りながらフェイの後ろを離れない。

味方など、ここには誰一人いないのだ。

帰りたい。早くエルカーナに帰って、お茶が飲みたい。エルカ

に会いたい

フェイ半泣きになりながらも、野次馬達の海をすり抜け、押し退けて、すこしでも早く教会へと駆け込もうと躍起になっていた。だが、大通りに出た瞬間、人の群れがプツンと絶える。

「な、なんだ？」

人の海にぽつかりと無人の空間が出来ていた。次を感じたのは異質な気配。

「……ようやく会えたな、リア「フェイロン」

重く、しわがれた声。

無人の空間の中央に、一人の屈強な戦士が腕を組んで立っていた。そして理解する。この空間は、その戦士の人を寄せ付けぬ重圧によつて作り出されていたのだと。

竜馬のような厳つい顔、短く刈り込まれた灰色の髪、黒い切れ長の目。

必要最低限の白鎧を身にまとい、その戦士は、薄く笑っていた。

「……風の、ガラム」

誰だろう、と思う前にフェイの口からその言葉が先に出ていた。あまりに思い描いていた通りの戦士だったからである。

「いかにも。このナラド」ガラムディン、ゼクス領主ラドクリフ公の命により、貴様を捕える」

フェイの憧れの人が、今、目前でシャムシールを抜き放った。

「ちょ、ちよつと待ってくれ！ セラは返す！ だから……」

「言ったはずだ。領主公は貴様を所望なのだと」

「んなバカな！」

ガラムが一步步つ間合いを詰める。

しかし、フェイは迷っていた。

剣を抜けば良いのか、逃げれば良いのか、それすら決められないでいたのだ。

そんなフェイの前にセラが進み、両手を広げる。

「ガラム！ やめて、お願い！」

「……セシリア様、失礼します」

ガラムは優雅に一礼し その直後、風になった。

滑るような足さばきで十歩はあつたはずの間合いを締め、瞬きの間にセラの眼前に迫る。

そして、主人であるセラの首筋へ手刀を叩き込むと、倒れるより早く小脇に抱え、再びフェイと間合いをとった。

流れるような一連の動作。

あまりに速く、あまりに冷徹だった。

ああ、俺はこうなりたかつたんだ

フェイが絶望にも似た羨望を浮かべている間に、このガラムの所業を見た周囲の野次馬から非難の声がポツポツと生まれる。

「ひ……ひどい」

「そ、そうだ。セシリア様になんてことするんだ」

「人の恋路の邪魔するんなんで、サイテーよ！」

「ひっこめ！ この悪魔！」
「ラマに蹴られて死んでまえっ！」

初めはさざ波のようだった非難の声も、すぐさま津波のような罵声に変わった。

しかし、ガラムは眉一つ動かさない。

そして、ゆっくりと曲刀の先をフェイに向け、大地を揺るがすような声で叫んだ。

「ゴルゴンを倒す！ そう誓ったそうだなあ！ リア＝フェイロン！」

その一喝だけで野次馬たちは息を呑む。

罵声にまみれた大気が、針が落ちても聞こえそうな沈黙へと昇華されたのだ。

「なれば、このガラムを倒してみよ！ 貴様の覚悟をここに示せ！」

そう言っただけでガラムはシャムシールを大上段に振り上げ、一直線にフェイに斬りかかる。

死ぬ と思ったフェイは条件反射でダガーを引き抜いた。

ギン

ダガーの側面を曲刀が滑り、火花が散る。

おおおおっ

地鳴りのような歓声が沸きあがった。

冗談じゃない、今のはわざと避けられるように斬りやがったんだ！

フェイの憶測を肯定するように、ガラムの目尻に浮かぶシワが濃くなる。

今や全ては相手の思惑通り、フェイは人垣と言う逃げられぬ監獄の中で、まんまと決闘しなくてはならなくなっていた。

しかし目の前にいるのはエルカの師匠で、ゴルゴンの副団長だった人である。実力など雲泥の差があるはずだ。

俺は、死ぬのか？

足が震える。息が上がる。動機が苦しい。

恐怖を感じれば動けなくなると分かっている、目の前の男はほとんど生きた伝説なのだ。

「ふっ」

鋭い呼気と共にガラムのシャムシールが再び迫ってくる。今度は下からの残撃。

ギリリ

腕を狙った一撃を弾きながら半歩後ろに下がって避ける。だが、弾いたはずの曲刀がクルリとひるがえり、フェイの喉元を狙って蛇のように伸びた。

チッ

シャムシールはジャケットの襟をかすめ、一瞬前までフェイの顔

があつた空間をえぐる。少しでも遅れていたら、即死だった。
フェイの中で恐怖がさらに膨らむ。

「どうした！ 名つての用心棒カシムを倒し、我が配下アズマをも
下した男が、この程度かつ！」

ふざけるな、二つとも偶然だ！

心では文句が言えるのだが、口に出す余裕は無い。

曲刀は変幻自在にうねり、必死で避け続けるフェイのジャケット
を斬り裂いた。

その斬撃は、とてもダガーで受け止められるものではない。受け
流して軌道を逸らし、そこに生まれた空間へ体をねじ込み、どうに
かしのいでいるのが現状だ。

ジッ

しかし、確かに流したはずの剣先が曲がり、フェイの体に次々と
裂傷を増やしていく。

ジャケットはすでにボロボロだった。

長引けば、不利になるだけだ

フェイは必死で相手の隙を探す だが、見つけたのは隙ではな
く恐ろしい事実だった。

ガラムが抱えているセラの長い金髪が、まったく揺れていないの
だ。

つまり、ガラムはほとんど動いておらず、逆にフェイの逃げる先
ばかりが完全に読まれている事になる。

「……化け者かよ」

フェイのダガーは全く届かない、ただ避ける一方であり、ガラムは体を動かす必要すらない。

あまりにも完全な実力差だった。

ギリリッ

それでも、フェイは斬撃を受け流し続ける。
死ねないのだ。

まだ浮気調査の報酬ももらっていないければ、ルナに告白もしていない。奮発して買ったベルリーフティの葉もたっぷり残ってる。
そしてなにより、もうすぐクロフの結婚式なのだ。

あいつの結婚を祝うまで、死ねるかよっ！

覚悟が決まったせいかわ、ようやく足の震えが止まる。上がっていた呼吸が徐々に落ち着き、無駄な動きが減る。

シャムシールの不規則な動きも、徐々にではあるが法則が分かってきた。

そして、フェイがなにより実感している事がある。

コノハの突きの方が、速いっ！

ジャリ

曲刀を頬のすぐ横で受け流し、そのままガラムの懐に入る。

そして、がら空きになった胸元にダガーを一閃　させようと
して標的が消えた。

直後、真横から脇腹を蹴り飛ばされる。

フェイはなす術も無く宙を飛び、人垣に突っ込んだ。
人垣の輪がさらに広がった。

「落胆したぞ！ 殺すつもりが無い剣で、このガラムが止まると思
ったか！」

さすが、エルカの師匠だ

殺されないためには確実に殺せとは、いかにもエルカが好きそ
うなノリだ。

そりゃあ、出し惜しみなんか出来ねえよな

フェイは立ち上がると息をゆっくりと吸い込み、ダガーを逆手に
構え直す。刺突には向かないが、掻き切る事に適した持ち方だ。
姿勢を低く、さらに低く構え、さらにその状態から前に倒れこん
だ。

そしてアゴが地面に着くすれすれまで倒れた時 全身のバネを
使い、這うように疾走する。

フェイは一枚の影になって、ガラムに迫った。

「……ほう」

ガラムの唇がつり上がる。

冷静にシャムシールを下段に構えると、間合いに入ったフェイを
草を刈るようになぎ払った。

しかし、フェイはそれをさらに切り上げ、曲刀を下から潜り抜け
る。

いける！

足腰に負荷のかかる下段薙ぎの後だ、絶対に避けられるタイミングじゃない。

そう確信し、無防備を晒した足首目掛けてダガーを閃かせた。

ゴッ

ダガーに力を込めたとはほぼ同時に、蹴り飛ばされていた。

ガラムは避けられぬと分かるや、斬られる足を使って問答無用でフェイを蹴り飛ばしたのだ。

確かに被害を最小に抑えられる可能性があるが、恐怖心が少しでもあれば出来ない事であり、フェイには想像もつかなかった行動だった。

そして、その結果、絶好のチャンスは足首に僅かな裂傷を付けただけに終わってしまった。

「本当に化け物かよっ！」

コノハ相手に唯一勝ったことのある奥の手だっただけに、フェイの顔が苦渋に歪む。

切り札の結果がアキレス腱にかすり傷を負わせただけなのだ。与えたダメージなど無いに等しい。次の手などもう無いのだ。

対してガラムは肩をゆすり出す。

「猫のごとき柔軟な動き、このガラムですら初めて見たぞ！ 面白い、久方ぶりに胸が震えるわっ！ くぁっはっはっはぁっ！」

この状況で、実に楽しそうに笑ったのだ。

ガラムは笑いながらセラをその場へ音も立てずに置いた。

そして、自由になった手で腰に差してあったもう一本のシャムシ

ールを抜き放つ。

左右非対称の、しかし、見る者を魅了する見事な二刀流の構えだった。

「このガラムに二刀を抜かせたこと、地獄で亡者どもに誇るがいい！」

「そんなのありかよっ！」

フェイが泣きそうに叫びながら、それでも生きたいと思う一心でダガーを正眼に構える。

その覚悟にガラムは満足そうに頷き、まるで砂漠に住む巨獣のように、魂の限り叫んだ。

「いくぞおおっ！ 黒猫おおっ！！」

その声にひるみそうになりながらも、フェイは一步を踏み出し

ゴスッ

しかし、衝撃は後ろからきた。

「すまない、フェイ」

声と共に視界が暗転する。

その声は聞き間違えようが無い。

フェイが一番聞きたかった声だからだ。

「すまない」

間違いなく、エルカの声だった。

(18) 小窓に浮かぶ月

小窓に浮かぶ月は綺麗だが、何も答えてはくれない。ただ白銀の光を静かに注ぐのみだ。

「……ふう」

フェイは暗い牢の中で一人ひざを抱えて座り、狭い夜空に浮かぶ月を見上げていた。

なにせ他にする事が何も無いのだ。

あるのはボロ布のような布団と毛布、悪臭を放つ大きな壺。これがトイレなのだから趣味が悪い。他にあるものを強いてあげれば、頑丈な扉と肩幅の半分も無い小窓、それだけである。

やる事もない、見る物もないこの状況では、どうしても同じ事ばかりが頭をよぎった。

「エルカ、どうしてお前が俺を……」

この牢で目を覚ましてから丸一日、フェイの口からはため息とその言葉ばかりだ。

実のところ、その理由はなんとなく分かっていた。

あのままガラムとやりあっていれば良くて半殺し、悪ければフェイの首は胴と泣き別れていた事だろう。

いや、今だって十分やばいんだよな

考えてみればそうだ。いったいフェイは何のために捕まったのか？ そんなもの決まってる。あの過保護変態領主の人間サンドバッグにされるためだ。

きっと今夜にでも、あの頑丈な扉が音をたてて開き、肉食獣のよ
うな顔が

ギギイッ

「おい、リアァフェイロン。エサだぞ……っ、何をやってんだ？」

便所壺の影に丸くなって震えているフェイを見て、親衛隊員アズ
マは頬をひきつらせた。

一方のフェイは入ってきたのが領主で無いと分かるや、その場で
屈伸を2度ほどすると、たった今アズマに気付いたように顔を上げ
る。

「おっ？ もう晩メシか！」

「……俺はこんなヤツに負けたのか」

アズマは心底悲しそうに首を振る。

なにせフェイを取り逃がした不手際で、5日間の牢番をさせられ
ているのだ。

月明かりに浮かんだ顔には宿屋で見たときよりも青アザがいつそ
う濃くなっており、えもいわれぬ悲壮感が漂っていた。

「そのアザ、痛そうだな。大丈夫か？」

「人事みたいに言うな！ メシ持って帰るぞ！」

アズマの手には粥の入ったお椀があり、腹立たしいほど旨そうに
湯気を立てている。

空腹には勝てず、フェイは黙って手を合わせるとそれを神妙に受
け取った。

「……言っておくが」

さっそく地面に座って食べようとしているフェイを見下ろし、アズマは憎々しげに宣告する。

「俺は貴様を絶対に許さないからな。貴様はセシリア様を投げ捨てたんだ」

そんな事は分かっていた。

だが、『捨てた』と言う言葉に胸が小さくうずく。

捨てられる痛みは十分に分かっていたはずだった。

しかもセラは、ただ一心に自分にすがっていただけであり、それを正面から裏切ったのだ。

「セラは　その、元気か？」

「元気か、だと？」

月明かりに浮かぶアズマの顔が、怒りに彩られた。

「このごにおよんで心配するフリか！　いいだろう。貴様に良心があるとは思えんが、少しでも心があるなら聞いて悔いるがいい！」

失言だった。聞きたくなかった。フェイは後悔するが既に遅い。

「セシリア様は食事も取らず、眠りもせず延々と泣いていらつしやる！　忌々しいことに、セシリア様を投げ捨てた貴様が、牢に入っている事を泣いているんだ！」

わんわんとセラの泣く声が、耳の奥に聞こえた気がした。痛かった。これならいっそ殴られたほうがまだ。

それきり返事をしなくなったフェイに興味を失ったのか、アズマは足音も荒く牢を後にする。

くそつ。バカだ、あいつ

残されたフェイは耳に残る泣き声を振り払うように、湯気の立ちのぼる粥を無理やり口に入れた。
味は全くしなかった。

同じ頃、フェイの上司として取調べを受けたエルカは、丸一日経った今ようやくエルカーナへ戻ってきた。

しかし、返ってきた待っていたのはコノハからの抗議の嵐だ。

「エルカツ！ どうしてフェイを引き渡したのよ！」

「ちよつと、コノハ。落ち着いて」

コノハの剣幕は凄まじかった。ルナがなだめているが収まりそうにない。

しかし、詰め寄られているエルカは、あくまで平然と答えた。

「ああするしかなかった。フェイが死んでもいいのか？」

逆に切り返され、コノハは信じられないとばかりに眉尻を逆立てた。

「剣を向ける相手が違うじゃない！ あんたのパートナーは誰なのよっ！」

「無茶を言っな。師匠は既に本気だった。ああなったら二人掛りで

も倒すのは難しい」

「戦う前から何よっ！ この臆病者！」

「ちよっと、コノハ。あなただって分かっているはずじゃない。あれ以上フェイが戦ったら、本当に犯罪者になっちゃうんだよ？」

「っ　でも、もうすぐクロフの結婚式なの。フェイが、一番楽しみにしてて……」

コノハはあきらかに焦っていた。

そして、焦っている気持ちにあれこれと理由をつけているが、本当の原因が他にあることに、ルナはなんとなく気が付く。

セシリア様が来るまでは、フェイに手を出す人なんていなかったもんね

だから、コノハは胸にある独占欲に気が付く事も無く、親友というポジションを満喫していられた。焦る必要も告白する必要も無かった。

それがいつの間にか、街中がフェイと公女様の婚約話で持ちきりなのだ。

言うなれば、自分のものだと思っていた桃の実を、収穫間近に盗み取られたようなものだ。

人間とはおろかなもので、無くなって初めて、自分がどれほどその実を食べたかったのか思い知る。まして、恋の実ともなればどれほど胸が焦がれるだろうか。

いつものコノハなら、無理やり行動して解決しちゃうんだろうけど

しかし今、フェイの運命の手綱は絶対的な権力者である公爵家に握られてしまった。いくらコノハに槍が振るえても、どうすること

も出来ない状況だ。

だから、その不安をひたすらエルカにぶつけているのだろう。

不器用だと思った。何とかしてあげたいと思った。

ルナはコノハの怒鳴りの視線を黙って受け止めているエルカの横顔を見つめる。

「……エルカ、あなた何か考えがあるんでしょう？」

その問いにエルカはゆつくりと頷いた。

「ちょっとした情報筋から聞いた話なんだが、次の満月にセシリアを紹介するためのパーティーが開かれる事になった。近隣領から上級貴族達を大勢呼び、セシリアのよき婚約者を決めるという盛大なパーティーだ」

「よき婚約者……って、そんなの絶対にセシリア様は納得しないでしょ。なんでやるの、そんなの？」

首を傾げたルナに、エルカは少し悲しそうに首を振った。

「セシリアの意思は関係ない。決めるのは相手と父上だ。父上が相手を気に入り、相手がセシリアを気に入ればそれで話はお終い。貴族の結婚はそう言うものだよ」

ルナは知らなかったと口元に手を当てた。

確かに領主の子供が公子、公女と呼ばれる。それは公爵家の人間が得る莫大な権力の引き換えに、その人権が領民のために費やされるからこそ、公の子供と呼ばれ、皆から尊ばれているのだ。

しかし、意に沿わぬ結婚が当然と言われると、さすがに受け入れがたい。

「問題は、そのパーティで婚約者が決まってしまう事だ」

エルカは本当に困ったように腕を組んだ。

「どうして？」

「新しい婚約者が決まり次第、フェイは本当の犯罪者になり、おそらく処刑される」

大人しく聞いていたコノハは、その言葉に目を見開いた。

「そんな無茶苦茶じゃない！　なんでフェイが処刑なんてっ」

「しょうがないさ、コノハ。結婚と言うのは重要な外交なんだ。そこに元婚約者なんて存在が知られれば体裁が悪くなる」

「ふっ、ふざけないでよ！　絶対に許さないわよ、そんなものっ！」
「ああ、私もそれは絶対に阻止する」

それまで淡々と話していたエルカの声に、初めて強い意志が宿った。

「幸い、私も父上から公子としての参加要請をされた。これでも一応他の領からは、まだゼクス領の長男だと思われてるからね。そして、今回はこれを利用してフェイを救出する。コノハ、協力してくれるか？」

「次の満月……10日後ね。勿論よ」

「助かる。では、私の婚約者として同行してくれ」

コノハは迷い無く頷いた。

しかし、一方のルナは不安そうな顔を隠せない。

「ちょっと待つてよ……もし上手く救出できたって、それじゃまだお尋ね者じゃないの？ そしたら、エルカーナには帰れなくなるんだよ？」

「心配ない。フエイにはパーティ会場で婚約破棄の宣言をさせる。領の面子は丸潰れになるかも知れんが、そこでなら領主公も強引な手には出ないはずだ。これで追っ手を差し向ける理由もなくなるだろう」

「でも……」

それでもルナの顔からは、不安の影は消えなかった。

無理もないか

エルカにもその気持ちは痛いほど分かる。

なにせ自信たっぷりに言ったものの、不確定要素が多過ぎるとエルカ自身が思っているのだ。

何より今の状況が一番の予想外なのである。

まさか、こうまで事態の進展が早いとは

エルカの狙いとしては、セラの芽生えかけた恋心を婚約パーティと言う障害を使って燃え上がらせようとしただけなのである。

しかし、セラの恋心と行動力は予想を遥かに超えて成長していた。まさか脱出して会いに来るなど、後先を考えぬ盲目っぷりにも程がある。

お陰でフエイへの危険視が頂点にまで高まってしまったのだ。

フエイもフエイだ。エルカーナで大人しくセシリアを差し出せば、一発殴られるだけで済んだものを

下手に逃げたため、結局こう言う事態になってしまったのだ。

お陰で明日からエルカとて、悪名を被ることになる。

なにせ男同士の決闘に割り込み、しかも悪役であったガラムの側に荷担したのだ。

エルカはため息をついて昨日の事を思い出した。

『すまない、フェイ』

そう言つてフェイを昏倒させた後、周囲の野次馬達からの罵声は凄まじかった。

決闘を邪魔された師匠も、鬼のような形相でエルカを睨み、剣を突きつけてこう言つた。

『殿下！ 一体どういうおつもりか！』

お陰でエルカの正体はバレる、石は飛んでくる、兄失格だのシスコンだの言いたい放題だ。

だが、あのままではフェイが殺されていただろう。

師匠はエルカですら見たことが無い二刀目を抜いていた。あれの意味する所は死闘である。

フェイがそこまで本気にさせたのだ。

黒猫、か

最後に師匠はフェイをそう呼んでいた。

確かに、すばしこいところも、気まぐれなところも、妙に懐くところもそっくりだ。

父上、私の黒猫は絶対に取り返して見せますよ

エルカはそう胸に誓い、小窓に浮かぶ月を見上げた。

(19) 拝啓領主様

『拝啓領主様

私は一領民としてあなたを稀代の名君と尊敬しておりましたが、先日のお女様の一件、耳を疑いました。どうして娘の恋路を邪魔するのでしょう？　そもそも父親とは　』

「うぬうううう……」

領主は長たらしい書面の残りを流し読みすると、自分の机の上に盛り上がった紙面の山頂に追加した。

この山はすべてゼクス領民からの苦情や嘆願書である。

これだけの意見が領民から出た事は、おそらくゼクス領始まって以来であろう。

領主は読んでいない山から5枚ほど掴み取り、目の前に並べる。

『セシリア様の気持ちを認めてあげてください！』

『子供は政治の道具ではありません。どうか……』

『頭が古いよ、今は自由恋愛の時代だぜ？』

『黒猫に愛の手を！』

『いい加減に娘離れしろ！　このタコ！』

「うがあああああああつ！！！」

読み終えた手紙を五十枚ほどまとめ、パンを割くように真つ二つに破り捨てた。

そして、次なる手紙をむんずと掴んで固まる。

「ガラムッ！　ガラムを呼べっ！」

「しかし、ガラム殿はセシリア様のパーティの準備で」
「かまわんっ！　いますぐ呼べ！」

やがて、執務室にガラムは風のように現れた。

「領主公、お呼びでしょうか？」

やや疲労の見えるその顔には、しかし不満の色は一つも浮かべていない。

優秀な部下を持ったものだ、と、頷きながら領主は言の葉に感謝の意を込めた。

「ご苦労……さっそく本題に入るが、まずはこれを見る」

差し出したのは1本の巻き物。

巻き物は手紙とは一線を画す正式な書簡である。本来であれば使者や正式な手続きを踏んで送付されるはずの物だ。

それが何故こんな所に紛れているのか　そこでガラムは、その巻き物に使われている封印が赤い地竜である事に気付いた。

「これはベヒモスの蟬印！　砂漠の民からの書簡ですか？」

「そうだ。この騒動がお前の一族にまで広がっているのだ。読んで見る」

ガラムは巻き物を敬意を持って受け取り、眼前に垂らして読み始めた。

「これは……まさか」

「ああ。長たらしいこと書いてあるが、要はリア＝フェイロンを戦士と認め、そのゴルゴン討伐に砂漠の民が総力をあげて協力すると

いう事だ。住処を失い流浪となったとは言え、あの閉鎖的な砂漠の民が、だぞ？ あれが軍事協力など、ゼクス領、いやシュバート国ですら前代未聞だ。一体何があったと見る……元、砂漠の長よ」

久しぶりに聞いた言葉に、ガラムは顔をしかめた。

思い出したくない過去なのだ。

「この書簡の差出人は私の娘、ディアナにございます。間違いなく、砂漠の民の総意でしょう」

「そんな事は分かっている！ なぜ、今ごろになって協力するような書面をよこしたと思う？ いつ、リア＝フェイロンごときを砂漠の民を戦士と認めたのだ！」

領主の怒声に、ガラムは先日の一仕事を思い出し舌打ちをした。

「……申し訳ありません。先日ヤツを捕らえる時に抜いた二刀目を、砂漠の民に見られたのでしょうか」

「あれごときに二刀目を抜いたのか！」

「あやうく、右足を潰されるところでしたので……よもやこのような事になるうとは、申し訳ございません」

「チツ、まあいい。協力自体は吉報なのだからな。だがそれにしても、砂漠の民の反応が早すぎる……」

例の決闘があつてからまだ二日目でこの手紙である。

砂漠の民め、ヤツを見張っていたか

砂漠の民は、ハッキリ言えば後が無い状態だ。故郷であるツヴェルフ砂漠にある拠点の殆どをゴルゴンに強奪され、ほぼ唯一の収入源であつた金鉱脈も奪われたと聞く。

そこへ、ゴルゴン討伐の勇者が現れたと噂が立ち上ったのだ。
砂漠の民が人物調査を仕掛けていてもおかしく無い。いや、むしろマークがあつたと考えるべきだろう。

砂漠の民は少数だが強力だ。軍事協力はありがたい、しかし、

「……だが、それでもまだ戦力が足りぬ」

「はい。ゼクス領と砂漠の民が協力したとて、まだゴルゴンには刃がたちますまい」

「しかし王軍は全く動かぬ。我らの要請にぬらりくらりと言いつけ、王都ばかりを守っているのだ。ガラム、すまん。約束はまだ果たせぬ」

「領主、私は命も誇りもあなたに預けております。今は砂漠の民ではなくゼクス領民とお考え下さい」

「そうか……しかし、あやつの処遇はどうしたものか」

領主は深く息をついた。

リア「フェイロンの噂がこれだけ大きくなってしまつては、もみ消す事はもはや適わない。

「領主公、いつそあの者を認めては」

「ならんっ！」

机に拳を振り下ろし、鈍い衝撃とともに卓上の書類が宙を舞った。

「セラがあんな男に言いように弄ばれるなどと、想像しただけではわたが煮えくり返るわ！」

「御意。ではパーティの準備はそのまま進めましょう」

頭を下げたガラムに、領主は斜め上を見ながら尋ねる。

「……セラは、どうしておる？」

「セシリア様はまだ、泣いておられます。食事も二日、取られておりません」

「ぐぬぬぬっ！ 忌々しい！」

領主はもう一度拳を机に振り下ろし、立ち上がった。

「セシリア様に、会いに行かれるのですか？」

「ああ……その前にヤツの覚悟を、聞いておく」

そして去り際に言った主の呟きを、ガラムは確かに聞いたのだ。

フェイは頭の上に便所壺を持ち上げ、扉の前で息を潜めていた。壺は重く、それを持つ腕も既に筋力の限界でプルプルと震えている。

しかし、月の傾き具合から、もうすぐアズマが飯を運びにやってくるはずだった。

そして、その時こそが脱出のチャンスなのだ。

計画は完璧だ。絶対にここを抜け出して、クロフの結婚式を祝ってやるんだ。

カッン……カッン……

階段を登ってくる足音がフェイの耳に届く。

決行の時は来た！

ゴクリと唾を飲み込み、頭の中でもう一度シミュレートする。
タイミングは扉から頭が出た瞬間、振り下ろす個所は後頭部、情
けは全て排除すること、脱出ぎわに言うセリフは悪く思っなよ
まさに完璧だった。

ガチャリ

鍵がはずされ、ゆっくりと扉が開く。

いけえええっ！

ヌツと侵入した人影に目掛け、全身全霊を込めて壺を振り下ろす。
しかし、侵入者はフェイの僅かな気配を感じるや機敏に反応した。

「甘いわっ！」

頑丈な便所壺は侵入者にぶつかる直前、巨大な拳によって粉々に
粉碎された。

「なっ
」

だがしかし、その反応速度を持っても便所壺の内容物までは
止めようが無い。

『甘いわ』の『わ』の形に広がった口へ、壺の内容物である『何
か』は容赦なく飛び込んだ。

「う、うわ」

「……ペッ」

アズマにしては巨大すぎる人影は、その『何か』を吐き出し、それが何であつたかを確認する。

薄い月明かりに、その顔に幾筋もの血管が浮き出るのがハッキリと見えた。

もし生まれ変わったら、チヨウになりたい

迫る拳を見て、フェイはうつすらと笑った。

「……む、フロに入るか」

領主は一仕事終えたばかりに額に浮かんだ汗を拭い、足音も高く牢を去っていった。

そして、牢には痛いほどの沈黙が訪れる。

酷い嵐の後に残される、あの沈黙だ。

従つてこの部屋に残ったモノと言えば、ボロ布のような布団と毛布、そして人間のような雑巾、それだけだった。

(20) パーティ前夜

パーティ前夜、月は明日満ちるのを待ちきれないように、その白体を惜しげもなく夜空に晒していた。

ただ、パーティの存在すら知らないフェイには、その月を見ても何の感慨も抱かない。

眠れぬ夜の気まぐれに、小窓から溢れそうなぼんやりと月を眺めていただけだ。

そういえば、小さい頃も眠れない夜は一人で月を見てたっけ

月の光は時に遠い記憶を呼び覚ます。フェイが思い出したのは、幼き日の眠れぬ夜だった。

孤児仲間と住んでいた空き倉庫は、夏になると蒸し暑くともなく寝苦しかった。そこで一人でコッソリ抜け出しては、お気に入りの大きな木に登ったものだった。

その木には細腕のような枝が横に並んだ場所があり、そこへ横たわると、何故か酷く安心するのだ。

そこから月を見上げては、眠るまで人差し指でおでこをこすっていた。

今考えると、俺ってほんと女々しいヤツだったな

おでこをこすっていた理由を思い出し、フェイは苦笑を漏らす。

その理由とは母親が眠る前、よくおでこにキスをしてくれた様な気がしたからだ。

しかし、実際にはフェイは物心つく前に捨てられており、そんな事を覚えているわけがなかった。

それに自分を捨てるような人間がキスなど、してくれるわけもな

い。

「まったく、ほんとにガキだったな。くだらねえ。捨てられたくせに変な望みなんてさ。さっさと捨てるよな、恥ずかしい」

フェイは過去の自分をあざ笑うと、手の平で両目を覆い、そしてポツリとつぶやいた。

「……けど、」

『けど』の先を言葉にすることは辛うじて耐える事ができた。だが、心で思う事は止められない。

けど、その記憶が本当だったら……俺を捨てた時に母さんは、泣いてくれたのかな

月の光は遮ったのに、フェイの胸には幼い頃の寂しかった記憶がふつりふつりと甦ってきた。

今夜は、眠れそうに無かった。

セラはベッドからムクリと起き上がり、真っ赤に腫れた目をゴシゴシとこすった。

どうやら泣き疲れて眠っていたらしい。グルリと周りを見回す。

誰も、いない

部屋は真っ暗で、しんと静まり返っていた。

皆、泣き続ける自分に愛想を尽かし、どこかへ行ってしまったのだろう。

これだけ泣いても事態が好転しない事は今までなかった。つまり、泣こうが喚こうがどうにもならないのだ。

しかし、諦める訳にはいかない。婚約者が、大切な人が牢で救出を待っているのだ。

もう一度、お父様にお願いしよう

フェイに教わった通り、思いを言葉にしよう。ちゃんと伝えよう。そう決めたセラは、腫れぼったい顔を水ですすいで自室を出た。寝間着のまま広い廊下をペタペタと歩く。開かれた窓から見える月はもうほぼ満月だった。

「もう、明日なんだ」

新しい婚約者を決めるなんて考えられない。

しかも、フェイを牢に入れてまでやることでは絶対じゃない。

フェイ、ごめんね。すぐに出してあげるから

やがて、執務室の扉が見える。

夜はかなり更けていたが、そこからは灯りが漏れており、部屋からは父とガラムの声が聞こえた。

「領主公、婚約パーティはもう明日なのです、嬉しくないのは分かりますが……」

「当たり前だ！ 娘を誰かにやる作業が嬉しい訳が無いだろう！」

地を割るような怒鳴り声、セラがあまり耳にしない不機嫌な罵声である。

勿論、父が本気でガラムを罵倒している訳ではないことは分かる。むしろ信頼しているからこそ、思いの丈をぶつけているのだ。

しかし、セラは父の怒鳴り声にすっかり萎縮してしまい、執務室まで後一步のところで、その足は止まってしまった。

「しかし、やらねばなりません。既にエドガー王子がこちらに向かっているとの事です」

「王子か……王子と縁談がまとまれば、軍を動かすには十分な口実が出来るな。あと有力な貴族も教えてくれ、挨拶せねばならんだろう」

「はい。海都ツヴァイ領のリーガン公子、美都アハト領のコーデイリア公子、我が領からはケント伯のご長男……あと、ゴネリル將軍本人が」

「なっ ガラム！ 貴様はあやつにまで招待状を出したのかっ！」

「いえ、どこから聞いたのか是非参加したいと手紙だけよこし、既にここに向かっているとの事です」

「あやつは既に四十近いではないかっ！」

「ですが、実質的な位は王子より上です。御来訪を断るのは不可能かと」

「ゴリネルめがセラを望めば、差し出さねばならん、という事が……」

セラの足が震える。

何を言っているかなど分からなくとも、迫り来る漠然とした結果だけは分かる。

自分が誰かのモノになって、フェイとは二度と会えなくなるという事だ。

なんとか会話に割って入りたかったが、しかし足は執務室まであ

と数歩の場所からピクリとも動かなくなっていた。

「……領主公、一つよろしいでしょうか？」

「なんだ？」

「領主公にとつて、セシリア様はただの娘ではありません。亡き、奥方様の身代わりでございます」

「……だから、何だと言うのだ」

「セシリア様は、絶対に助からないと言われた状態で生まれ、それでも助かった奇跡の御子です。ただ、医者の見立てでは、それが原因でお体がこれ以上成長できないとのこと」

「くだい！ だから何だと言うのだ、単刀直入に言え！」

今度こそ、セラのひざから力が抜けた。

成長しないって何？

そんなこと何も聞かされていなかった。

これ以上聞いてはいけないと言う思いと、それでも知りたいと願う願望の狭間で、その会派は容赦なく続けられた。

「では、言わせていただきます。セシリア様を政治の世界から遠ざけること、それが領主公の本心ではないでしょうか？」

「ぬかせっ！ 何故我々貴族が領民から税を受け取る？ 何故貴族に生まれただけで飢えない？ それは貴族に領を繁栄させる義務があるからだ！ 貴様とて、一族の長だったのならわかるはずだっ！」

「しかし、セシリア様は」

「セラがどうだと言うのだ？ 仮に好き放題させて皆になんと説明する？ 母親の命と引き換えに生まれた事が、何かの理由になるとでも言うのか！」

その後の言葉は、もう聞こえなかった。

セラはきた道を引き返すと、声にならぬ悲鳴を上げながら、月夜に浮かぶ廊下をまろびながらも走り続けた。

私が、お母様の命を奪った

やっと理解した。

小さい頃から兄が自分をうとんでいた理由が、母親の存在を問うた時の気まずそうな侍女たちの反応の意味が。

だから兄は家を出て、この体は小さいままで、フェイは牢に入れられているのだ。

「フェイ、フェイを探さなくちゃ、そして、言わなきゃ」

言わなくてはならない。

自分は汚れているのだ。罪人なのだ。

だから、この領のために犠牲にならないといけない。

だから、言わなくてはならない。

『ごめんなさい』と、そして、『さよなら』を。

ダンダンダンッ！

詰め所の扉が激しく叩かれる。

囚人一人を監視するだけで暇だったアズマは、何事かと飛び上がった。

扉を開く　　が、誰もいない。

「お願い！」

いや、視線を下に向けると、やや寝癖のついた金色の頭が見えた。

「セシリア様！ いったいどうなされました」

「フェイを、フェイのところに行かなきゃ……言わなきゃ……」

寝間着のままの公女を見る。

その顔は蒼白であり、目もうつろで、今にも倒れそうであった。

「セシリア様、明日は大切な日でございます。どうか、お部屋でお休みください」

「お願い。どうしても、どうしても、言わなきゃいけないの」

アズマは悩んだ、勝手に面会させれば今度こそ城から追い出されるかもしれない。

だが、目の前の少女の事を思う。

明日、別の婚約者が決まれば、もうフェイと会うことも無いだろう。

これが最後かもしれないのだ。

「セシリア様、少しだけですよ」

セラは唇を引き結んで、小さく頷いた。

アズマの後ろについて、セラはゆっくりと階段を上がる。

牢は四階建てである領邸の五階、屋根裏部屋とも言える場所にあるのだ。

セラはそこに足を踏み入れた事など無い。

一步、一步、未知の階段を登る度、セラの心に不安が積もっていった。

できれば、笑顔で言いたい

『さよなら』の言葉を思うたびに泣き出しそうになる。

しかし、言わなくてはならなかった。フェイを自由にしなくてはならない。

そうしなくては、フェイの身も危険だと言う事がようやく分かったのだ。

私の婚約者になんかあったから、フェイは……

母親の命を奪った次は、フェイの自由も奪い、さらにはその命を危険に晒してしまっていたのだ。

無知な自分に唇をかみ締め、こぼれそうになる涙を、まぶたの裏でこらえる。

やがて、階段は終りを迎え、無骨な扉がゆっくりと開かれた。

「　　っ！」

まず鼻をついたのは酷い悪臭だった。

その向こうでボロ布に包まっている黒い影が動く。

光の加減で顔が影になっているが、見間違えようが無かった。

「……フェイ」

「セラか？」

フェイは驚き、額にやっていた手を下げると起き上がった。

月明かりを浴びたフェイの顔は腫れており、体もボロボロだった。この汚い部屋で10日間も閉じ込められた事を思うと、言おうとした『ごめんなさい』が鉛のように重くなり、その重さに怖気づき

そうになった。

一方、フェイも何を言っているかわからなかった。
ひたすら泣いていたと聞いたとおり、セラの泣き腫らした目や蒼
白な顔が、心に刺さったからだ。

「では、しばらくしたら迎えに上がります」

アズマはうやうやしく一礼すると、しずかに扉を閉め、律儀に階
段を下りていった。

しかし、二人きりになっても、セラは口を開けなかった。なにか
言葉を紡げば、そこで泣いてしまいそうな気がしたからだ。

もう少し、もう少しすれば、きっと言えると自分に言い聞かせる。

「まだ、起きてたのか？」

先に口を開いたのはフェイだった。

その変わらぬ優しく低い声に、セラは口を引き結んだまま、小さ
く頷く。

「眠れないのか？」

この状況で、こんな状況でも心配してくれるのだ。

好きになってよかった

セラはその気持ちを胸いっぱい吸い込んだ。
そして、ゆっくりと頭を下げる。

「ごめんなさい」

「　　は？」

「明日、私の婚約者が決まるの」

「セラ？」

「だから、無かったことにするから。私とフェイは会わなかった。そしたらフェイは自由だから、ここから出られるから、だから……」

じわりと浮かぶ涙を、目を閉じて堪え、精一杯の笑顔を作る。

「さよなら」

月の光を浴び、無理に笑う少女の前に、フェイは言葉を失った。素直に『さよなら』と言い返せば、きっと自由になれるのだ。だが、その言葉の意味はセラを捨てるという事なのだ。フェイは何がなんだか分からなくなり、月を見上げた。

『眠れないの？』

ふと、声が蘇った。

女性の声、懐かしい声、とても落ち着く声、温かい声。その後に続く、額の温かなぬくもり。

ああ、あれは本当に俺の過去だったんだ

月の光で蘇った記憶をなぞるように、フェイは額をひとなでする。そして、目をつぶって震えながら笑っているセラに近づいた。綺麗な寝間着を汚さぬよう、身をかがめる。

そして、月明かりに白い額へ、そっとキスをした。

パチリ

セラの目が開かれ、離れていくフェイの顔を凝視する。

「おやすみ」

フェイの言葉に、セラはようやく何が起こったのか理解した。
蒼白だった顔は目に見えて赤く染まる。

しかしそれに終わらず、今度は真っ青になった。

「お、おい、セラ？」

セラは真っ青な顔を歪めてうつむき、屈み、床に手をつき、

「おええええええっ」

「吐くかよっ！」

セラは盛大に吐いた。

この騒ぎを聞きつけたアズマがセラを連れ去ることになり、フェイは傷つきながらもゲロの清掃に当たった。

アズマはセラの背中を擦りながら、ゆっくりと階段を下りる。

「おそらく、あの部屋の悪臭にやられたのでしょう。さ、足元に気をつけてください」

アズマはそう言ったが、セラは納得しなかった。

それも理由の一つかも知れないが、一番大きな理由はそれではなかった。

確かに額にキスをされたと分かった瞬間は、本当に嬉しかったのだ。心が震えるほどだ。

しかし、その直後、もう一人の自分が囁いた。

『お前に、その資格は無い』

その声が聞こえた瞬間、体の奥底から途方も無い不快感がこみ上げたのだ。

最後、だったのに

みつともない姿を晒した事が、たまらなく恥ずかしかった。

でも、『さよなら』を言えた

あのキスはフェイの『さよなら』だったのだ。最後のプレゼントだったのだ。

もういい、もう十分だ。早く部屋に帰って、思い切り泣こう。

セラはまだぬくもりの残る額を、そつとなでた。

（21）準備はいいか

「準備はいいか、コノハ」

エルカはライトブラウンのシャツとダークブラウンのサーコート
を身に付け、コノハの着替が終わるのを今か今かと待っている。そ
の風格はどこからどう見ても貴族であり、普段のナンパな雰囲気は
微塵も無かった。

一方、コノハもエルカーナの一室にこもり、ドレスの着替えや化
粧をルナに施してもらっていた。

「ゴメン、もうちょっとかかりそうなの」

コノハの代わりにルナが部屋から顔だけを出し、どことなくウキ
ウキとした口調で言う。

「今日は遊びじゃない、目立たない感じで頼むよ」

「わかってるけど、ちよつとは、ね。あと十分くらいだから」

「分かった、パーティは十八時に始まるんだ。なんとか早めに行っ
て経路を確認しておきたい」

「はいはい」

気の無い返事をする、ルナはボタンと扉を閉めてしまった。

エルカは小さく息を吐くと、監視の配置図にもう一度目を通す。
それはクロフが今朝持ってきた情報を図面化したものだ。

その時の事を思い出すと、ますます失敗は出来ないと思った。ク
ロフは危険を顧みず情報を提供したばかりか、帰りがけ『俺も参加
できないか』とエルカに聞いてきたのである。

当然侵入できる人員に空きは無く、無理だと断ったのだがクロフ

はしつこかった。

『クロフ、君が衛視をクビになったらフェイがどれだけ悲しむか、分かるか？』

その言葉をもつて、ようやくクロフは諦めたのだ。

これで失敗すれば、どれだけ恨まれるか分かったものではない。

『頼む』と、言い残してクロフは衛視の仕事に戻った。重いものを頼まれたものだとしてエルカは苦笑する。

そもそも、このパーティの発案者はエルカ自身なのだ。妹の恋心をちよつと煽つてみるつもりが、大切なパートナーを危険に晒してしまっている。

『自分でやった事の責任は自分で取れ、それがこの町のルールだ』

そうフェイに言ったのもエルカだ。その責任を、今こそ取らなくてはならないのである。

エルカはギュツと手を握ると、もう一度、衛視の配置図に目を通した。

「お・ま・た・せ」

約束の十分を少し過ぎた頃、ようやくルナが応接間に戻ってきた。これ以上無いほどの上機嫌だ。

「じゃーん！」

ルナは手を引いてコノハを部屋から引きずり出す。

恥ずかしそうに俯くコノハは、まるで見違えてしまっていた。

いつもは邪魔にならないよう後ろで縛ってある真っ黒な髪をバサリと落とし、髪先を幾つもの金管で束ねてある。その長さは胸元まであり、それだけでだいぶ印象が違う。

ドレスは目立たないようオーソドックスなダークパープルのフィットドレスだが、着る人が着れば妖艶なドレスになるらしい。大胆に切れ目の入れているスカートのスリットが印象的だ。

「ほら、コノハ、顔上げて。化粧が会心の出来なんだから。ほらエルカ、見てよ」

ルナに促されて、コノハはゆっくりと顔を上げた。

エルカは一瞬、本当に別人かと思った。しかし、確かにコノハだ。日に焼けて荒れていた肌は、見違えるようなきめ細かな小麦色の肌に変容しており、しかし、化粧を意識させない絶妙な色合いだ。口には朱が、頬には薄いチークが、ややきつめに見られる目元には、柔らかな色のシャドウが施されている。

それ以上の細かな化粧については、エルカですら何が施してあるのかわからなかった。分かったのは欠点だった顔のきつい部分がいっさい無くなっており、それが別人だと思ってしまった原因だと気付く。

「たしかに、とても綺麗だと思うよ。ただ」

エルカが『ただ』と続けたので、二人は何を言われるかと、それぞれ不安な顔を見せる。

「ただ、今のコノハをフェイが見たら……見惚れて動けなくなるな」

「あははっ。うん、そうだよね！」

ルナは合格がもらえたことに安堵して笑い、エルカはどんな時でもエルカだなあと妙に納得した。

一方、コノハは笑わなかった。それどころか化粧を施されてから、一切口を開いていない。強張った顔で、手はギリギリと握り締められている。

緊張しているのだ。

この違和感のある格好で貴族達と談笑し、フェイを救い出さねばならない。それを考えると、今さらながらひざが震えた。

第一、丸腰で行かなければいけないのが落ち着かない。せめて、棒切れの一本でも持っていききたいのだ。

「じゃあ、エルカ、コノハ、気をつけてね。くれぐれも無茶はしないで」

「ああ、行ってくるよ。コノハ、不安そうだが大丈夫か？」

しかし時間は、無情にもやって来る。

大丈夫、絶対に上手くいく！

コノハは覚悟を決め、小さく、ゆつくりと頷いた。

ゼクス領は鉦都と呼ばれている。

かつてバイスレイト以外にも金、銀、鉄等が採掘できた為、そう呼ばれるようになった。しかし、今では金と銀は既に掘り尽くされ、

商業都市と云う位置付けに変わったのだ。

ただ、巨道バイスアルムを通した商業利益は莫大であり、その領主公女のお披露目パーティとなると、シュバート国全体でも有数の外交場となる。

しかも、来客に將軍や王子も参加すると聞かされたラドクリフ邸の侍女、執事、調理人達は色めきたっていた。

「何だこの肉はっ！ 王都から最上級のものを頼んだはずだろっ！」
「すっ、すみません。昨日から王都の仕入れ馬車が来なくて、一応、ここらでは最高の肉なんですが……」

「ふざけるなっ！ 何だこの肉の色、まるでラマみたいじゃねーか！ もういい、お前、市場でツヴァイ産の最上級エビと魚を買い占めて来い！」

「ええっ！？ 今からですかっ！？」

「セシリア公女殿下に恥かかせるつもりか？ つべこべ言わずにさっさと行けっ！」

特に調理場は鬼気迫っていた。

その様子をこっそりと見ていたガラムは、戦場にいた頃には無い不安に襲われる。

しかし、失敗する訳には行かない。ゼクス領の、いや、セシリア様の未来がかかっているのだ

今朝から急に協力的になってくれた公女を思い出し、ガラムは氣を引き締めた。ようやく覚悟を決めたのだろう。

泣いても笑っても、一時間後には招待客が大挙してくるのだ。その前にやれる事はやっておかねばならない。

「まずは、セシリア様の様子を見てくるか」

ガラムは調理場を後にし、中庭にやって来た。

直径百キュピトのバイスレイトでできた巨大舞台^{ステージ}があり、それを一キュピトの水路が円を描くように覆い、さらにその周りを樹木や花々が覆っている。

ゼクス領自慢の『満月の庭園』である。

舞台の形が完全な円であり、満月の夜に最も美しくバイスレイトが輝く為そう呼ばれている。しかし、ここにセラはいなかった。

ガラムはその足で牢屋にも行ったが、看守役のアズマも知らない
と首を振る。

「セシリア様……いつたいどこに」

と、そこまで考え、肝心のセラの部屋を確認していない事に気がついた。時間の猶予は無い。ガラムは大慌てでセラの部屋に向かった。

そこには案の定、人の気配がある。

「ヒック ヒック 」

まだ泣いておられるのか

ガラムは扉をノックし、返事が無いので、そのまま中へと入った。侍女たちは公女を精一杯大人に見せたかったのだろう。深紅と黒を基調としたドレスを着たセラが、真っ白な帽子を胸に震えていた。その帽子には見覚えがある。最後に脱走した際、フェイに贈られたものだ。

「……セシリア様、もう、お時間です」

セラは俯いたまま、ゆっくりと立ち上がった。その動きには生気がまるで感じられない。

「その帽子はお預かりしましょう。もし御辛いのでしたら、私めが処分しますが？」

「駄目！ これだけは……これだけは、誰にも、渡さない」

鏡台の引出しを開けると、帽子を生き物のように大切にしまう。そして、ようやく顔を上げたセラの顔は　まるで死者のようだった。

白粉をかるく振った顔は、その必要が無いほど真っ白であり、目はドレスに負けないほど赤い。

長い金髪は、きつちりと頭上で結っており、確かにいつもより大人に見える。しかし、ガラムはいつものセラの方が、何倍も美しいと感じた。

無論、忠実な臣下はそんな感想はおくびにも出さない。

「さきほど特注の靴が届きました。早く慣らさねばなりません。さ、参りましょう」

「う……」

「セシリア様？」

「うおええええええっ」

過激な掛け声と共にセラは嘔吐した。ガラムは急いで布巾を用意すると、汚れたドレスや口元を拭く。

幸い、ほとんど胃液しか出ていないため、ドレスの着替えだけは免れた。

「セシリア様、どうなされました？　緊張しておいでですか？」

「昨夜から、ずっと気持ち悪いの……大丈夫、なんでもない」

セラはそのまま、ふらふらと着付け役が待つ部屋へと歩いていった。

その様子を見て、ガラムの心中にはある予感が生まれたのだ。

セシリア様 まさかつ！？

しかし、その疑問はしばらく保留となる。なぜなら、セラと入れ違いに衛視の一人が走りこんできたのだ。

「ガラム様、急いで応接間にお戻りくださいっ！」

「む、どうした？」

「ゴッ、ゴリネル將軍が、到着されました」

「ちっ！ 予定より早いではないか」

ガラムは忌々しげに舌打ちすると、大急ぎで応接間へと駆け出した。

「久しぶりだな、ラドクリフ公」

「ご壮健とお見受けします。ゴリネル將軍」

「貴公も相変わらず頑健よな。とても五十を過ぎたようには見えんよ」

ゴリネルは太った腹をゆすって笑った。

どちらが將軍かと他国の人に聞けば、十人中十人がラドクリフ公を指すだろう。それほど、ゴリネルは將軍としての迫力に欠けていた。

目鼻立ち丸みを帯びており、赤みがかった髪はやや薄く前頭部

は顕著だ。それを隠すように横の髪を前頭部に回してセットしてある。そして、ラドクリフ公とは対照的な脂ぎった体軀、どれもが將軍としての威厳に欠けていた。

しかし、世襲制の貴族達とは違い、將軍は勲功のあった者が就任する。ゴリネルは盜賊団ゴルゴンを何度も退却せしめ、將軍にのし上がった歴戦の將軍なのである。

將軍は国王に次ぐ権威があり、公爵より位が上だ。

九公爵の一人とはいえ、無礼は許されない。

「ところで、ゴリネル將軍。再三ゴルゴン討伐の要請を出したはずですが、現在はどうのように」

「ラドクリフ公、今日はそのような無粋な話をしに来たのではない」

「しかし、ゴルゴン討伐はシュバート国の」

「ああ、そうそう！ 来る途中、妙な噂を聞いたのだが、説明していただけるかな」

「……噂、ですと？ なんの噂ですか」

ラドクリフ公は表情を変えずに聞いた。しかし、聞くまでも無い。街中で騒がれている噂と云えばたった一つだ。

ゴリネルは勿体つけるように、あごひげをひと擦りして、ニヤリと唇の端を歪めた。

「黒猫だよ」

（２２）満月の庭園

満月の庭園は、そのステージのいたるところに花々が飾られ、パーティーの会場として一層豪華さを増していた。

なんて贅沢な

その庭園をコノハは剣呑な目で睨んでいた。
ポンと肩に手が置かれる。横を見なくても手の大きさを誰なのかすぐに分かった。婚約者役のエル力である。

「コノハ、そんな目で見ないでくれ。貴族は、特に九公爵は代償も大きいんだよ」

「分かっている。政治の道具になるなんて、いくら贅沢な暮らしが出来たってあたしはごめんだね」

「あたし、じゃなくて、この場では私と言って欲しいな」

空はまだ明るく、日もそろそろ赤くなろうかと迷う時間だが、コノハとエル力は既に満月の庭園へ侵入していた。

庭園から邸内への通路も確認を終了し、警備の配置もクロフの情報そのままだ。

ただ、衛視以外にも忙しそうに働く侍女や執事達が予想より多い。これは注意しなくてはならないだろう。

「大丈夫、計画は今のところ順調だ。パーティーが始まってセシリアに皆の注目が集まった時、行動を開始する」

「近衛兵のアズマとか言う男が、五階の牢の鍵を持ってるのよね」

「そうだ。一応策は仕掛けてあるが、万一の時は近衛兵から鍵を強奪する。一番危険なポイントはここだろう。詰め所の位置は把握し

ているな？」

コノハはゆつくりと頷き、もう一度満月の庭園を見回す。

その漆黒の瞳は、冷静な遂行者としての眼光があった。その視線に満足したエルカも周囲をさりげなく見回す。

ステージを囲う水路の外側には、ここが邸内だと忘れそうになる程の樹木や花々が、静かに風にそよがれている。あそこは万一の時に身を隠す場所になるだろう。

一方、ステージ内の所々に設置されたテーブルには、色鮮やかなオードブルが運ばれ始めたようだ。料理を運ぶ侍女達に混じり、到着した貴族達の姿もちらほらと見かけることが出来た。

ふと、貴族の一人と目が合う。

見覚えのあるその貴族は微笑を浮かべ、エルカの方へとやって来た。

「やあ、エルカーノ」

「お久しぶりです。ようこそいらっしやいました、リーガン公子殿下」

「ああ、堅苦しいのは無しにしよう。僕らは同位イブンだろ」

「そう言ってもらえると肩の荷が下りるよ。リーガン」

「それより、そちらの美女は？」

話を振られたコノハは、思いつきり固まった。

「ああ、こちらは私の婚約者フィアンセのコノハです。コノハ、こちらはツヴァイ領の公子、リーガン」

「お初にお目にかかります」

コノハは必死に笑顔を作り、ぎこちない会釈を試みせた。

リーガンは海都ツヴァイの公子らしく真っ黒に日焼けしており、それゆえ真っ白な歯が印象的な好青年だ。その眩しいばかりの歯をニツと見せ、人懐こく笑う。

「エルカーノ、君は果報者だな。こんな美人はツヴァイにだって見たことが無いぞ！」

「ありがとう。だが今夜手を出すのは、我が妹だけにしてもらいたいな」

「あつはつは、分かっているさ。君の妹にはあつた事が無いが、それは美しいとの噂をかねがね聞いている。実に楽しみだよ」

「噂は噂、過度な期待は禁物だよ」

「……ふむ、噂と言えば」

リーガンの笑みが少し陰る。

「君の妹だが、既に婚約者がいると噂を聞いたよ。一体どういうことだ？」

「それは……」

エルカは失言だったと顔を少しだけしかめた。

「そんな事、根も葉もない噂に過ぎません。ご安心を、リーガン様」

コノハが薄く笑って答える、ただし目が笑っていない。

リーガンはゾクリと体を震わせると、僅かに身を引いた。

「そ、そうか、まあ、婚約者を決めるパーティーで聞くことでは無かったな。じゃあ、僕はこれで失礼するよ」

そう言ってリーガンは足早に去っていった。

「……まずかった？」

「いや、とても助かったよ。感謝する」

そう言つてエルカは少し笑い、真つ赤な空を見上げた。

さあ、始まるぞ

ガラムが息を整えながら応接室に入った時、そこには不機嫌を絵に書いたようなゴリネルがいた。

遅かったか

ガラムはさりげなく領主の後方へ控え、有事に備える。

「しかし、わしは確かに聞いたぞっ！ 一人や二人ではない。何人もだっ！ しかも、リア＝フェイロンを目撃した者までいたのだぞっ！」

「そう言われましても、そのような輩は存じませんな」

「いいのか、これを見ても同じことが言えるのかっ？」

ゴリネルは唾を吐き散らし、懷から一枚の紙を取り出した。先週、ガラムらが総力をあげて回収したはずのリア＝フェイロンの張り紙だった。

やはり、流出していたか

ガラムは内心、申し訳ない気持ちで一杯になったが、領主は眉一

つかささない。

「ああ、その張り紙ですか。もうしわけない。セシリアは妄想癖があつて、時折、そんな落書きを配布することがありましてな」

「バカなっ！」

「私も、娘の妄想癖には頭が痛めておつたところです。しかし、我が娘が気に入らぬなら、このようなパーティに参加して頂くのも申し訳ない。どれ、邸内で別席を設けましょうか？」

「……もういい」

ゴリネルは足を踏み鳴らして、応接間を出て行つた。

「見事です、領主公」

「ふんっ、あやつの魂胆など透けて見えるわ。弱みを握り、このゼクス領の利権を奪うことに執着しておるだけだ。全く吐き気がする」
「はて、吐き気と言えば っ！ 領主公、ひとつ気になることがございます」

「なんだ？」

「セシリア様が、その いえ、まだ確かめた訳ではないのですが、その……」

「何だと言つのだ、ガラム。いま時間が無い事は、お前が一番分かつているだろう」

ガラムは深呼吸を一つして、敬愛する領主にその推察を語つた。

「セシリア様は、身籠つておいではないかと 」

約束の十八時になっても、まだ領主とセラは満月の庭園に現れない。

お陰でエルカとコノハの二人は、訪れる貴族達に延々と挨拶を繰り返すことになった。

「こちらは、美都アハトのコーディリア公子殿下。コーディリア公子殿下、こちらはコノハ、私の婚約者です」

「お初にお目にかかります。コーディリアです」

「こ、こちらこそ」

公子、と言うからには男なのだろう。声もずいぶん低い。しかし、着ている服は見事に女物のドレスであり、顔の造形もコノハが見惚れるほど美しい。女性と言われれば絶対に信じていただろう。

美都アハト領、どんなところなんだろう？

物凄く小さな領だと聞いた事があるが、楽団や劇団の九割はアハト領に本拠がある。コノハは純粹に興味が湧いた。

「あの、コーディリア公子殿下、アハト領はどのような領なんでしょうか？」

「おお、良くぞ聞いてくれましたっ！ では、我が愛すべき故郷、アハトの物語をお聞かせしましょう。我がアハトは、この剣の国^{シユハート}が建国した当初は、もちろん存在していませんでした。しかし、二百年前、隣国ウオランとの戦争において……」

しまったあああああ！

押してはいけないスイッチを押したコノハは、「はあ」と頷きながら、アハト領の壮大なる起源から工芸品の種類、美術の歴史、

アハト領出身の伝説の吟遊詩人のサーガまで、延々と聞くことになった。

そんなコノハをエルカはさりげなく見捨て、食料を補給することにした。

『腹が減っては猫にも勝てぬ』である。

「さて、何があるか……ん、魚が多いな」

好物であるリブステーキが無いばかりか、肉料理がほとんど無い。久しぶりに王都産の最高級リブステーキを食べられるかと期待していただけに、エルカは少し消沈した。

しかたなく、ツヴァイ産の魚貝バター焼きを皿に盛り、レモンを絞る。

バターの風味が香ばしく、これはこれで美味そうだった。

それにしても、これだけ露骨に肉類が無いとは、一体……

思案を遮るように、ポンと肩を叩かれる。

「や、エルカーノ」

「ああ、リーガンか。父上もセシリアも遅れてしまっているようで、申し訳ない」

リーガンは「いやいや」と手で制し、塩釜焼きにされた白身魚の身をほぐし、皿に盛った。

「そう言えば、今日はエドガー王子も来る予定なんだが、エルカは見えないか？」

「いえ、まだ見てませんが……確かに遅いですね」

「そうか、いや、あの気まぐれな王子だ、ゼクス領の商店街で道草

を食っているのかもしれないな」

「はは、確かに我が領の巨道商店街は他の領に無い活気がありますから。それに、王子に婚約はまだ早いでしょうしね」

「あつはつは、確かに女性より土産に目がいく年頃だろう。おっと、向こうでケント伯子を待たせているのでね、失礼するよ」

慌しくリーガンが去った後も、エルカはテーブルを離れず思案にふけた。

王都産の食材が無い上に王子の遅延、王都との街道に何かあったか？

さりとて、今はフエイの救出こそ急務である。関係の無い余計な詮索は、任務の^{クエスト}実行に支障をきたすだろう。

では、クエスト完遂のため、今出来る事は何か？

すなわちそれは、食料の補給である。

エルカは一人納得し、魚貝のバター焼きにフォークを付き立てた。

領邸と庭園の間にある休憩所に、セラはじっと待機していた。

領主からの挨拶があった後、すぐに会場へ出られるようここで待て。父親である領主にそう指示されたからだ。

休憩所と言っても大理石でできた堅固かつ豪華な小屋である。ただし、大理石ゆえその表面は冷たく無表情であり、セラの心をますます消沈させた。

「セラ、少し、話がある」

セラが目を向けると、父親の鬼気迫った顔があった。

その脇に似たような表情のガラムもいる。

また、良くない事かな

暗鬱^{あんうつ}たる気持ちで、セラは小さく頷いた。

「セラ、昨夜から気持ちが悪いそうだな」

「はい」

「何度も吐いているとも聞いたぞ、本当か？」

「……はい、大事なときに申し訳ありません」

カタカタカタカタカタ

テーブルが鳴っていた。

領主の両拳が硬く震えるにあわせ、休憩所に備え付けられているテーブルが、呼応するように振動しているのだ。顔色は夕日などに負けないくらい真っ赤である。

「では、単刀直入に聞こう……セラ、あのリア＝フェイロンと、やましいことはしていないか？」

「やましい、こと？」

聞き返されて領主はゲフンと一つ咳払いをする。

視線を小窓から見える夕日に向け、ガラムに向け、セラに戻したところでゴクリと唾を飲み込んだ。

しかし、迷っている時間など無い。聞くしかないのだ。

最後に心で三つ数えた後、意を決した父は決死の言葉を放つ。

「子供が、できたのではないか？」

ガタンッ

セラは雷に打たれたように立ち上がり、その額に手を当てた。心当たりがあるような娘の挙動に、領主の真っ赤だった顔が一気に青ざめた。

一方、セラは昨日の夜の事を思い出していた。

あの時の、キスで？

「セラッ……まさかつ……まさかつ……」

「私と　フェイの　子供？」

「違うと言ってくれ、セラアアッ！」

額に当てていた手を、お腹に当てる。

「　　うれしい」

その言葉で領主は、キレた。

（23）があああああっ！

があああああっ！

その轟音をコノハは雷が落ちたのだと思った。しかも、相当近くにだ。

アハト領の公子コーディリアも、佳境に入った話をバツタリと止め「キャア」とその場にしゃがみ込む。

原因不明の轟音で、パーティ会場は騒然となった。

「コーディリア様、お話の途中申し訳ありませんが、私、何があつたか見てきます」

「ああ、コノハさん。危険ですよ」

しかし、コノハはこれ幸いとばかりにその場を早足で離れた。すると、エルカもすぐ後ろにぴたりと付いて来る。

「あの音は何だったの？」

「分からない。落雷にしては光もないし、雷雲だつてない　不確定要素は確かめるしかない」

がああああああっ！

凄まじい轟音が再び響きわたる。先ほどと同じ方角からだった。二人は身をすくめ、しかし、その目は音源を探る。

すると、雷鳴の代わりに、男の声が聞こえてきた。

「領主公っ！　どうか落ち着いてくださいっ！」

よく響く、低く威厳のある声。それはエルカには馴染みのある声だった。

「ガラム？……と云う事は、さっきのは父上かつ！」

「は？ 父上？ エルカ、あなた何をバカなこと」

「来れば分かる！」

エルカは歩を進め、茂みを一息に抜けると大理石で出来た豪華な休憩所が見えた。

白い壁に阻まれて見えないが、そこから凄まじい気配がする。轟音はそこから発生していたのだ。

「領主公、まずは開会の挨拶をつ ゴフッ」

「あんの盛りのついた黒猫めがあああああつ！！」

間違いない、あの轟音は、人の声だったのだ。

二人は恐る恐る、現場へと近づく。

「黒猫つて、フェイのこと？」

「たぶん、そうだ。父上が、完全にキレている……こんなことは、初めてだ」

ブルリとエルカの体が震えた。

休憩所まであと数歩と云うところでエルカの足は止まり、これ以上近づくなとコノハに目で合図を送る。コノハも無言で頷き、僅かに身を低くした。

「領主公っ！ 各国の方々が待ちかねておりますっ！ ここは堪えてっ」

「セラを孕^{はら}まされて黙っ^{はら}てい^{はら}う^{はら}のかっ！？ ふざけるなああ

あっ！」

孕ます？

エルカとコノハはお互いを見て、ゆっくりと五秒間見詰め合う。

四……三……二……一

クワツ

コノハの顔に陰相が一気に浮かび上がった。化粧の下からである。そして、何も言わずにグルリと向きを変え、パーティ会場へとゆっくりと歩き去った。

やがて、コノハの姿が、エルカの視界から外れる。そこで初めて、エルカは呼吸する事ができた。

体からあらゆる力が抜け、ガタガタと震えだす。

フェ、フェイ、お前、なんて事をおおっ！

どうすればフェイが生き残れるのか、もはや検討もつかない。

どんな状態でも対応できる計画を立てたはずが、フェイの災厄を呼ぶ体質は桁外れだったのだ。まるで墨汁につけた綿のように、そこらじゅうの災厄を吸い上げているとは思えない。

だが、一つ心に引っかけた事がある。あのフェイが本当にセラに手を出すだろうか、という事だ。どうにも想像できないのだ。

しかし、まずはコノハを説得せねば

エルカは氣力をふり絞って立ち上がると、パーティ会場へフラフ

ラと走りだした。

コノハはすぐに見つかった。給仕の侍女に何か頼んでいるらしい。

「ナイフを……下さい」

「はい、ナイフですね。どのようなナイフがよろしいでしょうか？」

「ソーセージを……」

「はい？」

「ソーセージを……ザクツ……と、切れるのを……お願い」

だめだ、コノハは声の届かない世界に行ってしまった

脂汗を浮かべたエルカは説得をあきらめ、作戦を絶対に使いたくなかった最後の一つに切替える。

何故、使いたくなかったか、それは作戦などと呼べるものではないからだ。

すなわち、ロックンロール強行突破である。

「生きているよ、フェイ」

エルカは泣きそうになりながら、一直線にフェイのいる牢へと駆け出した。

「領……主……公……」

ドンと地響きを立て、ガラムは轟沈した。アゴへの一撃が止めになったのだ。

障害物が動かなくなった瞬間、獣は一際大きく叫び、一箇所を指して爆走を始めた。もちろん、目指すはフェイのいる牢である。

領主公が居なくなり、再び静けさを取り戻した大理石の休憩所に、一つだけ動く影があった。

黒と深紅のドレスを身に纏った少女である。

少女は小さく頷くと、父親とは違う道を歩き出す。その目指す先にある場所は、貴族たちの集う満月の庭園であった。

その少女の目は、確信に満ち溢れていた。

「　　ありがとう」

「い、いえ」

コノハの雰囲気には怯えた侍女は、早々に踵を返すと早足で去った。残されたコノハの手には、鋭く光る銀のナイフが一本。そして、『切る時』に『抑える』ための銀のフォークが一本、しっかりと握られている。

キン

コノハは、その二つを静かに打ち合わせた。

「うふふふふ」

何を想像したのか壮絶な笑みを浮かべ、そして音も無く走り出した。その目は周りなど見えておらず、ただ建物の一角のみを見つめ

ていた。

だから、すぐ脇にいた少女の存在にも気が付く事無く、コノハは庭園を走り去ったのだ。

セラは一人、庭園の一角に設置された高台へ、ゆっくりと登る。
やがて、その姿に目を留めた貴族たちが集まり出した。

「あれが公女か……たしかに、美しいと言えば美しいが……」

「なんだ、十六ではなかったのか？」

「ゴルゴンの呪いらしいぞ」

「まあ可憐なこと……でも、あの衣装は頂けないわね。もっと……」

ザワザワザワザワ

「みなさん」

セラが口を開いた途端、ざわめきは雨が上がるように止んだ。

「本日は私のために御集まり頂き、ありがとうございます。ゼクス領を代表して、御礼申し上げます」

外見からは考えられないほど凜とした声であり、一同はその声に聞き入った。

「みなさんに、重大なお知らせがあります」

セラはお腹の前で手を組み合わせると、うつすらと微笑を浮かべたのだ。

(23) がああああっ！(後書き)

今回もフェイは登場しませんでした。

フェイ好きの皆様、申し訳ありません。

次回はフェイが登場します。

フェイ好きの皆様、申し訳ありません。

（24）親衛隊とは

親衛隊とは、簡単に言えば邸内の警備をする衛視のことである。衛視の中でも特に実績があり、かつ人格者が親衛隊に選抜される。

彼らは通常の衛視より高額な給与がもらえる代わりに、週五日を邸内で寝泊りしていた。その寝所たる詰め所も邸内の一角に存在しており、常に五、六人は詰め所に駐留している。

しかし、今現在、詰め所に居座っているのはアズマ一人だけだった。他の親衛隊が全て満月の庭園の警備に当たっているせいだ。

だが、たった一人で詰め所に留守番をしているアズマは、何故か満面の笑顔であった。なぜなら、可愛らしいと評判の侍女アイラが、アズマのためにパーティの食事をこっそりと持って来てくれたのだ。今、彼の前には滅多にお目にかかれないようなご馳走が、湯気をたて所狭しと並んでいる。

「いやあ、アイラちゃん、いい子だよなあ。ひょっとして俺に気があったりして……………おっと、冷めないうちに頂くか」

まだ温かなリブステーキにアイラが手作りしたというオニオンソースをたっぷりかけ、一気にかぶりついた。

「うまいっ！」

続いてマッシュポテトの山に突撃しようとして……………額からマッシュポテトの山に突っ込んだ。

バンッ！

音をたて詰め所の扉が開け放たれる。

入り口で息を切っているのはエル力だった。

詰め所の中からは誰も、何も反応が無い。美味そうな匂いが漂うだけである。

「よし、ここは計画どおりか」

頷いたエル力は、マッシュポテトの山に頭を突っ込んで、それでも眠りこけているアズマの懷から、牢の鍵を易々と拝借した。

「アイラは上手くやったようだ。三日で落としたかいがあつたな」

ようやく計画通りになった事に満足し、エル力は詰め所を後にする。

ここにルナがいれば、エル力はどこまでもエル力だったと感想を抱いた事だろう。

カチャツカチャツ　ガチャン！

慌しい金属音でフェイは目を覚ました。

ボロ布のような布団を押し上げ、物音を見る。

扉を開けようとしている音だとは分かったが、アズマが食事を持ってきたにしては酷く焦っているようだ。

バンッ

突然、弾けるように扉が開かれた。

そこに現れた顔を見て、フェイは我が目を疑う。何度も会いたいと願っていた顔があつたからである。思わず目が潤んだ。

「エッ、エルカーツ！」

しかし、フェイの呼び声に、エルカは必死の形相で答えた。

「いそげっフェイツ！ 死ぬぞっ！」

切羽詰った顔と声 悲しいかな不幸慣れしてしまったフェイには、それだけで何となく事態を理解してしまった。

エルカはフェイが拘束されてないと確認するや、すぐに階段を降り始める。その焦り様は並大抵のモノではない、あのエルカがだ。本当にただ事ではないのだと、フェイも文字通り牢から飛び出した。三段、四段と飛ばしながら階段を駆け下り、エルカとほぼ同時に階下に着く。

右の通路を見る 何もない。

左の通路を見る 獣がいた。

があああああっ！！

獲物を見つけた領主は理性のカケラも無い叫び声をあげると、猛獣そのものの動きで襲い掛かってくる。

「のわあああああっ！」

フェイ達は宙を掻き、半泣きになりながら残された右の道へ逃げた。

しかし、残る道の先に、ゆらりと細い影が現れる。

影は濃紫のドレスに身を包んでいるが、もう十年近い付き合いであるフェイは、その身のこなしやシルエツトから、それが誰であるかすぐに理解した。

「コノハッ！ 助けにきてくれたのか」

フェイは安堵の声を吐き、走り寄る。

「よせっ！ フェイツ！ それはもう人間じゃないっ！」

鬼気迫った制止の声に、フェイはコノハの顔を見てしまった。

悪魔だった。

キンッ

悪魔の手がブレて、光る何かがフェイの下腹部を狙って射出される。

フェイは『く』の字になって、間一髪でソレを避けた。

ガギッ

後方で領主だったモノが、ソレを歯で受け止めた。

ソレの正体は重そうな銀のフォークだ。しかし、獣はソレを苦も無くバキリと噛み砕き、ゴリゴリと咀嚼そしゃくすると、そのまま飲み込む。人外魔境もいいところだった。

前方から第一射を外したコノハが、ギラギラと光るナイフに舌を
這わせ、無言で近づく。確かに、ソレはもう人間ではない。

フェイは完全に戦意を喪失して、その場に膝をつく。

「エルカ、俺、なんで生まれたんだろう」

「あきらめるなっ！　いいか、大切な質問がある」

「何を、こんな時に……」

「これが命運を決めるんだっ！　イエスカノーで即答せよっ！　沈
黙は許さんっ！」

「イ、イエツサー」

「よし！」

エルカはフェイの目を見て、真剣に聞いた。

「お前は、童貞か！？」

「　　は？」

「いいから答えろ！」

「イ　イエス」

「生きろっ！　リアッフェイロン！」

エルカはフェイの襟元とズボンを掴んで担ぎ上げると、開いてい
る窓から外に向かってブン投げた。

ちなみに、ここは四階である。

「ノオオオオオッ！！」

フェイは空飛ぶ亀のようにグルグルと回りながら落下していった。
キラキラと光る涙が綺麗に舞う。

ドボーン

遙か下方で水音がした。

暗がりで見えないが、満月の庭園を囲む水路のための貯水池が、この下にあつたのだ。ここで生まれ育つたエル力ならではの荒技である。

フェイがまだ無事だと断定した獣と悪魔は、我先にと階下へ駆けていく。つまり、危機はまだ終わつたわけではないのだ。しかし、

後は、お前の悪運次第だ。フェイ

エル力は脂汗を拭い、静かにその場にへたり込んだのだ。

歪んだ白い光が見える。

それが水中から見た月だと気が付いたのは、一度水を飲み込んだ後だ。慌てて水を蹴って、フェイは水面を目指す。

「げ、げほっ……くそっ、体中が痛え」

水面に上がって初めて、水面に叩きつけられた痛みを実感できた。が、それでも止まる事は許されない。ヤツラはすぐに来るのだ。

最後に泳いだのはいつだっけ

思い出すように水を掻き、足が地面に触れるや、氣力を振り絞って水中を走った。思い通りに進めなくて何度となくつんのめってしまうが、どうにか池から上がる。

水を吸った服がひどく重かったが、服を脱いでいる時間も惜しい。

仕方なく裾だけ軽く握って絞ると、それでも水が滝のように流れた。ひどく惨めな気分になった。

「 出口は、どこだ? 」

辺りを見回すと、ここは山の中かと思うほど木々や花々が散在している。

しかし、追っ手から身を隠すには最適だ。 出口を探すより、一度隠れたほうが賢いかもれない。そう判断したフェイが最適な隠れ場所を探しだした時 声が聞こえた。

「 私は、大切な人に、この世界のルールを教えてもらいました 」

澄んだ空に響く声。

その声を聞いただけで鼓動がズキズキと高まった。続いて胃がキリキリ痛みだす。

間違いない、この声は

セラの声だった。

(25) 月夜に響く鈴のような

月夜に響く鈴のような声。

普段のオドオドしたセラからは想像もつかない、凜と芯の通った声だった。

耳を澄ませば、その周囲から多くのざわめきも聞こえる。どこかでセラが大勢を前にして話しているのだ。

フエイはその声に耳を傾ける。

「この世界のルール。それは、自分でやった事の責任は、自分で取るという事です」

覚えて、いたのか

保安所の椅子に座りその事を教えたのは、他ならぬフエイだ。教えた側としては少し嬉しくなる。やはりセラは世間知らずなだけで、決して愚かではないのだ。

「だとすれば、私に幸せになる権利はありません。何故なら私は、生まれた時に母の命を……奪ってしまったのです」

ザワザワ

喧騒が一段と大きくなった。

フエイも耳を疑った、そんな話は全く聴いていなかったからだ。

「私は、私が綺麗だと思っていました。でも、本当は誰より汚れていたのです。私がするべき罪滅ぼしは、このゼクス領のために生きて、そして死ぬ事。そう思い、このパーティに参加しました」

その言葉に、昨夜のセラの悲壮な顔を思い出す。

『明日、私の婚約者が決まるの』

『そしたらフェイは自由だから、ここから出られるから』

『さよなら』

そうか、だから

セラは、自分の意志で公女としての過酷な運命を受け入れたのだ。胸がジワリと熱くなる。

「しかし、私はもう一つの贖罪じゅくざいを見つけたのです。ですから、パーティに参加する訳にはいかなくなりました」

この言葉に、詰め掛けていた貴族達ならず、給仕をしていた人々も困惑の声を上げた。

嫌な、予感がする。セラを止めたほうがいいか？

フェイはすぐさま直感に従った。

茂みに隠れるのをやめ、満月の庭園へ近づく。そこには詰め掛けた会衆が、ある一点を見つめている。その先にいるのは、深紅のドレスを身に着けた少女だ。

セラは何十人も視線を受けても、少しも怯るんでいない。もとより空気を読めない性質たしだが、今はそれだけではない。確信めいた強い意志が感じられるのだ。

つまり、ぶっちゃけて言えば暴走中である。

「私、セシリア＝ラドクリフは公女です。自由な結婚は許されない身です。が！」

が！ がってなんだよ、がって！

頭に鳴りわたる警戒信号に従って走り出した。止めないと恐ろしい事になる予感^{アラート}は確信に変わる。

しかし、セラは遙か向こうにいる。急いで止めるためには会場を突っ切るしかない。すなわち見つかる事と同意だ。

フェイは一瞬迷う。隠れる事と止める事、どちらが被害が大きいか。

「考えるまでも無いか」

立ち塞がる水路を一足で飛び越えた。それを見た侍女の一人が小さく悲鳴をあげたが、そんな事に構っている暇は無い。

「私にはリア＝フェイロンと言う、愛し合った人がいます」

合ってない！ 合ってないぞっ！

これ以上の言葉を言わせてはいけない。しかし、セラまでの距離は絶望的なまでに埋まらない。やむを得ず、フェイは叫んだ。

「セラアアアッ！」

「フェイ？」

セラは耳ざとくフェイの声を聞き分け、指差した。

「あの人が、私の婚約者、フェイですっ！」

刹那、二人の間にいた貴族たちが、カーテンを開くように一斉に道を明けた。無意味に素晴らしい統制である。

そのままフェイは押し出されるように、セラの眼前に突き出された。

ここまで来てやる事は、力ずくでセラの口を塞ぐ事だった。しかし、フェイは説得と云う非常に愚かな選択をしてしまったのだ。

「セラ、昨日の宣言はどうしたんだ！ 俺を自由にしてくれるんじゃないのか？ おい！」

そんな声は暴走しているセラの耳には届かない。届く訳が無かったのだ。

次の瞬間、セラの口からその言葉は、問答無用で飛び出した。

「私に、この人の赤ちゃんができたのですっ！」

世界は、凍りついた。

「でっ、できるかあああああっ！！！」

フェイの絶叫で、止まっていた周囲の時間が解凍された。

土砂降りのようなざわめきが広がった。無論、その内容は混乱とフェイへの蔑みの言葉である。耳には「変態」「鬼畜」「ロリコン」のだと聞こえてくる。

しかし、それらの雑言を振り払うかのように、セラは拳を握り、天へと掲げた。

「私の罪滅ぼしは新しい命を育むことですっ！　この子のために、私は鬼でも悪魔にでもなります！」

「ふざけんなっ！　鬼と悪魔に謝れ！」

しかし、セラは首を傾げてこともなげに言う。

「どうしたの？　フエイ、あなたの子供よ」

「そんなわけあるかあっ！」

「さあ、認知して」

「につ、認知とか言うなあああっ！」

フエイは頭を抱えてうずくまった。

ゾクリ

首筋に悪寒が走る。

恐る恐る振り返ると、満月をバックに悪魔コバがいた。

スカートのスリットからはしなやかな足が覗き、一直線に上空に向けられている。周囲に溢れる闘気さえ気にしなければ、さぞ魅惑的な姿だろう。気にならない訳が無かったが。

「ちよ、ちよおお！　待てっ！　違っ」

言葉ごと切断するように、容赦なくカカトは振り下ろされた。剃刀のような一閃をのけぞってかわし、そのまま後方へ飛ぶ。

ドンッ

その途中で、何か巨大なものにぶつかった。

があああああつ！！

「ちょおおおお！」

掴みかかった領主ケモノの手を、フェイは泣きそうになりながらも必死で掻い潜る。

「師範、これを使えっ！」

どこからともなく、大根のような太さの棒がコノハに投げられた。コノハは無意識にそれを掴むとフェイの一部に狙いを定め、体を弓のように引き絞った。

「萎えろっ！」

氣力を根こそぎ奪うような掛け声とともに、大根棒が唸りを上げて突き出された。

フェイは全霊を持って身をよじり、紙一重で避ける。しかし、当たったかのようなその一撃を見た貴族たちは『ああ』とも『うう』ともつかないうめき声を上げた。パーティの参加者は主に健全な男子なのだ。

続く二撃、三撃も皮を削るように避ける。しかし、水を吸った服が重いと感じた瞬間だった。

ガシッ

後方から肩を捕まれた。領主に捕まったのだ。

とんでもない握力で押さえつけられ、あっという間に自由を奪われる。

動けなくなつたフェイの前に、コノハは悠然と立った。

息を静かに吐き、大根棒を構え、無情な一撃を加えようと、体を引き絞る。

エルカ、俺はどうすれば……ああつ、そうか！　そういうことだったのかっ！

「お前らっ！　良く聞けええっ！」

フエイの全霊を込めた叫びが響いた。
その気合に、悪魔^{コノハ}が、一瞬だけ止まる。

「俺はっ、童貞だあああああっ！！！」

その魂を削るような悲痛の叫びは　奇跡を起こした。

獣を父親に、悪魔を淑女に戻したのである。

領主公もコノハも、放心したようにその場に膝を付いた。周囲からも勇気ある発言に歓声のようなどよめきが湧き上がったのだ。

そして、フエイはひとり、満月の下に立ち尽くす。

エルカ、俺、やったよ

かくして戦いは終わった。これで終わったのだ。何もかも。

「ねえ、フエイ。ドウテイってなに？」

背後からのセラの一撃に、フエイは両手をついて轟沈した。

「あなたに子供なんて出来ようが無いって事よ、幸せなお姫様」

その答えは、誰もいなくなったはずの高台から降ってきた。
驚いたセラとフェイが声のした方を見ると、一人の女性が高台の上
に立っている。

長く波うつ灰色の髪が顔にかかっている、表情はよく見えない。
しかし、服装はこの会場において異彩を放っていた。ドレスではな
く灰色の大きなマントを身に纏まとっているのだ。

「子供が出来ないって うそ！ そんなのっ」

「本当にお子様なのね……黒猫ちゃんが可哀想だわ」

その言葉に殴られたようなショックを受け、セラはペタンと座り
込み、それきり黙ってしまった。

代わりに口を開いたのはショックから我に返ったフェイだ。ムク
リと立ち上がるとマントの女性に向かって指を突きつける。

「うるせえっ！ 黒猫ちゃんとか言うなっ！ だいたいお前、誰だ
よ！」

「あら、いい質問ね」

女はバサリとマントを払う。

その中にあつたのは、砂漠の民特有の皮鎧と、腰に下げた二本の
曲シヤムシール刀だ。

「私は砂漠の長、ディアナ」

その言葉は、会場にいた全ての視線を掻き集めた。
すると、視線からディアナを守るように脇に控えていた男が一步、
前に出る。見事な体躯の砂漠の戦士、間違うはずが無い カシム

だ。

ディアナと名乗った女性は、視線が集まった事に満足して頷くと、鈍く光る灰髪を無造作に掻きあげる。その髪の下にあった顔は、魅惑的な笑顔だった。

ディアナは妖艶な唇を開くと、何でもない事のように告げた。

「今朝、あなたたちの王子様が誘拐されちゃったんだけど、どうする？」

(26) 呼びかけたが返事が無い

呼びかけたが返事が無い。エル力は仕方なく師の顔をペチペチと叩くと、もう一度呼びかける。

「師匠^{ラビ}！ 起きてください」

ガラムはゆっくりと目を開けた。そして、意識が覚醒した瞬間、バツと飛び起きる。

「殿下っ、なぜここに？ 領主公はっ？ パーティはどうなりました？」

その忠誠心と責任感の強さにエル力は苦笑した。

「なにやら会場は騒がしいようですが、父上の叫び声は途絶えませんでした。おそらくフェイが上手くやったのでしょう」

「むっ、あの状態の領主公を客人に晒してしまったか」

うむむと呟いて顎に手を当てた。

十年前、エル力が十二才で初めて父に引き合わされた時から何も変わっていない、困ったときのガラムの癖だ。

「師匠^{ラビ}は、仕える主人を選び間違えたものではありませんか」

「そんな事はありません。領主公は自分に厳しく聡明で公正なお方です」

「頑固で、融通が利かない点も付けてもらいたいものだ」

「それは美点でございましょう」

ガラムは苦笑すると、体についていたほこりを払う。

ザワザワザワツ

「む、庭園が騒がしくなりましたな」

「またフエイがトラブルでも引き寄せたか……行ってみましょう」

師弟は休憩所から出ると、満月の庭園へと急ぎ向かったのだった。

ディアナの発言によって、会場は混乱の渦と化していた。

喚く者、放心する者、祈る者、そして、ディアナが砂漠の長とは信じない人々もいた。当たり前と言えば当たり前である。いきなり侵入して来た者の言うことであり、その内容が言うに事欠いて王子が誘拐された、なのだ。

その筆頭が、乱闘の時は隠れていたゴリネルだった。

「いきなり現れてふざけた事をつ！ 貴様はここをどこだと思ってるのだ！」

「あら、ゼクス領主のお邸だと思ってましたけど、違いますの？」

「ふっ、ふざけるなっ！ 貴様のような青二才で、しかも女のくせに砂漠の長だと？ 誰が信じるかっ！」

ディアナと名乗った女性は確かに年齢も若く見えた。まだ二十そこそこだろう。

「何をやっておるかっ！ 衛視ども！ さっさと捕えんかっ！」

ゴリネルの怒声にすぐさま衛視達が集まり、ディアナを捕らえよ

うと動きだした。あわせるようにカシムが一步前が出る。
そのタイミングでガラムは現れたのだった。

「デイ、ディアナッ！」

ガラムは迷わず叫び、ディアナの元へ走り寄った。

「あら、クソ親父。ちゃんと生きてたのね」

「クソ親父と呼ぶでないわっ！」

「しょうがないじゃない、私が反抗期の時にゴルゴンに入っちゃってそれきりなんだし。でも、元氣そうでよかったわ」

「そうか、そうだったな。お前も無事で何よりだ。サライは元氣か？」

いきなり繰り広げられたアットホームな会話に、一同は啞然とした。

そんな中、真っ先に口を開いたのはゴリネルだ。唾を飛ばしながら領主に詰め寄る。

「どう言う事だっ！」

「ガラムは元砂漠の長です。あの女は間違いなく砂漠の長でしょうな」

「ぐっ……それよりもだっ！ ヤツが風のガラムだとすれば、貴様
はゴルゴンの手先を家臣にしているのかっ！？」

「いえ、既にゴルゴンとは縁が切れております。そもそも、ガラム
めは砂漠の民の安全と引き換えに、ゴルゴンの副団長になっただけの
事です」

「それがどうしてゴルゴンと縁を切ったのだっ！？」

「ゴルゴンが契約違反をしたため、と聞いておりますが」

「そっ、そんな事、わしは全く聞いておらんぞっ！」

ゴリネルの唾が気になったのか、領主は一步引いて眉をひそめた。

「公爵には自治権が認められております、そこまで報告する義務は無いでしょう」

「うるさいっ！ 大体、リア＝フェイロンはいたではないかっ！
どう言う事だっ！」

「王子がゴルゴンに誘拐されたの今、そんな些細な事はどうでもよいはず……さて、砂漠の長よ」

まだ何か言いたそうなゴリネルを無視して、領主はディアナに問うた。

「なんでしよう、ゼクス領主ラドクリフ公爵閣下」

「ラドクリフでよい。砂漠の長よ」

「では、ラドクリフ、私もディアナと呼んで欲しいわね」

全く気負わないその口調に、領主は口を歪めた。

「分かった。ではディアナ、王子を誘拐したのはどこの組織だ？」

「分かっていると思うけど、ゴルゴンよ。今じゃ悪党の九割は、あそこに所属してるんじゃないかしら」

「何故、王都ではなくゼクス領に伝えた？」

「誘拐された現場は僅かだけどゼクス寄りだった……と言うだけでは納得しないわね。本当は、ゼクス領がゴルゴン討伐のために色々準備していると聞いたからよ」

ディアナはそこまで言うと、高台からゆっくりと降りる。足さばきが特殊なのか足音が全くしない。その光景は月明かりと相まって、酷く現実感が無かった。

領主はディアナが話すべき話を話し終えたのだと見るや、再びゴリネルに向き合った。

「聞いたでしょう、ゴリネル將軍。一刻も早くゴルゴン討伐の軍を派遣していただきたい」

領主は礼を尽くしながらも、問い詰めるように言及するが、ゴリネルはケロッと答えた。

「できんな」

「なっ！」

この返答に領主だけでなく、周りの貴族たちもザワリと驚いた。

「ゴリネル將軍！ エドガー王子は、唯一の王位継承者である事は分かっていよう！」

「しかし、無理だ。王子一人のために国を挙げての戦争はできん。王のために国があるのではなく、国のために王があるのだから」

「戦争ではないっ！ 討伐だっ！」

「同じ事だ。ゴルゴンは強大なのだからな　それより、ちょうど良い者がいるではないか」

ゴリネルは自慢の顎鬚あごひげで、会話に参加できないで呆然としているフエイを指した。

「あれを使えばよかるう。なにせゼクス領ご推薦の勇者様だ」

ゴリネルはニヤニヤと笑っていた。この緊急事態にだ。

もし、エドガー王子が殺されるような事があれば、王家は断絶するということにだ。

まさか、次の王座を狙っているのか？

領主の胸中に疑念が浮かぶ。

今、王家が断絶すれば、次の位である将軍が王になるのがふさわしい。その推論が当たっているとすれば、ゴリネルに軍を出させるのは難しいと判断した。

なんと浅ましい

領主はギリリと奥歯をかみ締める。

そのやり取りを興味無さそうに見ていたディアナは、長く波打つ灰色の髪をうつつとしそうに掻きあげ、フェイを見つめた。

その視線を感じてフェイが睨み返した瞬間、ディアナはニヤリと笑う。

「もし、リア＝フェイロンが先頭に立つと云うなら、私たち砂漠の民は総力をあげて協力しますわよ」

おおおおっ

貴族たちから歓声と困惑の入り混じったどよめきが漏れた。砂漠の民が軍事協力など前代未聞だからである。

しかし、そんなことはフェイにはどうでも良かった。

「ふざけんなっ！俺は絶対にやらないからなっ！」

吐き捨てるように言ったフェイの前に、ゴリネルはツカヅカと詰め寄っていやらしく笑う。

「おやおや、噂に聞いた黒猫にしては弱気な発言じゃないか」

「うるせえ、黒猫って呼ぶんじゃねえよブタ野郎」

「ブツ、貴様……わしが誰だか分かってないようだな」

「知らねえよ！ てめーも、黒猫も、婚約も、王子もみんな知らねえ！ ああ、知ったこっちゃねえ！」

フェイはゴリネルの胸倉を掴もうとして、しかし、その手を横から捕まれた。誰だ、と怒鳴ろうとして、喉元で飲み込む。

「エルカツ！ 離してくれ、もううんざりなんだっ！」

「よせ。事態が悪化するだけだ」

「でもさ、なんだよこれ……みんな自分勝手に好き放題言いやがって」

手首を掴んだ大きな手は、優しくフェイの肩を引き寄せた。

「大丈夫、私に任せろ。とりあえず、エルカーナに帰れるようにする」

耳元で囁いたその言葉に、フェイはため息をひとつ落とし、小さく頷く。

その答えにエルカは微笑み、矢面に立たされていたフェイの横に、さも当然のように並んだ。

ガッチリとした体に豪華なサーコートをまとったエルカ、ひよおりとした体にすっかり汚れた皮ジャケットをまとったフェイ。

横に並ぶと『王子と乞食』そのものである。

エルカは片手を振り払うように広げると、空気を震わせ、庭園にいた全てに、告げた。

「聞いたとおりだ！ リア＝フェイロンにとって、王子などどうで

もよい。そんな命令など聞くに値しないっ！」

会衆からは、憤りや困惑、非難の声があちこちから飛んでくる。されど、エルカはさらに大声を上げ、雑音を掻き消した。

「しかしっ、クエスト依頼としてなら話は別だ！」

訪れた静寂に、エルカは唇の片端をニイと吊り上げた。

「父上、いや、ゼクス領主ラドクリフ公爵閣下！ 王子救出のクエスト依頼、クエスト屋エルカーナにご依頼いただけますか？」

対する領主も、エルカと瓜二つな笑いを浮かべる。

「よかろう！ ただし、期限は明後日の夜までだ。それまでに王子の居場所を突き止めよ。それ以上は望まん。できるか？」

「勿論ですとも、公爵閣下！」

エルカは一步踏み出すと両手を広げ、芝居がかった口調で周囲を圧倒する。

「クエスト屋エルカーナのモーター経営方針は迅速、確実、徹底的」

エルカの視線がちらりとフェイを捕えた。

フェイはエルカを信じ、一步を踏み出し、胸を張って空気を震わせる。

「必ずや、クライアント依頼人の依頼も要望も解決し尽くし」
「そして、差し上げる事を約束しましょう」

フェイとエルカの視線が、交錯する。

「「あなたに、より良い明日を」」
ペターライフ

王子と乞食は、寸分たがわぬ一礼を決めて見せた。

（27）最大の障害は何か

最大の障害は何か

エルカは思考を巡らせた。

「王子が緊急の時にパーティなど論外だ。今宵はここで解散とする」

領主公が重々しくパーティの閉会を宣言すると、貴族たちはその言葉を皮切りにそれぞれの領地や屋敷へと急ぎ、ゴリネル將軍も罵りながら豪華な竜馬ナタクの馬車で去っていった。

フェイはエルカの要求した代えの服に着替えに行っている。

ディアナはガラムと何かを話しており、領主公は主だった貴族たちに指示を出していた。

コノハは自己嫌悪の中にどっぷりと漬かっており、カシムが声を掛けているが反応は無いようだ。

セラも同様に床に座り込み、時折声を掛ける侍女の声にも全く反応を見せる様子は無い。

エルカは一人腕を組み、今すべき事を考えた。

この依頼クエストさえこなせば、領主ちちうえと言えど王族の恩人であるフェイを手にかけることはすまい。

では、何が依頼遂行の障害となるか

まず考えられるのが、王子が既に殺害されている場合である。この場合、悲報をシュバート国内に告げねばならない。

しかし、そうなればさしものゴリネル將軍もゴルゴン討伐を決意

する事だろう。それは、王子の敵討ではなく彼自身の野望のためで、非情に不愉快ではある。しかし、事態の進展を促した功績は認められるはずだ。

では、最大の障害とは

エルカは目の前で俯いている妹セラを睥睨へいげいした。

「……セシリア」

セラの頭がゆっくりともたげられる。その瞳に生氣の色は無い。よほど子供ができた事に、希望を見出してしまったのだろう。

これからその上に止めを刺すのだと思うと、さすがに胸が痛んだ。

「セシリア、お前は自分が母上を殺したと思っているのだそうだな。だが、私はお前が殺したなどと思っていない」

「……………なら、何故、兄様は私を避けるのですか」

そのすぐるような声を突き放すように、エルカは冷たく言い放った。

「お前がどうしようもなく子供だからだ。お前は自分が何をしたのか、分かっているのか？」

「え？」

「セシリア、お前がフェイを殺しかけたのだ」

「っ！？」

「自分の欲求しか考えぬお前の行動の結果が、今でもフェイの命を脅かしているのだ。分からののか？」

「うそ」

嘘ではない。私とお前の行動の結果、だがな

エルカは最後まで、優しく囁くように諭した。

「お前はフェイを不幸にしか出来ん。もう何もするな」

その言葉でムチ打たれたように、セラは立ち上がると領邸へ駆け出した。その後姿を見てエルカは目を閉じる。

これでもう、妙なマネはしないだろう

エルカは自分を納得させ終わると、ゆっくりと目を開き、次にすべき事に移った。

フェイは新しい服の感触に戸惑っていた。やたらとツルツルして羽のように軽いため、何も着ていないような心許無さがあるのだ。

だが、流石にデザインは良い。無地の白いシャツと真っ黒なスラックスなのだが、フェイの痩身にぴったりとフィットした服など初めてだったのだ。市場で買えばサイズは恰幅の良い人に合わせてあることが多く、大抵はダボダボでなのである。ついでに、上等な革ベルトも頂戴した。迷惑料としては足りないが、無いよりはマシだろう。

なにより、エルカーナに帰れるんだ

自然と顔が綻んだ。

依頼について不安が無い訳じゃない。なにしろ明後日までに王子を探さねばならないのだ。万が一、ルナの助力を得られなければ絶

望的だろう。

しかし、あのエル力がやると言ったのだ。やると言ったことはやり通す。そしてエル力なら何とかしてしまふのだろう。

領邸から出て大理石の休憩所が見えた頃、フェイは何か走ってくる事に気が付いた。

深紅のドレス、金色の結い上げられた髪　セラだ。

セラは俯きながら走っており、こちらに気がついている気配はない。明らかに様子がおかしかった。

構うな、放っておけ

フェイの理性はこれ以上無いほどハッキリ止めた。こう云うときにこそ悪に徹さなければならぬ。あれだけの経験を経て学んだ事だ。十分過ぎるほど分かっている。

でも

このままでは気持ちが悪いのだ。胸のつかえが取れない。こんな状態で生きていくなど、想像するのも絶えられない。

だから、これはただの自己満足だ。間違っても善行などではない。フェイは自分に言い聞かせた後、口を開いた。

「セラ！」

目の前まで走っていたセラは、その声にピクリと反応した。なれない靴にバランスを崩し、体が宙に浮いた。

「おっと」

フェイはセラの肩を掴み、腕を絡めるように支える。勢いがついていたはずだが、驚くほど簡単に止められた。本当に軽かったのだ。セラは顔を上げ、信じられないモノでも見るような目で、自分を受け止めた男を見つめる。

その顔は蒼白で、掴んだ肩は小刻みに震えており、歯は力チ力チとなっている。昨夜、牢で見た状態より酷い。

「おい、どうした、セラ？」

「あつ……ごめつ、ごめつなさ、い」

そこまで言うとならセラは碧眼から涙を溢れさせ、フェイの手を振り解いて邸内へと走り去さるうとした。

「おいっ！ セラッ！」

セラはこちらを見ないまま、しかし、フェイの怒声のような呼びかけに足を止める。

だが、引き止めたのはいいが、何を言っているかわからなかった。気の効いたセリフはカケラも思い浮かばないのだ。

だからまず、心に合ったモヤモヤとした不満を言葉にした。

「あのな、親のためとか、領のためとかさ、そういうのやめろよ！」

セラは振り向かない。頷きもしなかった。しかし、それ以上、フェイにかけてやれる言葉は無いのだ。

だから、エルカに教わった言葉をセラに伝える。

「セラ、お前はまだ生きてるんだ！ 死ぬ前にそれを見せよ！ 腐ってる暇なんて無いんだぞ！」

「……………なんで、フェイは、私を」

セラはそれだけ言うと、セラはさよならも言わずに走り去った。

ほら、やっぱり放っておけばよかったじゃないか

「うるせえな、分かってるよ。黙ってる」

フェイは誰とも無く呟いたのだ。

「フェイ、すまない。準備に時間が掛かりそうなんだ。先にエルカーナに帰って休んでくれ」

会場に戻ったフェイは、領主と話し合っているエルカに開口一番こう言われた。

「いいのか？ 本当に帰ってもいいのか？」

フェイの顔が懷疑の色に染まる。不幸慣れと云うのは、かなりネガティブになるらしい。

エルカは苦笑を浮かべ、もちろんだと頷いた。

「なにせ明朝には出発するからな。十分に休んでくれ」

「エルカは、その、体とか大丈夫なのか？」

エルカはもう一度頷くと、「ただし」と落ち込んでいるコノハを親指で指す。

「その代わり、私の代わりにコノハをエルカーナまで送って欲しい

んだが」

「コ、コノ八をつ！？」

「嫌か？」

「だって、ほら、さっきの見たろ？ コノ八、何があったか知らないけど、おかしかったじゃないか……」

エルカは心の中で、この朴念仁と軽く毒づく。

「もう心配ない。そうだ、なんなら背負っていけ。それで昔のように戻れるだろう。ついでに助力も頼んで欲しい。コノ八がいれば心強い」

「……まあ、エルカがそう言うなら、でも本当に」

「大丈夫だ。ああ、それからルナがエルカーナで待っている。彼女の助けが今回は必須だ。同行を頼んでくれるか？」

「ルナがつ！？ よし、分かった。任せとけ！」

途端に上機嫌になったフェイは、さつさと踵かかとを返すと一目散にコノ八を迎えに行った。残されたエルカは苦笑する。

フェイ、お前は何故修羅の道を選ぶか……このゴタゴタが終わったら存分に楽しませてもらうからね

エルカは根本的なところでまったく懲りていなかった。

「師範を頼む」

カシムはそれだけ言つと、放心するコノ八を見捨て立ち去ろうとした。

「ちょ、ちよつと待て！」

「なんだ、俺は忙しいんだ」

「いや、あんたが何でコノハを師範とか言ってるんだ？」

その途端、カシムの表情が怒りに歪む。なにやら炎のような怨念さえ見えた。

「お前を倒すために決まっている。このゼクス領一の槍術家と名高い師範に槍術を鍛え直してもらい、いつの日か貴様にリベンジしてやるのだ」

「リベンジなら思いつきりしたじゃねーか！ 椅子ごとぶっ飛ばしやがって！」

「不意打ちなど勝負の内に入らん。正々堂々と真剣勝負をしてみようからな」

「お前の勝ちでいいからっ！ って言うか他にすることあるだろうっ！」

カシムは一呼吸吐くと、月をまぶしそうに見上げた。

「貴様を倒すまで……俺は一步も進めない」

「そのノリやめろよっ！」

しかしカシムは何を思ったのかニヤリと意味不明な笑いを浮かべ、ディアナの傍へ行ってしまった。

フェイは息を一つ落とすと、仕方なく落ち込みまくっているコノハに呼びかけた。

「おーい、コノハ」

フェイが試しに呼んでみるが、相変わらず反応が無い。

早く帰りたいフェイは、エルカの助言通り、コノハを背負うことにした。

引き上げるために両手首を掴むと、意外なほどに細い。強いと云うイメージしかないコノハだが、その実、非常に華奢な女性だと思いついた。

九年前、はじめて会った時は男だと思ったのに

戸惑いを打ち消すようにフェイは作業に没頭する。

コノハの前に座り込むと、肩に細腕を乗せ、慎重に立ち上がった。コノハの顔がフェイの顔のすぐ横に来る。

あ、あれ？

その瞬間、フェイは違う女性を背負ってしまったかと焦った。いつもと違う髪型、別人のような綺麗な顔、憂いを帯びた表情。

違う、これはコノハだ。ただのコノハだ

フェイは必死で自己暗示をかける。しかし、ことさら意識しないようにすると、逆に色々と気になるものだ。

背中の中も、支えている腕にかかる重み、甘い香水の匂い。

高鳴ってしまった鼓動を運動のせいにするため、フェイは駆け足で領邸の門を出て行った。

満月の夜、巨道バイスアルムにある商店街は遅くまで活気に溢れかえる。

屋台の焼きチーズの匂い。調子外れの歌のような大道芸人たちの

掛け声。月明かりを照らす白い巨道の淡い白色光……何もかもが懐かかった。

そう言えば最近、ここに来てなかったな

昔は満月の夜になると、コノハとクロフとの三人で金も無いのに巨道商店街に来ていたものだ。

大道芸の演劇を遠くから盗み見たり、武器のたたき売りを冷やかしたり、金を出し合って焼きチーズ一本を分け合い、他愛の無い事で口論をする。そんな事が無性に楽しかったのだ。

あの頃、コノハはひたすら真っ直ぐだった。

困った人を見れば、周囲を巻き込みつつ助けた。絡んでいるチンピラを見れば、相手がどれだけ強そうでも間に入った。知り合いがやられれば、どれだけ時間をかけてでも後悔させた。

一言で言えば義憤きふんの塊だったのだ。

だが、今は何を考えているのか分からない。言動も矛盾だらけで、始終怒っている様にも感じられている。しかも、その怒りはほとんど自分に向けられるのだ。

「フエイ」

突然コノハが声を出した。心臓がギクリと悲鳴を上げる。

「あーっ！　なんだ、お前、あの、おまえさ、あの、全然反応しなかったから」

「うん、ごめんね」

素直に謝られ、フエイの調子が狂う。昔は謝ることが何より大嫌いだっただけなのだ。

「お前すごい変だぞ。今日だって、お前、まるで悪魔だった」
「……………」

急に怒りがこみ上げてきた。

フェイの中ではコノハは最強だったのだ。憧れだったのだ。どんなチンピラでも一蹴して、十二で師である父に勝ち、エルカにだって試合では負けた事がない。

こんなの、コノハじゃない！ この背中にいるのは誰なんだ？

怒りだけではなかった。

さつき感じてしまった女性の部分。コノハだけが変わってしまったような戸惑い、不安、そんなものがグシャグシャと頭の中をかき回していた。

フェイはよく分からない気持ちを、よく分からないままぶつけた。

「元気になったのなら、さつさと自分で歩けよ！」

「……………」

弱気で、甘えたような声。心臓が高鳴るのは、怒りのせい戸惑いのせい、それとも

エルカはコノハを背負えば昔に戻れると言っていたのに

それどころか、どんどん戻れない所へ進んでしまっている気がした。

それきり、フェイは言葉が出せなくなった。

「ねえ、フェイ。あそこ覚えてる？」

沈黙に耐えれなくなったように、コノハはその細い指で一点を指した。

その先にあるものは潰れたままになっている娼館だ。

勿論その場所をフェイは覚えていた。人さらいまがいの営業をしていた親父に、キツイ天誅を下したのはコノハだ。フェイも情報収集をやらされ、覗き少年と勘違いされ監視に捕まったのだ。忘れる訳がない。

しかし、フェイが答える前にコノハは指を横に移動スライドさせた。その先にあるのは一本の木。あの上から三人で並び大道芸を覗いたのだ。

次に指したのは何の変哲も無いラマの馬車。あの後ろにコッソリと乗って、この広い町を何度も何度も横断した。あの頃、自分達はどこへでも行けると得意になったものだ。その時の取り留めの無い話が、耳によみがえっては消えていく。

コノハは次々に指を指す。フェイの答えを期待したのではないのだ。ただ

「昔に、戻りたいな」

そのときフェイは気がついた。コノハだって昔の自分に戻りたいのだ。

「戻ればいいじゃないか。簡単だろ。昔みたいにふんぞりかえって」「できないの……あたし、今、すごい弱くなってる。自分で分かるの。気がつく你今天みたいに無茶苦茶になってて、もう、訳が分からない」

「コノハ……」

また沈黙が訪れた。かける言葉が見つからない。

その沈黙を静かに破ったのは、もしかしてコノハだった。

「……あたし三年前にルナから聞いたの。フェイがあたしのこと、その、どう思ってるか」

フェイはビクリと身を振るわせた。何かまずい事でも言ってたのだろうか？

必死で記憶を探る。

ルナにコノハのことを話したとすれば、ゼクス領で一番強いんじゃないかと軽口を叩いていたくらいだ。

後ろから長い長い深呼吸が二度、聞こえた。

「あのね、その………今でも、あたしのこと、同じように思ってる？」

「ああ、何だ。そう言う事か」

「何だって何よ！ あ、あたしにとっては、すごい大切な事で」

「あの時と一緒にだよ。今だって、コノハが一番だと思ってる」

「っ！！」

背中ではコノハが身を震わせた。

強いつて思われることが、コノハには大切なことだったんだ。

馬鹿だな

馬鹿はお前だ。エルカなら間違いなくそう突っ込んでいるだろう。しかし、そうと知らないフェイはコノハの不調の原因が分かったような気になり、ホッと息を吐いた。

「さて、まずはクロフの結婚式を祝ってやらなきゃな」

「え？ あ、う、うん」

「そうそう、明日からのクエスト、コノハも手伝って欲しいんだよ」
「え、ええ？ なにそれ？」

フェイは苦笑した。昔からキレると本当に周りが見えなくなるのだ。

「じゃあ、王子が誘拐された事も知らないか？」

「王子様が誘拐！？ それって一大事じゃない！」

「で、明日から王子を探さなきゃならないんだ。かなり危険だけど、また手伝ってくれないか？」

「あんた、また巻き込まれたの？」

「う……面目ない」

「しょうがないわね、手伝ってあげるわ」

その言葉を聞いた途端、フェイは急におかしくなった。

いつも『しょうがないわね』なのだ。困っている人がいれば、いつだって彼女は『しょうがない』の一言で全力を尽くすのだ。

「何よ、何笑ってるの」

「いや、変わらないところは変わらないんだなと」

「何よっ！ だいたいあんた、髪がすごい臭いわよ」

「しょうがないだろ！ もう一週間も風呂に入ってないんだっ！
だいたい臭いなら早く降りろよ！」

「なに？ このあたしが重いつて言うのっ？ いい度胸してるじゃない！」

「本当の事じゃねーか！」

本当の事だった。エル力が言った通り、昔に戻れた

昔のまま、二人はギヤアギヤアと言い合いながら白い道を帰っていく。

しかし、一点だけ違っている事があった。

コノハの顔が月明かりにもハッキリと赤く染まっている事など、背負っているフェイは気がつかなかったただけなのだ。

(28) 告白された？

「告白されたっ！？ フェイに？」

ルナは耳を疑った。三年前の勘違いはまだ解消されていないはずだったからだ。

しかし、ルナに化粧を落してもらいながら、コノハは小さく頷いた。頬はチークを落としたにもかかわらず真っ赤に染まっていた。その様は、同性のルナが見ても抱きしめたくなくなるような気持ちにさせる。

そっかあ、この魅力にやられたんだ。分かる分かる。手紙の事話さなくてよかったなあ……こう云うのを『人間万事塞翁がラマ』って言うのかしら？

ルナはウンウンと頷き、脱脂綿にオイルを染み込ませ、コノハの目の上をゴシゴシと拭く。すると、コノハの顔が悲しそうに歪められた。

「あ、ごめん。痛かった？」

「ううん、ただ、魔法が解けるみたいで……あはは、もう本当に変だね、あたし」

ルナは化粧落としを中断して、本当に抱きつこうかと迷った。

「大丈夫よ、コノハ。こんな魔法くらい、いつでもかけて上げるから」

「……うん、ありがと。本当にありがとうね、ルナ」

鏡越しの真っ直ぐな感謝の視線が気恥ずかしくて、ルナはシャドウを落とすふりをしてコノハの目を閉じさせた。

「そうかあ、これでコノハも彼氏持ちなんだ。なんか焦っちゃうな」
「……え？」

「何言ってるのよ、付き合う事にしたんでしょ？」
「……………えーと、あれ？」

その反応にルナは目玉を引ん剥いた。まるで大罪者を咎めるように指を指してコノハを糾弾する。

「なにそれっ！ コノハ、あなたまさか告白されて放置したの！？」
「えーと、あれ……あの、でも、その場のノリが」

「あああああっ！ もうっ！ いまから一緒にお風呂に入ってきたさいっ！」

「ちょ、無茶言わないでよ！」

しかし、その騒ぎは風呂場にいたフェイにはぎゃあぎゃあと言う喧騒にしか聞こえなかった。

フェイはエルカーナに帰るなり、ルナに「臭い」と言われ、慌てて風呂に入っているのだ。

「うあー、自由最高っ！」

少し大きめの樽にお湯を入れるだけの風呂だが、フェイのお気に入りの一つだ。

一週間の牢生活から解放され、すっかり垢を落としたフェイは、樽風呂の中で目一杯くつろいでいる。

ルナはクエストの協力をあっさり了承してくれ、これで王子の居場所を特定すれば、しばらくは平穏な日々が戻るかもしれないのだ。

そして、コノハの機嫌も直ったのだ。全て順調である。

でも

フェイの顔が僅かに陰る。

「でも、あのゴルゴンが王子を誘拐か……信じたくないな」

その声は風呂場の壁に反響し、泡のようにすぐに消えた。

空がうつすらと明るくなった頃、將軍ゴリネルを乗せた馬車は砂煙を巻き上げ、砂漠を爆走していた。

「何をしているっ！ もっといそげっ！」

その叱咤に御者は眉をひそめながらも、竜馬ナタクに鞭を入れた。さらに走る事一時間、御者は砂漠のど真ん中にある湖に馬車を止める。その途端、怪しげな集団が馬車を取り囲んだ。見るからにゴロツキの集団である。

「よし、ここで待て」

そのゴロツキ集団に、何の疑問も抱かないようにゴリネルは馬車から飛び降りる。そして、たった一人でその怪しげな集団に混じり、一際大きな建物の中へと消えていった。

「おい、クラー！ クラーはどこだっ！」

「こんな早朝に何用ですか、ゴリネル」

ゴリネルが振り返ると、探していた男がいつの間にか背後にいた。綿の寝間着に豪華なローブをまとい、痩身の男は不機嫌そうに眉を寄せている。

歳は四十半ば、真つ白な髪、そして知的な顔は周囲のゴロツキと比べるとあからさまに異色だ。そして、その顔で特に印象的なのは目だ。鋭い。何もかもを見通すような鋭い目、身長は平均程度だが、それ以上に見せる雰囲気はその男にはあった。

「クラーよ、一体どう云う事だ！ 王子の誘拐が砂漠の民どもに漏れていたぞ！」

「おや、そうでしたか」

「そうでしたか、で済む問題ではないっ！ 万が一、わしが疑われたらどうする！」

「そうですね、次の將軍を探しますか」

「っ！！」

ゴリネルの顔色が変わった。横柄な態度が消え、クラーから一步身を引く。

「安心下さい、この砂漠のどこに王子を隠したのか、知っているのは私と実行者だけです。それに、將軍としてあなたほどの適任は他にいませんから、大事にしますよ」

「そ、そうだろう！ あと、万が一の事もある。王子は今のうちに確実に始末して欲しい」

「分かりました、そう伝えましょう。で、各領の動きはどうでした？」

ゴリネルは良くぞ聞いたとばかりに唇の端を上げた。

「わしが牽制^{けんせい}しておいたぞ。ゼクス領のヤツラも困り果ててな、苦し紛れにクエスト屋に依頼しおったわ、ハッハッハ」

「クエスト屋？」

「ああ、こいつだ」

ゴリネルは懷から張り紙を取り出すと、クラーに渡した。

「ほう、領公認の実力者、と言うわけですか」

「黒猫などと呼ばれていい気になっておる。あの風のガラムと互角にやりあつたそうだがたいした男では」

「ガラムと、だとっ!？」

クラーは被さるようにゴリネルに近づいた。

「その黒猫のことを、詳しく話さないっ!」

男の表情は、明らかに焦っていた。

翌朝、エルカーナにやってきた竜馬^{ナタク}二頭立ての馬車には、なんと専用の御者までついていた。

「どうも、ご苦労様です」

フェイが頭を下げると、御者は左右についたチヨビ髭をピクリと動かし鷹揚に頷いた。どこことなく偉そうではあるが、貫禄があるとも云える。エルカが経験豊富な御者を選んだのだろう。

しかし、馬車の中にさらにおまけがいた。

「はあい、黒猫ちゃん。約束どおり来たわよ」

「感謝しろ」

朝からテンションの高いディアナと、不機嫌そうに大根棒を構えたカシムが馬車から降りてきた。

「……エルカ、どう云う事だ？」

「昨夜彼女等は協力してくれると言っただろう。無料タダでしかも強い。どこに不満がある？」

「そうよ黒猫ちゃん、邪険にしないでね」

「うるさいっ！ 黒猫ちゃんって呼ぶなっ！」

そのフェイの反応を見てディアナは微笑みながらエルカに何か耳打ちをし、エルカも笑顔で頷いた。

「なあ、カシム。あの二人いきなり仲良くなつてないか？」

「昨夜は寝ずに語り合っていた。どうにも気が合うらしい」

「そうかあ、確かに年齢は同じくらいだろうけど……あんな女、真面目なエルカとは気があわなそうなんだけどなあ」

フェイは頭を掻きながらも二人を店内へ案内した。

部屋はけっして大きくはないが床には十六方位が描かれており、中心にルナ、端にはコノハがいる。

二人とも長身なディアナと巨漢のカシムが、いきなり部屋に入ってきたので、かなり驚いていた。

「おはようございます。師範」

「カシム、道場の外で師範は止めてって言ってるじゃない。あと、

コノさんの店の護衛はいいの？」

「一週間のお暇を頂きました。あの人は口が悪いですが、話せば分かる人です……ああ、こちらは砂漠の長、ディアナ様です」

カシムは一步引いて、ディアナとコノハを引き合わせた。

「ディアナよ、噂はカシムから散々聞いてるわ。昨日の下段突きも惚れ惚れしたわよ」

「あつ……あの、ごめんなさい」

意味も無くコノハは謝り、その様子にディアナは微笑みを浮かべた。

そして、ルナにも軽く手を振る。

「そつちもはじめまして。エルカからきいたけど、あなたが『神の約束』を受けた神官見習ね」

「はい。アルティアルルナティヒです。ルナと呼んでください」

「ディアナ」ガラムデイン、ディアナと呼んで。間違っても砂漠の長なんて呼ばないでね。私はあなたの神の従者ではないけど、ここにいても大丈夫なの？」

「ああ、はい、もう全然っ！」

パタパタと手を振っているルナは、それでも『神の約束』を得た優秀な神官見習だった。

『神の約束』とは『証』^{あかし}と呼ばれる奇跡の使用を、神から許される事である。約束を得る神官は十人に一人と言われ重宝される。

なお、『証』の種類の殆どは治癒か託宣だ。ルナの『証』も一応託宣の部類に入るが、かなり特殊であり用途は非常に限られている。しかし、クエスト屋にとっては、これ以上無いほど貴重な奇跡だった。

「じゃあ、適当な場所に座っててくれ。本当は外でもできるんだが、最初は正確な方位が欲しいんだ」

エルカはディアナ達に説明して座らせると、ルナに始めてくれと合図した。

ルナは方位の線が重なる中心点に、一本の何の変哲もない細い木の棒をまっすぐに立てる。一つ深呼吸をすると静かに目を閉じ、『証』のための詠唱を始めた。

「神様、神様。尋ね人です。名前は、ええと、エドガー・グロスターさん。どっちにいますか？ えいっ！」

「……あなた達の神様って、結構アバウトね」

ルナが棒から手を離す。棒はしばらく屹立していたが、やがて力尽きたように倒れた。

カランツカランツ

木の棒は西北西を指した。エルカは地図を広げ、定規で方位をしっかりと固定すると、一本の線を引く。

「迷いなく棒が倒れたという事は王子はまだ生きているようだな。場所は、やはりツヴェルフ砂漠か……よしっ、出るぞ！」

エルカは地図を仕舞い、立ち上がる。それが出発の合図となった。

コンコン

領主の執務室のドアが控えめにノックされる。領主はその音だけで、叩いたのが誰か分かった。

「入りなさい」

目を真つ赤にしたセラが入ってきた。

「また泣いていたのか、いい加減に」

「お父様っ！」

セラの声音は力強く、しかし震えていた。

「お父様がフエイを殺そうとしていたのは、本当ですか？」
「……本当だ」

セラの顔が、怯えと怒りと悲しみに染まる。

「何故ですか、やはり私がお母様の命を奪ったからですかっ!？」

「さて、セラ。それは違う。わしはお前がテイリアーナの、お前の母の命を奪ったなど、思った事は一度として無い」

「……では……私のせいですか？ 私が、フエイに会いに、ここを抜け出したせいなのですかっ？」

領主は一瞬返事に詰まる。しかし、沈黙では許さぬと言う娘の迫力に、口を開いた。

「……そうだ」

「なら、私を牢に入れてくださいっ！　なんで、フェイにばかり辛く当たるのですかっ！」

「いいか、セラ。お前は公女で」

コンコンッ

再び執務室のドアが叩かれた。しかし、セラとは違い、的確で力強いノックだ。

「誰だ」

『ツヴァイ領公子リーガンです。領主公に相談があつて参りました』
『アハト領公子コーディリアです。セシリア公女にも、ご相談があります』

帰ったのではなかったか？

領主は疑問を心に抑え「入りなさい」と命じた。セラは感情が高ぶってこぼれた涙を、手の甲で何度かこする。

「失礼します」

入ってきたのは、昨日とは打って変わって軽装になったリーガンと、ドレスからワンピースとズボンになったコーディリアである。

昨日、挨拶を交わしていなかったセラは、コーディリアの女装姿に口をパカリと開いた。

「さて、この緊急時にどうされたかな」

領主の問いに、リーガンが一步前が出る。

「王子誘拐の件で、ラドクリフ公爵閣下にお問い合わせです」

「願いか……まずは聞こう。単刀直入に言え」

「我々は王都へ行き、王にゴルゴン討伐の直訴をするつもりです。しかし、そのためには公爵以上の上告状が必要なのです」

「ふむ」

領主は腕を組んで、ふむと吐息を漏らす。

悪い話ではない、か

ゴリネルがああ調子であれば、ゴルゴン討伐の嘆願状は途中で話を握りつぶされていたのだろう。直訴する価値はある。自分がゼクス領を離れられない今、願ったり適ったりではないか。

「そして、セシリアに依頼とは？」

今度はコーディリアが一歩進みでて、軽く頭を下げる。長い赤銅色の髪が流れるように肩から零れた。

「二領の公子だけでは説得力に欠けます。せめて三領の代表者が欲しいところですが、あいにくゼクス領の公子エルカーノ様は王子を探索中。そこで、セシリア公女殿下に同行をお願いしたのです。それに」

コーディリアはその美しい双眸そうぼつで、セラを流し見た。

「セシリア様が牢に入ったとて、あなたの勇者様は喜びましょうか」
「コーディリア！」

リーガンがたしなめるが、コーディリアは意に介した風も無い。

「申し訳ありません。盗み聞きするつもりはなかったのです。ですが、先ほどの話を聞き、私はセシリア様に、是非とも同行していただきたいと思っただのです」

「でも、兄様は、私に何もするなど……」

「何もするな？ 何もするな、ですか！」

コーデイリアは両手を広げ、大仰に嘆いてみせた。

他の誰がやっても様にならないであろうその一挙一動は、見る者全てを魅了する技にまで洗練されている。

「では、セシリア様！ あなたの胸にあるその想いは、何もしなければ一体どうなりましょう？」

コーデイリアは真っ直ぐにセラの胸を指した。

セラは自分の胸元を見つめる。成長不良どころではないまっ平らかな胸。しかし、その中にあるものは確かに熱く脈打っているのだ。

「あなたが動かずに、誰があなたの想い人を救うのですか？」

「でも……私は……」

セラは迷う。

自分が動けばフェイを不幸にする。しかし、もし今動かなくて、フェイが死んでしまったら、この想いは一体どうなるのだろう。

『セラ、お前はまだ生きてるんだ！ 死ぬ前にそれを見せよ！ 腐ってる暇なんて無いんだぞ！』

そうだ、確かにフェイは私にそう言ったのだ。私は生きている、怖いけど、後悔したくないけど、それでも

「お父様！」

セラは領主の目を見た。その碧の目にある確かな、どこまでも真
っ直ぐな意思。

領主はどうやっても勝てぬ相手がいることを認め、苦笑する。

「良からう。護衛は任せたぞ、リーガン公子、コーディリア公子」

「この一命を賭して、お守りいたします」

二人は両拳を合わせ、誓いの一礼をした。

(29) 薄い雲が空を覆い

薄い雲が空を覆い、馬車の窓から見える空気は灰色に淀^{よど}んでいた。暑いと感じる季節に入った今、この天気は砂漠の探索には有り難い天候だ。ひよっとすると夕方にはスコールがあるかもしれない。

朝、洗濯しなくて良かったあ

窓の外を見ながら、ルナはそんな事を考えていた。

竜馬^{ナタク}の馬車はご丁寧に六人乗りだ。

前後に分かれた対面式であり、酔い易いルナが前向き窓際をとったため、奥からルナ、コノハ、ディアナの順になる。

後向きの席は奥からエルカ、フェイ、カシムの順に座った。筋肉漢二人に潰される形になったフェイは非常に不快そうだ。

しかし、コノハだけがフェイの浮かない顔の原因が、他にある事に気づく。

「なんだよ、コノハ。俺の顔に何かついてるか？」

「ううん。でも今日のフェイ、すごく元気ないと思って」

退屈そうにしていたディアナが、ひよいとフェイに顔を向ける。

「どうしたの黒猫ちゃん、酔っちゃった？」

「だから、黒猫ちゃんって呼ぶなっ！」

フェイは息を落として、不機嫌そうに頬杖をついた。

「ただ……ゴルゴンが誘拐なんて、ちょっと信じられなくて、さ」

「ゴルゴンは最低の盗賊団だ。それぐらいやって当たり前だ」

強い口調で吐き捨てたのはカシムだった。顔には不機嫌を通り越して怒りの色が見える。

「最低ってなんだよ！」

「最低だから最低と言ったまでだっ！ やつらが砂漠の民に何をしたと」

「カシム」

ディアナの静かな制止の声に、カシムはすぐさま貝のように口を閉ざした。

カシムの代わりに口を開いたのはエルカだ。

「フェイ、私も疑問に思っていたんだが、どうしてゴルゴンに憧れる？ 言っては何だが、誘拐くらいは普通にやる集団だぞ」

「それは……」

エルカが人のプライバシーを詮索した。それはすなわち知る必要があると言ったことだった。

今回の依頼はゴルゴンに刃を向ける事であり、場合によれば命のやり取りがある。迷い、逡巡があれば命取りもなるのだ。

フェイはため息を吐くと、観念したように頷いた。

「……分かった、話すよ」

そうは言ったものの、過去を話す事は正直、怖かった。

言葉に詰まり、チラリと窓の外を見る。とんでもない速さで景色が流れており、既にゼクス領の西端まで来ていた。

時間は、迷う事を待つてくれそうに無いようだ。
フェイはだらけていた姿勢を正し、ボツボツと語り出す。

「十六年前、ゼクス領が食糧難になった時、俺は捨てられたんだ。
三歳で捨てられれば生きてなんかいけない。俺が死ななかったのは
ゴルゴンと、オルフェルのお陰だ」

「ああ、オルフェルさん」

ポンと手を打ったのはルナだった。

たしかにルナが知っていてもおかしくない。あの食糧難で何十人
もの子供が孤児になった。彼らが頼るとすれば教会か、オルフェル
の所だったのだ。

「俺を拾ってくれたオルフェルは、ゴルゴンのメンバーだった。そ
りゃあ、時々盗みはしたが、それをみんなに配ったんだ。盗んだ相
手だって、悪い事して儲けてたヤツだけを狙った」

「オルフェルさんってゴルゴンの人だったんだ……ええと、義賊、
だったの？」

「そんなつもりは無かったと思う。オルフェルはいつだって自分を
悪だっけ言った。悪者だっけ割り切って、言い訳なんかしなかった
んだ」

言葉にしてみると、意外にもスラスラと言葉が出てくる自分に、
フェイは驚いていた。

そう悪い過去でも無かったのかな

オルフェルのいかにも悪人と云った面構えと、顔に似合わない穏
やかな声がフェイの頭に蘇る。

「オルフェルは俺を含めて十人もの孤児の世話を、文句言わずに見てくれた。そんなの奇麗事じゃできない。あれが悪なら、俺も悪でいい」

「でも、オルフェルさん、急にいなくなっちゃたよね？」

ルナが頬に指を当てて思い出し、フェイは小さく頷いた。

「ああ、十年前にオルフェルは急にいなくなった。後で噂に聞いたんだけど、ゴルゴンの本体に呼ばれて合流したらしい」

「アンタがパンを盗んで、半年の間、鉱山で働かされた時だっけ？」

「ああ、あの後にコノハに会ったんだっけ。オルフェルだけじゃない、一緒に住んだ仲間もみんななくなって、ちよつと荒れてたんだ。そんな時にコノハに会って、ケンカして、散々ぶちのめされて、おまけに仕事を紹介してもらった。あの時は助かったよ」

コノハは素直な謝礼よりも、フェイをぶちのめした過去に真っ赤になって俯いた。

「と言う訳で、俺の命を助けてくれたのはゴルゴンなんだ。間違っても貴族達じゃない。これが俺がゴルゴンに憧れる、本当の理由だ」

くつくつくと喉を震わせて笑う音、ディアナが可笑しそうに顔を抑えていた。

「何だよ、何が可笑しいっ！」

「ごめんね。黒猫ちゃんがあんまりにもお人好しだから、ついね。綺麗な過去を汚すようで悪いんだけど、そのオルフェル、だっけ？ たぶん、腕っ節が強かったんじゃない？」

「あ、ああ、すごく強かったよ」

「それで、孤児たちを徹底的に鍛えて、そしてゴルゴンに連れ去っ

た」

「それがどうしたって」

「それは、『草』だね」

ディアナはその灰色の髪をかき上げ、笑っているような、詰まらなそうな、ひどく曖昧な顔を見せた。

「あちこちで善人面して情報を収集したり、組織の良い噂を流したり、そこらの孤児を拾って暗殺者に育てたり。そういう奴を砂漠の民は『草』って呼んでる」

チン

フェイは短剣^{ダガー}を引き抜き、ディアナに向けた。

「オルフェルを馬鹿にするなら、俺は許さない」

カシムが動こうとして、ディアナはそれを目で制す。ルナは息を呑み、エルカは腕を組んだまま動かない。

「馬鹿にしているのそっちだと思うけどね……ああ、そうそう。その十六年前の食糧難、何で起こったのか、知ってる？」

「……知らねえよ、そんなこと」

「まあ、何故か秘密にされてるから、黒猫ちゃんは知らないわよね。ゴルゴンが穀都フィーアの食料庫を襲ったなんて」

突きつけられた短剣^{ダガー}の刃を、ディアナは人差し指で愛しそうに撫でる。

「つまり、あなたはゴルゴンのせいで親に捨てられたってわけ。な

のに恨むどころか憧れるなんて、もう可笑いッたらないわ」

ケラケラと笑うディアナにつられ、ダガーの先がカタカタと震える。

しかし、そのフェイはそれ以上刃を進めることができなかった。代わりに、すぐるようにエルカに目を向ける。

「エルカ、本当か？ ゴルゴンが原因なんて、本当なのか？」

「……ああ、本当だ」

フェイは短剣^{ダガー}を下ろすと、黙ったまま座り、俯き、目を閉じた。馬車はガタガタと真っ白な道を突き進む。時間は一秒だって待ってはくれなかった。

「ほら、飯だ」

さも悪人と云った風貌の男が、鉄格子の向こうから不機嫌そうに食事を差し出す。分厚いパン切れが一枚と、頑丈そうなカップに水がなみなみと入っていた。

「ありがとうございます」

おずおずと食事を受け取ったのは、牢に入れられているのが場違いとしか言い様が無い男の子だ。

なにせ豪華な純白のサーコートに、艶のあるシャツ、濃紺に金の縁取りが映えているスラックスだ。その衣装を売るだけで、一般人なら何年も遊んで暮らせるだろう。

しかしまあ、誘拐されたくせに、飯をもらっただけで『ありがとう』か

不機嫌そうな男は、牢の向こうでモソモソと上品に食事を取る男の子、エドガー王子を睨んだ。

陰影が見事な細い金髪、少女のような柔らかで繊細なつくりの顔、大きな蒼い瞳。天使のようなという形容詞がピッタリと来る。

年齢は十二歳。王子誕生の感謝祭があったのが十二年前なので間違いない。

それは盛大な祭りだった。高齢で子を諦めかけていた王に待望の子が生まれ、さらに王位継承権のある男の子だったせいだ。

「それが、これか」

「ん？ どうしたオルフェル？」

オルフェルと呼ばれた男は、隣にいるゴロツキの見本のような風情の男に、なんでもないと云うように、ヒラヒラと手を振った。

「いや、俺は今、とんでもない事してるんだろうなって」

「なんだ？ オルフェルとあるう悪党が、誘拐ごときでビビったか？」

オルフェルはその悪人面をさらにしかめた。

「そんなんじゃないやねえ。ただ、こいつを見てると思い出すんだ」

「何をだよ」

「昔拾ったヤツだ。アイツを思い出す度に思うよ。悪人にはどうしてもなれない人間がいるんだってな」

「なんだ、そいつグズだったんだ？」

ゲハゲハと笑うそいつは確かにグズではない。獰猛な狩人にも優秀な暗殺者にもなる。だが、オルフェルは好きになれそうになかった。

「いや、優秀だったさ。俺が教えた十人の中でも随一だな。気転は効く、手は起用、足も速ければ、剣の筋もいい。射撃は特に良かったな」

「なんだ、面白くねえ。ゴルゴンでも出世できるタイプじゃねえか」

オルフェルは「いやいや」と苦笑して首を振る。そして、それ以上話そうかと迷った。他愛の無い、どうでもいい話なのだ。

だが、こんな話でもしないと、今回の任務は胸糞が悪くてやっていられなかった。

「そいつは、まあ、一言で言うとかバカだったんだ。グズに付き合つてパンを盗みに入つて、グズを逃がすために捕まった。お陰で半年間も鉱山で穴掘りだ」

「ゲハハハッ！ そいつ本当にバカだなっ！ で、そのバカは今どうしてるってんだ？」

「さあな、十年前の召集で鉱山に置き去りにして、それっきり……思えばあれからか、ゴルゴンがおかしくなったのは。昔はウイシャの大将が先頭にたつて、ボンクラ貴族から財宝をふんどくつて、そりゃあ痛快だったんだぜ」

「知らねえよ、俺様が入ったのは七年前だからな。ゲハッゲハッ！」

オルフェルはこんなヤツに話すんじゃないかったと、小さくため息を吐いた。

バタン！

突然、背後でドアがあわただしく開かれた。

「オルフェルの旦那！ クラー参謀の伝令が来ました」

「通せ」

牢の前から離れ、監視用の椅子に座ったオフフェルの元に、伝令役の小柄な男がやって来た。

その小柄な男は軽く頭を下げて挨拶すると、地面に膝を着く。悪党にもルールはあるのだ。

「クラー参謀からの伝言です。どうやらエドガー王子誘拐の噂がシユバート国に漏れたらしいですぜ」

「ちっ……軍か領に何か動きはあったか？」

軍は動かない　クラーからそう言われたが、王子誘拐ともなればいつかは動くはずなのだ。そう考えて行動せねば、取り返しのつかない事になる。領の私兵が動く事も考えねばならない。

面倒な事になったと、オルフェルは奥歯をギリリと噛みしめた。

「ゼクス領の領主がクエスト屋を雇って、王子探索を依頼したらしいです」

「……は？　それだけか？」

「それだけです。あ、ですが、クラー参謀は黒猫に気をつけろと」「黒猫だあ？」

伝令の男は頷き、一枚の紙をオルフェルに手渡す。

オルフェルは、それを眼前に垂らした直後、我が目を疑った。

「……………フエイ」

日が中天に昇った頃、エルカは御者に馬車を止めさせた。

午前中はひたすらバイスアルムを西に走ったため、ゼクス領と王都とのほぼ中間地点まで進む事が出来た。周囲には荒野が広がり、北にはツヴェルフ砂漠がうつすらと見える。

チヨビ髭の御者が竜馬達^{ナタク}に水と干し肉を与えている間に、ルナは再び王子の場所を調べた。

木の棒が指した方角はほぼ真北。これは偶然ではなく、ディアナから入手した砂漠の地図から予想ポイントをエルカが出した結果だった。

「ここからバイスアルムを外れ、あそこに見える砂漠の縁^{へり}まで行く。その先は砂煙が危険だから、馬車を降りて歩くぞ」

「そこから目的地まではどれくらいなの？」

体力に自信が無いルナは不安そうな顔で聞く。

「たぶん、普通に歩けば二時間くらいで着くだろうが、隠れて行くとなると四、五時間はかかる」

「うわ、五時間……馬車に残っちゃ駄目？」

「すまない。ヤツラのアジトの目星は着いたが、そのどこに王子を隠しているのかが知りたいんだ」

「帰ったらミルフィーナのケーキ食べ放題、それで手を打ちましょ
う」

「……………了解した」

エルカの顔が苦渋に歪んだ。

ルナは超甘党であり、その別腹は三つを下らない。かなりの散財を覚悟した決断だった。

フェイ達がバイスアルムを外れてツヴェルフ砂漠に向かった一時間後、同じ場所を竜馬^{ナタラ}の馬車がもう一台通過した。

その馬車にいる面々はツヴァイ領公子リーガン、アハト領公子コーデイリア、ゼクス領公女セシリア、及びそれぞれのガーディアンである。

「セシリア様、顔色が優れませんが大丈夫ですか？」

「だい、じょうぶ、です」

セラの頼りない返事は、尋ねたリーガンをますます心配させた。

「このあたりで休みましょうか？」

「いえ、お願い、少しでも早く王都に、うつぶ……………ガラム、あれを」

ガラムは懷から萎れた革袋らしきモノを取り出す。セラはそれを受け取り口をつけると、盛大に吐いた。

すると、萎れていた袋は膨張し、妙に生々しいカエルの形を現したのだ。

「うわ……………」

隣に座っていたリーガンは、その生々しさにうめいた。

「一度吐くと、楽になるんです。ほら、これ、かわいいでしょ」

「……あの、それは一体何でしょうか？」

「ゲロゲロ袋のゲロちゃんです」

セラは真つ青な顔でカエル型の革風船っぱいモノを振った。相当薄い革で出来ているらしく、ところどころ内容物が透けて見える。

タプンタプンと揺れるゲロちゃんを、セラはおもむろに馬車の窓に釣り掛けた。

「こうすると酔わないって、お父様が」

「どんな密教ですか、それはっ！」

引きつった顔のリーガンに、コーディリアがもたれかかる。

「ごめん、リーガン。アレ見てたら私も気持ちが……うぶっ」

「よせっ、コーディリアッ！ 気持ちは分かるが、お前も一応男だろっ！ 耐えろっ！」

しかし、コーディリアの不調を目ざとく見つけたセラは、ガラムからもう一つカエル袋を拝借し、青ざめたコーディリアに押し付けた。

「あの、これどうぞ」

「うぶっ！」

「沢山入るので男の人でも大丈夫です。このお尻の部分を開いて、口をしっかりとつけて下さい」

「っっっ！！」

やがて、カエルが二匹仲良く吊り下げられ、王都に着くまでタプ

ンタップンと哀愁を誘ったと言う。

(29) 薄い雲が空を覆い(後書き)

お食事中の皆様、ほんつとーに申し訳ありませんっ！
皆様の明るい苦情は、小説感想コーナーにて受け付けております

(30) 砂漠は貪欲に

砂漠は貪欲に雨を吸い込む　　とうとうスコールが降り出したのだ。

このスコールが降る直前、フェイ達はゴルゴンの隠れ家らしき廃村を既に発見していた。

探索組の六人は逆に発見されないよう、砂漠用に迷彩を施した薄革のシートを頭上に広げ、その下に座り込んでいた。撥水油はっすいゆを塗りこんである雨避けシートは、雨は透さないものの酷く蒸す。

その熱気の中にいるのは、目を閉じ木の棒を静かに支えているルナだ。

「神様、神様、本当に何度もすみません。これで最後です。尋ね人の名前はエドガー・グロスターさん、どっちにいますか？　えいっ！」

木の棒が指した方向の先を、エルカはシートから顔を出してするどく睨み、地図と照らし合わせる。雨の向こうにボンヤリと見えるのは、ひとつの廃村だった。

「あの廃村に王子がいるのは間違いない。建物も限定できそうだし、敵は何人くらいだと思う？」

ディアナは必要以上にエルカに近づき、ささやくように聞いた。されどエルカは顔色一つ変えずに答える。

「二十……いや、三十以上はいるか」

「エルカ達なら、やっつけられる人数じゃない？」

ルナの言葉にエルカとディアナは揃えて首を振った。

「あそこにいるのはゴルゴンの精鋭だと思った方がいい。同人数でも勝てる保証は無いんだ」

「それに、王子を盾にとられちゃったら、私たちは一網打尽。いくら黒猫ちゃんが強くてモネ」

「だからっ」

「シッ！　ここは廃村から死角になっているとはいえ、大きな音は禁物だ」

不満そうに口を閉じたフェイの肩にポンと手を置くと、エルカは足元に廃村の略図を描いた。

そして、最後に一つの丸を加える。

「ルナの指した方角から、おそらくこの廃屋が怪しい。王子の確認を頼みたいが　フェイ、できるか？」

ったりまえ
「勿論だ」

「王子を確認するだけでいい。他領の公子にも応援を頼んであるから、ゼクス領に帰ればそれなりの救出部隊がいるはずだ。救出はそっちに任せよう」

「そいつはありがたい」

「危険だと感じたら迷わず退け、見つからない事が何より重要だ」
「分かってる」

フェイは腰に掛けてあったボウガンをルナに渡した。

「トリガーを引けば使えるようにしてある。ルナに危険が行かないようにするけど、万一の時は使ってくれ」

「ううう、使わないで済む事を祈ってるわ」

フェイは渡したボウガンの代わりに、バッグから小さなサイズの薄革のシートを引っ張り出す。ただの黒い防水革だが、用意してよかったと思う。目立たないだけで無く、濡れて動きが悪くならないためだ。

「この土砂降りは天の恵みだ。いつまで降るか分かんが、止むま
でに頼む」

「了解、店長！」

フェイは薄革を広げ、頭上に被ると雨の中へ走り出そうとした。

「フェイ！」

呼び止めたのはコノハだ。

フェイは顔だけ振り返り、目で言葉を促した。

「あの……ね、無事に帰れたら、フェイに、その、言いたい事があるの、だから」

「いや、報酬の相談ならエルカに頼むよ」

ドガッ

「いてっ、何するんだよ、コノハッ！」

「もういいっ！ 早く行って！ このバカッ！」

フェイは尻を擦りながら、ブツブツと出て行ったのだ。

「セシリア様、着きましたよ」

何時の間にか眠っていたセラを起こしたのは、コーディリアの労わるような声だった。

窓の外は既に薄暗く、空を覆う雲は僅かに赤く染まっている。ツヴェルフ砂漠の方角は既に真っ暗だ。

城門の前ではリーガンが門兵と話しており、その向こうには視界に入りきらない巨大な城がそびえ立っていた。

莊嚴華麗、その全てが高純度のバイスレイトで出来ていると言われる白亜の城

「シュバート城……」

「セシリア様はここに来るのは初めてですか？」

「いえ、エドガー王子の誕生祭　それと建国三百年祭に」

「ああ、そう言えばあの時はエルカーノ殿も来ていましたね。あの頃からエルカーノ様は素敵で……」

コーディリアは頬を染めて自分自身を抱きしめる。

首をかしげるセラの前で、三人のガーディアン達の顔が僅かに引きつった。

「許可が下りた、馬車をここに預けて城に入るぞ」

セラ達を呼ぶリーガンの口調は、始めて会った時より随分と砕けている気がした。これが本来の彼なのだろう。

ガラムに手を取ってもらい馬車から下りると、すぐさま門兵が馬車の収容にかかり　窓に吊り下げられたカエルを不思議そうに見た。

一人の門兵が、好奇心に負けてカエルに手を触れようとする。

「うかつに触るなっ！ それは危険物だっ！」

リーガンはするどく叫んだ。触ろうとした門兵は、その剣幕にビクリと直立すると、意味も無くリーガンに敬礼する。

「き、危険物でありますかっ？」

「そうだ、中に恐ろしい危険物が詰まっている。絶対に天地無用だ。お尻を持って速やかに処理して欲しい」

門兵の顔が恐怖に歪んだ。

しかし、セラはそんな事にお構いなく、ギリギリと軋む音をたてて開く巨大な門を見ている。

とうとう、ここまで来たんだ

もう、甘えも、間違いも、後悔も許されない。ここが自分の戦場なのだ。

セラは深呼吸をすると、門に向けて一步を踏み出した。

「オルフェル！ おい、聞してるのかっ？」

目の前の男が手をヒラヒラとさせていた。

「ああ、聞いてるさ。ちょっと考え事をしてただけだ。別にスコールくらい珍しくないだろう」

「珍しいさ、ここ一ヶ月は降らなかったんだ。何か嫌な予感がする」

目の前の男はやたらとネガティブなヤツだったと思い出す。何かにつけては「嫌な予感がする」と言っては仕事をサボる。しかし、その臆病さが彼を優秀にしている事も事実だ。

「駄目だ。王子の番は俺がやる。お前は外、変更は無しだ」

「ちっ、すっかり御頭気取りかよ。分かりましたよオルフェル様っ
！」

ペツと唾を吐き捨てると、ドンドンと足を踏み鳴らしながら男は廃屋を出て行った。

残されたオルフェルは、机に広げた紙を覗き、ニヤリと笑った。

「お前はそっち側に行ったんだな……フェイ」

ガタッ

「誰だっ!？」

外からの物音 扉近くにある小窓の辺りだ。

オルフェルは胸元から短刀^{ククリ}を引き抜くと、壊れかかったドアを蹴り開け外に出る。

「いない？」

そんなはずは無い、確かに気配がしたのだ。

バサッ

「上かつ!」

音だけで反応して短刀^{ククリ}を頭上で一閃させるが、そこに手応えは無かった。あつたのはただの黒い薄革だけ。

ピタリ

喉元^{ダガー}に短剣の冷たい感触が吸い付いた。

「声を出さないでくれ、オルフェル」

「……フェイ、フェイなのか」

二人の声は、豪雨の中に呆気なく消えた。

「グロスター王、夜分にお目通りを許可して頂き、ありがとうございます」

グロスター王は玉座に深々と座り、挨拶をしたリーガン達に小さく頷いた。

その顔色は見るからに悪い。確かまだ六十に満たない年齢のはずだが、既に七十を超えた老人に見えた。目は淀^{よど}んでいて、よく見れば手先が震えている。

ギロリ

グロスター王の顔をジツと凝視してしまったセラは、睨み返されて慌てて視線を下に向けた。

リーガンは三人を代表し、一歩進み出る。

「王よ、既にお聞きとは思いますが、エドガー王子がゴルゴンに誘拐され」

「なんだとっ!!」

グロスター王は玉座から文字通り飛び上がり、ひゅうひゅうと呼吸を荒くした。

「き、聞いておりませんか。てっきりゴリネル將軍がこちらに報告に上がったと」

「聞いておらぬっ! ああっ! エドガー!」

荘厳な王座の間で、王は外面も無くひざまずく膝き頭を掻きむしる。

「落ち着いてください、王っ! グロスター王っ!」

「来るなっ!」

駆け寄ろうとしたリーガンとコーディアを、グロスター王は拒絶した。顔を見合わせた二人の後ろで、セラは狂乱した王の姿をじっと見つめる。

やがて、グロスター王は疲れたように両手で顔を覆い、ため息混じりに呟いた。

「余は既に、ただの飾り物だ。誰もが余の命を狙っており。味方など、もう誰もおらん。エドガーが、エドガーだけが、余の心の支えだったと言うのに……」

それは、まるで自らに呪詛をかけているような独白だった。

グロスター王はゆらりと立ち上がり、玉座に倒れこむように座る。また一つ、歳を重ねたように見える。

リーガンは恐る恐る口を開いた。

「王、我らはあなたの味方です。どうか、ゴルゴン討伐の王命を」

その言葉の先を、王は盛大なため息で制する。

「軍は、動かんよ。將軍にしか軍を動かせんのだ。だが、ゴリネルは余の命など聞かぬ。理由無くば罷免^{ひめん}できぬのを良い事に、余を死人^{しびと}のように扱うのだ」

コーディリアはもう一歩だけ、グロスター王ににじり寄り懇願する。

「では、親衛隊をお貸し下さい。王の親衛隊が立ち上がれば、各領も決起するでしょう」

「それで、エドガーが助かる保証がどこにある？ 手薄になった城をゴルゴンが襲わぬ証拠は？ 貴様が裏切らない証拠が、どこにあるっ！」

王はどこまでも頑^{かたく}なだった。

リーガンとコーディリアは、最後の抵抗とばかりに食い下がる。

「しかし、王よ。我がツヴァイ領は、建国以来一度も、王を裏切った事などありません」

「我がアハト領も、王の威厳を損なうような詩は、一度として流しておりません」

「それが何になるっ！ 余はもう誰も信用せんっ！ 信用に足る証拠が無くば立ち去れっ！」

血走った目で、王は一喝した。それは病的なまでの人間不信であ

る。城の中の荒廃と謀略はここまで進んでいたのだ。

これ以上の説得は、無理か

リーガンは王への説得をあきらめ、去るための一礼をしようとした。

「王様……これが、証拠です」

少女の声がした。

後ろではない。もっと前、すなわち 王の方向。

リーガンがそこに目を向けた時、セラは王の前で、手を振り上げていたのだ。

パンッ

乾いた音が、玉座の間に響く。

叩かれたグロスター王は頬を押さえ、エサを求める魚のように口をパクパクと開閉させた。

「セシリア様っ！　なんて事をっ！　王に手を上げたものは、死罪なのですよっ！」

コーディリアは悲鳴のような叫び声をあげ、腰を上げようとしてその肩をリーガンにガツシリと掴まれた。

「任せよう。我らの命運を、あの小さな姫君に」

「よう、フェイ、随分久しぶりじゃないか。すっかり白犬の仲間か？」

「違う！ 確かに白犬に友人はいる。でも、オルフェル、俺は今だってゴルゴンに入りたいと思ってるんだ」

「……………なんだと？」

ロープで椅子に縛り付けられたオルフェルは、初めて声に苛立ちを混ぜた。

フェイの懐には猿ぐつわが用意してあるが、オルフェルには噛ませていない。それが危険な行為とは分かっているが、オルフェルと話がしたかったのだ。真実をオルフェルの口から聞きたかったのだ。

「どう言う意味だ！ お前は領公認の勇者様で、公女の婚約者だろうが！」

「違うっ！ あれは断じて違うんだ！」

「じゃあ、どう言う了見で、ゴルゴンを潰そうとする？ 何故、ここに来た？ ええっ、黒猫さんよ」

答えられず、フェイは部屋の奥に顔を向ける。

そこには牢があり、王子らしき豪華な身なりをした子供が、恐々とこちらを見ていた。

仕事を忘れるな

フェイは机の上に無造作に転がっていた牢の鍵を手取る。

そして、牢の前に進み……………もう一度オルフェルを振り向いた。

「オルフェル、正直に答えて欲しい……………十六年前、あの食糧難を起

こしたのは、本当にゴルゴンなのか？」

「……少しは知恵がついたじゃないか。ああ、本当だ」

「なあ、オルフェル、この誘拐は、本当にあんたがやったのか？」

「はっ！ 当たり前だ。言っただろう？ 俺は悪党だとな」

ガチャン

牢の鍵はあっけなく開いた。

フェイが目で合図すると、王子は頷いて牢を出る。その動作は静かで、物音を立てないよう注意している。愚鈍な王子ではなさそうだった。

「オルフェル、俺はアンタに感謝してる。絶対に恨んでなんかいない」

「うるせえよ！ だからお前は嫌いなんだ！ さつさと失せろ！」

「オルフェル、声を出すな。アンタを殺したくないんだ」

その言葉にオルフェルはゲハゲハと笑う。こんな笑い方はフェイの記憶には無いのだ。

「笑わせるなっ！ お前が殺す？ 無理だな、ああ無理だ。お前は悪党には絶対になれねえ。俺が保証するよ、リア＝フェイロン！」

その言葉に、フェイは泣きそうな顔をした。

「その名前をくれたのは、オルフェル、あんただ」

「覚えてるさ。そして後悔してる。お前は失敗だった。そのくせ散々俺に懐きやがって、うっとおしいったら無かったぜ！」

ドンドン

ドアが乱暴にノックされた。王子は「ひっ」と小さく悲鳴を上げ、
フェイもドアに向かって短剣ダガーを構える。

「なんでもねえよ！ さつさと持ち場に戻れっ！」

怒鳴ったのはオルフェルだ。フェイは目を見開いてオルフェルを見た。

「オルフェル、やっぱり」

「勘違いするな。俺は自分の命が惜しいだけだ。どこにでも行っちゃまえ！」

フェイは小さく頷くとドアを開き、王子を連れて降りしきる雨の中へと出て行った。

それを確認すると、オルフェルは目を閉じ小さく頷く。

お前は、こっちに来るんじゃないかねえ

そして、悪人面を歪ませ、満足そうに笑った。

(31) 王の目は狂気に染まる

王の目は狂気に染まる。

たかが公爵の小娘に頬を叩かれたのだ、こんな事は前代未聞である。

「証拠……だと？」

枯れても剣の王の威圧感は凄まじかった。いや、むしろ病的な狂気が、壮絶な威圧感を生み出したのかもしれない。後ろで見ているリーガンとコーディアですら肌があわ立ったくらいだ。

しかし、セラは引かなかった。

もちろん怖かった。逃げたかった。体のどこかで栓が抜けたように腹の奥から力が抜けていき、じわりと涙目になってしまう。

それでも歯を食いしばって、ゆっくりと頷いた。

引かない、引けない

そのセラの思いを押し潰すように、グロスター王は眉間の皺しわを深くすると、腰に下げていた剣を引き抜く。

玉座の間を照らすいくつもの灯火に、濡れたように輝く重剣ブロードソード。このシュバート国の起源とも言える『王の剣』だった。

その切っ先はセラの鼻先に突きつけられ、王の狂気を体現するかのようにカタカタと震える。

「王に手を上げた者は、一切の例外無く死罪。公女ならば分かっているよ。」

「はい」

「では、一体何が証拠だと言うのだ！ 答えよ！」

セラは息を吸い込んだ。喉がカラカラに乾き、ひゅうと音が鳴る。

「これで、王は私の命を、いつでも奪う事ができます。私は、もう裏切れません……ですから」

「だから、余の親衛隊を出せ、と言うのか？」

セラが震えるように頷くと、王は剣を引いた。安堵のあまり、膝から力が抜け落ちそうになる。

よかった、これでフェイを助けに

ギイン キンツ カンツ カラン

王の剣が、セラの足元へ無造作に落とされた。触っただけで切れそうなの刀が飛び跳ね、思わず一歩引く。

「なれば、その剣で、今すぐ自らの首を刎ねよ」

「……え」

「まず、その首を持って罪を贖^{あがな}つてみせよ、と言っているのだ」

氷水をぶちかけられたような悪寒、目の奥だけが熱く脈を打つ。

命を賭けると勇んで踏み出したのに、言葉だけの覚悟だったと思
い知った。涙が一筋、頬を伝う。

取らなきゃ、剣を、取らなきゃ

ガクガクと震える膝を必死で折り曲げ、剣の柄に手を伸ばした。
重い。

大人の手の長さほどの短い剣だが、両手で持ち上げねばそれは持ち上がらなかった。

剣を持ってよろよろと立ち上がり、一度刃先を振り上げてから、首筋へと近づける。

「っ！」

剣の重みで、覚悟のままならないまま刃に首が当たった。慌てて引き上げたが、刃を伝って血が玉座の前に赤い染みを作る。その深紅の雫に気が遠くなった。

「も、もういいでしょう！ 王よ！」

耐え切れず、コーディリアが立ち上がった。

「セシリア様、そんな事をして、あなたの大切な人が喜ぶとも思っているのですか！」

必死に訴えるコーディリアが視界の隅に入った。女性より美しいその顔に、涙が光っている。あのリーガンも顔が真っ青だ。今更ながらとんでもない事をしているのだと気がつく。

私が死んだら、フェイ、泣いてくれるかな

つい、そんな事が思い浮かんだ。

考えるまでもない。きつと、バカだアホだと罵りながら泣いてくれるだろう。その姿を想像すると、体の震えが少し収まった。

「コーディリア様……これは、フェイのためじゃ、ないのです」

そうだ、もう誰かを言い訳に生きたりしない。

フェイに生きて欲しいと願うのは他の誰でもない、私自身なのだ。

「これは私が私のためにやる事。私が生きている証」

そうだ、フェイと会うまでは、私はきっと死んでいたんだ

それがたった数週間、世界は色づき、意味を持ち、そこで初めて私は生まれたのだ。

逢ったたびに鼓動は加速し、きっと一生分を打ち終わったのだ。

この成長しない大嫌いな体も、今このために存在していたのだ。

やってみせる

涙が流れるのは止められない。

腹の奥がよじれるほど怖いのも、消しようが無い。

しかし、セラは王の狂気の目を、真っ向から見返した。

「王様、必ず、親衛隊をお貸し下さい」

セラは目を閉じ、手に力を入れた。

コーディリアの悲痛な叫び声があがる。

痛く、ない？

うつすらと目を開けると、王が手を伸ばし剣を止めていた。

あの老体で、片手一つで柄の先を握り、セラの両手から剣をもぎ取ったのだ。

「……あ、あれ？」

体から力が抜け、セラはその場にへたり込んだ。

グロスター王は片手で易々と剣を振り回すと、セラの目の前で刃先を鞘に収める。

「何故、そこまでやれる……何故、死の恐怖に抗える？」

王はセラに問う。

その口調は忌々しげであり、しかし、何かを渴望^{かつぼう}するかのようだった。

何故か 答えは簡単である。こんなにも明確に、この胸に存在しているのだ。

セラは口を開いた。

「え、ええと、あの」

しかし、言葉にすることが出来なかった。それは言葉に出来るもので無いと、セラは知らなかったのだ。

代わりに、ひどく遠回りな事を言い始める。

「私は、ついこの前まで、知らない人が怖かったです。知らない人と話す事も嫌いだったし、それでもいいと思っていました」

目を閉じると、一室に閉じこもっていた空虚な日々が甦った。

「だから、私は知ろうともせず、何も求めず、何もませんでした。私は、世界を拒絶していたのです」

王の顔が歪む。しかし、セラは気がつかない。その顔の歪みの原

因を知りもしない。

王の心から愛した王妃が毒殺された事も。

同じ食事をたまたま遅く食べ、妻の苦しむ姿に慌てて吐き出し、自分だけ助かってしまった事を。

それ以来、誰も信用せず、誰も寄せ付けなくなった事を。

「でも、私に大切な人ができました」

セラの目は、ここでない遠くの人を見た。

その目のはかつて、死んでしまった王妃がグロスター王に教えてくれた、人を信じる目だ。

「その瞬間から、沢山あった怖いものが無くなりました。本当は優しい人のほうが全然多いのだと知ったのです。でも代わりに、死ぬ事より怖いものができました」

「死よりも、だと？」

「はい……その人に嫌われる事です」

セラの整った顔が、悲しみに歪む。

「なのに、私は愚かで、大切な人を、傷つけ、殺しそうになったのです」

王の顔も同じように歪む。

愛すべき人が守れなかった事を、悔やまぬ日はないのだ。

「なのに　それなのに、フェイは、私を励まそうと、言葉をくれたのです」

セラは真正面から王の目を見て、言った。

「あなたは生きています。生きていますなら証拠を示しなさい。腐っている暇なんか無いって」

王の心臓が跳ね上がる。その言葉は、かつて王妃が王に言った言葉なのである。

若く王に就任し、間違った政治をした時、王妃は背中を叩き、そう言ったのだ。

「……そう言ったのは、フェイとか言う若造だと？」

「はい。フェイは、今この時、命を賭けてエドガー王子を救出しようとして、懸命にゴルゴンと戦っています」

「なれば、今から救援部隊など送っても間に合うまい。そんな事にお前は命を賭けるのか？」

その言葉に、セラは頭の奥が真っ赤になるほど怒った。

「間に合わない事など、どうでもいいです！ 間に合うかもしれない事が、私には大切なのです！」

セラは王に指を突きつける。その指は小さくとも、まっすぐ王の心を刺した。

「剣の王よ、あなたは生きています！ ならば、その証拠を見せてください！ 腐っている暇などありません！ エドガー王子は、他の誰でもない、あなたの助けを待っているのですっ！」

王の目に光が戻った。淀^{よど}んでいた瞳が蒼い輝きを発したのを、セラは確かに見たのだ。

「アイオール！」

王の呼びに、すぐさま一人の騎士が滑るように現れ、玉座の横に
跪く。
ひざまづ

「アイオール、エドガーがゴルゴンに誘拐された。至急、城中の親衛隊を集めよ。十分でだ！」

「し、しかし、王、私達はあなたの盾であります。あなたの傍を離れるなど」

「痴れ者がっ！ 王の剣を掲げ、余が戦うと言っているのだ！」

アイオールと呼ばれた騎士は下げていた頭を跳ね上げた。

「王よ、戻られたのですかっ！」

「何を訳の分からぬことを……そうだ、アレは動かせるか？」

「ハッ！ 十分に用意いたしますっ！」

アイオールは歓喜の応と共に、玉座を滑るように去った。

「さて、セシリア・ラドクリフ」

「は、はいっ！」

セラは名を呼ばれ、ビシリと姿勢を正した。その姿は祖父に怒られている孫の図である。

「王へ手を上げたものは死罪だ。例外は認められない」

「……はい」

「しかし、王を諫めただけなら、何の問題も無い。いや、むしろ良くぞ言ってくれた。お陰で余は剣の王だと言う事を思い出す事ができたのだ。礼を言う」

「い、いえ、もったいないお言葉です」

「お礼に、この剣の国の取って置きを見せてやろう」

王は微笑むと、不器用なウインクをセラに贈ったのだった。

フェイと王子は廃屋の物陰に隠れ、見張りが途切れるのを待っていた。しかし、さすがに見張が多い。

一人でならどうともなるのだが、二人で抜け出すチャンスがなかなか無いのだ。

「あの、フェイさん……って呼びてもいいでしょうか？」

王子がヒソヒソ声で話しかけた。おしゃべりを注意しようかとも思ったが、この土砂降りなら問題ないだろうと判断する。

「いや、フェイでいい。黒猫なんて絶対にやめろよ」

王子は微笑む。その表情は子供ながらじつに様になっていた。将来はさぞ女泣かせな王子なるだろう。

「あの、ではフェイ。さっきの人、オルフェルと呼ばれていた人ですが」

「ああ、どうかしたか？」

「あの人、怖そうにしてたけど、僕にもずっと親切でした。いい人ですね」

「誘拐されていい人って、お前、どんだけ能天気なんだよ……あ」

フェイの頭で、ピタリとパズルのピースが重なる。

どこかで見たことがある能天気かつお人好しだと思えば、セラと似ているのだ。そして、セラなら顔の造詣そうけいでもこの王子に負けない。二人が並べば、それは見事な絵になることだろう。

「よし、王子、いつかお前にピッタリのヤツを紹介してやる」

「は？」

「いいからいいから、任せとけ！」

フェイは上機嫌で王子の肩を叩いた。

そんな事を離している間に、雨が徐々に止んでくる。これはまずかった。

空は真っ暗だが、雨が止めば月も出るだろう。視界も晴れるし、音も隠せなくなる。

ヒューイイイイイ！

突然、鋭い口笛の音が闇夜に響いた。

「フェイ、この音は？」

「くそっ、牢が空になってる事がバレたな……………おっ、見張りがズレた。いくぞっ！」

フェイがマークしていた見張りが、口笛の音につられ移動した。

隙を逃さずフェイは王子の手を引き、廃村を抜け出す。

ここからエルカ達の隠れている場所まで五分ほど走らねばならない。その間、視界を遮蔽しゃへいする物は何も無い。

ここに来て『救出しなくていい』と繰り返し言っていたエルカの言葉が、ようやく骨身に染みた。王子を救出すれば追っ手はどこまでもやって来るだろう。何も無い砂漠の上で手練の追っ手を巻く事

は、不可能に近いのだ。

頼みの綱は闇夜だったのだが、雨はあっという間に止み、雲間から恨めしいほどに明るい満月が姿を現した。こうなると、時間との勝負だ。

「おい王子っ！ 背中に乗れっ！ いそげっ！」

王子は一瞬だけ戸惑い、小さく「すみません」と謝るとフェイの背中に飛び乗った。セラより若干重いが、コノハとそう変わらない。フェイは濡れた砂漠をザクザクと走り出した。

ゴルゴンの指笛の音は、エルカ達の所にも届いていた。

「フェイがしくじった？」

エルカは心底驚いていた。フェイがこの手の潜入でしくじるなど初めてだ。

いつだって、誰にも気付かれず偵察し、成果を上げてきたというのに。

それだけゴルゴンの見張りが優秀だったという事か

「エルカ、私が行って様子を見てくるわ」

「ディアナ？ いいのか？」

「もちろん。砂漠の民はリア＝フェイロンに協力すると言う盟約をしたじゃない、もう忘れたの？」

「助かる。ルナ、君は馬車に戻れ」

ルナは黙って頷く。この場合、自分がお荷物になることが良く分かっているのだ。

ディアナとルナは、それぞれシートの反対側から飛び出した。

ヒュン ザクッ

フェイのすぐ右側に矢が刺さった。

もう追いつかれたっ!?

フェイは、慌てて王子を背からおろす。

「 このまま真っ直ぐいけ 俺の仲間がいるはずだ。いそげっ」

息を整えながら小声で指示を出し、ダガーを引き抜く。王子はすぐさま指示に従い、砂漠をひたすらに駆け出した。

振り返った先には三人の男がいた。弓を持った男が一人、残り二人は盗賊らしく大振りな短剣ダガーを持っている。

三人……やれるか?

「おい、こいつ黒猫じゃねえか!」

「殺れば出世間違いなしかよ!」

「ヒュウ、ラッキー!」

三人は軽口を叩きながらも油断無く近づいてくる。無論目はカケ

ラも笑っていない。さりげなく走ってきた息を整えているのだ。戦い慣れている。

出し惜しみなんかしてる場合じゃない……でも、殺したくない……できるか？

フェイは自問自答を繰り返しながら、短剣ダガーを逆手に構えた。その時、背後から艶めかしい声なまが響く。

「あら、三人とも不細工ね。アンラッキー」
「ディアナッ！」

月明かりを浴びたディアナはフェイの背後に音も無く近づいた。詰まらなそうに髪を掻き揚げ、波打つ灰髪の下にあったのは、満面の笑み。

「黒猫ちゃんは、あの射手だけお願いね」
「ディアナ、頼む、殺さないでくれっ！」
「……全く、まだゴルゴンを信じてるの？」
「違う、そうじゃない。でも、殺したくないんだ。頼むっ！」
「ふう、了解よ。黒猫ちゃん」

ディアナは躊躇ちゅうちう無く二本一対の曲刀シヤムシールを抜き放ち、砂漠の上を滑るように盗賊二人に迫った。

「喜ばなさい、認めてあげるわ。あんたたち二人で一人前ってね」

盗賊たちは、戸惑いの顔を浮かべながらもそれぞれの武器を構える。その二人の中心へ、ディアナは笑いながら躊躇ちゅうちうなく割り入った。

「砂漠の踊り方、教えてあげるわ」

「ハアツ……ハアツ」

王子はひたすら走っていた。

まだ生きたいのだ。いつもは怠惰に過ごしていたくせに、命の危機になった途端、死にたくないとひたすらに願っている。

だめだ、もう、限界

しかし、その体は限界に達していた。王は体の弱い王子をさらに過保護に育て、結果として一般人よりはるかに劣った体力になってしまったのだ。

剣の王の継承者として相応しくない事を、王子は痛切に感じていた。

ガツ

つま先が上がり切らず砂漠に引つ掛け、躓^{つまず}き、濡れた砂に思いっきり顔を打ち当てた。口の中に砂の味が広がる。

力が抜ける。服が湿り、それが気持ちいい。いっそ、このまま眠ってしまいたいと言う欲望が頭をもたげた。

「大丈夫？」

優しい声が空から降ってきた。

王子は口から砂を吐き、見上げる。

そこにいたのは、月明かりに淡く光る栗色の髪をした

女神？

その優しそうな女性はそっと屈み、顔の砂を指先で払った。顔から火が出そうなほどの羞恥、心臓が飛び跳ねた。

「はい、もう大丈夫よ」

女神はそう言って微笑み、その笑顔に王子は全身を貫かれたのだった。

みんな、大丈夫かなあ

ルナは一人、砂漠を歩いていていた。

戦力にならないとは言え、一人だけ逃げ出していると考ええると、罪悪感が沸いた。

ふと気になって振り返ると、遠くに白い光が見える。目を凝らすと、それは人だ。

「追っ手？」

油断無く、ボウガンを白い人影に向ける。だが、どうにも違和感があった。

まず何より派手すぎる。白いコートを着た盗賊など、あまり聞かない。それに、必死で走っているようだが、どちらかと言うと逃げている感じだ。

徐々にその人影は近づいてくる。小さな身長は、あきらかに子供である。

あつ！ まさか、あれが、王子様？

ピタリと頭の中で思考が噛み合った瞬間、ルナは駆け出した。

バタリ

力尽きたように王子は倒れ、そのまま起き上がらない。
ルナは慌てて駆け寄り、声を掛けた。

「大丈夫？」

王子は生き返ったかのように、ゆっくりと顔を上げた。
月明かりを受けキラキラと光る金髪、優しげでかつ繊細な顔立ち、
どこまでも澄んだ蒼い瞳、天使のような儂い美少年。
ルナの理想の結晶が、そこにいた。

「いやね、早過ぎよ。もっと楽しませて欲しかったわ」

そう言うディアナの息は、確かに殆ど上がっていない。そのセリフに気を取られた盗賊の首筋に、フェイはダガーの背を当て昏倒させた。当然、その息は上がりまくっている。

「お疲れ様、向こうでエル力達が待ってるわ。いくわよ」
「……ゼイ……くそっ、化け物親子めっ……ゲホッ」

咳き込みながらも、フェイは負けん気だけでディアナに追走した。

「あの、皆さんを置いて来ても、良かったのでしょうか？」

王子の問いにルナはニツコリと頷いた。

「フェイやエル力なら、大丈夫。きっと砂に潜ってでも助かります。それより、一刻も早くお父様のところへ行きましょう。みんな本当に心配しているんですよ」

ルナと王子はあれから二時間をかけて砂漠を抜け、馬車にたどり着いた。

そしてそのまま馬車に乗り、一路バイスアルムを目指していたのだ。

今は何より王子の命を優先するというルナの判断である。

「それに、バイスアルムに出れば、通りかかった商人達に救援を求める事も出来ます。今はとにかくお休み下さい。さあ、膝枕をして差し上げますから」

「……はい」

王子は真っ赤になりながらも、その膝に寄りかかった。

「ルナ様、王子！ 馬車が見えますぞ！」

チョビ髭の御者のこの一言に二人は飛び起き、窓から顔を出した。

月明かりを受けて横たわる真っ白なバイスアルムに、一点の染みがある。シルエットからこの馬車と同じ竜馬ナタクの馬車であると分かった。一部の上流階級しか所持できない超高額な馬車のはずである。ルナ達の馬車がバイスアルムに近づくと、向こうも気がついたのか馬車を止めた。

「あ！ あれは剣の紋章！ 軍の馬車です！」

馬車の脇にある紋章を見つけ、エドガー王子は声を弾ませた。御者はバイスアルムに入ると急いで馬車を止め、ルナ達はすぐさま飛び出した。

「私はエドガーⅡグロスター！ この国の王子です！ 至急、救援をっ」

馬車からぬつと人影が現れる。

キツそうに正規軍の将校服を着込んでいる太った男だ。

「何故、お前がまだ生きている？」

ゴリネルは憎々しげに吐き捨て、剣に手をかけた。

(32) オルフェルと四十人の盗賊(前書き)

補足: 1 キュピト 1.6 mです

(32) オルフェルと四十人の盗賊

オルフェルと四十人の盗賊はフェイ達の退路を断ち、包囲した範囲を徐々に狭めていた。

逃げ回れるのも、ここまでか……くそつ、予想よりも数が多い

エルカは夜空を睨むように見上げる。

確かに人数の面でエルカの予想は外れた。しかし、その戦術は盗賊をも感嘆させたのだ。足跡を細工し追っ手を違う方向へ引き付け、それこそ砂の中に隠れてやり過ごし、指笛の暗号まで解読して誤報を流す事までやった。

ただ、腕利きの盗賊四十人から四時間も逃げおおせられたのは、解放されたオルフェルが追撃を遅らせた為でもある。お陰で王子とルナは一度も襲撃せずに脱出できたのだ。

だが、フェイ達は砂漠の端まで後一步のところで囲まれてしまった。

上出来と成功は違う。

エルカは悔しさにギリギリと奥歯をかみ締めた。

「フェイ。この期に及んでまだ『殺すな』とは言わないだろうな？」

「……ああ、我俣^{わがまま}を言つてすまなかった」

答えたフェイの表情は、エルカ以上に苦渋に満ちていた。

オルフェルを始め、接触した斥候^{せうこう}の盗賊を殺していれば、少なくとも十人は追っ手を減らせたはずだった。自らの我俣でエルカ達を危険な目にあわせているのだ。

自分の責任は自分で取る

「エルカ、俺が敵を引き付ける。各個撃破を頼む」

フェイはエルカの返事を待たずに一人で飛び出した。

ようやく、砂漠での走り方も様になってきたのだ。すくなくとも十人は集めなくてはならない。

砂漠の盛り上がった部分に立つと、フェイは短剣^{ダガー}をかざし、ゆっくりと近づいてくる盗賊たちに叫んだ。

「俺の名は、黒猫リア＝フェイロン！」

名前が売っていたのは囃としては幸いだった。盗賊達は面白いようにざわつき、視線をフェイへと集める。

黒猫なんて、本当の俺じゃない。リア＝フェイロンだって本当の名前じゃない。でも、今は使わせてもらう

フェイは月に向かって甲高く笑うと、くるりと短剣を回した。

「今日の俺は機嫌がいい。まとめて相手をしてやるから　かかってこい！」

「ゴリネル將軍！　まだ生きていたのかとは、一体どう言う事です
かつ！？」

「……クラーのヤツめ、秘薬を使って王子を操ろうとしたか。だが、
天は我に味方した」

ゴリネルは王子には意味不明の言葉を呟くと、鈍く光る剣を抜き放つ。それを見たルナは、ゴリネルと王子の間に割って入った。

「待ちなさいっ！ あ、あなたっ、將軍なのに、何考えてるんですかっ！ こんな可愛い王子様を！」

そして手に持っていたボウガンをゴリネルに突きつける。その危なっかしい挙動に、ゴリネルは冷や汗を流し一歩引いた。

「貴様　黒猫の仲間か？　手が震えてるぞ？　そらっ！　そこをどけっ！」

「どきませんっ！」

ルナはボウガンを構えたまま、逆に一步を踏み出した。ゴリネルの指摘の通り、ルナの膝はガクガク震えている。それでも、この背後にある者は守らねばならないのだ。

ルナは精一杯の怖い表情をし、ゴリネルを睨みつけ、啖呵^{たんか}を切った。

「私は何があってもここをどきませんっ！　たとえ、神様が砕けようとして！」

「砕くなっ！　貴様、それでも神官かっ！」

ゴリネルは思わず突っ込んだ。しかし、ルナは胸を張って答える。

「いいえ、私は神官見習ですっ！」

「……貴様の担当にだけはなりたくないな」

ゴリネルは痛そうにこめかみを抑えた。だが、それも一瞬の事だ。

「わしは、ゴルゴンを何度も撃退した英雄だ！ 貴様ごとき、相手にすらなんのだ！ 分かったらさっさとどかんかつ！」

ブンブンと剣を振り回され、ルナはバランスを崩し、ボウガンの狙いを大きく逸らしてしまった。

機を逃さず、ゴリネルはルナにとどめを刺そうと剣を振りかざす。

ゴゴゴゴゴッゴゴゴゴゴゴオッ

突然、轟音が地面を揺るがした。

途切れない断続的な音、石臼で粉を引いた音を何倍も大きくしたような、そんな地響きが近づいてくるのだ。

「なにあれっ！」

素っ頓狂な声を上げたのはルナだけである。將軍と王子は、その正体を知っていたのだ。

「^{ダンブ}蒸気車が、何故ここに！？」

^{ダンブ}蒸気車と呼ばれたそれは、まるで鉄の塊であった。真っ黒な鉄の塊がバイスアルムの上を、大量の白煙を吹き上げ接近している。無骨ではあるが勇壮なそのフォルムは、まるで鉄で出来た煙突付きの一軒家が疾走しているようだ。

ギギイイイイイ

^{あぶらぜみ}

油蝉が何十万匹と擦り潰れたような音が、大気を侵し支配する。

ルナはその音に耐え切れずボウガンを投げ捨てて耳を塞いだ。

音と引き換えに鉄の塊は速度を殺し、最後にガタンと止まる。同

時に耳障りな音も消え、中央にある扉が跳ね上げられた。

蒼く輝く鎧兜を身に付けた老人が、蒸気車タンクの中から姿を現した。

「ゴリネル……」

怒気を孕んだ声が轟く。

「グッ、グロスター王っ！」

ゆつくりとタラップを降りる人影を見て、ゴリネルはそれこそ目が飛び出るように驚愕した。

「我が最愛のエドガーに、何故剣を向ける？」

「あつ、あの、これは」

「アイオール！」

王の掛け声と共に青い影が蒸気車タンクから飛び出し、ゴリネルと衝突した。

ゴリネルの剣を打ち払い腕を捻り上げる。野生の獣にはありえない、流れるような一挙動だ。

「ゴリネル、言い分は後でたっぷり聞かせてもらおう」

その鬼のような表情の王に、なんの警戒も無く走りよる人物があった。

「父上っ！」

「エドガーッ！ 無事だったか！」

グロスター王は先ほどの怒気の孕んだ声とはまるで別人のような

優しい声を上げると、駆け寄り、息子を抱きしめた。

「父上、申し訳ありません。僕が不甲斐ないばかりに……」
「何を言う、よくぞ無事でいてくれたっ！」

それ以上の言葉は要らなかった。ひたすら互いのぬくもりを感じるため抱き合う。その光景にルナはそつと涙を拭いた。

トントン

後ろから肩を叩かれる。

何かと思い振り向くと、金髪に二本の尻尾が左右に揺れていた。

「あれ、セラちゃん？」

「フェイは？ フェイはどこ？」

「ああああっ！ あのね、ちゃんと覚えてたよ？ ええと、今、盗賊に襲われてて、ギイイっと、方角は、ええと、あっちなんだけど」

フェイ達の事をすっぱり忘れていたルナは、慌てて答えようと支離滅裂な説明をする。しかし、セラは重要な部分を聞き取ることに成功していた。

フェイは向こうで、戦っているんだ

セラは頷き、その小さな指で一点の方角を指し示し、王に向って声を張り上げる。

「王様！ あそこで、今あの場所でフェイが戦っているのです。力をお貸し下さいー！」

「父上、私からもお願いします。フェイは僕を命懸けで助けてくれた恩人なのです」

王は二人に鷹揚に頷き、アイオールに指示を飛ばす。

「^{ダンプ}蒸気車を北に向けろっ！ 今すぐ救出作戦を実行する」

「む、無茶です！ これはバイスアルムを走るようにしかできてお
ら」

「だまれ！ 無茶かどうかなど、後で決めればいい！」

アイオールはその言葉を覚えていた。王に仕えて二十年、散々その言葉に泣かされたのだ。だが、今はその言葉をこの上なく嬉しく感じる。

アイオールは両の拳をガツリと合わせ、王への忠誠を誓った。

「^{イエス}了解、^{マイロード}王様！ ^{ダンプ}蒸気車、^{ハードボート}取舵一杯！」

フェイは思惑通り盗賊たちに囲まれていた。

その数はゆうに十を超え、数えるのが嫌になるほどの盗賊が周りに群がっている。

その中心にるのがオルフェルだ。

オルフェルは飄々（ひょうひょう）と笑っていた。だが、本当は笑っていない事をフェイは知っている。知っているのに、どうしようもない事もあるのだ。

今からオルフェルと、殺し合うんだ

短剣^{ダガー}を逆手に構え、息を細く長く吐き出す。
気を落としている暇は無い。どこから敵が来るのか、それだけに集中した。

「こいつ、まだやる気だぜっ！　ゲハッゲハッ！」
「油断するな、嫌な予感がする……」

盗賊たちの気配も、獲物を狩る時のソレに色を変える。

「頼む。俺にやらせてくれ」

その緊張感を破り一歩前に出たのは、やはりオルフェルだった。
盗賊たちは不満そうに声を荒げながらも、しかし、一様に足を止める。

これだけの手練達に命令できるのだ、やはりオルフェルとは凄い男なのだ。

その男が、偽りの嘲笑を貼り付け、武器を正眼に構える。

「　　フェイ、せめて俺の手で楽にしてやるよ」
「オルフェル……やっぱいいやだ！　俺はっ」

オルフェルはそれ以上の言葉を遮るように、盛大なため息を吐いた。

「だから、お前は　　嫌いなんだよっ！」

オルフェルの短刀^{ククリ}が闇夜に閃き、フェイの短剣^{ダガー}と交錯する。響くのは虚しい金属音と儚い火花。

三度の交錯の後、短刀^{ククリ}がフェイの肩を切り裂いた。
そして、それを見たオルフェルの顔が、フェイにしか分からない

ほど小さく、歪む。

ついでフェイの短剣が、オルフェルの手の甲を小さく抉った。まるで自分を心をえぐったような衝撃が、心臓を締め上げる。

こんなの嫌だ、嫌だ、嫌だっ！ 誰か、助けてくれっ！

フェイが声に出さず叫んだ。

そして、その時、ソレはやって来た。

ゴゴゴゴオゴゴゴオオッ

地面から体を這い上がってくるような轟音。

砂漠にある無数の砂が一粒一粒ピヨンピヨンと飛び跳ね、フェイとオルフェルの剣が交錯したまま止まった。

「な、なんだ？」

「おいっ！ あれっ！」

「ベヒモス地竜か？ いや、それ以上の何か……嫌な予感がする」

盗賊達のざわめきの向こうに、とんでもない砂煙が立ち昇っていた。

ゴゴゴ……ゴゴ……ゴ……

その轟音の正体がようやく視認できる距離になって、その物体は静かに停止する。その黒い塊は動けぬ事に不満を表すかのように、盛大な白煙を上げた。

ついで、中から次々と青く光る鎧をまとった人影が沸いて出る。その数は五十人に近い。

「あれは、青騎士団!?」

オルフェルは戦いから身を引いて、息を整えながら目を凝らす。

「青騎士団つて、まさか、王の親衛隊か？」

盗賊の一人が聞き返す。青騎士団とはシュバート王国の精鋭四十人で構成されている、王を守るためだけにある騎士団だ。少数ながら、全員が名のある剣の使い手である。

これには盗賊たちも怯んだ。

「それが何故、王城から出てくるんだよ？」

「どうするよ、オルフェル？ 砂漠じゃ逃げ切れねえぜ、いっちょやってやるか？ ゲハハハッ！」

「……待て、何か、来る」

砂漠の上を凄まじい速さで走ってくる人影があった。

オルフェルはじめ、竜馬^{ナタク}が単騎で駆けているのかと思っただ、そうではない。誰かがその肩に乗っているからだ。ナタクは絶対に人を乗せないのだ。

やがて、そのシルエットが月光によって白く染められる。

「……あれは、ガラム 風のガラムっ！」

蒸気車^{ダンプ}はあと一步のところまで車輪が砂に埋まり、減速を始めた。

フェイ達の居場所をルナに確認してもらいながら、一直線にここまで来たのだ。しかし、その重量ゆえ砂漠は走れなかった。むしろ、

よくぞここまで走ったと言える。

セラは王の前に跪き、今一度乞う。

「王様、ゴルゴンの処罰を、王子を誘拐した者達の処罰を、どうか私に任せてください」

「……それは、フェイと言つ者を救つたためか？」

セラは揺れる鉄の中で毅然と踏みとどまり、大きく首を振る。

「いいえ、それは他の誰でもない、私の我侭です。どうか、どうかお許しを」

「どこまでもあいつに似ておる………良かるう。セシリア」ラドクリフ、お前が裁け！」

王は亡き妻を思わせる少女に、腰にあった剣を渡した。

少女はそれを抱くように抱えると、深々と一礼する。

「心から感謝を申し上げます……ガラム、お願いっ！」

蒸気車ダンブが息絶えるように停車するや否や、セラはガラムの肩に飛び乗った。

主人を乗せたガラムは、まるで竜馬ナタクのように砂漠の上を走り、フェイ達との距離をみるみる縮めた。

来た。とうとうここまで来たんだ

セラはガラムの頭にしがみつき、ただ一人を懸命に探す。

また、兄上に怒られるかも知れない。フェイを危険にさらすかも

しれない。だからと言って、止まるわけにはいかないのだ。たとえば間違っていたとしても、後悔するとしても、

フェイの、力になりたい

「セシリア様、ヤツを見つけました……派手に囲まれておるようですが」

「お願い、ガラムっ！ 急いでっ！」

返事の代わりに持てる全速力を持ってガラムは応えた。

フェイの姿がセラの目にも映った。肩が裂け血が流れている。そして、信じられないと言った顔で、こちらを見ていた。

フェイと目が合い、胸の奥が火が灯ったように熱くなる。

セラはその小さな体に、吸える空気を全て吸い上げ、力の限り、想いの限り、叫んだ。

「剣を引きなさい！！！」

その音量に盗賊達は、一斉にたじろいだ。

そして、その後もセラは止まらない。止まるはずが無かった。胸に抱く王の剣を抜き、鞘を投げ捨て、両の手で剣を掲げる。

「剣の王の名において、あなたたちの命を保証します！ 剣を引き、降伏なさい！」

盗賊達は顔を見合わせた。抵抗するか、逃げるか、降伏するか。

「やめたやめたっ！」

その中でオルフェルは早々に短刀^{クラリ}を空高く放り投げる。

「こんなクソみたいな任務なんかやってられるかつ！ クラーの召使いじゃねーんだよ、俺はっ！」

その声が引き金になって、剣が次々途中を舞う。

「命が無事なら、まあいいか」

「どうせなら可愛い譲ちゃんに降伏したいってもんだ。ゲハッゲハッ！」

「くそっ、だから嫌な予感がしたんだ……」

そこに青騎士が駆けつけ、一人一人に縄をかけていく。中には逃げようとする盗賊もいたが、すぐに捕まったようだ。

歓声、怒声、嬌声、奇声……その混乱の中から、ゆっくりと歩いてくる、一つの黒い人影。

「 フェイ」

ガラムは何も言わず、砂漠の上へセラを下ろした。

いまさらながら膝から力が抜け、セラは「あっ」っと小さな悲鳴を上げてよろめいた。

しかし、倒れそうな小さな体を、二本の細い腕が包みこむ。

フェイの細い体が視界一杯に広がり、強く、強く抱きしめられた。

「……………ありがとう、セラ……………ありがとう」

体を包む温かなぬくもり、耳元でささやく優しい声、そして初めて見るフェイの涙。

間に合った。生きていた。力になれた。

間違っ、て、なかつた

暖かな腕の中で、セラは声を上げて泣いた。

リーガンとコーディリアが駆けつけた頃には、全てが終わっていた。

そこにあつたのは、抱きしめ合う二人の姿だけだ。

「……リーガン、私は決めたよ」

「何を決めたんだ？ コーディリア」

コーディリアはその美貌を輝かせ、満天の星空に腕を広げた。

「この物語をシュバート国全域に広めよう！ 剣の国の黒猫の物語だっ！」

「『の』が多すぎるタイトルは陳腐だな。せめて一つ削るべきだ。それに、シュバート国全域だと？ いったい何年かかると思っている？」

「一週間さ！ アハト領の力を侮っているのかい？ バードギルド 吟遊旅団にかかれば、噂なんて一週間で国を満たしてみせる！ ああ、リーガン、僕は感動しているんだ。この奇跡を見てそうは思わないのか！」

「確かに、幸運すぎる。どこかで反動が無いといいな」

コーディリアは両手で顔を覆い、嘆きのポーズを取る。さすがに様になっているとリーガンは思ったが、悔しいので口には出さない。

「リーガン！ 君はなんと云うネガティブな人間だ！ いいかい、

君も国に帰って、この噂を広めるんだ」

「なんで私まで……いや、なるほど。彼をゴルゴン討伐の旗印にするわけか」

「旗印だなんて、君はなんと人聞きの悪い事を言うんだい！」

「ほう。では何だと言った？ あの手猫を、一体何にするつもりだ？」

コーディリアは「決まってるじゃないか」と頷いて答えた。

「ただの英雄だよ」

(33) 始まりは清々しい朝

始まりは清々しい朝だった。

窓からの柔らかで暖かい朝日を浴び、フェイはベッドの上でグイッと体を伸ばす。

「よし、快晴っ！」

外を見て顔を綻ばせて飛び起きると、そのままりビングを通り抜け真っ直ぐに厨房へと入る。鼻歌交じりに炭に火を入れると、水瓶に溜めた水をケトルで掬^{すく}って火にかけた。

それらの行動の目的はただ一つ、最高のベルリーフティーを淹れる事である。

ケトルから吹き出る蒸気で乾燥した茶葉を丹念に蒸らし、沸いたお湯をすばやくポットもカップに入れて十分に暖める。

万全を期した上でポットのお湯を捨てると、再び沸きたてのお湯を注ぎ入れ、最後に香り高き茶葉を投入する。お湯と茶葉が渾然^{こんぜん}一体となり、赤とも黄とも云える色が生み出されていった。

「綺麗だ……なんて美しい」

名残を惜しみながら、渋みが出る前に茶葉を茶漉^{ちやこ}しで掻き出す。その頃にはリビングの中は芳しいベルリーフの匂いで満ちていた。

「おい、エルカ！ お茶が入ったぞ！ そろそろ起きてくれ！」

店の奥に声をかけながら、フェイは料理用のナイフでパンとチーズを手早くスライスし、残った炭火で軽くあぶる。

「……おお、いい匂いだな。一週間ぶりなのに懐かしい気がするよ」
寢癖の残るエルカが、欠伸をかみ殺しながらリビングに現れ、店の隅に置かれたテーブルにつく。

フェイは真っ白な陶器のポットから温めたカップへと静かにお茶を注いだ。

コポコポと言う水音が少しづつキーを上げる。これがたまらない。フェイは堪えきれずカップを鼻先で燻らせた。

「……ふう」

鼻から頭に抜けるような香りが突き抜ける。神様ありがとう！と、無意味に叫びたくなる瞬間だ。

「フェイ、今日なんだろ？」

そのエルカの何気ない質問に、フェイは満面の笑みで頷いた。

「ああ、今日はクロフの結婚式だ！」

砂漠のど真ん中で死闘を繰り広げてから、既に二日が経っていた。あの後、手伝ってくれたディアナとカシムは、事の顛末を砂漠の民に報告すると別れ、一方のフェイ達は竜馬の馬車に乗ってゼクス領につくまで仲良く眠りこけた。

当然、セラだけは別の馬車で領主宅へ直行だ。

エルカーナに戻るなりエルカは領主宅に金をふんだくりに行ったが、そこまでタフでないフェイはルナに治療をしてもらって、そのまま体力を回復させるべく大人しく眠り続けた。

なにせ、待ちに待ったクロフと、酒屋の看板娘レンファの結婚式が行われるのだ。疲れた様子など見せたくないではないか。

「ふんふんふん」

フェイは上機嫌で、領主からふんだくった上質のシャツとスラックスを身に付ける。

クロフ達の式場はルナの働いている教会で、エルカーナからはそれほど時間がかからないのだが、楽しみのあまり早いと分かっている、つい身支度を急いでしまう。

そんなフェイの様子をベルリーフティをすすりながら見ていたエルカは、「そうだ」と懷から一枚の仮面を取り出した。

「フェイ、外に出る時は、これをつけている」

「……なんだ、これ？ 仮面？」

「そうだ。お前は既に有名人だからな。あまり騒がれたくないだろう？」

「で、でも、これはちょっと」

「大切な友人の結婚式に野次馬が入るかも知れんぞ。いいから付けておけ」

「うっ」

フェイは仮面を受け取り、渋々装着する。

真っ白な仮面は木製らしく、つくりは丈夫だが結構重かった。しかも、顔は隠してくれるものの、シャツとスラックスと仮面など傍から見れば怪しさ大爆発である。

『でも文句は言えないか……なあ、エルカも式に来るだろ？』

「いや、行きたいのは山々だが、事務処理が溜まってしまっただけ。クロフにおめでとうと伝えてくれ」

エルカは残念そうに両肩をすくめ、書類の山を指差した。

『ごめんな、字が書ければ俺が手伝えるんだけど』

「いや、気にするな。今日くらいは思い切り楽しんで来い」

『……ありがとう、エルカ』

フェイは手を振って出て行く。

仮面の下表情は分からなかったが、エルカはそれが幸せいつばいな笑顔である事を、信じて疑わなかった。

教会の会堂は花々やリボンで鮮やかに彩られていた。いつもの教会の厳粛な雰囲気、それだけで華やかな式場に一転するのだから不思議だ。

フェイはまず、クロフの控え室になっている小部屋を覗く事にした。

小部屋に入ると監視仲間に囲まれているクロフが、真っ先に目に入る。その嬉しそうな湯子顔を見て、ずいぶんと久しぶりだと感じた。

フェイはクロフの背後からこっそりと近づき、後ろから声を掛ける。

『おーい、クロフ』

「ん？ うおわっ！」

クロフは振り替えるや立ち上がって驚いた。

『俺だよ、俺！』

「……その声は、フェイか？」

『おうよ！ 見て分からないか？』

「分かるかよ、くそっ！ 変な仮面付けやがって！」

フェイとクロフは拳をガツガツと打ち合わせ、その様子に気を利かせたクロフの同僚の衛視たちが、静かに部屋を出て行く。

良い同僚達に恵まれたんだなと、フェイは人事ながら嬉しくなった。

「それにしてもまだ生きてたか。俺はまた領主がコノハに撲殺されたかとも思ってたぞ」

『勝手に殺すな！ お前が緊張のあまり、結婚宣誓を噛むところを見るまでは死ねないっての』

「うお、怖い事を言うじゃないか」

クロフは顔を引きつらせた。どうやら本当に緊張しているらしい。

「それにしてもなんだよその仮面は。密教にでもまつたのか？」

『違うわっ！ 今はこれが無いと町を歩けないんだよ……ったく』

「はずせはずせ、ここにはそんな野次馬はいないぞ」

フェイは頷いて仮面を外すと、クロフに満面の笑顔を見せた。

「おお、フェイ！ なんて酷い顔に……」

「この顔は生まれつきだ！ おめでとくらい言わせる！」

フェイはそう言ってクロフの胸元をゴツンと叩く。

この懐かしいじゃれ合いに、フェイはつい目元が潤みそうになった。

そっだ、これが日常なんだ

フェイはその有り難さを噛み締めていた。

式場に入ると既に席はほとんど埋まっていた。

これが皆、二人の結婚の証人となる為に集まった人々だ。

シュバート国の結婚式は、二人で一本の剣を掲げ夫婦の宣誓をする。神と人に宣誓の証人となってもらい、証人となった人々は二人の行く道を祝福するのだ。

「フェイー！ こっちこっち！」

前の方からコノハが手を振り、フェイを呼んでいた。

助かったとばかりに向かうと、コノハは薄紅色のフォーマルドレスを着て、この間より少し華やかな化粧をしている。つい、コノハを背負った時の事を思い出し、フェイは赤面した。

「どうしたの？」

「な、なんでもない」

フェイは首を振って席に着き、その席が前から二列目だと言う事にようやく気が付く。なんと親族席のすぐ後なのだ。

「うわ、随分前だな……こんな前だと緊張するだろ。もう少し後ろに行かないか？」

「バカね、後ろに席なんてもう無いわよ。それにあんたが緊張してどうするのよ。緊張してるクロフをアタシたちが応援するのよ！」

コノハは真っ直ぐな視線でそう力説した。

少し前まで、コノハの事が良くわからないと思っていたフェイだが、その視線は初めて会った時と少しも変わらない。正義感に溢れた、いつものコノハの目だ。

すっかり、元通りになっただんな

フェイは「そうだったな」と小さく頷き、コノハの横で姿勢を正した。

やがて、時を告げる鐘が遠くから聞こえ、同時に明かり取りの窓をルナやシスター達がバタバタと閉めていく。

部屋が暗くなり、ただ一つだけ開かれた天窓から、一筋の光が射し込んでいた。

光は式場の前方に設置された講壇に降り注ぎ、そこには装飾用の豪華な剣が抜き身で横たえられていた。光を浴びた剣が、銀色の光を周囲に撒き散らす。

暗くなったはずなのに、剣に反射する光で、フェイは逆にまぶしく感じた。

ザワツ

後方の扉が開き、クロフがレンファの手を引いて現れた。

会衆が僅かにざわめくも、二人は雑音など聞こえないかのように静々と講壇前に向かって歩を進めた。

ゼクス領の特色として、新郎新婦は必ず真っ白な衣装に身を包むという仕来りがある。クロフは暑いのを我慢して、輝くような白いサーコートを着込んでいる。そして、レンファの着ているドレスも上から下まで真っ白であった。

「綺麗……」

コノハがうつとりとため息を吐いた。

フェイもくすぐったいような違和感を覚える。なにせ普段はじゃじゃ馬として知られているレンファが、完全な淑女として飾られているのだ。

肩を出した大胆なドレス、スカートは腰の辺りから円状に広がっており、白い花を腰に巻いているような、幻想的で可憐な衣装だった。

「クロフ、奮発したな」

フェイの独白を聞いたコノハが、フェイのつま先を軽く踏んだ。

「って、何するんだっ」

「シッ！ 雰囲気無くすような事言わないで」

つま先踏まれた方が、雰囲気なくなるわっ！

そう言い返そうとしたが、クロフのためにグツとこらえる。決してコノハが怖かったわけではないのだ。うん。

カチャリ

クロフが右手で剣を取り、レンファの左手が添えられる。二人は支えあうように、一本の剣を光射す方へと掲げた。

「神よ、御照覧あれ！」

クロフの宣誓が始まった。

「我は剣の民、アルター＝クロフォード

何も持たずに生まれ、何も持たずに死する者

されどこの一瞬の生に、守る喜びを知る者なり

故に我は望む、二人が一本の剣とならんことを」

そしてクロフはレンファを見る。

その労わるような視線にレンファは小さく頷いた。

「我は剣の民、ラウオン＝レンファ

母の胎から出でて、母なる大地に還る者

されどこの一瞬の生に、愛する喜びを知る者なり

故に我は願う、二人が一本の剣とならんことを」

「神よ、我らの行く末を御照覧あれ！」

宣誓の余韻が消え、会堂からは割れんばかりの拍手と歓声が沸きあがった。

その中を二人が手を取り、歩いて行く。

「やったな、おいっ！ クロフ！」

「レンファ、おめでとう！」

祝福の拍手は、二人が見えなくなるまで、止む事は無かった。

「おおお、すごい御馳走だ！」

外に出ると、教会の庭が立食パーティの会場として生まれ変わっていた。その入り口ではクロフとレンファが、招待客一人一人にワ

インを注いでいる。

全ての招待客が入ると、クロフ自らの音頭で乾杯をし、パーティの盛り上がりは加速していった。

その中でいそいそと動き回るルナが、フェイの目に留まる。

「おーい、ルナ。大変だよな、神官見習なのに雑用ばかりで」
「ああ、フェイ……まあね」

ルナは大量の皿を抱えて、少し憂鬱^{ゆううつ}そうだった。

「どうしたんだよ？　なんか元気ないぞ？」

「いいのいいの、分不相応^{ぶんふそうおう}な事は諦めるの……それより、フェイ。今からクロフの友人代表の挨拶をやるんだけど、お願いしてもいい？」

「う……まあ、やれと言われればやるけど。でも、俺なんかにできるかな？」

「大丈夫、フェイなら上手くできるって」

「お、おう！」

ルナに言われて、フェイはすぐにその気になった。男とはかくも単純なものである。

新郎新婦席の横に設置された小さな壇上に昇ると、フェイはケホンと咳き込んだ。

会衆の視線が集中する。

「えー、皆様。俺……ケホンツ、わたくし、クロフの友人で、リア
「フェイロンと申します」

ドヨドヨと会場がざわめいた。フェイのこめかみがヒクつく。

なんだよ、その反応は。そこつ、黒猫とか言うなつ……いやいや、怒るな。クロフの大切な日なんだ。笑顔だつ、笑顔っ！

フェイはクエスト屋で培^{つちか}った作り笑いを顔に貼り付けると、これでもかと明るくしゃべり始めた。

「まずはクロフ、結婚おめでとう！ 思えば、クロフと出会ったのは八年前、巨道商店街で幼きクロフ君が財布をスられて泣いている所でした」

「あああつ！ お前、それをここで言うかつ？」

クロフの反応に会場がドツと沸いた。

これでフェイのイライラもあつという間に解消され、口にも油がのる。

「あの事のクロフは貧弱で泣き虫で、そのくせ負けん気が強くて、毎日のように喧嘩を吹っ掛けられました。倒しても倒しても、毎日挑んできたのです。そして、忘れもしない三年前の夏の日、とうとう私はクロフに負けたのです。彼は初志貫徹、有言実行、愚直な男です。レンファは良い人を選んだと確信している次第です」

おおおつとドヨメキが響き、「あの黒猫にか」と云う言葉がハッキリと聞こえる。

そのせいか、ちょっと毒の効いたジョークがフェイの口から漏れる事になった。

「なんと言つても、あの短気で傍若無人で人の話を聴かないクソ領主に仕えているのです。その忍耐力は保証付きでしょう」

シン

会場が静まり返った。

滑ったか、と思ったフェイは慌てて話を締めくくる。

「え、ええと、兎に角、クロフ、レンファ、おめでとうっ！ 末永くお幸せにつ！」

パチ……パチ……

非常に疎^{まば}らな乾いた拍手が響く。

その冷え切った空気にシヨックを受ける間もなく、ルナが引き攣^つった顔で次の挨拶者を紹介した。

「では、続きまして上司代表 領主様」

「は？」

壇上から降りようとしたフェイの肩が、背後からガシリと掴まれる。

振り返ると、ヤツがいた。

「小僧、宴席に戻るにはちよつと早くないか？」

「……ははは、ですよねえ」

フェイはラマのように引かれ、再び狭い壇上に引きずり戻された。むろん、領主も一緒である。

「さて、紹介に預かったゼクス領主ラドクリフである。クロフ、おめでとう。日頃の功績を称えて、わしから一発芸を贈ろう」

「い、一発芸ですか？」

「うむ」

領主は嬉しそうに頷いた。

「人間花火だ」

領主はフェイの両肩を驚掴わしづかみにすると、上へ放り投げた。
当然、重力にひかれてすぐに落下する。

その先に見えるのは、拳を溜める領主公の姿であった。

「うおおあああ！　ちょ、ちょっとまって」

落ちてくるフェイに向って、領主公は渾身の一撃をもって答えた。

「たあまやあああああ！！」

ドゴオン

「おおお、これまたすごいな！」

「新記録だっ！」

「かーぎやーっ！」

すっかり酔いのまわった衛視たちはヤンヤヤンヤと喝采を贈った。

「ありがとう、忠実な衛視諸君。さて、わしは職務に戻らねばならない。名残惜しいがさらばだ。クロフ、未永く幸せにな」

「あ、ありがとうございます」

クロフが引きつった顔で礼を述べた頃、

グシャ

ようやくフェイが落ちた。

パーティは終わり、コノハとフェイは連れ立って教会を後にする。日は傾き、間もなく夕焼けが始まる時間になっていたからだ。

「フェイ、無事終わってよかったね」

『無事じゃねーよっ！　ってて、くそっ、脇腹が……』

「大丈夫？　肩貸そうか？」

『……いや、いい』

仮面越しにフェイが断るとコノハは少し不満そうな顔をした。

しかし、こんな事にめげている暇はコノハに無い。婚約パーティの帰りにフェイが告白してくれたのに、色々と事件があったせいで返事がうやむやのままなのだ。

だから、コノハはこの日、このタイミングで返事をしようと心に決めていた。

その前に、まずは人気の無い場所　仮面を外せる場所まで行かなくてはと、コノハは帰路とは違う道に入り、クルリとフェイを振り返った。

「フェイ、ちょっと来て欲しいところがあるんだけど」

『そっちは丘しかないぞ？』

「いいから、来てよ！」

有無を言わせない態度に、フェイは首を傾げながらもコノハの後ろを歩き始めた。

コノハは少し俯いたまま黙々と進み、とうとう小さな丘の頂上まで進んだ。

丘の上は低い草が一面に生えており、それゆえ見晴らしは非常に良かった。夕日に染まったその場所は、十分に美しい光景と言えるだろう。

しかし、こんなものゼクス領では珍しい光景ではない。早く帰って休みたいフェイは、少し声を荒げた。

『おい、コノハ、引き回すのもいい加減に
フェイ！』

突然、コノハは立ち止まると振り返った。

『ここなら大丈夫だから、仮面を取って』

『え？』

『もうっ！ ちょっと頭下げて』

そう言うと、コノハはフェイの顔からするりと仮面をとりはずした。

息苦しかった仮面が無くなり、さわやかな緑の匂いと、コノハの香水の甘い香りが鼻腔をくすぐった。

『で、こんなところに連れてきて、いったいどうしたんだよ？』

フェイが尋ねると、コノハは俯いたまま、奪い取った仮面をもじもじとお腹の辺りでいじる。

「あ　あのね、まず確認したいんだけど、一昨日、セシリア様に会った時、抱き合ってたよね？」

途端にフェイの顔が真っ赤に染まった。

「ちがつ、あれは違うぞ！　変な意味は全く無い！　ただ、オルフェルが無事で嬉しくて、それでつい」

「うん。たぶん、そうだと思ってた。それを聞きたかったの」

「ふうん……えっと、要件はそれだけか？」

その言葉に、今度はコノハの肩がピクリと跳ね、その顔が夕日に負けないほど真っ赤に染まった。

「コノハ？」

フェイの呼びかけに答えず、コノハはスーハーと深呼吸を繰り返して「よし」と頷いた。

「あのね、フェイ。領主様の邸宅から私を背負って帰った時、覚えてる？」

「……ああ、あの時か」

「そう、その時、私に言ってくれたじゃない」

何のことだ、とフェイはあの時にした会話の内容を思い出し返す。確か、コノハに色々と言われたが、これではないだろう。その後、三年間と気持ちは変わっていないかと聞かれ、ゼクス領で一番強いのはコノハだと言った事だと思い、「お前が一番だと思ってるよ」と答えたのだ。

となると、またこの話題だろうか？

いやまでよ、それは結論が出てるよな。となるとその後、王子救出を手伝ってくれてお願いした事か？

そうだ、きつと手伝いをお願いした事だろう。ひょっとして謝礼でも欲しいのかもしれない。

フェイは考えの末に出た結論に満足する。

「あの時の返事……今、するね」

「え？ でもコノハ、あれはもう終わった事だろ？」

「……終わった、コト？」

コノハの声音が乾いたモノに変わる。

しかし、フェイにそれが何を示すか分かるはずもない。

「だってほら、もう王子は無事に救出できたし」

「……まさか、あたしが、依頼を手伝うように、あんな事、言ったの？」

「まさかって、そんなの当たり前だろ。何を今更、バカだなあコノハは。あっはっは」

バキン

コノハの手の中で頑丈なハズの仮面が砕け散った。

そして、操り人形の糸が切れたように、コノハがその場にペタリと座り込む。

「おい、コノハ？」

フェイは俯く悪魔の肩に手を置いた。

それが既に人間をやめた存在だと警告する者は、誰もいなかった。

コノハはスツと顔を上げた。

「ぎゃああああああっ！！」

その顔を見た瞬間フェイは絶叫を上げるや、バツタのように飛び跳ねて丘を駆け下りた。

カサカサカサカサカサ

逃げるフェイの後方から、奇妙な音が追従する。

振り返るなっ！ 振り返ったら負けだ！

フェイの理性は振り返ることを全力で止めた。
だが、絶大な恐怖はそれすら紙のように押しのけ、フェイはつい肩越しに後ろを見てしまう。

そこに、四足で迫る悪魔^{コノハ}がいた。

カサカサカサカサ

「ぎゃあああああああっ、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ！ 教会行ってごめんなさいいいいいっ！」

「やあ、おかえりフェイ……随分やつれたな。おい、泣いているのか？ フェイ？」

エルカに返事をせずに、フェイはフラフラと自室に入ってしまった。

寝よう、死ぬほど寝よう

真っ暗な部屋に明かりもつけず、フェイはベッドに潜り込もうとした。

しかし、部屋の異変に気が付く。ベッドが盛り上がっているのだ。僅かに匂うのは砂漠の民が使う香の匂いだ。

誰か、いるのか？

ベッドの中に潜んでいた者も、フェイが入った事に気が付いたらしい。

隠れるのをやめ、ゆっくりとベッドから姿を現す。

「なっ」

月明かりにまぶしい素足がまず目に飛び込んだ。

毛布をゆっくりと落とすと、衣服を何もつけていない起伏のある胸が晒された。

いや、下は裸でない。ただ辛うじて陰部が隠れるような下着を付けているのみだ。

侵入した人物は、ベッドから立ち上がると、恥じらいもせずフェイの前で立ち尽くす。

「……カシム？」

「待ちかねたぞ、リア＝フェイロン！」

カシムは立てかけてあった大根棒を取ると、フェイに突きつけた。

「さあ勝負だ！ この日をどれだけ待ちわびた事か！」
「その前に答える……その格好は、何だ？」

カシムはブーメランのようなぴっちりした黒革のパンツを、誇るように逸らす。

真ん中が盛り上がっているのが無性に憎い。

「貴様の速度に対抗するため、徹底的に洗練された究極の戦闘スタイルだ！ 見よ、この無駄の無い姿！」

「お前の全てが無駄だあああつ！」

フェイの怒声にカシムはにやりと笑う。

「黒猫め、この姿に臆したか」

「誰でも臆すわ！ 大体、この前は正々堂々と勝負するって言ったじゃないか！ 今、俺はボロボロの上に素手だ。見て分らないのかっ？」

カシムは侵入したらしい窓から、大根棒を投げ捨てた。

「体調不良は貴様の不手際だ。不運を呪え。さあ、俺も素手になつたぞ。肉弾戦といこうか」

「いいから寝かせてくれえ……」

「それはできん！」

カシムは腰を落として、タックルの構えを取る。

「今夜は………寝かさない」

ささやくようなその声に、とうとうフェイは、キレた。

「エルカツ！ フェイはいるっ!？」

「どうした、ルナ。何を怒ってる？」

「いいから、フェイはどこなの!」

フェイが自室にこもったすぐ後に、今度はルナがエルカーナを訪れたのだ。

エルカは戸惑いながらも、隠す理由も無く、素直に答えた。

「一応、フェイは自室にいるが」

「部屋ね。ちよっと、はやくどいてっ!」

ルナはガンガンと床を踏み鳴らしながら、フェイの自室の前に向った。

そして、フェイの部屋の扉の前に仁王立ちになったルナは、ノックもせずにドアを一息に開く。

「ちよっとフェイ！ あなたコノハに何を言った の」

そこで見たものは、組み伏せたフェイと組み伏された裸のカシムである。

フェイの胸元ははだけられており、なによりカシムの黒パンツがルナの網膜に焼き付く。

「きゃああああああっ!」

ルナは悲鳴をあげて去り、残されたフェイはカシムの上で泣き崩れた。

「ハアッ ハアッ、コ コノハッ！」
「ルナ、どうかしたの？」

教会の講堂で待っていたコノハの問いに、息を切らして走ってきたルナはガクガクと頷いた。

「 理由が、分かったの。ショック受けないで聞いてね」
「うん、覚悟してる。たとえばフェイがロリコンだったとしても」
「フェイ、実はね……」
「実は？」

ルナは沈痛な面持ちで、しかし容赦なく告げた。

「ハードゲイだったの」
「……………うわ」
「きついね、きついよね」

ルナに抱き寄せられたコノハは、その胸にポタリと涙を落としたのだった。

(34) それは不思議な夢だった

それは不思議な夢だった。

フェイは猫　しかもご丁寧に黒猫になって野原を駆け回っていたのだ。

青く広大な野原をどれだけ走っても、フェイはいつこうに疲れなかった。すっかり有頂天になり、グングンとスピードをあげていく山を駆け、川を跳び、砂漠を越え　最後に木が鬱蒼^{うつそう}と生い茂る森に入った。

木々に太陽の光が遮られ、黒猫は影に混じる。心にも影が落ちたのか、フェイは不安になってようやく立ち止まった。

ギヤアギヤア

突然、森の外から野鳥の群れが飛んで来た。

鳥の群れは木々をすり抜け一直線に近づくと、フェイの背中をゴツゴツと突付きまわす。これはたまらないとフェイは森の奥へ逃げ出した。

右へ左へととにかく逃げ続け、やがて野鳥の群れは去っていったが、かわりに濃密な茂みが自分をグルリと囲んでいた。

そこで進む道はおるか、帰る道すら分からなくなっている事に気付いた。

不安から逃げるように、茂みの僅かな隙間へ頭を潜らせては、とにかく先へ先へと進む。だが、不安は消えるばかりか、かえって取り返しのつかない道を進んでいるのでは、と言う焦燥感だけが募っていく。

助けて！

出そうとした声は、ニヤアと言う鳴き声にすらならなかった。声が出ないのだ。

ここどこ？

声が出せない。道が分からない。誰もいない。寂しい……

また、捨てられたんだ

なんの脈絡も無く、そんな概念だけが胸をギリギリと締め付ける。夢はいつだって脈絡がないものだと思いが決まっている。そのくせ、いつだって無遠慮に過去の傷を開いていく。

フェイは歩くどころか立つことすら苦しくなり、力なく地面に伏した。

そんな時に変化は訪れた。

ひよい、と後ろから人間の手に掴み上げられ、そのままフェイを胸に抱いたのだ。

暖かな感触に、優しく包まれる。

そのとんでもない安堵感に、焦燥も恐怖も孤独すら、一瞬で消え失せる。

だが、この腕に捨てられたら、きっと次こそ心が碎けて死んでしまふのだ。

お願い、捨てないで ずっと、僕を抱きしめて

振り返って、その人間に願おうとした時 人の気配を感じ、目

が覚めた。

目をうつすらと開けると、誰かの顔が視界一杯に映る。

「うおおあつ！」

フエイの慌てふためいた姿に、セラは微笑を浮かべた。

「おはようございます。フエイ」

「セラ！ お前、なんでここにっ！？」

セラはベッドサイドに客用の簡易イスを持ってきて、ちょこんと座っていた。

その姿にわずかな違和感を感じる。身長も体系も変わっていないはずなのに、以前の子供っぽい雰囲気あまり感じられないのだ。少し、顔つきが変わったせいかもしれない。

「勝手に入ってごめんなさい。兄様あにさまが良いって言ったから」

「ったく、エルカの奴は何考えてるんだ……ああ、そうだ。帰ったああの暴力親父に言っておけ、祝いの席の言葉くらい冗談で流せ。あんなんじゃすぐにハゲるぞってな」

セラは何を言ってるのと言うように、キョトンと首をかしげた。

「暴力親父とは、誰のことかな？」

「ああ？ 暴力親父ってのはあのクソ領主のことだよ。そうそう、クソ領主といえばこの間、俺が牢屋に入れられた時の事だけ……ん？」

そこで、声の主が野太く変わっていた事にようやく気付く。

フェイの肩を、誰かが後ろから叩いた。

振り向かなくても分かっていた。フェイは己の不運を嫌というほど分かつていたのだ。

覚悟を決めたフェイの耳元に、領主の熱い息がかかる。

「小僧……貴様も食いたいか？ クソを」

「いえ、遠慮し」

脳天に鉄塊を落とされたような衝撃が走り、『ます』を言う事は適わなかった。ゲンコツで殴られたとは信じがたい衝撃である。

フェイは再びベッドの上に沈み、目を閉じるとこの意味不明な状況^さを少なからず呪った。

「フェイ！」

セラが小さなその手で、フェイの体を支え起こそうとする。

心配してくれるのか

その優しさが、腕が、夢で抱きしめてくれた温もりと重なった。

「フェイ、二度寝はダメ」

「そっちかよっ！」

起きて目を開くと、セラは心配どころかニコニコと笑っていた。フェイはビシリと指を突きつける。

「何故だ！ 俺がこれだけ酷い目にあっているのに、何故笑ってられる？ むごいとか痛そうとか不憫だとか思わんのかっ！」

「あの、ただのじゃれ合いだってお父様は言っていました」

「人が熊とじゃれ合えば死ぬわっ！」

フェイの言葉にセラは全く理解できませんと言った顔で、再び首を傾げる。父親を妄信するあまり、今までの暴力は全て仲の良いじゃれ合いと、この碧眼ふしあなには映っていたのだ。

深く深くため息を吐いたフェイに、領主がゴホンと咳払いをする
と本題を切り出した。

「さて、小僧。王から貴様をシュバート城に連行せよとの御下命があった」

「王様の城に、連行！？」

「そうだ。王子救出の謝礼を下さるそうだ。もったいない」

「じゃあ連行とか言うなよ！」

「フェイ、私も呼ばれたの。一緒に行こっ」

背後からばんぼんと肩を叩かれ、慌ててセラの方へ振り返る。

「別に、俺は」

「拒否権は貴様に無い、すぐさま出発する。十分で準備しろ」

「いいから、俺を挟んで話すなっ！」

そう叫びながらも、今回は悪い気ばかりでもない。

なにせ、王様からの謝礼である。何をもらえるのか胸がときめくではないか。それにゼクス領にじっとしていても仮面の生活が待っているだけである。

どうせなら遠出も悪くない、か

フェイは小さく息を吐き出すと、ベッドから飛び起きた。

季節は初夏、湿度は低く、外を見渡せば草木が元気に生い茂っている。旅行にはもってこいの爽やかな晴天である。

しかし、馬車の空気は重かった。すごく重かった。

今回は竜馬ナタクではなく、駿馬エクウスの四人乗り馬車が二台用意された。豊かなゼクス領と言えど二頭しか竜馬ナタクを所持していないため、大人数だと自然と駿馬エクウスの馬車になるらしい。

先を走る馬車には領主とガラム、エルカ、そして嫌々詰め込まれたセラの四人が乗っている。

問題は後を追うもう一台の組み合わせである。

フェイ、その横に腕を組んで闘気を発散しているカシム、男二人を凄まじい目で睨んでいるコノハ、そして、その逆に男どもを視界に入れまいと頑なに外を見ているルナの四人なのだ。

これはたまらん

なにせフェイが「いい天気だな」と話を振っても、誰一人拾わないのだ。胃はシクシクと痛みだす始末である。

そして、この居たたまれない局面が五時間も続いている。王都までの残り十時間、この状態が続けば、胃の穴はめでたく開通する事だろう。

打開せねばならなかった。

では、どうするべきか　フェイは思案を繰り返す。

カシムに昨日の事で話しかけるのは論外である。むさ苦しい闘魂世界に引き込まれるのがオチだ。

では、コノハはどうかと考え、フェイは首を振った。不安要素が大き過ぎる。このところ、何がコノハの気に障るかまったく分からないのである。ここで悪魔が目覚めてしまつては逃げ場も無い、胃に穴が開くどころか、口から胃を引き抜かれるかもしれない。却下である。

やはり、ルナだ。せめて昨日の誤解だけでも解ければ

フェイは勇気を出してルナに釈明をしようと、口を開いた。

「あつ、あのさ、昨夜の事なんだけど」

「話し掛けないで！ この極右同性愛者！」
ハードゲイ

フェイは上を向いて目を閉じた。そうしないと、涙がこぼれそうだったからである。

その哀れなフェイに、易々と追い討ちをかけたのは、カシムである。

「なるほどな……だから貴様は童貞だったのか。合点がいった」

「うるせえっ！ 誰のせいだと思ってる！ この脳ミソまで筋肉や
口ウー！」

「いくら褒めようが俺は手を抜かんぞ。昨日の続きは、いつか必ずしてもらうからな」

「褒めてねえ！ あと、続きなんか絶対にしねえからな！」

「だめだ。次こそはどちらかが果てるまで」

「もう！ いい加減にしてよっ！」

きわどい会話に叫んで立ち上がったのは、ルナである。
その目は怒りに満ち、フェイを睨んでいた。

「フエイ！ あなた、に言いたい事があるわ！」
「は、はいっ」

ルナはビシリとフエイの鼻先に指を突きつけた。

「なんでカシムなのよっ！」

「……は？」

「どうして普通にやおえないのっ！？」

「……やおえ？」

「近くにエル力だっているじゃないっ！ 一步譲ってクロフだつて
！ どうしてこんなっ、夢のない男に引っかって 私の夢を返
してよ！」

「聖典以外にどんな本読んでんだ、お前はっ！」

「ほっとしてよ！ いいのよ、私の事は、それより」

「ルナ、もういい……黙ってて」

そこに割り込んだのは、静観していたコノハだ。

コノハはルナの肩を掴み、引き倒すように座らせ、代わりに立ち
上がると、フエイに氷のような視線を降り注ぐ。

「フエイ、あんたが例えロリコンでもハードゲイでも、あたしは納
得するわ」

「するなよっ！」

「でも、嘘だけは許せない。なんで、なんであんな嘘言つたのよ！
？」

「嘘？ なんのことだ？」

フエイはカケラも身に覚えが無いので、首を捻る。

「とばけないでっ！ 私を背負ってくれたあの日、三年前の手紙に

書いてある気持ちと、今も変わらないって、フェイ言ってくれたじゃない！ あんな嘘、酷すぎるじゃない……」
「手紙？」

フェイが首をかしげると、突然ルナが雷に打たれたように「あああつ！」と叫んで立ちあがり、すぐに座り、両手で頭を抱えた。

「ルナ、どうかしたの？」

「コノハ、あのね……ええと……その……その手紙ね、実は、フェイじゃなかったりして……」
「……は？」

ルナはもじもじと両手をすり合わせ、上目づかいでコノハに告白した。

「だから、あの恋文を書いたのは、実はフェイじゃなくて……クロフだったりして、あは　ごふっ！」

ルナの腹に抜き手の残像が見え、容赦無い一撃にルナは白目を剥いて悶絶した。

コノハはユラユラと自席に戻り、力尽きたように頭をたれた。そして、馬車の壁とブツブツ会話を始める。

つまり、フェイの必死の努力に反して、事態は悪化したようだった。

重い。すごく重い。

ポンとフェイの肩にカシムの手が置かれた。

「リアッフェイロン。お前も色々辛い立場なのだな」

「お前にだけは同情されたくねえ……」

「それにしても暇だな、王都につくまで腕相撲でもするか？」

「やらねえよっ！」

そうだ、他の事は良く分からないが、とにかくこの筋肉達磨カシムとのハードゲイ疑惑は解消されていない。これを解消するためにやる事は、たった一つである。

告白するしか、ない

フェイは安らかに眠るルナを見つめ、決意を新たにしたのだった。あら

昼前に出発し、何時の間にか日は落ちていた。

城が近づくにつれ、窓の外の景色も徐々に変わってくる。月明かりの下に薄ぼんやりと町並みが見えてきたのだ。

だが、ゼクスの巨道商店街に慣れきったフェイ達には、露店の一つもないその寂しい景色に驚く。王都とは、もっと華やかな場所だと想像していたのだ。

確かに巨道沿いの建物は大きく立派なのだが、それが暗く静まり返っていると、返って寂しさを増徴させる。

そんな中、月明かりに照らされた巨大なシルエットが四人の目に飛び込んだ。

まるで建物全体が発光しているように、月明かりをバイスレイトの城壁がまばゆく反射していた。

「すげえ！ あれがシュバート城かつ！」

「綺麗！ あれ全部バイスレイトなの？」

「流石に素手では壊せそうに無いな」

「あそこに、私の王子様が……」

すっかり復活した四人が口々に感想を漏らした。

「本当にあの中に入るんだよね……うう、ちょっと緊張してきた」
「だ、大丈夫よ。エルカもいるし」

二台の馬車は巨大な城門の前で静かに止まる。
その門前で待っていたのは、門兵と小さな白い人影。

「王子様っ!!」

馬車の扉を蹴り開け、ルナは王子に走り寄った。

「ルナッ！」

王子もルナの姿を認めると走り寄り、引き裂かれていた恋人のよう
に抱き合った。ようやく馬車から出てきたフェイの目が剣呑に細
められる。

その視線に気がついたのか、王子はフェイを見ると紳士的にルナ
から一步離れ、無邪気に手を振った。

「あ、フェイ！ お待ちしました」

「お、おう。元気にしてたか？」

「はい！ さあ、早くこちらへ。父上が玉座の間で待ってます」

王子は急かすように、フェイ達を城の中へと案内した。

玉座の間に入った八人を見た王は、玉座から立ち上がり鷹揚おつように両

手を広げる。

「よく来た、勇者リア!! フェイロンとその仲間達」

やめてくれえええっ

フェイを始め、何人かがピクリと反応した。特に領主公の顔が見るからに不快そうだ。その傍らで喜ぶセラと対照的である。

八人は、玉座の前まで進み出ると、揃って片膝をつき、項垂れる。左右には青い鎧の騎士が五名、直立不動で警護をしていた。そのため、妙な圧迫感がある。

「面^{おもて}を上げよ」

そう言つて、王はゆつくりと玉座に着く。フェイは目を上げ、初めて王の顔を見た。

白髭に覆われたその皺^{しわ}だらけの顔は、威厳に満ちていた。顔色こそ悪いものの、足腰の強靱^{きんじん}さは、座るだけの動作にも顕^{あらわ}れている。さすがは剣の王と言ったところか。

その王の右脇にちよこんと王子が立ち、微笑んでいた。その顔は確かに、王の面影を継いでいるようだ。

顔を上げた領主が代表して口を開く。

「グロスター王、夜分に手厚くお迎え頂き、感激に堪えませぬ。ゼクス領主ラドクリフ、以下七名に代わりまして厚く感謝の意を献上致します」

以下七名に若干の力が入っていたのは気のせいだろうか。

「いや、感謝をせねばならぬのは、余の方だ。王子を救出し、ゴルゴンの手先を拿捕し、ゴリネルの不正まで暴く事が出来たのだ」

ゴリネルの名前が出た途端、フェイはあの偉そうないけ好かない太ったオッサンを思い出す。

王は怒りを顕にして玉座の肘掛を叩いた。

「ゴリネルめは、かなり前からゴルゴンに通じておったようだ。道理でヤツだけが被害を出さずに連戦連勝するわけじゃ」
「ゴルゴンの情報は入手できましたか？」

領主の尋ねた声は渴望の色が見えた。ゴルゴンを心底討伐したいと思っているのだろう。

しかし、王は無念そうに首を振る。

「ゴリネルの奴め、頑なに口を割らぬ。流石は元將軍、と言った所か」

「父上、そろそろ本題に」

「おお、そうだった！ 今宵は貴公らに感謝の意を表す場であったな。ラドクリフ公爵、そして命を賭して余をいさめてくれた公女セシリアよ。そなたらには明日、輝盾勲章を授ける」

「もったいなき名誉です」

父に習い、セラもペコリと頭を下げた。何が貰えるか等、分かっているのだろうか。

次に王はフェイ達に目を向ける。

フェイの胸が高鳴った。いよいよ褒美が貰えるのだ。

「聞けば、貴公らはクエスト屋なるものらしいな。なれば勲章より、金銀の類がよからうと思つてな」

イエスッ！ 王様最高ですっ！

フェイは心の中でガッツポーズを取った。

王が手を叩くと、侍従官が袋や剣を持ってくる。金貨が大量に入っている袋が、ルナ、コノハ、カシムの前に置かれる。そして、エルカには一振りの名のありそうな剣が与えられた。エルカはそれを恭しく受け取る。

どうやらフェイは最後のようだ、この心苦しいまでの演出が憎らしいではないか。

王は微笑み口を開いた。

「恩賞は以上だ」

「ちよっ！ 王様っ！」

思わずフェイが腰を上げ、王に対してツツコミを入れる。領主の顔が引きつっているのがハッキリと分かるが、これはいくらなんでも納得できる訳が無かった。

「分かっておる。リア＝フェイロン」

しかし、そんな無礼を働いたフェイにも、王は笑顔で頷き、玉座を立ち上がりフェイに近寄る。

直々に渡すつもりだったとは、王様もやってくれるぜ

ドキドキしながら膝を付き、期待に満ちた目で王を見上げる。その視線を受けながら、王はフェイの眼前までゆっくりと近づいた。

ジャキン

王はおもむろに剣を引き抜くと、フェイの肩にピタリとつけた。
フェイの目が点になる。

「あれ？　ちょ、ちょっと？　王様？」

王の蒼い瞳が、クワツと見開かれ、その威厳のある声が高らかに
宣言した。

「リア＝フェイロン、貴公を將軍に任ずる！」

「は、はいいいいいっ！？」

玉座の間にフェイの叫びが木魂こたました。

(35) 頼んだぞ、フェイ將軍

「頼んだぞ、フェイ將軍」

「フェ、フェイ將軍!？」

フェイは裏返った声で反芻^{はんすう}すると、エルカは顔を伏せ口元を抑えた。笑っているのだ。その笑いがルナとコノハ伝染し、顔を伏せ「弱そ……うくつ」と肩を震わせる。

「ちょ、ちよつと待ってくれ! まさかこんなのが褒美か？」

「そつだ。よもや不服とでも言うまいな？」

「言うよ! 当たり前だろ! 俺がどれだけこの褒美を楽しみにしてたか分かるか? なのにそれが何で国家の犬になれます権なんだよ! 理由を説明しろよっ!」

「ふむ、理由か……よかるう。アイオール、例の手紙を」

王が虚空に叫ぶと、どこからともなくアイオールが現れ、手紙を王に差し出した。

「これは王子が救出された翌日、ゴルゴンから送り付けられた手紙だ。裏切り者のナラド^{さつりく}ガラムデインとリア^{さつりく}フェイロンの首を差し出さねば、奴らは無差別の殺戮と略奪を繰り返すと書いてある」
「なっ、そんな! ゴルゴンが、まさか、そんなっ!」

フェイの悲痛な叫びに、和やかな雰囲気が一気に冷めた。特に砂漠の民であるガラムとカシムの顔が剣呑になる。

しかし、王はあくまで朗々と事実を述べ続けた。

「賊に屈するなどシュバート国の本意ではない。しかし、無視する

わけにも行かぬ。なれば、ゴルゴンを討伐し果たす以外に道はない
そう余は考えた。ここまでは良いか？」

これにはフェイも頷かざるを得なかった。大人しく2人の首を渡
すと言う回答だつてあるのだ。そんなの冗談じゃない。

「だが、王子誘拐の件でゴリネルを將軍から罷免ひめんした今、軍を動か
せる人間がおらぬ。早急に次の將軍を決めねばならないのだ。しか
し、余に信頼できる人間の心当たりが無い」

王の顔が苦渋に歪む。

フェイは威厳の陰に隠れた弱々しい王の姿に驚いた。王ならばだ
れでも命令を聞くはずだと思つていたのだ。だが、実際はゴリネル
のような私益を優先する輩やからが後を絶たないのだらう。

「二度とゴリネルのような者を任ずるわけにはいかん……そんな中、
このエドガーが進言したのだ。リア＝フェイロンは優秀で、かつ信
頼に足る人物だとな」

フェイが王子を睨むが、王子は悪びれも無く 否、むしろ照れ
たように頬を染めてはにかむ。

やはり王子とセラは同類てんねんだつたようだ。

「余も初めは迷つた。しかし、ゴルゴンが貴公の首を渡せと指名し
た以上、貴公が裏切るはずもない。いや、むしろゴルゴンが最も恐
れている人物 それが貴公なのだ」

王がフェイに詰め寄り、その肩をガツシと掴む。

「さらに貴公は砂漠の民から全面的な協力を受ける約束を得ている

と言うのではないか！　これ以上將軍に適任な者がこのシュバート国にいようか？　否、断じておらぬっ！」

眼前で王の口調がヒートアップし、その力強い言葉につい頷きそうになったフェイは焦る。

まずい！　何か反論をしなくては流される！

「で、でも、ほら、あそこにいるガラムさんは、俺よりずっと強いし、年齢的にも　」

「だめだ。あの者はラドクリフ公爵に剣を捧げておる。王とて、いや、剣の王だからこそ、そのような者を將軍には出来んだ」

「で、でも……」

「よいか、リア＝フェイロン。余は近々退位を考えておる。先日、そこにおるセシリア公女を見て悟ったのだ。この国には新しい力が必要だ、とな」

王はフェイの両肩に手を置いたまま、視線を同じ位置まで下げ、まるで懇願する^{こんがん}ように見つめた。

「だが、エドガーはまだ幼く未熟である。貴公に、エドガーを助けて欲しいのだ」

「でも、俺以外にも　」

「これほど言ってもまだ分かんかつ！」

フェイがあくまで首を縦に振らないのを見て、王はとうとう声を荒げた。

「貴公でなくてはもう駄目なのだ！　この国がリア＝フェイロンと言つ名の剣を求めているのだっ！　来て、とくと見よっ！」

王はフェイの腕をむんずと掴み、そのまま引き摺るように玉座の間を出た。事態を呆然と見ていたエルカ達も後を追うように追従する。

連れて行かれた先はとある広間で、その部屋の奥には巨大な扉があった。

フェイ達が城に入った場所とは正反対にある扉で、おそらく裏口のようなものだろうが、十キュピト以上もの背の高さがあり、表の門よりはるかに重厚だ。

パンパンッ

王が小気味良く手を打つ音が響き、左右に控えていた侍従官が口――プをガラガラと引く。

すると、重厚な扉がゆっくりと左右に割れた。

「うお……」

深夜だというのに、城の前にはフェイが呻くほど数多あまたの人がいたのだ。

その数は何千、いや何万にのぼるだろう。それらの人が手に手に松明を持ち、城の広場にひしめいていている。

目を凝らすと、城の裏門は開放されていた。そして、人の織り成す光の絨毯じゅうたんは門の向こうにまで続いている。

その雲霞うんがのごとき人の群れが、王とフェイの姿を認めた途端爆発した。

城をも揺るがす大歓声。

隣で王が何かを叫ぶが、全く聞こえない。

やがて、無秩序だった歓声は、勢いをそのままにある言葉に収束

し、唱和した。

「「フェイ將軍、万歳！ 黒猫將軍、万歳！」」

「っざけんなこらあああっ！」

フェイは力の限り叫び返したが、圧倒的な火力を前にその叫びは文字通り掻き消された。

悪夢だ

ゆっくりと扉が閉められ、王は嬉しそうにフェイの肩に手を置いた。

「これで分かったな、リアァフェイロン」

「分かるか！ このバカ騒ぎはいったい何だ！？」

「新將軍の噂がどこからか民に漏れてな。明日の就任式まで待てないらしく、一刻も早く新しい將軍を見せろと騒いでおるのだ。それに、軍都ドライ領に駐屯していた兵たちも、將軍不在によりここに集結しておる」

「噂って、まさか……王子を救出した事もか？」

フェイが恐る恐る尋ねると王は当然とばかりに頷き、次いでとてもないことを口にした。

「それとな、貴公とセシリア公女の恋物語ラブロマンスが王都の民に明るい未来を示したのだ！ 今や王都では、貴公の事はラマでも知っておる。黒猫は既にこの国の英雄なのだ！」

フェイは「ぎゃああ」と悲鳴をあげ、その場に崩れ落ちる。

「俺は何もしてねえ……俺はただ、依頼クエストをこなしただけで……」

「世界はそうは思わん。ゴルゴンもだ。頼む、將軍位を受けてくれ、そしてエドガーを頼む」

「……だ、嫌だ、絶対嫌だ！俺は断固拒否するぞっ！」

フェイは涙混じりに王に向って堂々と言い放つ。

権力がなんだっ！これ以上、俺の日常を脅かされてたま
るかっ！

その強い視線に、王は深々とため息を吐いた。

「ならば、止むを得ん。ゴルゴンに貴公の首を差し出しかないか」

「今度は脅しかよっ！」

「本当に止むを得んのだよ。ゴルゴンはやると言った事は必ず実行に移してきた。悔しいが貴公の首を差し出し、時間を稼がねばなら
ん」

「なっ……だけど」

フェイは迷う。

あの多くの民の命を守り、全国民の思いを背負う事などできるだ
ろうか？

そして軍の人々に命じ、盗賊とは言え人の命を奪わなくてはなら
ない。そうなったら、もうエルカーナには帰れなくなる。あの幸せ
な日々は二度と戻らないのだ。

領けば恐ろしい未来が待っている。しかし、領かねば未来は無い。

くそっ、くそお！なんでこうなるんだっ！

フェイが頭を抱えて悩んでいる間に、侍従官の一人が王に近寄り耳打ちをする。

王の顔色が見るからに変わった。

「ゴルゴンが大挙し、ゼクス領に進攻を開始したとの報が入った。その数、およそ五千……」

その場に衝撃が走った。フェイはフラフラとする頭で叫ぶ。

「嘘だ！ 俺を将軍にしたいための嘘だろうっ！」

「嘘などではないっ！ 砂漠の長からの報告なのだ！」

王の剣幕にフェイは一步後ずさった。

もう一步下がろうとしたとき、グイと胸倉を捕まれる。視線を向けると、憤怒の領主がそこにいた。

「リアッフェイロン。先日結婚したアルター・クロフォードは、お前の友人だったな？」

「あ、ああ」

「五百に満たぬゼクス領の衛視では、1日ともたず全滅するだろう。つまり真っ先に死ぬのは、貴様の友だ。さあ、お前はどつする？」

「お、俺はっ！」

エルカがフェイの肩に手を置いた。

「フェイ、お前が將軍になると言うなら、私も付き合う。望むならお前の参謀にでもなつてやろう」

コノハがいつもの真っ直ぐな目で、フェイを見つめる。

「あたしも、フェイの傍にいるよ。きっとフェイならできる。將軍になって、クロフ達を助けよう?」

ルナが両手を組み、祈るようにフェイに願う。

「お願いフェイ。教会を、町の皆を 助けて」

下を見れば、セラが心配そうな目で見上げていた。

「フェイ……」

ひとりじゃなかった

夢の中でフェイを包んでくれた暖かな手は、一人の手ではなかったのだ。

とれだけ遠くに行っても、迎えてくれる暖かい手は、こんなにたくさんあったのだ。

たとえば体中が血で汚れても、きっと抱きしめてくれる。

「やるよ……將軍つてのをやってやるよ! 失敗しても文句言つなよ!」

フェイの不遜な物言いに、王は満足した笑みを浮かべ頷いた。

「なれば軍に出陣を告げよ! 蒸気車ダンフを貸してやる。車両を付け足せばゴルゴンに対抗できる数の軍も運べるだろう」

王は手を叩くと、侍従官がロープを引き、巨大な扉が再び開かれた。

そして、割れんばかりの歓声が響く。

軍はともかく、広場に詰め掛けた人々ですら誰も帰っていないかった。

「静まれ！」

王が両手を広げると、歓声は水を打つように静まる。

両脇に灯されたかがり火に照らされ、その姿は神々しくすらあった。

「今、ゴルゴンが大挙してゼクス領に進攻を開始したと報が入った」

うねりのようなどよめきが、城の前を駆け巡る。

「もはや一刻の猶予も無い。ゴルゴンを討伐せねばなんのだ！」

さあ、新しき將軍よ、前に出よ！」

王の声に津波のような歓声が沸きあがった。

フェイは王に譲られた場所に、ゆつくりと導かれ、その中心点に立つ。

コッソ

肩を叩く硬い感触に振り返ると、エルカが剣の柄を差し出していた。
バスタードソード王から賜ったばかりの長剣だ。

エルカの顔にはニヒルな笑みが張り付き、その表情はフェイに語っていた。

將軍らしく、これを抜けと。

キンッ

鞘から剣を抜き放ち、天空に静かに掲げると、広場は再び沈黙に包まれた。

あれだけの歓声を上げていたエネルギーは、今、この剣一本で塞^せき止められ、決壊する出口を探しているのだ。

熱気とも狂気とも感じる空気に、フェイは総毛立った。

しっかりしろ！ クロフ達が助けを待ってるんだ

フェイはその細い体に、吸えるだけの息を吸い込んだ。

「剣の民よっ！ 俺がリアッフェイロンだっ！」

リアッフェイロン、オルフェルがくれた大切な名前だった。

オルフェルは自分を悪だと言って、その上でフェイ達を育てたのだ。

ならば、自分も言い訳などすまい。

「剣の行く先は、悪だ！ どんな大義名分があろうと、悪だ！」

悪という異質な言葉に民たちは困惑の色を浮かべ、顔を見合わせる。

「だが、今必要なものが剣ならば、我は悪になり剣を振るおう！」

フェイは剣を人の群れの中点に向け、突いた。

「皆に問う、その覚悟はあるか！？」

一瞬の沈黙　そして次々と呼応の叫びが続き、拳が振りあがる。

「なれば、我が剣に続け！」

フェイのその一言に、広場に溜まっていた熱気は終に決壊を起した。

地割れのような歓声が、王都の町を揺るがしたのだ。

「クラー参謀、合図の狼煙があがりました。王都で軍が動いたようです」

伝令の報告に、クラーは持っていた短剣を近くの木の幹に深々と突きたてた。

「やはり、愚かなる剣の民は従わぬか……忌々しい。將軍は情報どおりリア＝フェイロンだろうな。ゼクス攻略隊の先鋒の状況は？」

「あと三時間ほどでゼクスの外壁に着くと思われます」

「王都からは竜馬で急いでも十時間はかかる。それだけの時間あれば十分だ。リア＝フェイロンなど気にせず、到着次第ゼクスに侵略しろ！そして、進攻後六時間後には撤退するよう先鋒に命じる」

「はっ。ですが、もし軍が来るまで撤退できなければ」

「安心しろ、殿は、ウイシャ団長がやってくださる。我らを侮った報いを略奪の限りをもって示せ！」

「はっ」

伝令が去ると、クラーは立ち上がり、誰も伴わずに後方にある馬車へと向った。

「調子はどうだ？ ウイシャ団長」

馬車の覆いをめくり、ランプを掲げる。

そこにいたのは鎖に繋がれ、涎よだれを垂らしつづけている一人の男だ。長く伸びきった黒い髪に隠れているのは、知性の光の無い瞳。鍛え上げられた巨軀は爪で引つ掻いたような傷がびっしりとついている。あからさまに自傷の痕あとである。

「ひっ……秘薬を……をおおおっ」

それは水に飢えた野獣のようであった。

クラーが懷から紙包みを取り出すと、男はガチャガチャと鎖を鳴らし、興奮を表す。

「ウイシャ団長。あたなの活躍の場が来ましたよ。殺戮きつりくに酔いなさい」

クラーは紙包みの封を破り、荒ぶる男の口元に一筋の粉を降り注いだ。

(36) 蒸気列車は闇夜を行く

蒸気列車は闇夜を行く。
ダンブフェン

煙を上げ、唸りを上げ、力を振り絞り、ひたすらに白き巨道レイルを疾走していた。

蒸気車に繋がれた五台の車両には、落ちそうなほどの人が詰め込れ、屋根の上にもギツチリと鎧兜をつけた軍人がひしめいている。絶対的な強度を誇っていたはずのバイスレイトが、非常識な車両の重みにギリギリと悲鳴を上げるほどだ。

作戦会議はその先頭車両で行われていた。

千人隊長と呼ばれる者が三人、百人隊長と呼ばれる者が二十五人、ゼクス領の領主やガラムの姿も見えた。その先頭に立っているのは將軍、つまりフェイであり、その右で作戦を展開しているのは、フェイが臨時参謀に任命したエルカだ。

「敵は間違いなくゼクス領の西門を突破しようとする。衛視たちが必死に防衛するだろうが、人数差から考えると我々が着くまで保たないだろう」

フェイと、フェイの左に控えていたコノハの顔が悲痛に染まる。結婚したばかりのクロフも、西門の守りに着くのだろうか？

(大丈夫だ。あのクロフが、こんなところで死ぬはずが無い)

フェイは心の中で自分に言い聞かせ、動揺を隠す。

將軍の仕事とは、自信に満ちた顔してふんぞり返っている事だと、エルカ参謀に言われたばかりなのだ。

「もし西門が無事なら事は簡単だ。残存する守備隊に合流し、ともに西門を死守する。だが破られ、領内に侵入されている場合はこの蒸気列車ごとゼクス領に乗り込み、各部隊をさらに10人ずつの分隊に分け、領内に散っている敵を掃討する。ここまでは良いか？」

「参謀、よろしいでしょうか？」

手を上げたのは、千人隊長の一人だ。髭に白髪が混じっており、人生経験の豊富さが伺える。

其れゆえか、エルカに対する不信感がちらほらと見て取れる表情を浮かべていた。

「我々の軍は敵の半分である二千五百。分散するより、集中しての各個撃破が上策かと存じます」

「もしこれが総力戦と言うなら、言う通りだろう……だが、敵の狙いはシュバート国への警告、王が要求を飲まなかった事への制裁だ。おそらく軍との消耗戦は避け、犠牲が出る前に退却するだろう。だから我々の目的は一刻も早くゼクスに着き、非戦闘員を一人でも多く救助する事にある。他に質問はあるか？」

とても若輩者の発するとは思えない口調と威厳、そして戦略眼に、質問した千人隊長は愚か他の者もエルカを見る目を変えた。

そして、一拍置いて手を上げたのは、ずっと沈黙を守っていたゼクス領主、ラドクリフ公だった。

エルカの顔に、一瞬の不安が落ちる。

「父　いえ、ラドクリフ公爵、なにか作戦に疑問でも？」

フェイも詳しく聞いたわけではない。しかし、エルカが公爵家を出たの原因は、この領主が原因である事に疑いようも無い。

おそらく、それは劣等感だ。

領主もそれを知っているのだろつ。エルカに微笑を向けると小さく首を振る。

「心配するな、エルカ。作戦はそれで十分だ。ただ、敵の大將
ウィシャには手を出すな。作戦が全て壊れるぞ」

「……それはどういう意味でしょう？」

「ウィシャを人間と思うな。砂漠の長だったガラムを破ったのも奴。
わしらを退け、砂漠の拠点^{オアシス}をことごとく殲滅^{せんめつ}できたのも、奴がいたからだ。あれに遭遇したら何があっても逃げる。そして、このラド
クリフ公を呼べ。以上だ」

腕を組み沈黙した領主の目には、覚悟の炎が見える。
その父の姿に、エルカは小さく唇を噛んで、やがて頷いた。

クロフは西門の上にいた。

明らんできた東の空に背を向け、西の地平線を一心に睨む。
来るな、来るなと祈りながら……

ゼクス領は南北を険しい鉾山に挟まれた、守るに易い地形だ。

もし砂漠側から攻めるなら、西側の門が一番に狙われるのは道理
である。

^{バイスアルム}

しかも、広大な巨道上に設けられた門は木製だった。巨大で重厚
なものの、火を点けられれば一貫の終わりだ。

もし西門が破られれば　あとは無防備な町並みが広がるのみ。
つまりここは絶対に死守しなくてはならない、最大の拠点なのだ。

地平線の一部が黒く滲^{にじ}む。

「来たぞ！ ゴルゴンだっ！」

望遠鏡を持っていた監視役の衛視が叫んだ。

ゴルゴンの第一陣は、巨道バイスアルムの真中を堂々と歩いてくる。

「弓を持って！ 絶対にここを通すなっ！」

門上の衛視達を率いて指揮を取っているのは親衛隊員のアズマである。青アザはすっかり取れ、その精悍な顔で、的確に指示を出していた。

昨夜、砂漠の民から「ゴルゴンが来る」と情報が入るや、アズマは全衛視に声をかけ、西門上に一晚陣取っていたのだ。若くして親衛隊に加わった実力は、本物だった。

レンファ

クロフは奥歯を噛み締め、守りたい人の顔を強く心に描く。

だが、目の前に広がるは千を超える賊の群れである。突破されるのが時間の問題である事は、そこにいる誰もが感じていた。

それでも退く訳にはいかない。

守るべきものが、このすぐ後ろに広がっているのだ。

「一斉射撃用意っ！」

放てっ！」

数百の矢が宙を舞った。

落下力を利用するため上空に向けて放たれた矢は、ゴルゴンの尖せん兵へいを何人が減らす事に成功した。だが、言い換えればほんの数名を削ったのみである。

ゴルゴンの軍勢は怯むどころか、逆に低い雄叫びを上げると、郡狼のように突撃を開始した。

クロフは悲痛な想いで第二射を準備し、弓を構える。

「くそっ！ 新手だっ！」

その時、監視役の悲痛な声が響いた。

クロフがギョツとして地平線に目を向けると、そこに見えたのは、数百の騎馬が巻き上げる土煙だったのだ。

だめだ、破られる

「いや、なんか様子が変だ」

監視役の言葉にクロフは目を凝らす。

確かに、敵の後続と思われた騎馬部隊は、門に迫っている賊達とは毛色が違った。

「おい、あの騎兵の先頭にいるやつ、女だ！」

「……っ！ おい、ちよつと貸せっ！」

クロフは監視役から望遠鏡を引つ手繰ると、その先頭にいる女に焦点を合わせる。

騎兵隊の先頭を駆つて来る人物は、確かに灰色の長い髪を靡かせなびていた。なるほど、遠目からでもすぐ女と分かるわけである。

そして、その両手には二本の曲刀シヤムシールが見えた。艶やかな美しい顔と、壮絶な笑み。

フェイに聞いた砂漠の長、ディアナの姿にピタリと当てはまる。

「間違いない、砂漠の民だっ！ 砂漠の民が加勢にきたぞっ！」

クロフの叫びは、衛視たちの顔に生氣を呼び戻した。
アズマは剣を抜き、高らかに叫ぶ。

「門を開ける！ 挟撃を開始する！」

挟撃された賊は、すぐさま戦意を喪失し、蜘蛛の子を散らすように退却した。

西門の前は、初戦の勝利に喜ぶ衛視と砂漠の民で沸き返る。

ディアナは手綱も握らずに駿馬を操ると、アズマの前にやって来た。

アズマは膝を着き、感謝と敬意を表す。

「助かりました。砂漠の長」

「なんだい、気持ち悪いね。ディアナと呼びな。それより、あんたがこの門の指揮官ね？ よく門を出てきたじゃない。その判断力は誉めてあげるわ」

「あ、ありがとうございます」

「さて、敵さんはまだまだ来るわよ。ここを守りきって、もうすぐ戻ってくるあんたらの領主様を驚かしてやりな！」

ディアナは悪戯をする子供のような笑みを見せ、領主と言つ言葉に衛視達の顔がさらに輝いた。

「ゴルゴンの第二陣、見えました！」

門の上から監視役が叫ぶ。

「あ、敵が止まりました……あ、いえ、一人だけこっちに歩いてきます」

「一人？ 使者か？」

アズマは見張りの指差す方を見る。

ディアナも馬首を巡らして、敵のいる方へ目を細める。
突然、ディアナの目が見開かれ、馬上で立ち上がった。

「ウイシャだっ！！ 全員町に入って散れ！ 急げっ！」

その顔には微塵の余裕も無く、顔は一瞬のうちに蒼白になっていた。

「ディアナ殿、一体なにを？ 相手は一人です。あれがゴルゴンの頭だっと言っなら、ここで」

「そうやって砂漠の民は何度も、何度も住む場所を失った！ 迷っている暇は無い、急げっ！」

ディアナの号令に、砂漠の民は迷うことなく門をくぐり、遅れてアズマたちも門の内側へ入った。

「門を閉じる！ 門の上にいる弓隊もすぐさま撤退しろ！」

アズマに代わってディアナが指示を飛ばす。

しかし、弓隊は命令を聞いてもいいものか困惑の顔を浮かべた。

「相手は一人、それに門だって閉じてる。たとえ燃やされても、しばらくは大丈夫だし、やれる事はやっておこう」

誰かがそう言うと、数十人いた弓隊は全員頷き、歩いてくるウイシャ目掛けて一斉射を開始した。が、ユラユラと揺れるその男には当たらない。かすりもしない。

男は上半身は裸で、傷だらけの体を朝日に晒している。くすんだ革ズボンに、みすばらしく伸びきった長髪は、盗賊団の長と云うより、まるで幽鬼かなにかのようだ。

その手には巨大な、体よりも大きな鉄槌てつちを一本だけ持っており、ゆつくりと、しかし確実に門へと近づいている。

と、弓隊に向けて下から怒声が飛んできた。

「何をやっている！ 退けっ！ 門を捨てろ！」

ディアナの声に弓隊はようやく重い腰を上げた が、既に遅かった。

門の前に立ったウィシャは、その巨大な鉄槌を子供が木の棒切れで遊ぶかのように振るう。

すると分厚い門は紙のように破れやぶ、無残にその姿を変えた。

「うわ、化け物っ！」

ちょうど、門から降りたばかりの弓隊の面々は、ウィシャは見て悲鳴を上げる。

その声を聞くやウィシャは持っていた鉄槌を、躊躇ちゅうちゆ無く投げつけた。

ゼクス領自慢のバイスレイトの鎧など、何の意味もなさなかった。悲鳴を上げることさえできず、一瞬で骨まで潰された。

動かなくなった衛視にウィシャは近づき、その腰にささっていた剣を滑らかな動作で奪う。

ぐるりと辺りを見回し、逃げようとしていた衛視が視界に入るや、その背に剣を投げた。

門はすぐに静かになった。

近くに動くものが無くなった事を知ったウィシャは、最初に投げた鉄槌を虚ろな顔で拾いあげ、赤く染まった巨道バイスアルムを、音も無く歩き出した。

クロフはアズマ達と巨道沿いに逃げていた。目指すは彼らの主の城でる領主邸だ。

そんな衛視隊に駿馬エクウスに乗ったディアナが追いつき、沈痛な表情で「突破された」と告げた。

クロフ達が門を振り返ると、ゴルゴンの第二陣が蟻のように西門から侵入している。

アズマは頭を抱えた。

「くそつ、西門を突破された……今度こそクビだ」

「こんな時に女々しい事を言うんじゃないよ！ ウィシャは無視して、他の賊を討ちなさい！ 被害を最小限に抑えるのよ！」

「し、しかし、こちらの手勢は相手より少なく」

「増援が来るまで民を守るくらいのこととはやって見せなさい！」

ディアナは落ち込むアズマを叱咤した。

その言葉に誰より反応したのはクロフだった。

そうだ、レンファ！

クロフにとって、取り返しのつかない命は沢山ある。

だが、一つを選べと言われれば、それは、

「アズマさん、俺、野暮用ができました。今日はここで早退します

！」

「お前、何を　　ああ、そうか！　よし、行つて来い！」
「はいっ！」

レンファ達が避難した場所は、おそらく二人が式を挙げた教会だろう。

クロフは一人方向を変え、鎧を打ち鳴らして駆け出した。

仮眠を取れと言われたが、フェイは一睡も出来なかった。
フェイに寄り添うように目を閉じているコノハも、触れている肩の緊張は一向に緩まない。
眠れないのだ。

眠れる訳、無いよな

何度目になるか分からないため息を吐き出そうとしたときだった。

「見えたぞ！　ゼクスだっ！」

興奮したような叫び声が響く。おそらく車両の上にいる兵士の声だろう。

フェイとコノハは弾かれるように目を開くと、車両の窓から身を乗り出す。

真っ黒な煙が、見えた。

「そんな……」

コノハは両手で顔を覆った。
フェイは、確かめるように生まれ育った故郷を何度も見る。だが、
事実は変わらない。
煙は一筋ではない、黒い煙がゼクス領のあちこちから立ち昇っているのだ。

間に合わなかった

フェイは唇をかみ締め、自分が迷って行動が遅れた事を後悔した。
ゼクス領があつという間に近づき、力無く開いている西門が視界に入る。

門の手前には、動かなくなった人々。それは門の向こうにも続いており、全て放置されている。

あれは死体なのだ、死者が出てしまったのだ。

「……うつ」

「何を動揺している、リア＝フェイロン」

振り向くと、カシムが腕を組んでいた。

「ど、動揺して悪いかっ！　だって、死体だぞ！　人が、死んでるんだぞ！」

「砂漠の民は、今まで何度もこうやって住む場所を追われていた」
「でも……」

カシムはフェイの目を覗き込んだ。

「貴様ら剣の民は、それを見ようとしなかった。自分たちに害が無ければ、目に入らぬのだ」

フエイはカシムを睨み返した。
何か反論を言いたいのだが、思い浮かぶ言葉はどれも、言い訳にしか思えない。

「貴様がいくら目を閉じ幸せに暮らそうと、同じ世界では誰かが泣きながら殺されている事を、忘れるな」

カシムはそれだけ言つと、ガラムのところに戻って行つた。
フエイは動かなくなつた屍を見つめる。

これが、俺が見ようとしなかつた現実

フエイは剣を握る手に力を込めた。
ダガー

「なんだあれはっ！」

ダンブフェン
蒸気列車を見て、クラーは叫び声を上げた。

クラーはゼクス領には入らず、領外にある木々生い茂る山の中に身を潜め、伝令や狼煙のろしで指示を出していたのだ。

だが、そこからでも蒸気列車ダンブフェンの巨大な姿と、吹き上げる白い煙はハッキリと見る事ができた。

「分かりません　　が、あの鉄の塊に軍が大量に乗り込んでいるようです」

「くそっ、ゴリネルめが！　情報を隠しておつたな！」

クラーは悔しそうに短剣をガツガツと木に突き立てる。

「止むを得ん、予定より早いが撤退の合図だ！」
「はっ」

欲を言えばもつと被害を与えたかった。

各領で最もゴルゴン討伐に意欲的なゼクスを叩く事で、ゴルゴンの力を示す事が出来たはずなのだ。それが、予想外の事態である。

だが、そろそろウィシャの薬が切れる頃だ、そうならば

「あとどれだけの死者がでるのか、楽しみだな」

クラーは血走った目で蒸気列車を睨み続けた。

西門をくぐった蒸気列車は、分隊を降ろすため減速を開始した。

ギイイイツギイイイイイイ

何万匹の油蟬が断末魔をあげたような怪音は、たちまち街中に響き渡った。

「第九、第十分隊、北へ散開！ 第四、第五分隊は南へ！ 指定地区の安全を最優先せよ！ 逃げる者は追うなよ！」

エルカの号令で十人単位の兵が、減速したとは云え動いている列車から飛び降りる。足を痛める者もいるだろうが、誰一人ためらう

事無く飛び降りると、すぐさま立ち上がり指定区域へと急いだ。

「エルカ、指揮は任せていいか？」

フェイが尋ねると、エルカはゆっくりと頷いた。

「行ってこい。だが、將軍は死なない事も仕事だ。絶対に無理はするなよ……コノハ、フェイを頼む」

大きく頷いたコノハの目には、既に静かな決意があつた。
言つまでも無かつたかとエルカは苦笑する。

「躊躇^{ちゅうしゆ}するな、誰かを守りたければ、迷わず斬れ」
「了解、店長」

フェイとコノハは静かに列車から飛び降りた。
それはまるで、二匹の猫のようだった。

クロフの振るつた白刃は、五人目の盗賊を切り伏せる。

「ハアッ、ハアッ……」

人を初めて斬り殺したのは、たった十分前である。
何の覚悟も出来ないまま、レンファを守りたい一心で剣を振り、
既に五人を斬ってしまった。

頭の中が朦朧^{もうちゅう}とし、視界がグルグルと回る気持ち悪い浮遊感が抜けない。

しかし、クロフのすぐ後ろには教会があり、礼拝堂にはレンファを初め、多くの女子供が隠れている。何があってもここを通す訳にはいかないのだ。

「衛視さん、無理しないで下さい」

隣で声を掛けたのは、まだ十五、六の少女である。しかし、実力はたいしたものだった。

彼女はコノハの道場の門下生だと言う。『クグラ槍術道場』の門下生一同は、賊から民を守るため、槍を手に果敢に立ち上がったそうだ。

ここにはクロフと少女の二人だが、他にも多くの民間人が立ち上がっていた。

少女のように道場の門下生もいれば、フェイ達のようなクエスト屋もいた。家族の為に家宝の剣を引っ張り出した父親も少なくない。

「私、こう見えても、コノハお姉様に筋がいいって言われてるんですよ」

「……そうか、それは心強い」

上気した頬で満足そうに頷いた少女の顔は、やはりまだ子供だった。

こんな子供を殺人者にしたくない。

止めは、俺が刺さなきゃな

クロフは苦笑すると、持っていた剣をギュッと握りなおした。

ピイイイイッ　ピイイイッ

「退却だ！ 退却の合図だっ！」

指笛の音と共に、町の間から盗賊達の退却を告げる声が響いた。すぐさま、賊達が慌てて逃げ出す姿がクロフ達の目にも入った。

終わった！ 守り切れた！

クロフは剣を振って血を落とすと、鞘に収め、息をついた。少女も槍を杖代わりにして、地面にペタリと座り込んだ。相当気を張っていたのだろう。

知らずお互いの顔を見て、笑みが零れた。その時だった。

「うわああああっ！」

切り裂くような断末魔、そして、腹の底に響く爆碎音が近くから飛び込んだ。

そして次の瞬間、目の前にあった家屋がガラガラと倒壊する。

「なっ、何事だ？」

クロフは再び剣を引き抜くと、家屋が倒壊し、砂煙の舞う方角を凝視する。

その中から、ゆっくりと人影が姿を現した。

ゾクリ

クロフの背に、金属でも押し当てたかのような阿寒が走った。砂煙から現れた男は巨大な鉄槌を構え、幽鬼のように無表情に歩いている。その淀んだ、銀の瞳がつまらなそうにクロフを捕えた。クロフは隣にいる少女に、小さく指示を出す。

「……に、逃げる」

「この人、なんか変です。誰なんですか？」

「いいから、急いで中に避難しろっ！」

「で、でもっ！」

「俺に殺されたいかつ！」

少女は「ひっ」と息を飲み込み、慌てて教会の中へと駆け出した。

レンファ

クロフは祈るように剣を構え、その男に正面から向き合う。
その覚悟を見て、ウィシヤの唇がニィと吊り上った。

(37) ラドクリフ公爵

「ラドクリフ公爵、ウィシャが出たと報告が入りました。教会のすぐ近くだそうです」

エルカの報告に、領主は大きく頷いた。

「分かった。すぐに向かおう……………だがその前に、少し頼みがある」

エルカは顔を上げ、領主の目を見た。

その眼は、いつもの威厳を微塵みじんも感じさせない。ただそこにあつたのは、覚悟と悲壮　エルカの胸に不安がよぎる。

「なんでしょう、ラドクリフ公爵」

「もう一度、父と呼んでくれんか」

エルカは目を見開らいた。

つい、『父上』と口に出てしまいそうになるのを抑え、首を振る。

「御免です。そう言う事は、王都に戻ってセシリアに頼んでください」

「相変わらずだな。だが、家を出た頃と比べ随分マシになった。大人しく戻ってくるなら公爵を継がせても良いが、もう無理であろうな」

「……………いい加減にしてください、公爵閣下」

怒りを抑えてエルカが睨むと、領主は最後に苦笑を浮かべ、それ以上何も言わず列車から飛び降りた。

その背中をじつと見つめ続けるエルカに、ガラムは声をかけた。

「殿下、領主公は大丈夫です。なにせこの私を圧倒したのですから」
「初耳ですよ、そんな事……ですが、ウイシャと言う男も、師匠^{ラビ}に勝ったのでしょうか？」

ガラムは沈黙で答える。

それはどちらがより強かったのかすら、雄弁に語っていた。

「……師匠^{ラビ}、父上を頼みます」
「この命尽きるまで」

ガラムは両の拳を合わせると、風と言う名に相応しく、羽のように列車を飛び降りた。

ウイシャの鉄槌^{てつち}は、予備動作も無くクロフに振り下ろされた。

「うおおおおっ！」

クロフは身を振り^{よじ}辛うじてそれを避けたが、鉄槌は垂直に軌道を変え、クロフの横腹にめり込む。

「うえっ……けほっ」

クロフは地を四転し、持っていた剣はさらに遠くへと飛ばされてしまった。

ウイシャの鉄槌が無理な軌道を描いたため即死こそ免れたが、肺

を強打されたクロフは呼吸困難に陥り、動く事ができない。

まだ、死ねない

ウイシャは倒れたクロフを見ても、一切の動作を止めず、ただ真つ直ぐに近づいてくる。

クロフは遠くに転がる剣に手を伸ばすが届くはずも無く、ただ蛙のように地を這いずっただけだった。

ウイシャの影が、クロフの体の上に落ちる。

レンファ！

クロフは目を閉じ、必死で愛する者の名を胸に刻んだ。
しかし、死の鉄槌はクロフに迫る途中で、その軌道を変える。

ギンッ

そして、鉄槌は飛来した何かを弾き飛ばした。

「クロフッ！！」

その懐かしい声に、クロフの目に涙が溢れる。

「……フエ、イ」

滲んだ視界に、黒いひよろりとしたシルエツトが映る。

少し視線をずらせば、矢のように疾駆するもう一つの細いシルエツト。

「クロフから離れなさいっ！」

コノハは音すら置き去りにした渾身の突きを放つ。
鉄槌は難なくその軌道を逸^そらす^そが、続けざまに鉄槌の防ぎ難^{にく}い足元を狙う。だが、その一撃は鉄槌のグリップエンドで弾かれ、すぐに間合いを取られた。

「クロフ、大丈夫か？」

その間にフェイがクロフ助け起こし、回収した剣を渡す。

「フェイ、コノハ、お前ら最高だよっ！」

「喜ぶのは早いぜ、クロフ……まだいけるか？」

「教会にレンファがいるんだ。やれないわけが無いだろ！」

クロフは体のダメージを確認する。呼吸は戻っている。骨にひびくらい入っているかもしれないが、まだ動けないほどではない。

いける　クロフは愛用の剣を構えなおすと、フェイやコノハの動きにあわせ、ウィシャの周りを囲む。

屈強な大人に対抗するため、三人で何度も練習した陣形である。

その懐かしさが、クロフの中から恐怖を拭い去った。

今なら何でもできる気がする。

「あれ、いくよ！」

コノハは号令を掛けると、二人の返事も聞かずに加速する。

フェイもダガーを目の前にかざすと、地面すれすれを駆け出した。最後にクロフは剣を中段に構え、ウィシャへと突進する。

コノハが軽やかに空へと跳ぶ。

跳べばその軌道は簡単に読まれ、一対一の武術においてはとんで

もない悪手である。

だが、反対から地を這う攻撃と合わさればどうなるか　無論、視線が追いつくわけが無い。前後上下からの攻撃に対応できる人間などいないのだ。

となると、対抗する術はその二人の対角線に入らぬように移動するしかない。

けどな、移動なんてさせねえぜ

腰を落として下がろうとしていたウィシャに、クロフは真正面から突撃する。

「うおおおおっ！」

剣にクロフの全体重を乗せ、力任せにぶつかった。当然、ウィシャの鉄槌は剣を受け止め、ダメージを与えることはできないが、動きが一瞬止まる。そして、それで十分だった。

「いけっ、コノハ！　フェイ！」

その叫びに応えるように、コノハが逆光を背に槍を放ち、フェイが影に紛れて足を刈る。

その時、ウィシャの顔に壮絶な　笑みが浮かんだ。

クロフの背に再び悪寒が走り、そして気付く。巨大な槌つちを持っているのは、ウィシャの右手一本だったのだ。

自由な左手は、神速で迫る槍の穂先をあっさりと掴み、フェイのダガーも刃先を見もしないで踏みつけ、封じてしまった。

三人の必殺のはずだった攻撃は完全に封じられ、一瞬の静寂が訪れる。

ドスッ

ウィシャの顔がピクリと歪み、その腹に食い込んだ鉄矢ボルトを見た。

「俺はもう、躊躇ためらわない」

フェイが左手に隠し持ったボウガンを、用済みとばかりに横に投げ捨てた。

ウィシャの力が緩み、その隙に止めを刺すべく、三人が動作を開始しようとした刹那　落雷のような警告が飛んだ。

「よせ！　それは、畏だ！」

領主の叫びは、三人の命をギリギリで救った。

コノハは槍を捨て、後方に跳び、クロフもフェイも唸りを上げる鉄槌を紙一重で避ける。

「退け！　リア＝フェイロン！」

フェイ達は言われるままに距離を取る。

領主の気配に呼応したのか、ウィシャは虚空に雄叫びを上げた。

「……ひ、ひや……く、をおおっ！　うをおおおおっ！」

それは飢えた嘆きの声だ。

「憐れな、まだ解放されぬのか……」

領主は鈍い光を放つ直剣サーベルを抜き放ち、野牛の如く突撃した。

その一キュピトにみたぬ刃は巨大な鉄槌と比べ、あまりに貧弱だ。

「ぬおおおつ！！」

だが切り上げた直剣サベルの一撃は鉄塊を跳ね上げ、がら空きになった胸を狙う。

しかし、跳ね上げられた鉄槌は、さらに加速して引き戻される。耳が痛くなるほどの金属音と大量の火花。

弾き飛ばされた両者の武器は磁石のように引き合わされ、轟音に変わる。

手を伸ばせば触れる距離で二匹の化け物は互いの命を晒しあい、剣戟けんげきの速度を上げていく。

重量を無視したような速度で振り下ろされる鉄槌を、ただ一本の直剣サベルが真正面から受け止めた。

一瞬の膠着じゅうちやく。

両者は後方に飛ぶと同時に一瞬だけ息を継ぎ、水に潜るように再び交わる。

叩き、受け、薙ぎ、潰し、潰し、潰し、逸らし、突く

しかし、際限なく速度を上げると思われた打ち合いは、一步だけウィシャの速度が上回った。

常人なら持つ事も適わぬ鉄槌を振りまわす速度が、である。

「ぬおおおおおお！」

領主は形勢の不利を理解し、それでも渾身の突きを見舞う。だが、喉元のどもちを狙った一撃は、ウィシャの素手に掴まれた。ウィシャの顔が狂喜に彩られ、鉄槌が凶悪な弧を描く。

「領主公っ！」

ガラムは一陣の風となり、鉄槌と領主の間に体をねじ込んだ。
鉄槌を防ごうとした二本の曲刀は一瞬のうちに砕け散り、その胸に鉄槌が食い込む。

領主は一瞬で来た隙を付いてウィシャを蹴り飛ばすが、ウィシャは宙で一回りすると事も無く地に降り立った。

「この馬鹿者がっ！」

領主は倒れ伏すガラムを罵倒した。

「すみませぬっ……殿下との、約束……で」

「黙れガラムッ！ 貴様とわしの約束が先決のはずだ！ 必ずこの悪魔^{ウィシャ}を止めてやる。だからそこで待っているっ！」

領主は勝ち目が無くともこの戦いを止めるつもりは無く、その闘志は欠片も衰えなていなかった。

変化があったのは、ウィシャの方であった。
涎^{よだれ}がとめどなく流れ出て、体を掻き^{むし}り始めたのだ。

「あああっ！ ひや……くうおおおおっ！ くらあああっ！」

何かを叫び、突然、背を向けると西門に向って一直線に逃亡を開始した。

領主は追いかけようと一步を踏み出し、そこで倒れているガラムを見て、立ち止まる。

そして、領主のほかに誰も、追いかける気力などありはしない。
狂気の逃げた先を見て、呆然と立ち尽くすのみだった。

「何をしておるっ！ 敵は去ったのだぞ！ 急いで消火にあたらんかっ！」

呆けていた一同に、領主の一喝が告げた。
ようやくこの戦いが終わったのだと、誰もがその時思ったのだ。

エルカは復旧処理を済ませるまで、このゼクス領に留まる事をフエイに告げた。

当然、領主やガラムもゼクスに残る事になっていた。だが、

「コノハ、別に無理して王都に戻らなくても良いんだぞ」
「いいの。あたしはあんたと一緒に行くって、そう決めたんだから」

そう言いながらも、王都近くに来るまでの数時間、蒸気列車に揺られながら、コノハは五分おきにゼクスの方角を振り返っていた。
あそこには彼女の家族がいて、道場があるのだ。一応の安否は分かったとはいえ、傍に居たくない訳が無い。多くの門下生だっている。天涯孤独なフエイとは違うはずなのだ。

フエイが心配そうにコノハを見つめると、コノハは頬を染めてフエイの額をこずいた。

「あたしは大丈夫って言ったでしょ！ それより、フエイこそ大丈夫なの？ あんたいつつも無駄な責任抱え込むんだから」
「……」

すっかり見抜かれていた。

この戦いは、フェイが原因で始まったようなものだ。

自分が犠牲になれば、被害は自分ひとりで済んだかもしれない。
ゼクス領に倒れていた犠牲者たちは、すえてこの首の代償なのだ。

もし、今、コノハが傍に居なかったら、きっと後悔と自責で塞ぎこんでいた事だろう。

「正直に言っと、コノハがいてくれて助かる……ありがとうな」

「フェイ……」

その言葉にコノハは泣きそうな顔を見せ、呼吸が届くほどフェイに近づいた。

フェイと同じ漆黒の瞳が潤み、真っ直ぐに見つめる。

「あたし」

「ケホンッ！ あー、それ以上は解散してからにして頂けないでし
ようか。ここには一人身のヤツも多いので」

「えっ？」

ケホンケホンと咳払いをしたのは、顎鬚あごひげの立派な千人隊長だった。
周囲を見回したコノハは、そこにいる大量の将兵を見るや、慌て
て一歩下がり、すっかり俯うつむいてしまった。

「フェイ將軍、すみませんな」

「ん？ いや、とにかくそのフェイ將軍っての止めてくれよ」

「と言いますと、黒猫將軍と呼べと？」

「なおい悪いわっ！」

フェイが怒鳴ると、千人隊長は苦笑した。

「気難しい方ですな。それより、ほら、王都に入りますぞ」

言われて、フェイは窓の外に身を乗り出した。
王都の古めかしい門が見え、遠く小さく見えるシュバート城まで
真っ直ぐ伸びている白き巨道が……何かに埋もれていた。

道が塞がれてる？

門の向こうの道が、大量の何かで埋まっているのだ。
しかもそれは、もぞもぞと蠢うごめいている。

まさかあれ、人か！？

「あぶない、どけええっ！」

フェイが窓から身を乗り出し巨道を塞ぐ人々に叫ぶと、その万倍
の叫び声が返り、あまりの轟音に車内が小刻みに揺れた。

蒸気列車はやむなく減速するが、その凶悪なブレーキ音ですら大
歓声に打ち消される。

俯うつむいていたコノハも、何事かとフェイの横から身を乗り出した。

「なんの騒ぎだ、これは！」

フェイの叫びを聞く事が出来たのは、横にいたコノハだけであっ
た。

「この鈍感！ みんなあんたの勝利を祝ってるのよ！」
「勝利！？」

フェイは素っ頓狂な声を上げた。

「そうよ！ あんたはよくやったわよ！ ゼクスを救ったのよ！」

コノハは誇らしげに笑った。

俺が、救った？ 冗談じゃない、俺のせいなのに

フェイが眉根を寄せると、コノハは不満そうに頬ほほを膨らませた。
しばらく思案した後、コノハはおもむろにフェイの手を掴むと、
道を埋め尽くす民衆へ強引に手を振らせた。

歓声がさらに沸き返る。

「おいっ、コノハッ！ やめろって！」

「これも將軍のお仕事でしょ！ はい、笑って笑って！」

確かに、コノハの言う通りかも知れない。

たとえ悲しんでいても、皆を明るく勇気付ける事が、將軍の責任
の取り方なのだろう。

うん、きっとこれが、責任だ

隣で笑っているコノハを見て、フェイはそう思った。

それにそう、大切な友人であるクロフを守れた。それだけは、事
実なのだ。

戦いの後、レンファに抱きついてワアワアと泣いているクロフを
見てフェイは思った。

クロフにとってレンファは、本当に心の支えなのだ。

結婚の宣誓にあった、『守る喜びを知る者』とは、本当の事だっ
たのだ。

そして、思う。

自分も守るものが欲しいと、心の支えが欲しいと。

帰ったら、ルナに告白しよう。怖いけど、断られるかもしれないけど、俺の気持ちを正直に言おう

フェイは拳を握り一大決心したのだ。

シュバート城の廊下で、ルナは窓枠に身を預けているエドガー王子を見つけた。

エドガーはゆっくりと迫り来る列車と、それに群がり歓声を上げる人々を、遠い目で見つめていた。

「王子、どうかされましたか？」

「ルナ！……いや、僕は、その」

ルナは王子の前に座り込むと、その白く美しい手を優しく包んだ。

「何かあったのは見れば分かります。私でよければ、話してください」

「……あの、僕は……その、怖いのです」

王子はポツポツとルナに語った。

「実は明日、王になれと父上に言われました。既に父上は、退位の儀まで済ませてしまったのです」

「大丈夫、あなたは素敵な王様になれます。この私が保証します」

「でも、僕はフェイ將軍の足元にも及ばない。あの大歓声は、すべてフェイ將軍に向けられているのです。僕が王になって、果たして

あの大歓声が得られましょうか？」

王子の澄んだ蒼い瞳には、涙すら溜まっていた。

フエイなんて、たいしたこと無いのに……でも、これは

ルナは天使のような微笑を浮かべると、王子の手をそつと引く。

「なら、私が勇気を差し上げますわ」
「勇気を？」

王子は引かれるままに、ルナの後ろをどこまでも付いて行ったのだった。

(38) 結論から言おう

結論から言おう、フェイはその夜ルナに告白することができなかった。それどころか、彼女に会うことすら適わなかったのである。城に戻ったフェイを待っていたのは、既に退位した王の長い長い長い^{すばい}長い言葉と、新王エドガーの即位式に集まった領主たちの挨拶に次ぐ挨拶。そして冷めた料理だけである。

あわよくばルナが出迎えて、感激のあまり頬にキスでも……と妄想していたフェイの落胆は大きかった。

チュン チチチッ

そして気がつけば朝である。

ここは、どこだ？

体の埋まりそうなベッドの上でムクリと上半身を起こした。

肌寒く、ブルリと体を震わせると、自分が裸であることに気付いた。

ベッドには乾いた木綿布^{タオル}が無造作に転がっている。昨夜は濡れていたこの布でガシガシと体を拭き、そこで力尽きて寝入ってしまったのだと思い当たる。

部屋を見渡すと、そこは無駄に広い部屋だ。壁には悪趣味な絵画や剣が飾られ、サイドテーブルにはやたらと高そうな壺まで鎮座している。

そういえば、将軍用の部屋とか言ってたっけ

つまり、先週までゴリネルが使っていた部屋だ。そう考えると、

居心地が急に悪くなる。

さて、どうしたものかと、あくび交じりに伸びをした瞬間だった。

ダンドンドンダンドンドンッ！

ドアよ砕けると言わんばかりのノックが響く。
次いでコノハの切羽詰った声が続いた。
せっぱつま

「フエイ、大変よっ！ ルナがないのっ！」
「なんだって！？」

フエイはベッドから飛び降るや、扉を一気に全開した。
コノハの目が見開かれる。

「おいコノハ！ ルナがいないってどういうことだっ！」
「ちょ、ちよつと、フエイ！」

コノハが顔を真っ赤にして視線を逸らし、手で目を覆う。
しかし、ルナの一大事にフエイの意識は集中していた。
さらにコノハに近寄ると、肩を掴んで正面を向かせる。

「おいっ、コノハッ！ ちゃんと説明しろよっ！」
「きゃああああああっ！ この変態っ！」

ドゴスッ

コノハのヒザはフエイのミゾオチに突き刺さり、そのままフエイを部屋の奥へすっ飛ばした。
扉がバンと閉められ、向こうからドスの効いた低音が響く。

「はあっ、はあっ……フェイ、いい地獄知ってるんだけど、紹介しようか？」

「……遠慮します」

教訓、疲れた朝には気をつけよう。

フェイは胸に深く刻んだ。

フェイが服を着込み、コノハに引かれるまま玉座の間に到着すると、ゼクス領を除く各領主や公子、公女達が將軍の到着を待っていた。

「おお、フェイ將軍！ 大変な事になってしまった！」

王 いや、退位して伯爵となったグロスター伯は、大仰に両手を広げながらフェイに駆け寄った。

「聞いたぞ、ルナと王子がいなくて まさか、ゴルゴンにさらわれたのか？」

フェイは近づいたグロスター伯の胸倉を掴み、ガクガクと前後に揺らした。

「いや、違う。兎に角これを見てくれ」

「……手紙？」

グロスター伯は怒りもせず、フェイに一枚の手紙を差し出した。読み書きの苦手なフェイだったが、幸い簡単な言葉が多く辛うじて読むことができた。

『父上』

今、さぞ心配されているでしょう。申し訳ありません。
僕は運命の人を見つけました。ですが、王子と云う身分は、この
恋を許さないでしょう。

ですから僕は今夜、愛するルナと駆け落ちします。……』

「はあああつ？ か、かけおちい？」

フェイは手紙を上半分しか読む事が出来なかった。

頭の中は『ルナ』と『駆け落ち』が順番に明滅する。

読み間違いかと、もう一度最初から目を通して、コノハが
肩を叩く。

「フェイ……ルナの部屋にも手紙があったの」

コノハは一枚の手紙を見せた。

その手紙を引^ひ手繰^{たく}ると、フェイは貪^{むさ}るように目を通す。
すぐに読めた。

なにせ手紙に書いてあった事は一言だったからである。

『おいしゅうございました』

「何食ったんだっ、あの破戒僧はああっ！」

フェイは魂から絶叫した。

グロスター伯が口をバケツのように開けたまま固まっているフェ
イの肩をポンと叩く。

「ともかく、これからは王として頼むぞ、リア＝フェイロン」

「……………は？」

グロスター伯は王子の手紙を突^つ付く。
うなが
促されるままに、王子の手紙の残り後半を読んだ。

『僕は王の器で無いと痛感しました。やはり王には英雄たるフェイ
がなるべきです。』

僕がいなくなれば、將軍であるフェイが王となれるでしょう。
それこそが、このシュバート国が望む未来だと確信しております。
これを父上との別れの言葉として、お元気で。 エドガー』

グロスター伯は、もう一度フェイの肩を叩いた。

「と、言う訳だ」

「と言う訳じゃねえ！ もう一度あんたが王様やればいいだろっ
！」

「一度退位の儀を済ませてしまった以上、もう二度と王位にはつけ
んのだよ。頼んだぞ、フェイ王」

その時、セラが立ち並ぶ領主達を掻き分け、王へと抗議した。

「待って下さい！ それは納得いきません！」

「……ふむ、どういうことだ、セシリア公女よ？ そちらら賛成す
ると思ったかの」

その場に集まっていた一同の視線が、セラに集まる。
特にフェイの視線は熱かった。

セラ、頼む！ この横暴極まる事態から、俺を救ってくれ
っ！

セラは一步を踏み出し、その無い胸を張り、朗々と答えた。

「フェイ王など絶対に許しません。ここはリア王とすべきです!」
「お前なんか二度と信じるか! ばーか!」

フェイの叫びは黙殺され、グロスター伯はセラの提案を微笑んで受け止める。

「リア王か、そこはかとなく悲しい響きが良いな。ではリア王、頼んだぞ」

「嫌だ! 俺はぜつたいに王様なんてやらねえからな!」

グロスター伯の目が悲しみに染まる。

「どうしても、嫌だというのか?」

「つたり前だろ! 嫌だつて言ったら嫌だ!」

これ以上ないほどの即答だった。

グロスター伯は首を振って、剣を鞘ごと抜いた。

「止むをえん。血筋の異なる王が即位するためには、王に相応しい試験が必要なんだが、どうしても嫌というなら、この試験で王として不適正だと皆に示してくれ」

「試験?」

「なに、難しい事じゃない。この剣を抜け」

王の剣が無造作にバイスレイトの床へと投げ出された、フェイはその剣を拾い上げる。

手に馴染まないズシリと重い剣　つまりこの剣を抜かなければ、

王位につかなくてもいいのだ。

フェイは柄に手をかけ、少し力を入れた振りをするとヘラヘラと笑う。

「いやあ、重くて抜けねえなあ。こりゃだめだ」

「よし、合格じゃ！」

「なんでだよっ！！」

周囲からはグロスター伯の言葉を後押しすべく、拍手が沸き起る。

当然、納得いかないフェイはグロスター伯に詰める。

「り、理由を言えよ！ 何で合格だよ！」

「剣は鞘に入っていてこそ意味がある。まして王の剣はなおさらだ。その重みをよく理解した完璧な回答 さすがだリア王よ！」

「嫌だ、俺は」

「黙れ！ アイオール、新しい王を民の前に引きずり出せ！」

何処からとも無くアイオールとその他数人の親衛隊が現れ、フェイを羽交い絞めにする。

さらにはリーガンとコーディリアが満面の笑顔で、フェイの腕を掴んだ。

「さあさあ、リア王。外で民が新しい王の到来を広場で待っております」

「自らの地位を投げた王子の心意気、私は感動しましたとも。さあリア王、輝ける王国の未来に旅立ちましょう！」

フェイは死刑場に向かう死刑囚のごとく、泣き喚きながら引き摺られていった。

「民よ！ 我が息子エドガーはこの国のため王となる事を諦めた！
それは何故か！」

グロスター伯の朗々とした声が、シュバート城裏門広場に集まった万を超える人々に響き渡る。

息子が失踪したにもかかわらず、むしろ嬉々とした表情ですらあった。

「それは、この国に新たな王が必要だと信じたからに他ならぬ！
さあ、今ここに新しき王を迎えよう！」

エドガーが出てくるとばかり思っていた広場を埋め尽くす民衆は、この宣言に一瞬だけ動揺したものの、その脇にグツタリしているフエイを見つけると、口々に「まさか」と期待する声を高める。

「新しき王の名は、リア＝フェイロン！ リア王の誕生であるっ！」

その言葉を皮切りに、民はお祭り騒ぎに突入した。

「リア王！ ゴルゴンを倒してくれよ！」

「ゼクス領の敵をとってくれ！」

「シュバートの強さを思い知らせてやれっ！」

「黒猫王！ この国に平和を！」

民衆は口々に騒ぎ、そしてその叫び声は一つに収束する。

「リア王、万歳！ 黒猫王、万歳！」

その声に、グロスター伯があごで指示を出し、フェイは民衆の前に突き出された。

とうぜん、大歓声は最高潮に達する。

「リア王、万歳！ 黒猫王、万歳！」

「うるせえええええっ！」

フェイの体中から搾り出すような絶叫は、民を静まらせるのに十分だった。その目は、あきらかにイッている。

「俺は、絶対にやらねえっ！ やるもんかつ！」

フェイの叫びは広場の隅々まで響き渡った。

「俺はもう何もやらねえ！ ゴルゴン討伐がしたけりゃ勝手にやれ！ ふざけるなっこのタコがつ！ こ、こらっ、離せええっ！」

暴走しかかったフェイを、親衛隊数名が羽交い絞めにしてすぐさま引っ込める。

しかし、時すでに遅く、困惑の波は民衆の間を駆け巡っていた。

「……いったい、今のは何だ？」

「王は、何を言っているんだ？」

その混乱した民衆の前に、恐れることなく進み出た者がいた。

水色のドレスを纏い、金色の髪の毛の束を左右に揺らし、大観衆に全く動じることなく立ち向かう10歳児にしか見えない少女。

セラである。

「民よ！　まだ王の言葉の意味が分からないのですか！」

何を分かったんだ、お前

フェイは冷や汗を流しながらも、セラの暴走を眺むことしかできない。体が動いていれば、間違いなく口を塞いで、民衆の中に放り投げていただろう。

だが今、セラは自由だった。

その小さい体のどこからそんな声が出せるのかと思うほどの大音声で、民に告げる。

「リア王はこう言ったのです！　あなたがた自身が剣を持てと！　なぜ王や軍に任せ、自らは何もしないのか、と！」

その言葉に民衆はまだ戸惑いの色を隠せない。

しかし、そんな空気などセラには何の影響も与えない。

空気を読む事など、彼女の辞書にある訳が無いのだ。

「盗賊たちはこの国に根を張り巡らせるように潜んでいます。それを軍が根絶するのは、残念ながら難しいです。しかし、あなた方が剣の民が立ち上がれば、ゴルゴンなど造作も無く滅ぶでしょう。何故それが分からないのです！」

セラの言葉に、民衆は衝撃を感じた。

「そ、そうか、そう言う事だったのか？」

「私たちが、剣を？」

「でも、確かに俺達が立ち上がれば……」

民衆の心に灯が点り始めた、その絶妙の一瞬　セラは小さな拳を振り上げた。

「立てよ国民！　剣の民の存亡は、この一戦にかかっているのですっ！」

うおわああああああああっ！！

城の前は熱狂の渦に包まれた。

「お前が座れよ……」

フェイのツツコミは誰の耳にも届かなかった。

広場は再びリア王をたたえる大歓声シュプレヒコールに包まれていた。

その様子をゴミのように打ちひしがれているフェイの横で見ているコーデイリアは、隣にいるリーガンへ恍惚ニトニト交じりに呟つぶやいた。

「リーガン、聞いてくれ。私は感動しているんだよ」

「　　またか、で、次は何を広めればいいんだ？　またこの黒猫とセシリア様の恋物語か？　それとも、このバカ騒バカ騒ぎぎをか？」

「そうとも！　見たまえこの熱き民衆の雄姿を！　我らがこのリア王の初勅はつしちがもたらした奇跡だよ！」

「剣の民よ、今こそ剣を取れ　―とでも伝えるか。しかし、本当にゴルゴンに突っ込む連中が出たらどうするんだ？　誰が責任を取るんだ？」

「そんな事は決まっているとも。言いだしっぺの王様さ！コレ」

その会話を聞いていたフェイは、この国がどうすれば滅ぶのか真

剣に考えた。

城の地下牢にゴリネルは囚われていた。

裏門広場では民衆がお祭り騒ぎになって時、ただ一人そこに近づいていく男がいた。男の名はドライ領主デイルトン公爵。

デイルトンは門番に多額の金を握らせると、堂々とゴリネルのいる牢の前に歩み寄る。

そして、ためらいも無く鍵を、開けた。

「遅かったな、デイルトン公」

ゴリネルは当然と言った風に牢を出てくる。

それをデイルトン公も不思議に思わない。むしろ従者のように頭を下げた。

「ゴリネル。あの黒猫が、王になった」

「なっ！？ ……ふ、ふざけた事をつ！ わしの野望を奪いおつて！」

ゴリネルは腕を組み、やがて、ニタリと笑った。

「いや、ヤツが王になったのは、むしろ好機かも知れんな」

「……どういう、意味だ？」

「なに、ヤツの弱点を突こうと思っていたのだ。王ならば、その収穫も大きかるう」

「……うう」

デイルトン公はブルリと体を震わせると、ゴリネルに一歩近づい

て懇願^{こんがん}する。

「それより……はやく、アレを……もう無いんだ」

「残念だが秘薬は没収され、ここには無い。クラーに貰わねばならんが……貴様には、その前にしつかりと働いてもらうぞ。いいな？」

デイルトン公は蒼白な顔でガクガクと頷いた。

セラはその時まで上機嫌であつた。

なにせフェイの役に立てたと思つていたのだ。

民も意気揚々と立ち上がってくれ、さぞフェイから褒めてもらえると期待していたのである。

しかし、フェイを探し、長い廊下を歩きまわっていた時、柱の影にいたフェイとコノハを発見した。

フェイがコノハの腕をつかみ、しきりに何かを頼んでいるのだ。

その切羽詰った様子に、ついセラも柱の陰に隠れ、二人のやり取りを覗き見る事になってしまったのだ。

「頼む、コノハ！」

「嫌よ！ そんなのエルカに頼んでよ！」

「エルカは公子だから無理なんだ。今、俺が信頼できる人はコノハしかないんだよ！」

ギユウ

心臓が氷の指で掴まれたように縮み上がり、次いで息苦しさのよ
うな怒りが沸いてくる。

それはセラが今まで感じたことの無い感情だった。

「だって、あたしなんかが將軍なんて」

「頼むよ、コノハ。今、俺、頭がおかしくなりそう、お前に傍そばにいて欲しいんだ。俺を一人にしないでくれ……」

コノハは驚いたような顔を見せると、頬を赤く染め、俯うつむいてしまった。

やっぱりこの人も、フェイの事が好きだったんだ

黒いモノがお腹の底から沸いてきて、頭をグチャグチャに掻き回す。

セラの視線は逡巡しゆんすんするコノハに釘付けになっていた。

フェイと似た黒い瞳に黒い髪、フェイの鼻先まであるスラリとした背、自分と違いしっかりと膨ふくらんだ胸。

気がつけば、手が真っ白になるまで柱を強く掴んでいた。

「……もう、しょうがないわね。あんたを、支えてあげるわ」

「ありがとう、コノハ！」

フェイの両腕がコノハを包むと、それ以上、見ることができなくなった。

セラは走り、宛あてがわれた個室に駆け込むとゼイゼイと息を吐く。そして、恐る恐る、鏡の前に立った。

鏡の中にいたのは、フェイの胸にすら背が届かない小さな子供。女性らしさの欠片かけらもない体。

『医者の見立てでは、セシリア様のお体はこれ以上成長できないと』

ガラムの言葉が頭の中に甦^{よみがえ}る。

嫌^{いや}だ、嫌^{きら}いだ、こんな体、こんな体

両肩を抱くように掴み、爪を強くたてる。

その行為が何の意味も成さないことも、自分を駆り立てている感情が『嫉妬^{しっと}』と呼ばれる事も知らない少女は、泣くことすら出来ずに自分を睨み続けた。

コンコン

「失礼します、セシリア様」

セラは不機嫌極まりない声で返答した。

「……誰です？」

「ドライ領主、デイルトンです。リア王がセシリア様をお呼びです」
「フェイがつ！？」

セラはもう一度鏡を見た。

そこにいたのは、頬を緩ませ上気した、さっきとは別人の少女である。

髪のをれを直し、慌てて扉を開いた。

「フェイは？ リア王はどこに？」

「裏口で、待っております……セシリア公女と、少し遠出をしたいと」

デイルトンの虚^{うつ}ろな視線に、セラは最後まで気がつくことは無か

った。

チュン チチチ

フエイが気がついたとき、外は既に朝だった。
異様に肌寒い。初夏といえベッド上に裸で寝ていれば当然である。
目の前には体を拭いた木綿布タオルが、乾いた状態で転がっている。

くそ、悪夢の一日だった

寝ぼける頭でそれだけ認識し、体の埋まりそうなベッドの上でムクリと上半身を起こす。

無駄に豪華で広い部屋。壁にかけられた絵画や剣、サイドテーブルには高そうな本がずらりと並んでいる。

ここは王の私室で、この国最高級の部屋で、とにかく居心地は最悪だ。

とりあえずお茶でも入れるか、と立ち上がるうとした瞬間である。

ダンダンダンダンダンッ！

ドアよ砕けると言わんばかりのノックが響き、次いでコノハの叫び声が聞こえた。

「フエイ！ 大変よっ！ セシリア様がないのっ！」
「なんだって！？」

フエイはベッドから飛び降り、扉を一気に全開した。
コノハの目が見開かれる。

「お」

そこまで言って、アゴを打ち抜かれた。

「こんの露出狂がああ！」

コノハの怒声と共に、フェイは前のめりに崩れ落ちたのだ。

(39) 強烈な既視感

強烈な既視感^{デジャヴ}がフェイを襲った。

セラがいなくなつたと聞いて玉座の間に駆け込むと、昨日と同じくグロスター伯を初め、領主、公子達が待ち受けていたからだ。ムツとする人いきれや、騒然とした雰囲気まで似ている。

だが、昨日と違う点もあった。

沈痛な空気が佇^{たたず}んでいる事と、硬い玉座へ座るのがフェイだという事だ。

フェイが嫌々玉座に座ると、領主達はその前に居並び、一斉に膝^{ひざ}を着いた。

その敬意が自分に向けられていると思うと、気持ちが悪くて鳥肌が立つ。

王の親衛隊長であるアイオールは、玉座の前に進み出ると両の拳をカツンと打ち合わせ、跪^{ひざまず}いた。

「リア王、脱獄を許してしまいました。申し訳ありません」

「脱獄？ どういう事だ。いなくなつたのはセラだけじゃないのか？」

「はい。昨夜遅くにドライ領の馬車が消え、ドライ領主デイルトン公とセシリア公女、そして牢にいたゴリネルがいなくなっております」

「まさか、ゴルゴンにさらわれたのか!？」

アイオールは「おそらく」と申し訳なさそうに頭を下げた。

ゴリネルは盗賊団ゴルゴンと繋がっていた將軍であり、デイルトン公はそのゴリネルと特に懇意だった領主である。

その三人が一緒に居なくなつたとすれば、セラが連れ去られたと考えるのが自然だろう。

「何か、何か手がかりは無いのか？」

「今のところ、置手紙一つ見つかっておりません。ですが、ドライ領の馬車が砂漠へ向うのを見たとき、町民から報告がありました」

「やはりゴルゴン……か」

「申し訳ありません、まさか九公爵からゴルゴンに寝返る者が居ようとは」

牢の見張りを担当するのも親衛隊の任務であり、アイオールは深々と頭を下げた。

とにかく具体的な手がかりが無い以上、軍を動かす事も出来ないのだ。

フェイは玉座の肘掛^{ひじかけ}を強く握り締めた。

それから丸一日、何も出来ない時間が過ぎた。

城内の雰囲気も焦燥が募るばかりであり、さらには城の外でもセシリア公女誘拐の噂は広まっていた。それは新王誕生のお祭り騒ぎだった王都に、暗い影を落とす事になる。

そんな折、コノハが持ってきた知らせはフェイにとっては久しぶりの朗報だった。

「フェイ、エルカが王都に着いたって！」

「エルカがつ!?」

フェイは目の前いる書記官をチラリと見ると、その中年の恰幅^{かっぴく}の良い女官は苦笑を漏らし、王の逃走を許可した。

慣れない公用語でサインしていた書類の束を書記官に突き返すと、フェイは執務室を飛び出す。

すると、執務室から出るのをコノハが待っていた。

先日正式に將軍に襲名したコノハは、白いシャツに紺をベースに金縁^{きんぶち}をあしらった女性用の将校服を着込んでおり。それは想像以上にコノハに似合っていた。

「玉座の間で待つてゐるって」

コノハが笑顔で教えてくれたので、二人は並んで廊下を駆け出した。それは王と將軍というよりは、授業をエスケープする学生の姿そのものであった。

玉座の間には確かにエル力がいた。

しかし、その横に憤怒^{ふんぬ}のゼクス領主ラドクリフ公の姿もあった。冷水をぶつ掛けられたように、フェイとコノハの足が止まる。

「早く、座って頂けませんかな……リア王陛下」

領主の口調は丁寧なのに、強迫されているとしか思えない。

フェイがおそろおそろ玉座に座ると、その前でエル力が優雅に膝^{ひざ}をつく。

続いて領主も膝を折るが、その目は片時もフェイから離れる事は無い。頭を下げるときですら睨み上げるように目が離れないのだ。耳を澄ませば齒軋^{はきし}りの音がギシギシと聞こえてくる。

そんなに嫌なら頭下げなくていいですから

フェイは喉元まで出かかったその言葉を飲み込んだ。

領主は上目遣いでフェイを睨みながら、忌々しげに口を開く。

「この度は、ご即位、おめでとうございます。リア王」

「本来なら早急に駆けつけねばならぬところ、ゼクス領復興の基礎を固めており、遅くなって申し訳ありません」

続いたエルカの低い声は、まるで天使の歌声のようだった。

おそらく、その前の領主の挨拶が地獄の使者そのものだったからに違いない。

「さて、リア王、少々お聞きしたい事がある」

徐々に領主の口調が変わってきた。敬語がところどころ抜け落ちてきたのだ。

「わが最愛のセシリアを、王の庇護^{ひご}下に置いていたのだが、いま、セラは、どこだ？」

「……いや、その」

領主の視線がコノハに向けられる。

「そちらは、新將軍のクグラ」コノハ殿とお見受けする」

「は、はいっ！」

領主の迫力に、さしものコノハも返事が裏返っていた。

「將軍が城に居ながらこの不始末、どういふことか、説明してもらえんか？」

「いや、あの、あたしは昨日正式に將軍になったばかりで、関係ないかなあ、なんて」

「汚ねえっ！ 一人だけ逃げる気がよっ！？」

「だって！」

領主は立ち上がると、コノハに向かって凶獣のような顔をずいと寄せた。

「つまり、責任は全て王にあると？」

「あ、あの、はい」

コノハはいとも易々とフェイを切り捨てた。

領主がズンズンと迫り、玉座に座るフェイの視界一杯に広がる。

「ち、父上。いくら父上と言えど、王に手を上げれば死罪です！」

「黙れエルカツ！ 死罪なんぞが怖くて……」

領主がその凶悪な拳を引き絞る。

フェイは玉座の上で涙を流しながら、最後まで首を振り続けた。

「父親ができるかあああつ！！」

玉座ごとフェイは天井まですっ飛んだ。

静かになった玉座の間に、アイオールが駆けてきた。

「リア王、これを！ ……これは一体、何事ですか？」

部屋の惨事をみて、アイオールが固まる。

領主はにこやかに玉座を元の位置に戻すと、フェイの襟首えりくびを掴み上げ、事も無げに言う。

「いや、王にご忠告差し上げただけのこと。そうですね、リア王？」
「……はい」

フェイが領主の手にぶら下がりピクピクと動いているのを見て、
アイオールは問題無いと判断した。

ラドクリフ公と言えば、風に聞こえし名領主なのだ。

「リア王、先ほどゴルゴンから矢文が送り付けられました。おそろく、セシリア様の中へ」
「貸せっ！」

領主がそれを引つ手繰り目を通す。

解放されたフェイも、横から手紙を覗き見る。そこには盗賊とは思えぬ丁寧な字が連ねられていたが、内容は凶悪の一言に尽きた。

『セシリア公女の命が惜しくば、三日以内にリア王一人でツヴェルフルムへ来い』

ツヴェルフルム　小さな丘の上に沿って造られた、砂漠の民の生活拠点のひとつであり、現在は廃墟となっている場所だ。つまり、どれだけでも伏兵を置く事ができる場所でもある。

これ以上無いほどの、明確な罠だった。

「手紙と一緒に……その、これが」

アイオールが差し出したのは、一房の金系の束　セラの髪に間違いなかった。

セラ自慢の長く美しい髪が、無残にもごっそりと切り取られているのだ。

フェイの胸に、吐き気にも似た怒りが満ちる。

「まさか、王とあろうものが、ノコノコと行くつもりではないだろうな？」

領主はあくまで冷静な声で、フェイに告げた。

その声が静かな怒りに震えている事までは、この時のフェイには分からなかった事だ。

「い、行くに決まってるだろうっ！」

「駄目だ、それは許さん！」

「な、何言ってるんだ！ あんたが一番心配なんだろう！ ゴルゴンはやるっていったら本当にやるんだぞ！」

「分かっている。だが、セウは臣下で貴様は王だ。比べることすら許されん」

領主は立ち上がると、そのまま玉座の間を後にする。

その背は悲しみに彩られており、それ以上フェイは何も言うことが出来なかった。

王の私室で、オーク材のテーブルを囲みフェイとエルカとコノハが座っていた。

テーブルの上には、フェイの淹れたベルリーフティーがバイスレイト製の高級カップに注がれ、芳しい香りを放っている。

しかし、フェイはその香りを楽しむことができないでいた。

「エルカ、ゼクス領の様子はどうだった？」

「建物の被害はたいした事はないが、人の心はそうはいかん。亡くなった衛視達の葬儀に参列したのだが、正直言っ^{たま}て堪らん」

エルカは深くため息を吐いた。

「だが、師匠^{ラビ}はなんとか無事だったよ。肋骨はバラバラだが、肺にも刺さっていない。不幸中の幸いだよ。当分、絶対安静だろうがね」

「そうか、それはよかった」

「フエイこそ、王になって喜んでいないとは思ったが……大分やつれたか？」

フエイは頭^{カブ}を垂れ、しばらく迷った後、唐突に切り出した。

「俺さ、ルナが好きだったんだ」

ガタン

コノハが席を立った。

そして、何事も無かったかのように座る。「どうしたコノハ？」とフエイが聞いても「気にしないで！」としか答えず、エルカは口元を隠しつつ、フエイの話を促した。

「それより、フエイ。ルナが好きだったと言ったな。過去形か？」

「あ、ああ。なんかさ、ルナが駆け落ちしたって聞いて、かなりシヨクだったけど……なんか、本当に好きだったのか、分からなくなっただ」

「どついう意味だ？」

「上手く言えないんだけど、ルナが幸せになるならいいかって、そう思ってる自分がいたんだ」

フエイは指先で、カップのふちを軽く突付いた。

「で、フェイ、お前は結局、誰が好きなんだ？」
「もういいよ。今は女より、エルカやコノハと一緒に居てくれる方が何倍も嬉しい」

コノハの顔がピクリと引きつる。

「それって、あたしが女性じゃないみたいに、聞こえないかな」
「ち、違うって！ そうじゃなくて、ほら、二人にはすごい世話になったしさ、良い機会だから言っておこうかなって思ってる」
「何のことよ？」

いぶかしむ二人に、フェイはゆっくりと頭を下げた。

「今まで、本当にありがとな」

そして、頭を上げた。

ニコニコと笑うその笑顔に、エルカもコノハも、白けた視線を送る。

「な、なんだよ、その反応はっ！ ちょっと恥ずかしかったんだぞ！」

「ねえ、あんた一人で抜け出して、セラちゃんの助けに行こうとしてるんでしょ？」

「なっ！？」

コノハの言葉に、フェイは驚いて固まった。

「フェイ、お前が私に隠し事など、百年早い」

「エルカ……そうだよな。ごめん。俺、やっぱり、無理なんだわ。こんな時にじっと待ってるの、耐えられるわけがない」

そう言つと、テーブルにあつたベルリーフティをグイと飲み干し、壁にかけてあつた黒い革ジャケットを手に取る。

「俺、やっぱり行くわ。あいつがピーピー泣くの苦手なんだ」

そのフェイの後ろ姿を見て、コノハがため息を吐く。

「つたく、しょうがないわね……あたしも行くわ」

「コノハ？」

「あんたとずっと一緒にいるって、約束したでしょ？」

そんな二人を見てエルカが「やれやれ」と呟き立ち上がる。

「なら、王都を抜けるのにちょうど良い抜け道を見つけたんだ。そこを使う」

「ちょ、エルカ！ ちょっと待てよ！ リスクしかないんだぞ？」

「しかもとんでもなく分の悪い」

「なら、なおさらこの私が必要だろう？」

「あんた一人じゃ何もできないでしょ。こんな頼りなお王様、聞いたこと無いわ」

そう言つて二人は微笑む。

感極まつたフェイは、二人を力いっぱい抱きしめた。

「エドガー様、お父様からお手紙ですよ」

「ありがとう、ルナ。手紙にはなんて書いてありました？」

「……まあ！ フェイがもう城を抜け出したそうですよ。しかも將軍になったコノハやエルカまで連れて。やっぱりフェイは王様に向いてなかったみたいですね」

「すみません、ルナ。せっかくお芝居につき合ってしまったのに」「私が言い出したことだから、それはいいんです！」

王都にある宿の一室で、エドガーとルナは微笑^{ほほえみ}を交^{かわ}し合った。フェイが凱旋した夜、ルナはエドガーを連れ、グロスター王に直訴したのだ。

エドガーの本音を聞いた欲しいと。

「でもまさか、父上がこんな形で辞意を許してくれるとは……思ってもいなかったです」

「たぶん、辛いと思ったんでしょうね。この状況で王様になることが」

その言葉にエドガーは顔を伏せた。

今まで、父が王として気が狂うほど苦しんでいた事を、ずっと見ていたのだ。

そして、それをフェイに負わせてしまった。

「大丈夫ですよ」

ルナは落ち込んでしまったエドガーの肩に両手を乗せた。

「それで、これからどうしますか？ エドガー様」

「……僕が出来ることをあきらめないでやってみます。それが、フエイやルナに教えてもらったことだから」

「それでこそ、私の駆け落ちの相手です」

その言葉にエドガーは微笑むと、枕元に立てかけてあった剣を手に取り、部屋の扉を勢い良く開いた。

埃^{ほこり}っぽい匂いに、口の中に残る砂の感触。

セラが目を覚ますと、そこはやはり牢の中だった。

いつかフェイがいた牢と違うのは、部屋の一面が鉄の格子で出来ており、その向こうから常に監視されている事だろう。

監視しているのは真っ白な髪に、何もかもを見通すような鋭い目の男。周りからはクラーと呼ばれていた。

クラーはセラが起きたのを見て、嬉しそうに告げる。

「起きたか……あと一日、あと一日で、お前の首を王都に届ける。それまでに黒猫が来る事を、せいぜい祈るのだな」

「フェイは来ません。絶対に」

フェイは来ない、それはハッキリと分かっていた。

王とは生きている事が役目なのだ。たとえ兵がどれだけ死のうとも、王は死ぬことを許されない。

だからセラは自分が死ぬことに納得していた。そもそもこれは自分が騙された結果なのだ。

しかし、その決意を踏みにじるように、クラーは薄笑いを浮かべる。

「それでも構わんよ。リア王は婚約者を見捨てたと、せいぜい悪評を広めさせてもらうからな」

その言葉にセラは顔を伏せた。

私は、死んでもフェイに迷惑を掛けるの？

後悔で、胸が止まりそうだった。

何故、私なんかが愛されていると思っってしまったんだろう。

好きだと言われた訳でもないのに、勝手に勘違いして、勝手に婚約者にして、盗賊達の矢面に立たせ、拳句の果てには王にまでしてしまい、彼の愛した自由をことごとく奪ってしまった。

それをこんな時に、ようやく気付くなんて。

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい

惨めで、絶対に泣きたくないのに、頬を伝う雫を止めることができなかった。

バンッ！

突然、扉が開け放たれ、一人の盗賊が駆け込んできた。

「参謀！ 黒猫が来ました！」

セラの心臓が悲鳴をあげる。

また罪を重ねてしまったような、ひどく息苦しい想いが胸を締め付けた。

「まさか本当に来るとはな。ゴリネルとデイルトンには済まない事をしたか。一人か？」

「いえ、仲間が二人いるようです」

「あぁっはっはっはっは、たった三人か！ なんと愚かな！」

クラーは狂喜して立ち上がる。

「黒猫め、散々私の計画を邪魔しておって。気が狂うまで我が奴隷としてくれるわ！」

慌しく牢の鍵を開いたクラーは、セラの細い手を強引に引くと、無理やり立たせる。

「離してっ！ 私は」

「お前は、黒猫を狩るためのエサなのだ！」

私は……また、フェイの命を……嫌だっ、嫌だっ！

「いやああああああっ！！」

だが、セラの叫びは、誰の心にも届きはしなかった。

(40) 日が頂点に昇る頃

日が頂点に昇る頃、ツヴェルフルムに3人の人影が近づいていた。ツヴェルフルム砂漠の西端に位置するツヴェルフルムは、砂漠の中にポツンとある緑豊かな丘だ。

丘の中腹にはいくつかの泉が湧いており、それが砂漠に飲み込まれるのを盾のように防いでいる。それに気付いた砂漠の民は、泥と藁わらを混ぜたレンガで住居を建て始め、やがて住居で丘を埋め尽くすと、ツヴェルフルムと名付たのだ。

ツヴェルフルムには丘の麓から頂点までを貫く大きな階段があり大階段と呼ばれている。

近づいていた3人は、迷うことなくそこへ足を踏み入れた。

「……フエ、イ」

丘の頂上にいるセラからはまだ遠く、目を凝らしても黒いゴマ程度にしか見えないのだが、それでも人影が誰なのかセラには十分過ぎるほど分かった。

「な、んで」

セラの顔は蒼白に染まり、歯はガチガチと鳴り止まない。後ろからはクラーがその細い腕を身動きできないほどに捻り上げていたのだが、セラは痛みすら感じなかった。

恐ろしかったのだ。

このままでは、フエイはセラの軽率な行動のために死ぬ いや、聞いていた話では薬で人格を奪われ、デイルトン公爵のように罪を重ねるだけの一生が待っていると言う。

あの優しいフエイにとって、それはどれほどの地獄だろう。

なによりこんな状況でありながら、フェイを見て嬉しく思っ
てしまう自分が、心底おぞましかった。

何とかしなくては、その一心でセラは叫んだ。

「フェイ！ だめっ！」

その瞬間、クラーが短剣ステイレットの柄でセラの後頭部を容赦なく殴りつけ
た。

「黙っている。綺麗な顔で黒猫に再開したければな」

クラーはセラの眼前に鋭い刃物をちらつかせた。が、セラは目
はその刃の遥か向こうだけを見つめ、もう一度叫んだ。

「フェイ！ 来ないで！」

「このっ」

クラーは眉間にしわを寄せると、その長い指でセラの首を後ろか
ら鷲掴みにした。

セラの声がヒューヒューと言う風切り音に変わり、苦しそうに顔
をゆがめる。

「まったく、これだから貴族の女は度し難い。もう、ただで死ねる
と思わない事だな。お前を欲しいと言う部下は吐いて捨てるほどい
るんだからな」

そう蛇のようにささやくと、ゆっくり階段を昇ってくるフェイ達
の姿を見て、クラーは唇の端を吊りあげた。

「しかし本当に王自ら来るとは、やはり愚者に王たる資格は無いか

……ここに総力を集めておいて正解だったな」

ツヴェルフルムの丘の斜面に立ち並ぶ家々を眺め、クラーは目を細める。

なにせあの廃墟の中にはゴルゴンの総力 四千を超える賊が息を潜めているのだ。

そもそも、リア王一人を討ち取るために終結させたのではない。ただリア王就任事件で求心力が薄れつつあるゴルゴンの状況を打破するため、総力を上げて手薄な領に略奪をかける予定だったのだ。そうすれば、民衆の期待も揺らぎ、同時にゴルゴン内の活気も戻るだろうとの算段だった。

それが思いもよらぬ形で士気を高められそうだ。クラーは舌なめずりをし、中腹まで上がってきたフェイ達に声をかけた。

「黒猫 いえ、リア王陛下とお呼びするべきかな？」

「ふざけんな！ 俺はフェイだ！ それ以外の何者でもねえ！」

フェイは親指で自分の胸を叩き、その名を誇る。

その横には鎧を着込んだ屈強そうな男と、レザーメイルを身に着けている黒髪の女がいた。

「手紙には一人で、と書いたはずですが、そちらの二人はどういうつもりです？」

その言葉にセラの肩がピクリと跳ねた。

セラはその時、ようやくフェイの横に立っている人物に気付いた。

コノハ、さん

コノハはフェイと肩を並べ、彼を守るべく槍を斜めに構えている。静かな決意に溢れた彼女は、本当に美しかった。

私も、その場所に立てたら

そんな羨望が胸に生まれ、羨望はすぐさま絶望へと変わった。

セラがいる場所はフェイの隣ではない、それどころか、窮地に追い込んでしまった張本人なのである。

非力で、愚鈍で、何の役にも立てず、ただ不幸だけを振りまく人間　それが自分なのだ。

死にたいと、痛切に願った。

「構うな、適当に挑発しろ」

エルカの耳打ちにフェイは小さく頷き、クラーに向かって怒鳴りつけた。

「細けえ事はいいんだよ！　それより早くセラを放せ、このロリペド野郎！」

「くつく、あなたに言われるとは心外ですね」

クラーは薄ら笑いをまったく崩そうともしない。さすがにオルフェルが白蛇野郎と毛嫌いしていただけはあるようだ。

フェイの横にコノハが近づき、小声で問う。

「フェイ、気付いてる？」

フエイは小さく頷き、左右の家屋を目の端で確認する。

中から盗賊たちの気配がプンプンするのだ。一人や二人なら気がつかなかっただろうが、その数は百や二百どころではない。

「……エルカ、作戦に変更は無いか？」

突き刺ささる視線の数々に顔をしかめながら、エルカは大きく頷いた。

「なおさら変更無しだ。賊の首領を捕らえ、逆に人質にする……稚拙だが、それくらいしか皆が助かる方法が思い浮かばなかった。すまん、フエイ」

「何言ってるんだよ、エルカらしくもない」

フエイは短剣^{ダガー}を引き抜き、クラー達のいる頂上を見上げる。

クラーの周りには3人しかいない。チャンスはあるはずだった。

セラ

セラはクラーに後ろから首を掴まれており、苦しそうに顔をゆがめている。

そして、右半分の髪が無残にも切られており、長さの不揃いになったその髪は、まるで乞食のように髪が乱れていた。

フエイの胸の奥にどす黒い衝動が駆け巡る。

その表情に気付いたのか、クラーはぐいとセラを突き出した。

「さあ、リア王よ。婚約者の命が惜しければ、その辺りで止まってもらおうか」

クラーは心底嬉しそうに唇を舐めると、するどく指笛を鳴らした。

家屋から町を埋め尽くすほどの盗賊たちの群れが、ゆっくりと姿を現す。

後から後から建物から沸いて出て、あっという間にフェイ達は囲まれてしまった。

「随分と大袈裟な歓迎だな！ この腰抜けが！」

「ええ、使えるものを使うだけですよ。さあ、武器も捨てなさい
さもないと」

クラーは針のような短剣^{エストック}で、セラの残った片方の髪のを束を斬り飛ばした。

バサリと大階段の上に、金の束が力無く、落ちた。

この行為にコノハが激怒の叫びを上げる。

「貴様あああつ！」

クラーは短剣^{エストック}をセラの喉元^{のどもと}に突きつけ、フェイ達の動きを止める。

「私は、やると言ったらやります。武器を捨てねばどうなるか、分かりますね？」

この行動に、エルカがうめき声を上げる。

「まずいな、想像以上に慎重なヤツだ。この距離ではどうしようもない。本当に盗賊か？」

「フェイ、どうするの？」

コノハがフェイに問うた、その瞬間だった。

セラが喉元にあった刃を飲み込むように噛み^{くわ}喰えたのだ。

そして、首をひねると短剣^{エストック}をクラーの手から引き抜いた。一歩間

違えば、刃先が喉に突き刺さる行為である。

そして、渾身の力を込めてクラーの足を蹴りつけると、縛めていた手から逃れた。

「うわあああつ!!」

セラは短剣を握ると目茶目茶に振り回し、必死で周りにいた賊たちを威嚇する。

それを見たクラーの顔がみるみる怒りの色に染まった。

「この小娘があつ!!」

振り回す短剣の隙間から、セラの腹を容赦なく蹴り飛ばした。

セラは後ろに飛ばされ苦痛の声を上げるが、すぐさま歯を食い縛って立ち上がると、短剣を構えなおす。

「小娘が、よくよく死にたいらしいな」

「ケホッ……死ぬの、なんて、怖くない。私はあなたを、許しませんっ!!」

「っ!!」

その時、セラの目をみたクラーは一瞬ひるんだ。

悪魔のようなウイシャの目を見ても平然といられるはずなのに、それ以上の殺意を感じたのだ。

「セラッ!!」

セラがクラーから離れたタイミングを見計らい、フェイは走り出していた。

3人を取り囲んでいた賊も、注意がセラ達に向いており、フェイ

はその間を黒猫のように駆け抜けた。

そして包囲の一枚目を抜けると、懐からボウガンを取り出すや、大雑把おおざっぱな狙いでトリガーを引いた。

キョン

狙いは大雑把だったが、鉄矢ボルトはクラーの肩に命中する。

撃たれたクラーはたまらず蹲うつくまり、その側近たちは浮き足立った。

「コノハ、今だ！ 中央突破でいくぞっ！」

エルカの指示に、コノハは即座に応答する。

そしてフェイを背後から狙おうとした盗賊の群れに突っ込み、それぞれの武器を振るった。

たまらず賊たちはフェイをあきらめ、コノハ達を迎え撃つ。

「フェイ、後ろはまかせて！ あいつを！」

コノハの声に押されるように、フェイは影のように駆けると、迫る刃を掻かい潜くり、クラーに詰め寄る。賊たちもフェイを生け捕りにしろといわれた手前、中途半端な攻撃しかできず、次々と突破される事になった。

さらに、そのフェイに気を取られた盗賊たちが次々とエルカとコノハに討たれていく。

狙われていると分かったクラーは、大声で部下達に命じた。

「も、もういい！ 生け捕りはやめだ！ 全員殺せっ！」

この号令に様子を伺うかがっていた盗賊たちが、待ってましたとばかりに我先へとフェイ達に殺到する。

ここから旗色が悪くなった。

フェイ達の中央突破は最初こそ順調だったが、行動を開始した段階でのクラーとの距離が遠すぎたのだ。

突破するべき道を、盗賊達が埋め尽くしていく。

「くそっ、数が多すぎる……」

あと数歩でクラーに届くと言う所で、フェイは盗賊達に道を阻はばまれ、むしろ押し返されていた。

肩越しに後ろを振り返ると、エルカとコノハとの間も、完全に盗賊たちで埋め尽くされている。

その途端、冷たい不安が胸をよぎった。

くそっ！ あきらめるなっ！

フェイは自らを叱咤し、目の前の敵を一人、また一人と切り伏せていく。だが、その数は減るところか、加速度的に増えていくだけだった。

「きゃあああ！」

悲鳴のした方に目をやると、短剣を振り回していたセラが盗賊に取り押さえられていた。

その光景に気を取られた瞬間、背中に衝撃が走り、次いで焼けるような痛みが襲ってくる。背後にいた敵に斬られたのだ。

傷は浅いと分かったが、すぐに二撃目が来るはずだった。避けるなり、振り向きなりしなければ、終わりだ。

だが、フェイの目には、セラにのし掛かった盗賊がその服に手をかける光景が映る。

あああつ、くそっ！

フェイは振り返る事を諦めた。

無防備な背中をさらしながらもボウガンを構え、セラを襲っている賊を狙い、撃った。

ボウガンから射出されたボルトは、正確に賊のこめかみを貫き、息の根を止めた。

そしてフェイは、背後からくる最後の一撃を待った………だが、その斬撃はいつまで待っても来ない。

おそろおそろ振り返ると、そこにいたのは、灰色の髪をなびかせ、シャムシールあやつ ようえん二本の曲刀を操る妖艶な美女。

「ディアナ!?」

「黒猫ちゃん、お疲れ様。私たちの 勝ちよ!」

ディアナの曲刀シャムシールが砂漠を指した。

フェイが呆けた顔でその先を追うと、そこには何も無い砂漠が広がっているだけ……いや、違う。

砂漠に巨大な染みがあり、それがうごめいているのだ。

「な、なんだあれはっ!」

ソレに気が付いた誰かが驚きの叫びを上げ、その声がさらに周囲の視線を集めていく。

砂漠に広がった染みは、ゆっくりとツヴェルフルムを目指して動いており、しかもそれは一箇所だけではない。広大な砂漠のあちこちに見ることができた。

まるで空を埋め尽くす蝗イナゴの大群が、全て地に落ち、ゆっくりと迫ってくるようだった。

ディアナは唇のを片方だけ上げて笑う。

「あれは全て剣の民。あたしの見たところ……そうね、五十万はいるんじゃない？」

「ごっ 五十万だって！？ な、なんでそんな？」

聞いたことも無いような数字にフェイの目が零れそうなほど見開かれる。

「なんで、とはご挨拶ね。リア王とその婚約者を助けに来た義勇軍なのよ」

「義勇軍！？」

その声が聞こえたのか、盗賊たちの間に驚愕きょうがくの聲が木霊こだまする。

「バカなっ、あれが人の群れだって！？」

「ふざけるなっ、こんなの聞いてないぞ！」

盗賊たちの悲鳴をディアナは心地よさそうに聞き流しながら、義勇軍を指差しフェイに向かって説明する。

「あの辺の部隊はツヴァイ領とアハト領の公子が指揮してる民、およそ十万。あっちがゼクスゼクスの民五万をクソ親父が無理して率いてるわ。特に多いのが中央の部隊、あたしらが救出したエドガー王子が扇動した王都の民、二十万ね。王都の人口は三十万だって言うのに、たいしたボウヤだわ」

「エドガーが！？ 駆け落ちしたんじゃないのかったのかよ……」

フェイは壮観たる光景に足が震えた。

フェイだけではない、盗賊たちですら立ち尽くし、その光景に飲まれていたのだ。

「……フェイ」

いつの間にかセラがフェイの傍に来ていた。
目を合わせず、おびえ切った表情で、彼女はそこにいたのだ。

「セラ」

フェイが呼ぶと、セラは泣きそうな顔を見せた。
青ざめ、今にも消えてしまいそうなセラを、フェイはひよいと持ち上げ、その左肩に乗せた。

「わっ」

「セラ、見てみる！」

フェイに言われるまま、セラはゆっくりとその光景を見た。
雲霞うんかの如き人の群れ あまりの多さに鳥肌が立つ。

「セラ、分かるか？ これが全部、お前の声に立ち上がった奴らだよ！」

「わたし、の？」

「そうだよ！ お前が言ったんじゃないか、剣を持って立ち上がれつて。なあ、セラ、見えるか？」

「……うん。見えるよ、フェイ……すごい」

口元を押さえ静かに涙を流す少女に、フェイは自分の短剣ダガーを渡した。

「フェイ？」

「ほら。こんなんだけど、これだって一応王の剣だろ。こいつらの

処分、任せたぞ」

任せたぞ。

その一言が、セラの胸に途方もない安堵が染みてゆく。
これも、フェイの優しさかもしれない。

でも、フェイがそう望むなら、セラはまだ生きようと思った。

「はい……リア王陛下」

セラはフェイの肩に乗ったまま、小さな剣を高々と掲げ息を吸い込むと、喉よ裂けよとばかりに叫んだ。

「リア王の名において、あなた方の命は保障しますっ！ 投降しなさいっ！」

フェイの耳がキンキンと遠鳴りを起こすほどの音量だ。

そして、打算も見下したような傲慢さもないその声は、聞く者の心に入り込む。

信じてみようか、そう思える不思議な声だった。

「剣を、捨てなさいっ！」

セラの心を絞り出したような言葉に、一人、また一人と剣を放り、やがて大階段は剣で埋まった。

「馬鹿な！ そんな馬鹿なことがっ！」

フェイはセラを下ろすと、たった一人、狼狽し続けるクラーに近づいた。

「終わりだな、クラー。鉱山でオルフェルが待つてるぜ」

「あ、ありえない！ 貴様はっ、貴様だけは絶対に殺すっ！ ウィ
シャ！ 黒猫を叩き潰せっ！」

クラーの叫び声が響き、フェイの首筋に悪寒が走った。

セラを突き飛ばし、階段から身を投げる。

一瞬の差だった。

フェイが刹那の前までいた空間は、今、巨大な鉄槌が存在していた。

鉄槌は階段にめり込むと、その周囲一帯を陥没させる。

「ぐおおあああっ！」

ウィシャは獣じみた咆哮を上げ、階段の上に倒れたフェイを見下ろす。

その背後でクラーはやすやすとセラを抱え込んだ。セラは一切抵抗しない。階段に落ちた衝撃で、動けないのだ。

「くそっ」

フェイがそちらに向かうとした気配を読んで、ウィシャの手がピクリと動く。

第二撃はその直後に来た。

「うおおっ！」

フェイは階段の側面を蹴り、さらに下段へと飛んで二撃目を避けた。

だが立ち上がる間もなく、既にウィシャは三撃目に入っていた。

「くのやろおおっ！」

悪態をつきながら階段を転がり、間一髪で鉄槌を避ける。

ウイシャの恐ろしさは、その臂力じりよくと予備動作の無さだ。避けても避けても、すぐさま次の一撃が追ってくる。それを回避するには、相手の意表を付いた場所に逃げるしかない。

フェイは凶悪な重量をもった鉄槌を、恐怖を堪いたえて前へと疾駆し、ウイシャの股下を掻い潜る。足を斬る余裕などなかったが、これにはウイシャも予想外だったらしく、次の一撃までの時間を稼ぐことができた。

「セラ！」

フェイの目に、頂上へと逃走するクラーの後ろ姿が僅かに映った。しかし、この化物ウイシャに背中を向けて追いかけるのは、リスクが大きすぎる。

フェイは止む無く、ウイシャへと振り返った。

「ん？」

だが、ウイシャは既にフェイを見ていなかった。階段を登っていく男だけを睨にらんでいたのだ。

その先にいたのは、憤怒ふんぬの形相の領主である。

「小僧、セラの元に行けっ！ こいつは……わしが仕留める」

そう言つと、領主は誓約を立てるように目の前で剣を構えた。フェイは小さく頷き、地面に落ちていたダガーを拾うとクラーの後を追った。

「こああああっ！」

領主の直剣^{サイベル}が鉄槌と交錯する。

撒き散らされる火花と、金属の軋む音。

領主はさらに一步を踏み込んで、至近距離で二撃目を放つ。

しかし、非常識な速度で舞い戻った鉄槌が、再び剣の行く手を阻む。

ギギイイン

直剣^{サイベル}の放つ悲鳴が上がる。

永き^{なが}にわたって主人に仕えた名も無き剣は、すでに限界を超えていたのだ。

それでも、主人の意思を体现せんと、振り下ろされた鉄槌にその身を叩きつける。

張り詰めるような金属音、涙のような火花　だが剣は耐え切り、鉄槌を弾ね上げた。

「ぬおおおおっ！」

がら空きになったウィシヤの胸に、領主は渾身の平突きを放つ。

だが、不条理なまでの速度で鉄槌は引き戻され、剣の軌道に立ち塞がる。

それらが交錯した瞬間、破裂したような剣の断末魔が響く。忠実な剣は鉄槌に一筋の傷を残し、粉々に砕け散ったのだ。

「くっ」

領主の顔が歪み、飛び下がって間を取った。だがウィシャはその後を追わない。

ウィシャの鉄槌を受け止められる武器など、この世にそうそうない。勝負はこの時、ほぼ決したのだ。

その時、ウィシャの足元にある何かを領主は見つけた。

それは一束の金糸　無残に切られたセラの髪だ。それを今、ウィシャが踏みつけていたのだ。

「……貴様、今、何を踏んでいるか、分かっているのか？」

ウィシャは答えない、足を退かす事はおるか、ニタリと笑ったのだ。

「その足を、どかさんかああああ！」

領主は絶叫するや、一匹の獣と化した。拳を引き絞り、武器も持たずに突進する。

ウィシャは鉄槌を大上段に振り上げると、長年の宿敵を押し潰すべく全力をもって振り下ろした。

「ぬおおおおおっ！」

唸りを上げて迫る鉄槌に、領主は拳を突き刺した。

両者の動きが一瞬だけ止まり、次の瞬間　それは音も無く碎け散った。

人の体ほどもあった巨大な鉄の塊が、である。

「ぐおおおっ！」

鉄槌を打ち砕いた拳はさらに加速し、驚愕するウィシャの顔面へと叩き込まれた。

鈍い骨が碎かれる音が響き、ウィシャは大階段の中深くへと埋め込まれる。

そして、ピクリとも動かない。

領主は拳を振り上げると、高らかに勝利の雄叫びをあげた。

「領主公……とうとう、やりましたな」

階段の途中まで辿り着いたガラムは、その光景を見、万感の思いを込めて呟いた。

「ガラム隊長、一つ聞いてもよろしいでしょうか？」

一人では立つ事すらかなわぬガラムを、隣で支えていたアズマは、おずおずと口を開く。

「なんだ、アズマ」

「アレを食らい続け、リア＝フェイロンは何故生きているのでしょうか？」

「……………慣^なれ、とは恐ろしいモノだな、アズマ」

アズマが深く頷いた時、ガラムの目に真つ白な異物が映った。
ツヴェルフルムの頂上から、丸い奇妙な物体が飛び立っているのだ。

「あれは 気球！ 奴らは砂漠の民から気球の技術まで奪ってい

たのか！」

フェイは切羽詰った顔で大階段へと戻ってきた。

上昇を始めた気球を指差すと、近くに見えたエルカに大声で報告する。

「エルカ！ クラーがあそこに！ セラもいるんだ！」

「なに、あそこに？ ……くそっ！ セラがいるならば矢も使えんか」

エルカが舌打ちをするのと同時に、領主の一喝が場を打つ。

「あきらめるなっ、小僧！」

領主はフェイに走り寄ると、その足首をむんずと掴む。

「おおっ？ ちょ、ちよつとまてっ！ まさかつ！」

「ぬおおおおおっ！！」

フェイは独楽のようにグルグルと回される。

そして凄まじいまでの回転力が付いた瞬間、気球目掛けて射出された。

「によおおおおおおっ！」

情けない叫びを上げ、フェイは気球へと一直線に飛んでいく。

「セラを、頼んだぞ……」

領主の顔は忌々しそうだったが、その声はどこか嬉しそうでもあった。

領主の狙いは正確だった。

気球の下にある藁わらの籠かごへと、フェイは一直線に飛び、わしつとその籠かごの外型にしがみつく。

途端に気球はグラリと傾き、籠かごの中からは「うおおっ？」と言う悲鳴が上がった。

フェイはチャンスとばかりに慌てて籠かごをよじ登り、その中へと降り立つ。

「フェイ！」

「貴様、一体どうやって!？」

フェイはクラーの質問を黙殺し、ダガーを構える。
しかし、クラーは油断無くセラの喉元に刃を突きつけていた。

「いい加減、セラを放してくれないか？」

「断る……だが、交換条件といこうか。貴様がその短剣ダガーを捨てるなら、小娘を放してやろう」

「フェイ、駄目っ」

そう叫んだセラの喉元に剣先が食い込み、一筋の血が流れる。
やると言ったらやる、その言葉がフェイの脳裏によぎった。

「分かった。その条件、飲んでやるよ……だがその前に聞きたい。」

「お前は何故、そこまで俺を憎むんだ？」

「何故だと？ 知れたことをつ！ この私が長い年月をかけ、この国の権力を掴もうとしていたのに、貴様はそれをあざ笑うかのうに全てを掠め取ったのだ！ この泥棒猫が！」

「……権力なんてもって、どうする気だよ？」

半ば呆れたように言うフェイに、クラーの目が見開られた。

「貴様は思わんのか？ この世界の頂点に立ちたいと！ シュバルト国の周りには、弱小国がひしめいているのだぞ！ これだけの国力があれば、世界ですら動かす事ができよう！」

「そんなの、面倒くさいだけだろ」

フェイのその言葉に、クラーの目が憎悪に満ちる。

「……お前もそう言うのか、黒猫」

どんよりと湿った風が、クラーの白い髪を揺らした。

「団長……ウイシャのヤツもそうだった。面倒くさい、それだけの理由で世界を握る事をやめたのだ！ ……私は許せん。その手にふさわしい地位があるのに、簡単に捨てる者が許せんのだ！ 生まれ持った幸運を捨てる暗愚どもが、絶対に許せんのだっ！」

その言葉に、フェイは声を上げて笑う。

「な、何がおかしいっ！」

「お前、俺が幸運だと言ってるのか？」

「違うのかっ！ 貴様ほど僥倖^{ウレウレ}を身に受けた者を、私は知らんぞ！」

「ああ、そうかよ。ならば見る！ 俺の僥倖^{ウレウレ}とやらをなっ！」

フェイは親指で周囲の空を刺し示す。そこには、真っ黒な雲が立ち込めていた。

閃光が龍のように走り、すぐさま轟音が耳を突き刺す。

「こ、これは雷雲？ い、一体いつの間に？」

「この俺が『幸運』だって？ その冗談、死ぬほど笑えるぜっ！
いいか、俺は自身をもって言えるぞ」

フェイは籠の縁に寄りかかり、短剣をクルリと回すと、刃先を虚空に向ける。

「俺ほど不幸なヤツ、見たこと無い！」

その声に呼応するかのように、雷鳴が轟き、気球を震撼させた。
まるで黒雲がフェイの刃を見て歓喜の声を上げたかのようなだ。

「ま、まさか、いや、そんな訳が……」

クラーの声を否定するように、再び雷鳴が轟く。
それは確実に気球との距離を縮めていた。

「欲しいならお前ににも、分けてやるよ。この黒猫の悪運をな！」
「な、なにを……戯言を」

そう言ったクラーの声は力無く、恐怖が入り混じっていた。

「さあさあ、神さま御照覧あれ！ この不幸王の生き様を！ 棒で打たれ、牢に繋がれ、自由を奪われ、恋に破れ、その黒猫が空を飛べばどうなるか さあさ、とくと思ひ知れ！」

祝詞のりとのようにフェイは語ると、天に向って短剣ダガーを放り投げた。

「セラ、耳を塞ふさげ！」

その声にクラーの腕が一瞬だけ緩み、セラは腕からすり抜けると、言われた通り耳を塞ぐ。

その瞬間　世界が白に染まった。

気球ごと光龍いかずちに食われたのだ。

耳が痛い。目をしっかりと閉じていたのに、あまりの眩めまいしさにまだ眩暈めまいがしていた。

それでも、セラはゆっくりと目を開ける。

始めは暗くて何も見えなかったが、視力は徐々に戻っていく。そして、その惨状を知った。

藁わらの籠かごは所々破れ、所々こげている。気球と籠かごを繋いでいたロープも、残り2本になっていた。

焦げ臭い匂いに、上を見ると、真っ白な気球の布に黒い染みが徐々に広がっている。

燃えているのだ。

クラーは籠かごに寄りかかるように倒れており、体から煙が上がっている。完全に気絶、もしくは絶命しているのだろう。

そしてフェイが見当たらない事に戸惑う。

だが、立ち上がるうとして足に何かが当たった。

うつ伏せに倒れているフェイの姿が、そこにあった。

まさか、死んで

その考えが頭を過ぎった瞬間、心臓が握り潰されたように痛む。

『フエイ！ フエイ！』

叫んだ時に、自分の声が聞こえなくなっている事に気が気付く。
雷で鼓膜こまくが破れたのだ。

不思議な感覚に戸惑いながらも、セラはフエイの体を抱えて起こそうとした。

だが、重くて持ち上がらない。体を横にするのがやっとだった。

黒ずんだ顔をそつと撫でると、目蓋まぶたがピクピクと痙攣けいれんする。

まだ生きていたのだ。

『よかった……』

安堵のあまり、涙が頬を伝う。

だが、気球は高度を急速に下げている。セラにはどうしたら良いか分からない。

フエイの顔をペシペシと叩いてみても、何の反応が無いままだ。

ごめんなさい、フエイ

心で謝ると、息を大きく吸い込んだ。

フエイの顔に自分の顔を寄せ、その唇に自分の唇を重ねた。

そして、力の限り息を吹き込む。

次の瞬間、フエイがパチリと目を見開き、むせ返った。

『フエイ!』

嬉しさが胸に入りきらず、泣きじゃくりながらフエイを力強く抱きしめた。

その温もりが、髪を失った悲しみも、コノハへの劣等感も、全部洗い流してしまう。

なにより、フエイはこんなところまで助けにきてくれたのだ。命を賭け、傷だらけになって、それでも当たり前のような顔をして、ここにいるのだ。

『私、本当は死にたくなって無かった! もっともっとフエイと生きたい!』

セラの心が切ないほど歓喜の声を上げていた。

フエイは呆然^{ぼうぜん}と抱きつかれたままキョロキョロと辺りを見回し、何か口をパクパクとさせたが、耳に手を当て眉をひそめる。

フエイの鼓膜^{こまく}も破れているのだ。

フエイは立ち上がって籠^{かご}から頭を出し、外を見まわしたので、セラも同じように見てみる。

既に地面は近かった。下は柔らかそうな砂漠だが、このまま加速すれば助かる見込みは少ないだろう。

フエイは籠^{かご}に足を掛けると、ロープにつかまりながらその縁^{へり}に乗った。

そして、セラへと手を差し出す。

セラはフエイを見上げた。

『ここから飛ぶの?』

セラの声が聞こえたように、フェイはゆつくりと頷く。

その顔は初めて会ったときから変わらない、ちよつと困ったような笑顔を浮かべていた。

セラはその笑顔が、たまらなく好きだった。

その手を二度と離さないよう、しっかりと握る。

二人は籠カゴの上に立つ。

少し体制を崩したセラを、フェイはその手でしっかりと支えた。下を見れば砂漠はすぐそこまで迫っているように見える。だが、フェイはまだ飛ばない。

怖いかと聞かれれば、セラの返事は「はい」だろう。

では不安かと聞かれれば、その答えは「いいえ」だ。

ここなら、フェイが死ねば自分も死ぬる。思い残すことは何も無いのだ。

うつん、思い残したこと、あった。私、まだ言つてなかったんだ

その言葉にセラが気付いた時、フェイの抱きしめる手に力がこもる。

次の瞬間、セラは空を飛んでいた。

静かだった。

遙か遠くには沈もうとしている太陽、下には広大な砂漠、そして、包むようにフェイの温もりがあるのだ。

言わなきゃ

落ちた時、自分は死んでいるかもしれない。
だが、今、私は生きているのだ。
後悔はしたくない。
今できる事があるのだ。

『フェイ……私、フェイのこと』

その声が聞こえているかのように、フェイはセラを見た。

『大好きだよ』

衝撃は、次の瞬間だった。

一番にフェイの元に辿り着いたのは、リーガンとコーディリアが率いた部隊だった。

「リーガン、リア王は無事でしたか？」

「僥倖^{きやうじやう}だな、腕はへし折れ、足は曲がらない方に曲がつているが、生きている。丈夫なことだ」

「そうですか、それはよかった！ ああ、セシリア公女は？」

「……恐ろしいことに無傷だ。王の運を吸ってるのかと疑いたくない」

「そうですか、それはよかった！」

コーディリアは夕焼けに向かって両手をさし伸ばす。

「ほら、見て下さい。五十万もの民が夕日を背に迫るこの絶景を！」

「……また何か広めるつもりか？」

「なにをバカなことを！　これだけの民衆ヤジウマが集まったのですよ？

これ以上、リア「フェイロンの何を広める必要がある」というのですか」

「お前が天性のサディストだと言うことは良く分かった。今はそれを広めたいよ」

「この世界が変わろうという時に、何を悠長なことを言っているのです」

「世界が、変わる？」

リーガンは眉をひそめた。

「分かりませんか？　民は立ち上がることを覚えたのです。無能な領主は、容赦なく蹴落とされるようになるでしょうね」

「ずいぶんと他所事じゃないか、アハト領は政治に自信があるのか？」

「いいえ。そうではありません。ただ私は政治より演劇でもやってくれる方が好きなんです。ああ、そっちの人生の方が、何かワクワクしますね！　一緒にやりませんか？」

「もちろん遠慮する」

リーガンがため息を吐いた頃、集まった民衆が王の無事を知ったのか、口々に叫び声を上げ始めた。

その叫びは、自然に一つの唱和へと変わっていった。

「さあ、リーガン。私達も一介の剣の民になって戦の終わりを叫びましょう」

「ふむ、お前にしてはいい案だな。よかろう」

リーガンとコーディリアは手を振り上げる民衆に混じり、その唱和に加わった。

そして、あらん限りの声で、勝利を歌う。

「リア王に栄光あれ！ 剣の国の黒猫に幸あれ！」

(41) 剣の国の黒猫

『剣の国の黒猫に幸あれ』

五十万の民がそう叫んだ日から、既に半月が流れている。

この半月の間、フエイは王都にある病室で療養しており、様々な人がこの病室を訪れた。

グロスター伯やアイオールが見舞いに来たり、武者修行の途中だと言うカシムがぶらりと訪れた事もある。

わざわざゼクス領からクロフがレンファが来た事は、フエイにとって何よりの贈り物となった。

ただ、ルナとエドガーがピタリと寄り添いながら来た時には、さすがに笑顔が凍りついた。どうやら、本当に恋人になっていたらしい。余計な期待などさせないで欲しいものだ。

一方、エルカだけは、入院した翌日に一度顔を出したきり姿を見していない。忙しい身なのは分かるが、それが少し寂しかった。

逆にコノハは將軍の激務にもかかわらず、それこそ毎晩のようにやって来て、あれこれとフエイの世話を見てくれていた。

そしてセラも、毎週のように竜馬^{ナタク}の馬車に酔いながらもやって来て、あれやこれやとゼクスの近状を話してくれる。短くなった髪をしきりに気にしているが、綺麗に切りそろえた髪は、むしろよく似合っていると思っている。

まったくの余談だが、セラが来る時は必ず領主も一緒に来ていた。そして話している間、部屋の片隅で黙って腕を組んで立っていた。本当にたまらない。

ただ気のせいかな、以前に比べると、表情はほんの少しだけ柔らかくなっている気がした。本当にほんの少しだけだが。

と言う訳で、来客の頻度を考えれば、この状況はいつか必ずやってくる事態だったのだ。

外はすっかり日が落ちており、ベッドサイドに二つ置かれたイスには二人の女性が座っていた。

セラとコノハだ。

二人とも満面の笑顔が顔に張り付いているのだが、目が怖いし空気が痛い。

なにせ二人の間が揃ってからと言うもの、一切の会話が無いのだ。ここまで来れば、いくら鈍感なフェイでもなんとなく想像が付く。

これは、修羅場だ

「あ、そうだ！ フェイ、何か果物欲しいんじゃない？」

「い、いや、いいよ、コノハ」

「ガラムは明日退院だそうです、今度連れて来ましょうか？」

「いや、いいって、無理させちゃ悪いし」

一向に視線すら合わせない二人に、胃が痛くなってきた。

セラの直球な気持ちは嫌というほど分かっていた。

そしてコノハも、フェイの世話をする端々に、思わせぶりな言葉をポツポツと置いていくのだ。

もしかして……と思っていた矢先に、この状況である。

「子供は子供らしく、外で遊んでいるのが普通だってフェイは思わない？」

「……は？」

「身体的特徴を侮蔑^{ぶへつ}する人間って、フェイはどう思います？」

「……え？」

「キスで妊娠するとか思ってるのって、完全に子供よね。フェイ」

「……あ、あの」

「すぐにキレて見境なく暴力を振るうような悪魔、いつか尻尾が生えるに決まってます。そうでしょ、フェイ？」

二人の間にある空間が、プレッシャーに負けてぐにやりと歪んだ気がした。

まずい、なにかとんでもなくまずい方向へ話がぶっ飛んで切る気がする

何か、雰囲気明るくする話題が必要だと、フェイは必死で考えをめぐらせた。

だがしかし、話題を探している時間など、あのセラが待つ訳がなかった。

いつものようにセラは唐突に立ち上がった。

「私は、フェイを愛してます！」

突然の告白　　と言うよりは、決闘の申し込みのような口調だった。

フェイはセラよりも早く領主へと目を向ける。

壁際で腕を組んでいる領主は、無論、鬼のような形相でフェイを睨んでいた。

「さあ、コノハさんはどうなんですか？」

セラは勝ち誇ったような顔で、コノハを見た。
喉をぐうと唸^{うな}らせたコノハだったが、負けじと立ち上がる。

「あたっ……あたしも、フエイが、好きなの」

顔から火が出そうなほど真っ赤になってコノハは呟いた。
その言葉を確認すると、セラはそのままフエイに詰め寄る。

「さあ、フエイ、選んで。あなたが選ぶなら、ちゃんと納得するか
ら！」

「あ、あたしも。白黒付けてくれるなら、そっちの方がいい」

とうとう来たか

フエイの返事は決まっている。もし、こんな事態なれば本心を正
直に告げると決めていたのだ。

ここで嘘を言っては勇気を出して気持ちを伝えてくれた相手に失
礼だった。

それに、生まれた時から嘘は苦手なのだ。

覚悟は、出来ている

フエイはその胸にあった想いを、ハッキリと告げた。

「どっちも嫌だ」

部屋の気温が氷点下まで下がる。

コノハの手に、どこからともなく大根棒が現れた。
そして、セラは領主の元に泣きながら走っていく。

「お父様……嫌だなんて、私」

領主は拳をゴキゴキと鳴らし、壁から離れた。

「ちょ、ちよつとまてっ！　ちゃんと選べば諦めるって、そう言っただけで、友達最高！　みたいな」

フェイはギブスの付いた両手をブンブンと振って自己弁護する。
しかし、コノハは大根棒を正眼に構えると、氷のような声で宣告した。

「言いたいことは、それだけ？」

領主は鉄槌すら砕いた拳を、慈悲じひのカケラも無く引き絞る。

「身の程を知らん愚者が……遺言を聞こうか」

フェイはギブスをあわせて懇願した。

「お願い、優しくして」

その願いは、塵ちりのように無視される事になる。

その夜、フェイの断末魔が途絶える事は無かったのだ。

次の日の朝、エルカが病室を訪ねると、そこは血の海だった。その中心でフェイがガタガタと震えている。

エルカはフェイの体を起こすと、口を開いた。

「……よく飽きないな」

「他に言う事あるだろうっ！」

フェイは血塗れのまま叫んだ。

「ちょっと待っててくれ、今医務官を呼ぶから」

エルカはテキパキと指示を出し、フェイを綺麗なベッドに寝かせた。

「医者が言うには裂傷と打撲だけで、特に問題無いそうだ。良かったな」

「良くねえよ！」

フェイは頭を抱える。

「あああ。退院したらすぐに王様なんぞに戻らなくちゃいけないんだ……嫌だああ」

エルカは「やはりな」と呟つぶやいた。

これ以上フェイが王様など続ければ、良くてノイローゼ、悪ければ本当にハードゲイにでも走りかねない。

そして、それを打開するために、エルカは見舞いにも行かず準備をしていたのだ。

フェイの肩に、優しく手を置いた。

「フェイ、一緒に別の国……海の向こうへ行かないか？」

「海の、向こうへ？ でも、俺は」

「王ならエドガーが上手く継いでくれるさ。その準備はしてきた。なにせ、あの歳で二十万の民を先導したんだ、大丈夫だよ」

「……………いいのか？ 本当にいいのか？ 俺は、自由になってもいいんだな？」

フェイの目が潤む。とことん真剣に王が嫌だったらしい。

「もちろんだ、好きな国を選ぶといい。そして、また、一緒にクエスト屋をはじめよう」

「エルカアアツ！」

フェイは目一杯力強くエルカを抱きしめる。

エルカはフェイに見えないように、ニタリと笑った。

三日後、退院する日の早朝、フェイはエルカに連れられ病院を抜け出した。

フェイの残した置き手紙がきっかけで、シュバート国はさらに変革することになるのだが、それはまた別の話である。

丸二日、駿馬エクウスの馬車に揺られ、フェイとエルカはツヴァイ領の港にたどり着いた。

朝靄あさもやの中、フェイとエルカを待っていたのは神出鬼没の美女ディ

アナだった。

「エルカ、待ってたわ」

「遅くなつてすまない、ディアナ」

そう挨拶を交わすと、二人は強く抱きあつた。

「新婚旅行の行き先、勝手に決めて済まなかつたな」

「何言つてるのよ、悪いなんてちつとも思つてないくせに」

そう言つと、フェイの視線も気にせず濃厚なキスを交わした。

「……えっ！？ ええええっ！？」

フェイがあたふたと狼狽すると、エルカはさもっかかりしていたと言わ^{とほ}んばかりの惚けた顔で言つてのけた。

「おや、言つてなかつたか。ちよつと前に結婚したんだ」

「なあああああつ！？」

ディアナはエルカの肩にしな垂れかかり、小さくため息を吐いた。

「あのクソ親父に現役復帰してもらつたから、砂漠の長から解放されたの。そうなつたら、急にあそこから出たくなっちゃつて」

「は、はあ……」

フェイは呆然と立ち尽くした。

「ほら、フェイ、私たちの乗る船だ。新造の豪華客船だぞ」

氷山に当たって沈没しないだろうか

そんな疑問を抱いたまま、フェイは船に乗り込んだ。

いよいよ、この剣の国ともお別れ、か

出航の鐘が鳴り、岸が徐々に離れていく。
郷愁きょうしゅうの念がフェイを襲い、セラ、コノハ、クロフ、オルフェル、
その他多くの人々の顔が頭を過ぎった。

みんな、黙って出発してごめんな

「暗い顔してどうしたの、黒猫ちゃん？」

「黒猫ちゃんって呼ぶな！ なんとも言ってるだろ！」

「いいじゃない、そのくらい。細かい男はモテないわよ」

「女は当分いらん！」

すると、エルカがゆっくりとディアナに近づき、その肩に手を置いた。

「ディアナ、フェイの気持ちも分かってくれ。ここには、もう戻れないかもしれないんだ」

そう言つと、エルカもフェイと同じように故郷を眺める。

そこには、エルカの今までの人生が全て詰まっていたはずだ。

悪い、と思いつつ、エルカがいなくて外国でやっていく自信など無い。

「エルカ、本当に、いいんだな？」

エルカは振り帰ると、大きく頷いて笑った。

「ああ、もちろんだ。剣の国の黒猫の物語を、ここでお終りにしよう」

シュバート国がすっかり水平線に消えた頃、フェイは水を貰おうと船倉にやってきた。

「水の樽は……おお、これが全部そうなんだ。さすがに豪華客船は違うなあ」

ふと、天井から吊り下がった干物が目に止まった。

だがよく見ると、それは干物ではなかった。薄皮で出来た風船のような物体であり、天井から伸びている紐ひもにぶら下がり、タプンタプンと揺れているのだ。

「これは……カエルか？」

その妙にリアルなカエルに手を触れようとした瞬間、鋭い制止の声が飛んできた。

「さわるな、それは危険物だっ！」

どこかで見たとような水夫が、真剣にフェイを呼び止めた。

「その物体は絶対安静、天地無用に願う」
「……あ、ああ」

その迫力に、フェイは素直に頷いた。

気を取り直すと、カエルの真下にあった樽たるの蓋ふたに手を掛けた。
蓋は思いのほか簡単に開らき………そして、すぐさま閉める。

「……おい、セラ」

『はい』

「何やってるのか、聞いていいか？」

『ええと、家出と密航、です』

「一応、動機を聞いておこうか」

『……エッチ』

捨てよう

フェイは樽を持ち上げようとすると、観念したのかセラが樽から這い出てきた。

「あ、あの、これをフェイに渡そうと思って」

「何だこれは？」

「ゲロちゃんです」

セラはカエルの干物に躊躇ちゅうしゆ無く口をつけると、プウと脹らませた。

「ほら、可愛いでしょ」

「で、呪いを掛けにわざわざここまで来たのか？」

「ちっ、違いますっ！ ああ、私、背がちよっと伸びたんです」

セラはフェイに一步近づいた。

「気球から落ちたせいとか、雷に打たれたせいとか、分かりませんが、成長してるらしいんです」

「……まあ、それはよかったな」

「はいっ！ だから、私、いつかきつとフェイに好きになってもらえる女性になるんじゃないかと」

「言っただけだ。今は誰とも付き合わないって。セラがいきなり俺と同じ背になっただけで、それは変わらない」

フェイが厳しく言うと、セラは瞳を潤ませる。

「分かってます。でも、私、決めてたんです。たとえ横に並べなくても、フェイの背中を追っていくって」

フェイを真っ直ぐに見つめる碧眼へきがんは、強い意思を湛たたえていた。何をもってしても、それは曲がらないのだろう。

「……つたく、仕事の邪魔だけはするなよ？」

「フェイ！」

セラはフェイの首に飛びついた。

「私、信じてるんです。雷でも、落下の衝撃でもなくて、フェイが呪いを解いてくれたんだって」

「俺が？」

「ほら、気球の中で……その、口と口のキス、したでしょ？」

「ああああっ！」

フェイの脳裏に、あの一瞬の記憶がよみがえった。

雷に打たれた後で目が覚めた瞬間、セラの顔が目の前にあり、さっきのカエルのように空気を挿入されていたのだ。

ちなみに、それがフェイのファーストキスの記憶でもある。

悲しい記憶だが、コノハがここに居なくて良かったと思う。聞かれたらまた酷い惨事になっていた事だろう。そう思った刹那^{せつな}だった。

「……ふうん、そうだったの」

背後から冷たくゾクリとするハスキーボイスが聞こえた。

振り向かなくてもそれが誰なのか、すっかり不幸に慣れてしまったフェイは瞬時に理解する。

「ちがうんだ、コノハ！」

甘美であった。やはりこうでなくてはならない。

物陰からフェイ達を覗いていたエルカは、強くそう思った。

「リーガン、知らせてくれてありがとう。これで充実した時間が過ごせるよ」

「い、いや、他ならぬエルカーノの頼みだからな。でも、これ見て楽しいか？」

リーガンが指し示す先には「このロリコン露出狂のハードゲイ童貞」と声を張り上げ、大根棒で小突き回しているコノハと、小突かれているフェイの姿があった。

ディアナが目を剥いた。

「こんなに面白いものが分らないなんて　なんて可哀想な人」

やはり、私の妻になる女性はディアナしかない

エルカは満足したように頷いた。

彼にとって女性を選ぶときに重要なのは、価値観の一致であった。そこになると、ディアナはまさに理想の女性なのだ。

エルカが熱くディアナを見つめると、彼女は飲み掛けのワイングラスを掲げた。

「私達の幸福な未来に」
「乾杯」

エルカは持っていた空のワイングラスを軽く当てた。

バンツ！

船倉の扉がけたたましく開かれ、血相を変えた水夫が大声を張り上げた。

「大変ですっ！　ゴルゴンの生き残りが、船を占拠しようと暴れます！　至急非難してくださいっ！」

必死で報告する水夫に、エルカは感嘆の声を上げる。

「シージャックか……さすがフェイだな」

空のワイングラスを水夫に押し付けると、エルカは船倉の奥に向

って告げた。

「何をしている、フェイ、コノハ、セラッ！ さあ、初仕事だ！」

「俺たちはゴルゴンの生き残りだっ！ この船は俺たちが占拠した。命が惜しくば、さっさと金目の物を置いて、海に飛び込むんだな！」

フェイ達が船倉から上がってくると、メインデッキの上で屈強な男が刀を手に怒鳴り散らしていた。

その周りでは、武器を持った悪人面の男達が五人ほど、ニヤニヤと笑っている。

エルカは吠え猛る賊を無視し、ある一点を指差した。

「いたぞ、あれが船長だ」

指し示す先には盗賊達から隠れるように、毛布をかぶって震えている恰幅のよい男がいた。

エルカは男に近づき、遠慮なく毛布を剥ぎ取る。

「あなたが船長ですね」

「うわあああ、頼む、命だけはっ！」

船長はあたふたと床の上を這いずって、エルカに命乞いを始めた。そこにセラがしゃがみ込んで、優しくその手を取る。

「違います。あの賊を駆除するご依頼を、私たちに頂けませんでし

ようか？」

「は？ いや、でも、君達は？」

セラは満面の笑みで答える。

「私たちは、クエスト屋です」
「クエスト屋？」

船長は顔を上げ、五人を見た。

「そうですとも！」

エルカは一步踏み出すと、芝居がかった動きで両手を広げる。

「クエスト屋エルカーナの経営方針は迅速、^{モーター}確實、徹底的」
ディアナが柔らかな曲線を誇示するように、その隣に並ぶ。

「黒猫の搜索から、盗賊退治まで、なんなりと」

フェイはいつものようにちよつと困った笑顔で、^{うやうや}恭しく頭を下げる。

「必ずや、^{クライアント}依頼人の^{クエスト}依頼も^{クレーム}要望も^{クリア}解決し尽くし」

コノハは凜と背を伸ばすと、すこし照れたように笑顔を作る。

「とびっきりの笑顔を差し上げます」

セラは短い金髪を揺らし、精一杯胸を張り、透き通るような声を

響かせた。

「私たちの願いは、たった一つなのです！」

最後に五人が一礼を決めた呼吸は、これからの未来を示すように、寸分の狂いも無かった。

「『あなたにより良い明日を！』」

（４２）がんばれ、セラ！（前書き）

ＴＯＣです。ここまでのご愛読ありがとうございました。

続編は絶対に書かないつもりでした。ですが、あまりに多くの方が続編を望んで下さったので、感謝の気持ちを込めて二年後の話を書かせて頂きました。

蛇足だとは思いますが、少しでも笑って頂ければ幸いです。

（42）がんばれ、セラ！

「がんばれ、セラ！ もう少しだ！」

フェイは小さな手をきつく握り、何度も何度も声を掛ける。

しかし、セラはベッドの上で苦悶の表情を浮かべ、うんうんと唸るばかりだ。白い額に脂汗をびっしりと浮かべ、そのお腹ははちきれんばかりに大きい。

「フェイ、もうだめっ！」

「あきらめるな、がんばれ！ もうすぐ生まれるぞっ！」

小さく頷いたセラは濡れる双眸めくろをギュッと閉じ、小枝のように頼りない腕を宙に彷徨さまよわせる。その細腕がフェイの背中を掴むや、信じられない力で抱き寄せられた。

「おい、セラ？」

だが、その声はもう届かない。少女はフェイの耳元で喉よ裂けよとばかりに絶叫したのだ。

「あああああっ！」

やがて、フェイの聴力が戻るにつれ、呼吸のような泣き声が耳に届いた。慌てて視線を下に向ける。するとそこには羊水に濡れる赤子がうずくまっていたのだ。

「お、おいっ！ 生まれたぞ！ がんばったな、セラ！」

フェイは感極まってクシャクシャとセラの頭を撫でる。

「……フェイ、赤ちゃんを見せて」

「ああ、待ってろ」

フェイは慎重に赤子を抱き上げ　そこで違和感を覚えた。

あ、あれ？

赤子の髪が異常に長いのだ。なんと背にかかるほど伸びている。
恐る恐る赤子を抱き上げ、その顔を見た。

……………顔が、コノハだった。

「うっぎゃああああああああっ！！」

フェイは絶叫と共に飛び起きた。

カーテンがフワリと揺れ、木窓から入る爽やかな風が寝汗に濡れたフェイを優しく撫でる。

チュン　チチチッ

長閑な小鳥のさえずり、そこはまぎれもなく、朝だった。

「夢かよっ！！」

しかし、夢とは思えない臨場感だった。フェイの心臓はまだバクンバクンとフル稼働しており、寿命が数年削り取られた気分である。

なんて夢だ。しかもなんでセラが母親で、コノハが赤ちゃん

なんだよ。普通は逆だよな。

そこで、はたと思考を止めた。

「いや待て、普通って何だよ」

「ふむ、普通か」

「おわっ！」

慌てて身をよじると、枕元にぬっと立ち尽くすエルカがいた。

「普通とは、大多数の現象を平均化したモノを呼ぶ。実に曖昧な言葉だな。反意語には特殊や特別、異端、変などの言葉があるが、私にはこれらの方が好ましく思える」

「エルカ、いたのか……… いったいいつからそこに？」

「セラ、セラとお前が愛しそうに呼び続けた頃かな」

「うがああああっ！」

フェイは頭を掻き毟って弁護する。

「ちがうんだ、エルカ！ 昨日、産気づいた妊婦を助けたんだよ。でも医者来れなくて、出産まで立ち会わされて、そのショックがだな」

「フェイ、必死だな」

「違うって！」

あたふたと言い訳を続けるフェイの様子を、エルカは幸せそうに眺めた。そしてやれやれとばかりに首を振る。

「まあ、昨日の事は聞いている。医者的心得も無いくせに、泣きながらへその緒を切ったばかりか、母親に赤子の名付けまで頼まれた

そうじゃないか。何故断った？」

「当たり前だつ！ くそつ、二度と妊婦なんて助けねえぞ」

「できない事は言うものじゃない。さあ、いい加減起きてリビングに集まってくれ」

フェイが首を傾げる。まだ朝食には早い時間だからだ。

「いやなに、頼みたい仕事が入ったのだ。お前好みの仕事だと思う」

エルカはそれだけ言うつとフェイの返事も聞かず、さっさと部屋を後にした。

「俺好みの仕事？」

傾げていた首を反対側にカクンと傾げるが、さっぱり答えは出てこなかった。

フェイは着替え終わると、早々にリビングに入った。

そこには優雅にお茶をすするエルカと、朝食の準備をするエプロン姿のセラがいた。

セラの所帯じみた格好から先程の夢を思い出し、フェイはドキリとする。

二年前に切られた金髪は肩にかかるまで戻り、また手足もスラリと伸びていた。十八歳にしてはまだまだ小さいが、もう十歳児には見えない。町へ出れば誰もが振り向く美少女なのだ。

「おはようございます。フェイ、よく眠れましたか？」

「え？ あ、ああ、一応は……」

歯切れ悪く答えると、エルカが実に楽しそうにこちらを見ていた。
(まさか、エルカに限って寝言の事なんて言わないよな?)

嫌な汗が額を伝う。

ここ最近、相変わらず無邪気にまとわりつくセラに、動揺する事が多くなった。これ以上、誤解を与えて暴走して欲しくないというのが本音なのだ。

「今朝のメニューはオニオンとブガットのオムレツにしてみたのですが、どうですか？」

そんなフェイの気も知らず、セラは皿へ盛ったオムレツを自慢げに見せる。

薄黄色のオムレツは七割ほど満ちた月のように綺麗に焼けており、色鮮やかな野菜が添えられている。見るからに食欲をそそられた。二年前のヘドロオムレツとは比べ物にならない。

「よし、見た目は合格だ」

「やったあ！ 味も自信があるので温かいうちに食べてくださいね」
「ああ、分かった……あれ、コノハはどこだ？」

コノハの名前が飛び出た瞬間、セラの表情がそれと分かるくらいに陰った。

「気になるんですか？」

「いや、ほら、エルカが仕事の話って言うからには、全員集まるのかなあって」

「……コノハさんは今、ディアナさんを起こしに行っています。す

ぐ来ますからっ」

オムレツの入った皿を乱暴にテーブルへ置くと、セラはパンを焼くために厨房へ足音荒く去っていった。

「つたく、なんだよ」

フェイはセラに聞こえないように呟いて席に着き、エルカはそんな二人を見て幸せそうに微笑むのだ。

「ディアナ、いい加減起きて」
「うーん」

コノハはダブルベッドで眠るディアナを何度も揺する。だが、毛布にくしゃくしゃに包まれているディアナは唸るだけで、さっぱり起きてくれなかった。

やがて、コノハの切れ長の目が吊り上がってくる。

「ちょっと、ディアナ！」
「もうちょっと寝かせて……昨夜、エルカが全然寝かせてくれなくて」

寝かせてくれないという言葉に、毛布を引き剥がそうとしていたコノハの手がピタリと止まった。
今まで気にもしていなかったベッドの乱れ具合が急に気になってくる。

「おや、顔が真っ赤だよ？ 何か想像しちゃったかい？」

毛布の隙間からディアナの灰色の瞳がコノハの顔を覗いていた。その目は三日月のようにニヤニヤと歪んでいる。

「ばつ、何も想像してないわよ！ いいから、早く起きなさい！」

「ほんと可愛いわね、もう二十歳ハタチなんでしょ？ まったく黒猫ちゃんもとんだ罪な男だね」

「……余計なお世話」

プイと横を向いた途端、ディアナは毛布ごとガバリと起き上がった。

「ね、コノハ。黒猫ちゃんを落とす手っ取り早い方法を教えようか？」

「あ、あたしは、別に、そんな」

「酒さ。あんなお人好し、ジュースだって酒を飲ませちまえばあつという間に理性なんて吹っ飛ぶよ。そこで胸元なんてチラッと見せてごらん？ それで勝負ありさ。あんたもそんな膜、いつまでも大事にしてないで、さっさと破っち」

どこから取り出したのかディアナの喉元にはナイフが押し当てられ、それ以上の言葉を紡ぐ事が出来なくなつた。

「……あと十数える前に起きてよね」

もつ否と言う事はできないねと、ディアナは早々に悟つたのだつた。

「お待たせ」

ディアナがリビングに入ると、そこにはピリピリした空気が蔓延していた。

その中で、エルカは一人だけ上機嫌である。

「やあ、ディアナ。いい朝だな」

「おはよう、エルカ。今日もいい日になりそうね」

ニヤリと微笑みを交し合い、朝食の待つ席に着いた。

「全員集まったな。では依頼の内容を説明する。もちろん朝食を食べたまま聞いてもらって構わないよ」

言われるまでも無くディアナは朝食を突付いた。

焼きたてのパンにオムレツをのせると、パクリと噛り付く。半熟で柔らかい卵とオニオンの風味、ブガットのほのかな酸味が実に良く調和していた。

あら、本当に美味しい。あのお嬢ちゃんも腕を上げたものね。誉めて欲しい人が近くにいれば当然か

ただ現在、褒めて欲しい人とは冷戦に入っているようだ。エルカの上機嫌の原因はこれだろう。

悪い人ねと夫^{エルカ}を見やる。

「今回のクエストだが、一つは商人の護衛、もう一つは財宝探索だ」「財宝！」

財宝の言葉にフェイが腰をわずかに浮かせて反応した。

「財宝って具体的には何だよ。宝石の類か？」

「いや、美術品だ。依頼人の情報では洞窟の隠し部屋にあるらしい。そこでフェイとセシリアに探索を頼みたい」

「私も!？」

弾かれたようにセラが立ち上がった。

今まで迷い人調査以外は留守番ばかりだったセラが、この大きな仕事に抜擢されたのだ。驚かない訳が無いだろう。

「ああ、私とディアナ、コノハの3人で商人の護衛をやるからな。

セシリアはマッピングの勉強をしていただろ? フェイを助けてやって欲しい」

「は、はいっ!」

その元気良い返事で、今度はフェイが不安になったようだ。

「おい、エルカ。マッピングは確かに有りがたいけど、危険は無いんだろうな?」

「危険はどこにでもある。クエスト屋をやるならいつかは通る道だ」

そこまで言うと、エルカは厳しい顔をフツと緩めた。

「まあ、野獣が出たとの報告はないから、多分大丈夫だろう……ただな、ちよつと出るらしい」

「出るって、何が?」

エルカの視線がスウと細められ、唇の端がニイと吊り上った。

「なに、ただの幽霊だよ」

セラは手に持った白墨で、五つめの目印を洞窟の岩肌に書き込んだ。

目印には数字や記号がつけられており、どの目印を見つけても最悪入り口に帰る事ができる仕組みになっているらしい。

「しかし、幽霊なんてな、本当にいるのかよ」

「しー！ ダメですよ、フェイ。幽霊の話をするとう霊が出るって言うじゃないですか」

口に指を当てながらパタパタと近づいてくる仕草は子供そのものだ。安全の為にティアナの革のマントを付けさせたが、大き過ぎて似合っていないかった。

財宝の探索という浪漫一杯のクエストなのだが、お陰でいっこうに緊張感が沸いてこない。

しかし、洞窟は狂ったように枝分かれしており、自力で脱出しろと言われても出来ないだろう。

セラのマッピングは確かに有りがたかった。

「それにしても、誰だっけ、その美術品の作者」

「グラム」ホロウさんです。高名な美術家さんなのですが、昨年にお亡りになったそうです。でもその直前、生涯最高の作品ができたとお弟子さんに漏らした事があったとか。グラムさんのアトリエにあった資料から、その作品がこの洞窟に隠してあるらしいのです」
「高名な美術家の生涯最高作品か……やりがいがあるじゃないか」

「はい！　どんどん行きましょう！」

二人はランプをかざして奥へ奥へと進む。たしかに洞窟は枝道が多いが、人間が進めるところはそう多くない。セラのマップには次々とバツ印が増えていった。

「セラ、俺の前は歩くな。罠が無いとは限らないんだ」

「あ、ごめんなさい。つい嬉しくって」

タタタツと本当に嬉しそうに戻ってくる。

「フェイと一緒に冒険する事は私の夢だったのです。お荷物じゃなくて、パートナーとして。だからこれって夢がかなったんですね」

無垢な瞳で見上げるセラを見て、フェイは返事ができなかった。

俺は、このままでいいのか？

つい、そんな疑問が沸いてきた。

セラも、コノハも、彼女達にはもつとふさわしい人がいるんじゃないかと思う。こんな不幸にばかり巻き込まれている男に、これ以上囚われていて良いのだろうか。

そんなフェイの思考を遮ったのは、セラの空を切る叫び声だった。

「きゃあああああっ！」

ハツと我に返ったフェイは、ランプをかざしてセラの様子を確認する。

一匹のコウモリがセラに襲い掛かっていた。

普通のコウモリならば、バタバタと動くものから遠ざかる。しか

し、このコウモリはセラがどれだけ追い払おうとしてもまとわりついてくるのだ。

吸血コウモリか!?

フェイは素早くダガーを引き抜いてコウモリを斬り付けた。狙いたがわずコウモリは翼を切られ、ボトリと地の上に落ちる。

「おい、大丈夫か？」

セラがはいと返事をしようと顔を上げたとき、その目が驚愕の色に染まった。

「いやああああああああっ！」

その絶叫にフェイも慌てて振り返る。そこにいたのは、岩肌の天上を埋め尽くすほどの吸血コウモリの大群だった。

「セラ、大声を出すな。あいつらは音に反応する　おい、セラッ！」

「きゃあああっ！　いやああっ！」

すっかり錯乱してしまったセラは、フェイの声などまるで届かなかった。口を抑えようにも、フェイの手もコウモリだと勘違いして暴れまわっている。

ゾクリ

首筋に悪寒が走った。

セラのマントの裾を掴みセラ自身をぐるんと巻くと、抱きかかえ

様に走り出す。

その直後、吸血コウモリの大群がフェイ達を取り囲んだ。厚手の皮ジャケットはコウモリの牙を防いでくれるが、首筋はそうはいかなかったらしく、するどい痛みが走る。

くっ、まずい

フェイはセラを片腕で抱えたまま走り、残る腕でバックパックから雨避け用の大きな薄皮を取り出す。そして、地面に倒れながら薄皮でセラと自分を覆った。

視界の悪い中、セラにまわりついていてるコウモリを一匹づつ追出し、最後に自分の首筋に食いついているヤツを引きちぎった。吸血コウモリと言えど、さすがに薄皮を捲^{めく}って入ってはこれないようだ。

「ふう。ひとまずこれで安心か、セラ、大丈夫か？」

「……その、ごめんなさい」

フェイの腕の中で、セラは小さくなった。どうせ、グジグジと自分を責めているのだろう。

「気にするな、最初はそんなもんだ。それより、落ち込むのは後だ。あいつらを何とかしないと動けやしない」

「……あの、発煙丸を持って来ました」

「おお、そうか！」

発煙丸とは良く燃え、煙を大量に発生する丸薬だ。主に巣穴にいる動物を燻り出すのに使うが、コウモリ退治にはもってこいだった。フェイはポケットから手探りで火打石と木屑を取り出し、木屑の上に発煙丸を数粒置いた。そして、カチカチと火花を散らし、吐息

で空気を送り込む。

赤い火が灯ると同時に、すぐさま煙が広がった。

「ケホッ、ケホッ、頼むぞ」

コウモリ達が群生している場所へ発煙丸を投げ込み、すばやく薄皮を閉じる。後は群れが退散するのを待つだけだ。

そうやってフェイが作業をしている間、セラはずっと俯いたままで、元気がすっかり無くなってしまっていた。

「どうした、怖いか？ それとも、さっきの事でも気にしてるのか？」

セラは後者のタイミングでコクリと頷く。やれやれと鼻先を掻くと、フェイはゆっくりと話し出した。

「俺は小さい頃、両親に捨てられて一人で生きてきた。一人は寂しかったけど、今はみんなと一緒に生活できて結構幸せだ。だからチャラだと思ってる」

「チャラ？」

「ええと、つまり帳消しって事だ。どれだけ不幸な過去でも、今が幸せならそれでチャラなんだ」

自分の言葉にうんと頷く。

「セラが失敗しても、まだ俺たちは生きてる。反省して、おまけに発煙丸も持っていたんだ。完璧にチャラだろ」

「でも、私は、いつもみんなに迷惑かけてばかりで……」

フェイはセラの頭に優しく手を置いた。

「なら、その分みんなを幸せにすればいい。それで全部、チャラだ」

セラは小さく頷き、ようやくフェイを見上げた。

「あ、フェイ、首筋に血が」

「ああ、後で消毒しなくちゃ　　って、おい、何する気だ？」

「動かないで！」

フェイの首筋にセラの唇がゆっくりと押し当てられ、その小さな舌が傷口を容赦無く、なめた。

数分後、薄皮を隔てた向こうでキィキィバサバサと騒がしい音が
高まり、やがてピタリと止む。

それを確認するや、フェイは安全も確認せずに薄皮から這い出た。

今度こそ、駄目かと思った

声を出したら負けと云う、自分に課した試練に辛うじて勝利した
彼は、しかし、わずかに涙目だった。

次いで少しだけ元気になったセラが、キョロキョロと警戒しながら飛び出す。

あれだけいたコウモリの大群は、群れの習性が全ていなくなっていた。

「……よし、いくぞ」

気を取り直した二人はさらに奥へと進み、やがて岩壁の行き止まりに突き当たった。

「これ以上は行けないみたいです。引き返して、別の道に行きますか？」

「いや、なんとなくここが怪しいと思う。ちょっと調べるから待っててくれ」

フェイはコンコンと洞窟の岩肌を叩き、隠し部屋を探す。すると、ある一箇所の岩から跳ね返る音が、カンと言う高い音に変わった。

「この岩、もしかして」

フェイがグツと岩を押すと、重そうだった岩は難なく横にスライドした。岩に見せかけた隠し扉だ。

そしてその奥に現れたのは、幅一人分ほどの細い階段だった。

「すごい！ これって隠し部屋ですよ？」

「ああ、凝ってるなあ……それにしても昇り階段か。これって地上に出ちまうんじゃないか？」

「今まで下っているところは無かったですから、ひよっとするとそうかも知れません」

「考えてもしようがないか、昇ってみるぞ」

フェイを先頭に階段を一步步慎重に昇る。

この先に美術品おたからがあるのか、出口に出てしまうのか、自然と胸が高鳴ってきた。

「お、扉がある。畏は……うん、無いようだ。開けるぞ」
「はい」

ゴクリと唾を飲み込み、安っぽい木の扉をギイと開け放つ。

真っ先に二人の目に飛び込んだのは、真っ白な老婆だ。老婆は微笑みながら、宙に浮いていた。

「のぎゃあああああつ！」

フェイがセラを抱え、転がり落ちそうになりながら階段を駆け下りる。

「ちょ、ちよつと、フェイ！」

「なんだよ！」

階段を抜けるや、岩の封印を閉めようとするフェイに向い、セラは努めて冷静に言う。

「フェイ、上に戻りましょう」

「バ、バカ！　ありや、本物の幽霊だ。俺達の適う相手じゃないぞ！」

「でも、あのおばあさん優しそうでした。きっと大丈夫ですよ」

「はあ？　お、おいっ！　セラッ！」

フェイの制止も聞かず、セラは再び階段を昇っていつてしまつた。

「し、知らねえぞ！　ったく」

そう言いながらも、フェイはやはり後を追うのだった。

部屋に戻ってきたフェイが見たものは、やはり宙に浮いている老婆の姿と、それに近づくセラだった。

「お、おい！ セラ！」

「大丈夫です。これ、幽霊じゃないみたいです」

「そんな、だつて」

フェイが恐る恐る近づいても、たしかにその老婆は反応しない。手で触れようとしても、スツと透き通ってしまうのだ。

この部屋も妙だった。さっき来た時には気付かなかったが、天上から幾筋かの光が漏れているのだ。どうやら地表に近いところにこの部屋はあるらしい。

良く見れば、地表から光が差し込む穴に人工的に削られた部分や、金属片が埋め込まれている場所がある。

「フェイ！ これを見てください！」

駆け寄った先にあつたのは、紛れもなく墓標だった。墓標には短く文字が刻まれている。

「こっちの国の言葉か、セラ、分かるか？」

「……はい。書いてあるのは、たつた、たつた一言ですから」

セラはフェイへと振り返り、涙目に震える声で言った。

「書いてある言葉は、我が全て、です」

我が全て、光の老婆、墓標、そして、芸術家グラムⅡホロウの生涯最高の作品、それらの示すところはつまり。

そう言う事が

「あのおばあさん、グラムさんの奥さんなのですね」

「ああ。そして、この墓所に眠っている人も、そうなんだろう」

おそらく、こう言う事だ。

グラムはどうやってかこの場所と、光が宙に見えるポイントを見つけた。そして、それを使って描く技術を見つけ出したのだ。

自分の寿命が長くない事を知ったグラムはその残りの生涯をかけ、この妻の墓所を作ったのだらう。

我が全て、墓標に刻まれた言葉が彼の情熱を雄弁に語っていた。

「つたく、死んだ人間にラブレターを書くなんてな」

「……このまま、何も見なかった事にしましょうか？」

ふむと腕を組んで、セラを見る。

「依頼者はグラム」ホロウの弟子かなんかだろ？」

「はい」

「なら問題ない。セラの作った地図をそのまま渡せばいい。きっと荒らすような事はしないさ。ここには値打ちモノも、持ち出せるモノもない。あるのは永遠だけだ」

「……フフッ」

セラがクスクスと笑うので、フェイは顔を真っ赤にして憤慨した。

「ごめんなさい、違うんです。ちょっと昔の事を思い出して」

「思い出した？」

「はい、昔、兄様と喧嘩したことがあって」

セラはフェイに近づくと、ニッコリと見上げた。

「私が読んだ本に『永遠の恋人』と言う言葉があつて、私も永遠の恋人が欲しいと言つたら兄様は笑つたんです。永遠の恋人なんて存在しないって」

「なるほど、エルからしい」

「そして喧嘩していたら、お父様がやってきて、私たちに言ったのです」

セラは眉根をよせ、目をキリリと見開いた。もし父親の真似をしているのだとしたら、恐ろしいほど似ていない。

「人の間に変わらぬ愛は無い。まして、永遠の恋など出会えはしないだろうって」

「鬼か、お前の親父は」

頬を膨らませ最後まで聞いてくださいと睨まれたので、フェイはすまんと口を閉じる。

「その後、お父様は私たちを抱き寄せて、すごく幸せそうに笑いました。愛というのは出会うものじゃない。作るものだって」

セラは目を閉じ、かつて父が語った言葉を忠実に再現する。

「毎日の言葉で、行いで、温もりの中で愛は形作られる。そして辛い日々も全部乗り越えたその先に、永遠はここにあったと感ずるのだって」

愛は作るもの、か

この墓所を作ったグラムはその事を知っていたのだろうか。いや、もし知らなくても、彼は作り上げたのだ。我が全てとまで言い切った、永遠の愛を。

フェイは、そんな二人を酷く羨ましいと感じた。

「フェイ、帰ろう。みんな待ってる」

頷いたフェイは、最後に老婆を見つめる。

その顔は確かに、愛と幸せに満たされていた。

「むー」

コノハは小さく唸った。

帰ってからというものセラは笑顔が絶えない。まあ、それまでは良いとしよう。しかし、フェイまで機嫌がいいのには納得がいかないのだ。

猫なで声でセラに尋ねてみた。

「セラ、フェイと何かあったの？」

「コノハには内緒」

ピキッ

こめかみにうつすらと青筋が浮き上がった。

そう。何があったか知らないけど、そういう態度を取るな

ら考えがあるんだから

上機嫌で皿を洗い続けるセラに背を向けると、コノハは闘気を立ち昇らせ、静かに自室に入ってしまった。

コンコン

「フエイ、ちよつといい？」

「こんな時間に珍しいな。どうかしたのか」

胸元が開いた浅葱色のワンピースを着たコノハは、ドアの隙間からひよいと顔を出した。

その顔には気付かれない程度の化粧が施してある。無論、間違ってもフエイは気が付かないだろう。

「今日、商人の護衛をしたでしょ？ そしたらお礼につて、その、ジューズをもらったの。一緒にどう？」

手に持った二つのカップと小樽を掲げて見せてから気づく。ジューズが入っているにしては高価過ぎる小樽だったのだ。不安がザワリと過_よぎる。

「へえ、そりゃ悪いな」

しかし、フエイはディアナの言った通り、蟻の爪先ほども疑っていない笑みでコノハを迎え入れた。あまりのお人好しぶりに、胸がチクリと痛んだ程だ。

ダメダメ。もう、後戻りはできないんだから。平常心よ、

平常心

部屋に入ると、さりげなく鍵をかける。これで邪魔者^{セラ}の妨害は無くなったはずだ。

フェイは座っていた椅子をコノハに譲ろうと立ち上がり、ベッドに腰掛ける。そこでコノハはさも気が付いたかのように口に手を当てた。

「ごめん、フェイの部屋ってテーブルが無かったっけ。しょうがない、この椅子をテーブルにしちゃおうか」

やや上ずった声で一息に言うと、フェイの横、つまりベッドに並んで腰掛ける。そして、なにか言われる前に小樽の栓を抜き、震える手でカップに注いで手渡した。

「おお、確かにいい匂いだな。それじゃ頂きます」

フェイは大きめのカップに並々と注がれていた果実酒を、グイとひと飲みにした。

「あ」

「うん？ 美味しいけど、ちょっと不思議な味だな。コノハは飲まないのか？」

「……ううん、飲む」

コノハも深呼吸すると、カップに並々と注いだ液体をグイとあおる。

「ケホッ」

「あっはっはっは、慌て過ぎだろ。じゃあ、もう一杯貰うぞ」

フェイはカップに再び酒を注ぐ。その顔は既に真っ赤に染まっていた。

(……ちよつと、これキツイお酒なんじゃ?)

コノハの不安をよそに、フェイの二杯目はあつという間に消えて無くなったのだ。

「だから、コノハ、聞いてくれよ」
「あー、はいはい、聞いてるわよ」

三杯目当たりからだろうか、フェイの饒舌じょうぜつに拍車しやくしゃがかかり、取り留めの無い愚痴が始まったのだ。

ムードもへつたくれも無い状態が続く。ちなみにフェイは既に六杯目を飲み干していた。

「昨日、妊婦を助けただろ。そりゃあ必死で励まして、元気な男の子が生まれたまではよかったんだ。へその緒まで切ったんだぜ?」
「聞いてるわよ。ほんと、よくよく巻き込まれるわね」

心底そう思つての言葉だ。でも、だから、放つて置けないのだろ
う。

「で、そのへその緒を切つた直後に、妊婦の旦那がやって来たんだ。そしたら凄い剣幕で俺に掴みかかって言う訳さ、俺の嫁のを見たのかつて」

「……見たの?」

「それが全然覚えてないんだ。ずっと頭の中が真っ白で、そんな事、気にする余裕も無かったんだ。でもな」

フェイの険しかった顔が、ふっと緩んだ。

「その旦那、赤ん坊の顔見たらデレツとしやがって、もう俺の事なんて目に入ってねえの。親子三人幸せそうに抱き合ってたさあ。ああいうの見てたら、子供ってのも悪くねえなあって」

「そう、それで許せちゃうなんて、あんたらしいわ」

つられるように、コノハも上気する頬を緩ませた。

あれ？ この会話の流れってチャンスなんじゃ？

実際、フェイとは肩と肩が触れ合う距離にいるのだ。こんなチャンスはもう二度と来ないかもしれない。

しかし、いざとなると急に緊張してきた。カラカラに乾く喉元をカップに残っていた果実酒で潤すと、思い切ってフェイの肩に頭をのせる。

「ねえ、フェイ、だったらあたしと」

ただでさえ開いている胸元を、指先でずり下げていった。

「そうそう！ それで今朝、セラが出産する夢を見たんだ。しかも生まれてきた赤ん坊がコノハの顔してたんだぜ。あれは気持ち悪かったなあ」

プツン

コノハは崩れるように床に座り込むと、ベッドの下に手を突っ込んだ。

「おい、何か下に落としたのか？ ああ、大根棒か……って、何で俺のベッドの下にあるんだよ！ おい、ちよつとまて！」

その目には涙と、真っ黒な炎が渦巻いていた。

「言いたい事は沢山あるんだけど、もういいわ……死んで」

エルカは絶叫が木霊する覗き穴から目を離し、ブルリと身を振わせた。

「なんと言う甘美な夜だ。これでまた素敵な夢が見られそうだよ」

ディアナも覗き穴から目を離すと、それを愛しそうに撫でた。

「痛い出費だったけど、これを作った甲斐があったわね」

「全くだ。来週にはセラを焚きつけてみるか」

「また作戦を考えなくちゃね」

ここは彼らの寝室、書棚をどかすと銀鏡を使った覗き穴システムが出現する仕掛けである。

むろん、フェイの許可などっていない。

「ディアナ、フェイはマゾヒストなのだろうか？」

「いきなりな質問ね。でも違うと思うわ。カサカサ虫よりも頑丈だ

けど性癖はいたって普通ね」

「では、何故アレだけ叩かれて、それでも明日には笑っていられるのだろうな？」

理解不能だとばかりに首を捻った夫に、エルカ妻は微笑んで答える。

「猫ってそんなものよ」

愛する夫は「なるほど」と手を打ち、満足そうに頷いた。

「ではそろそろ寝るとするか。ディアナ、良い夢を」

「ええ、良い明日を」

ディアナは眠る前に、最後にもう一度だけ覗き穴を覗き込む。

そこにはコノハの前に丸くなってガタガタと震えるフェイがいた。その姿がほんの少しだけ哀れに見え、誰にも聞こえないように小さく呟いたのだ。

「黒猫ちゃんの明日に幸あれ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9606c/>

剣の国の黒猫

2010年10月9日14時51分発行